千葉県文化財センター調査報告第355集

東関東自動車道(千葉・富津線)
埋蔵文化財調査報告書 3

－市原市大作頭遺跡－

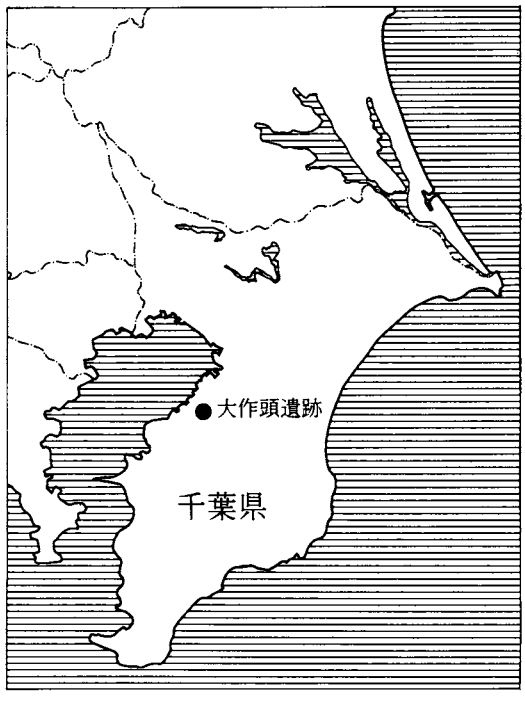
平成11年 3 月

日　本　道　路　公　団

財団法人　千葉県文化財センター

東関東自動車道(千葉・富津線)
埋蔵文化財調査報告書 3

－市原市大作頭遺跡－



南部調査事務所

大作頭遺跡出土の子母口式土器

序　　文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県文化財センター調査報告第355集として、日本道路公団の東関東自動車道（千葉・富津線）建設事業に伴って実施した市原市大作頭遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、縄文時代早期の炉穴や土器が多数出土するなど、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成11年３月31日

財団法人千葉県文化財センター
理事長　中村好成

凡　　例

1　本書は、日本道路公団による東関東自動車道（千葉・富津線）建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書の第３集である。

2　本書に収録した遺跡は、千葉県市原市今富字大作1,066ほかに所在する大作頭遺跡（遺跡コード 219-043)である。

3　発掘調査から報告書作成に至る業務は、日本道路公団の委託を受け、財団法人千葉県文化財センターが実施した。

4　発掘調査及び整理作業の組織、担当者及び実施期間は、第１章に記載した。

5　本書の執筆・編集は、主任技師　加納　実が担当した。

6　発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁生涯学習部文化課、日本道路公団、市原市教育委員会ほか多くの方々から御指導、御協力を得た。

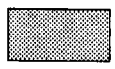
7　本書で使用した地形図は、下記のとおりである。

第４図　国土地理院発行　1:25,000地形図「姉崎（NI-54-19-16-３)」

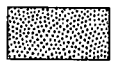
8　周辺航空写真は、京葉測量株式会社による昭和42年撮影のものを使用した。

9　本書で使用した図面の方位は、すべて座標北である。

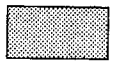
10　挿図に使用したスクリーントーン及び記号の用例は、次のとおりである。


石器　ミガキ

石器　強いタタキ


石器　弱いタタキ

炉穴　燃焼部


炉穴　土層断面の焼土

●　土器　胎土中に繊維を含む

本　文　目　次

第１章　はじめに……1
第１節　調査概要……1
1　調査の経緯と経過……1
2　調査の概要……1
3　調査の方法……4
第２節　遺跡の位置と周辺の遺跡……5
1　遺跡の位置……5
2　周辺の遺跡……5
第２章　大作頭遺跡Ａ区……7
第１節　旧石器時代……7
1　基本層序……7
2　石器出土地点……7
第２節　縄文時代……12
1　遺構……12
2　遺物……27
第３節　歴史時代……40
1　遺構……40
2　遺物……42
第３章　大作頭遺跡Ｂ区……43
第１節　旧石器時代……43
1　基本層序……43
2　石器出土地点……43
第２節　縄文時代……50
1　遺構……50
2　遺物……65
第３節　歴史時代……115
1　遺構……115
第４章　大作頭遺跡Ｃ区……117
第１節　旧石器時代……117
第２節　縄文時代……118
1　遺構……118
2　遺物……138
第３節　歴史時代……149
1　遺構……149
第５章　まとめ……151

第１節　炉穴 ……151
第２節　子母口式土器 ……152
報告書抄録……巻末

挿　図　目　次

第１図　確認調査対象範囲と本調査範囲……2
第２図　本調査範囲とグリッド……3
第３図　小グリッド呼称用例……4
第４図　遺跡の位置と周辺の遺跡……6
第５図　Ａ区全測図……8
第６図　Ａ区旧石器時代石器出土状況図……9
第７図　Ａ区旧石器時代石器実測図……10
第８図　Ａ区炉穴実測図（１）……13
第９図　Ａ区炉穴実測図（２）……15
第10図　Ａ区炉穴実測図（３）……16
第11図　Ａ区炉穴実測図（４）……18
第12図　Ａ区炉穴実測図（５）……20
第13図　Ａ区縄文時代土坑実測図（１）……22
第14図　Ａ区縄文時代土坑実測図（２）……24
第15図　Ａ区縄文時代住居跡実測図……26
第16図　Ａ区炉穴出土土器実測図（１）……29
第17図　Ａ区炉穴出土土器実測図（２）……30
第18図　Ａ区縄文時代土坑出土土器実測図……31
第19図　Ａ区縄文時代住居跡出土土器実測図……32
第20図　Ａ区遺構外出土土器実測図（１）……33
第21図　Ａ区遺構外出土土器実測図（２）……34
第22図　Ａ区遺構外出土土器実測図（３）……36
第23図　Ａ区石器実測図（１）……36
第24図　Ａ区石器実測図（２）……37
第25図　Ａ区歴史時代土坑実測図……40
第26図　Ａ区方形周溝状遺構実測図……41
第27図　Ａ区方形周溝状遺構出土土器実測図……42
第28図　Ｂ区全測図……45
第29図　Ｂ区旧石器時代石器出土状況図……47
第30図　Ｂ区旧石器時代石器実測図……48
第31図　Ｂ区炉穴実測図（１）……51
第32図　Ｂ区炉穴実測図（２）……53
第33図　Ｂ区炉穴実測図（３）……55
第34図　Ｂ区炉穴実測図（４）……57
第35図　Ｂ区炉穴実測図（５）……59
第36図　Ｂ区炉穴実測図（６）……61
第37図　Ｂ区縄文時代土坑実測図（１）……62
第38図　Ｂ区縄文時代土坑実測図（２）……64
第39図　Ｂ区縄文時代住居跡実測図……66
第40図　Ｂ区炉穴出土土器実測図（１）……68
第41図　Ｂ区炉穴出土土器実測図（２）……70
第42図　Ｂ区炉穴出土土器実測図（３）……72
第43図　Ｂ区炉穴出土土器実測図（４）……73
第44図　Ｂ区炉穴出土土器実測図（５）……74
第45図　Ｂ区縄文時代土坑出土土器実測図……74
第46図　Ｂ区縄文時代住居跡出土土器実測図……75
第47図　Ｂ区遺構外出土土器実測図（１）……77
第48図　Ｂ区遺構外出土土器実測図（２）……78
第49図　Ｂ区遺構外出土土器実測図（３）……80
第50図　Ｂ区遺構外出土土器実測図（４）……81
第51図　Ｂ区遺構外出土土器実測図（５）……82
第52図　Ｂ区遺構外出土土器実測図（６）……83
第53図　Ｂ区遺構外出土土器実測図（７）……84
第54図　Ｂ区遺構外出土土器実測図（８）……85
第55図　Ｂ区遺構外出土土器実測図（９）……86
第56図　Ｂ区石器実測図（１）……87
第57図　Ｂ区石器実測図（２）……88
第58図　Ｂ区石器実測図（３）……89
第59図　Ｂ区石器実測図（４）……90
第60図　Ｂ区石器実測図（５）……91

第61図　B区石器実測図（６）……92
第62図　B区石器実測図（７）……93
第63図　B区石器実測図（８）……94
第64図　B区石器実測図（９）……95
第65図　B区石器実測図（10）……96
第66図　B区石器実測図（11）……97
第67図　B区石器実測図（12）……98
第68図　B区撚糸文土器分布図 ……101
第69図　B区礫分布図 ……102
第70図　B区礫分析図（１）……103
第71図　B区礫分析図（２）……104
第72図　B区礫分析図（３）……105
第73図　B区礫分析図（４）……106
第74図　B区礫分析図（５）……107
第75図　B区礫分析図（６）……108
第76図　B区礫分析図（７）……109
第77図　B区礫分析図（８）……110
第78図　B区礫分析図（９）……111
第79図　B区礫分析図（10）……112
第80図　B区礫分析図（11）……113
第81図　B区礫分析図（12）……114
第82図　B区方形周溝状遺構実測図 ……115
第83図　C区全測図 ……116
第84図　C区旧石器時代石器実測図 ……117
第85図　C区炉穴実測図（１）……119
第86図　C区炉穴実測図（２）……121
第87図　C区炉穴実測図（３）……123
第88図　C区炉穴実測図（４）……125
第89図　C区炉穴実測図（５）……127
第90図　C区炉穴実測図（６）……128
第91図　C区炉穴実測図（７）……130
第92図　C区炉穴実測図（８）……132
第93図　C区縄文時代土坑実測図（１）……134
第94図　C区縄文時代土坑実測図（２）……135
第95図　C区縄文時代土坑実測図（３）……136
第96図　C区縄文時代住居跡実測図 ……137
第97図　C区炉穴出土土器実測図（１）……140
第98図　C区炉穴出土土器実測図（２）……141
第99図　C区炉穴出土土器実測図（３）……143
第100図　C区縄文時代土坑出土土器……143
第101図　C区遺構外出土土器実測図……145
第102図　大作頭遺跡表採の縄文土器実測図……146
第103図　C区石器実測図（１）……147
第104図　C区石器実測図（２）……148
第105図　C区方形周溝状遺構実測図（１）……149
第106図　C区方形周溝状遺構実測図（２）……150

表　目　次

第１表　A区旧石器時代石器一覧表
第２表　A区縄文時代石器一覧表
第３表　B区旧石器時代石器一覧表
第４表　B区縄文時代石器一覧表
第５表　C区縄文時代石器一覧表

図　版　目　次

巻頭図版　大作頭遺跡出土の子母口式土器
図版１　大作頭遺跡周辺航空写真
図版２　A区炉穴（１）
図版３　A区炉穴（２）
図版４　A区炉穴（３）
図版５　A区炉穴（４）
図版６　A区炉穴（５）、A区縄文時代土坑（１）
図版７　A区縄文時代土坑（２）、A区縄文時代住居跡、A区方形周溝状遺構、B区炉穴（１）
図版８　B区炉穴（２）
図版９　B区炉穴（３）
図版10　B区炉穴（４）

図版11　B区炉穴（５）
図版12　B区炉穴（６）
図版13　B区炉穴（７）、B区縄文時代土坑（１）
図版14　B区縄文時代土坑（２）
図版15　B区縄文時代土坑（３）、B区縄文時代住居跡（１）
図版16　B区縄文時代住居跡（２）、C区炉穴（１）
図版17　C区炉穴（２）
図版18　C区炉穴（３）
図版19　C区炉穴（４）
図版20　C区炉穴（５）
図版21　C区縄文時代土坑、C区縄文時代住居跡、C区方形周溝状遺構
図版22　旧石器時代石器
図版23　A区炉穴出土土器
図版24　A区縄文時代土坑出土土器、A区縄文時代住居跡出土土器、A区遺構外出土縄文土器（１）
図版25　A区遺構外出土土器（２）
図版26　B区炉穴出土土器（１）
図版27　B区炉穴出土土器（２）
図版28　B区炉穴出土土器（３）、B区縄文時代土坑出土土器
図版29　B区縄文時代住居跡出土土器、B区遺構外出土縄文土器（１）
図版30　B区遺構外出土縄文土器（２）
図版31　B区遺構外出土縄文土器（３）
図版32　B区遺構外出土縄文土器（４）
図版33　B区遺構外出土縄文土器（５）
図版34　B区遺構外出土縄文土器（６）
図版35　B区遺構外出土縄文土器（７）、C区炉穴出土土器（１）
図版36　C区炉穴出土土器（２）
図版37　C区炉穴出土土器（３）、C区縄文時代土坑出土土器、C区遺構外出土縄文土器、大作頭遺跡表採の縄文土器
図版38　A区・B区・C区剥片石器
図版39　A区・B区礫石器
図版40　B区礫石器
図版41　B区礫石器
図版42　B区礫石器、C区礫石器
図版43　子母口式土器文様接写（１）
図版44　子母口式土器文様接写（２）
図版45　子母口式土器文様接写（３）
図版46　子母口式土器文様接写（４）
図版47　子母口式土器文様接写（５）
図版48　子母口式土器口唇部加飾接写

第1章　はじめに

第1節　調査概要

1　調査の経緯と経過

日本道路公団によって、東関東自動車道（千葉・富津線）の建設が計画され、事業地内の埋蔵文化財の取扱いについて関係諸機関の協議した結果、記録保存の措置を講ずることとなり、平成元年3月から財団法人千葉県文化財センターが事業区域内に所在する遺跡の発掘調査を実施することとなった。

大作頭遺跡の発掘調査は、平成元年3月から事業範囲46,700㎡の確認調査を開始し、縄文時代早期を中心とする遺構・遺物などの分布が認められた。この確認調査の結果に基づき、20,450㎡の上層本調査と、104㎡の下層本調査を実施することとなり、平成元年4月から本調査を開始し、平成2年11月をもって発掘調査を終了した（第1図）。平成9年4月から整理作業を行った。なお、発掘調査・整理作業の実施期間・担当職員は下記のとおりである。

発掘作業

昭和63年度

調査部長　堀部昭夫

班長　　佐久間豊

担当者　　柴田龍司

平成元年度

調査部長　堀部昭夫

班長　　佐久間豊

担当者　　半澤幹雄　神野信　四柳隆

平成2年度

調査部長　堀部昭夫

班長　　郷田良一

担当者　　加藤修司　沖松信隆　糸原清

整理作業

平成9年度

調査部長　西山太郎

所長　　高田博

担当者　　川島利道　加納実

作業内容　原稿執筆まで

平成10年度

調査部長　沼澤豊

所長　　高田博

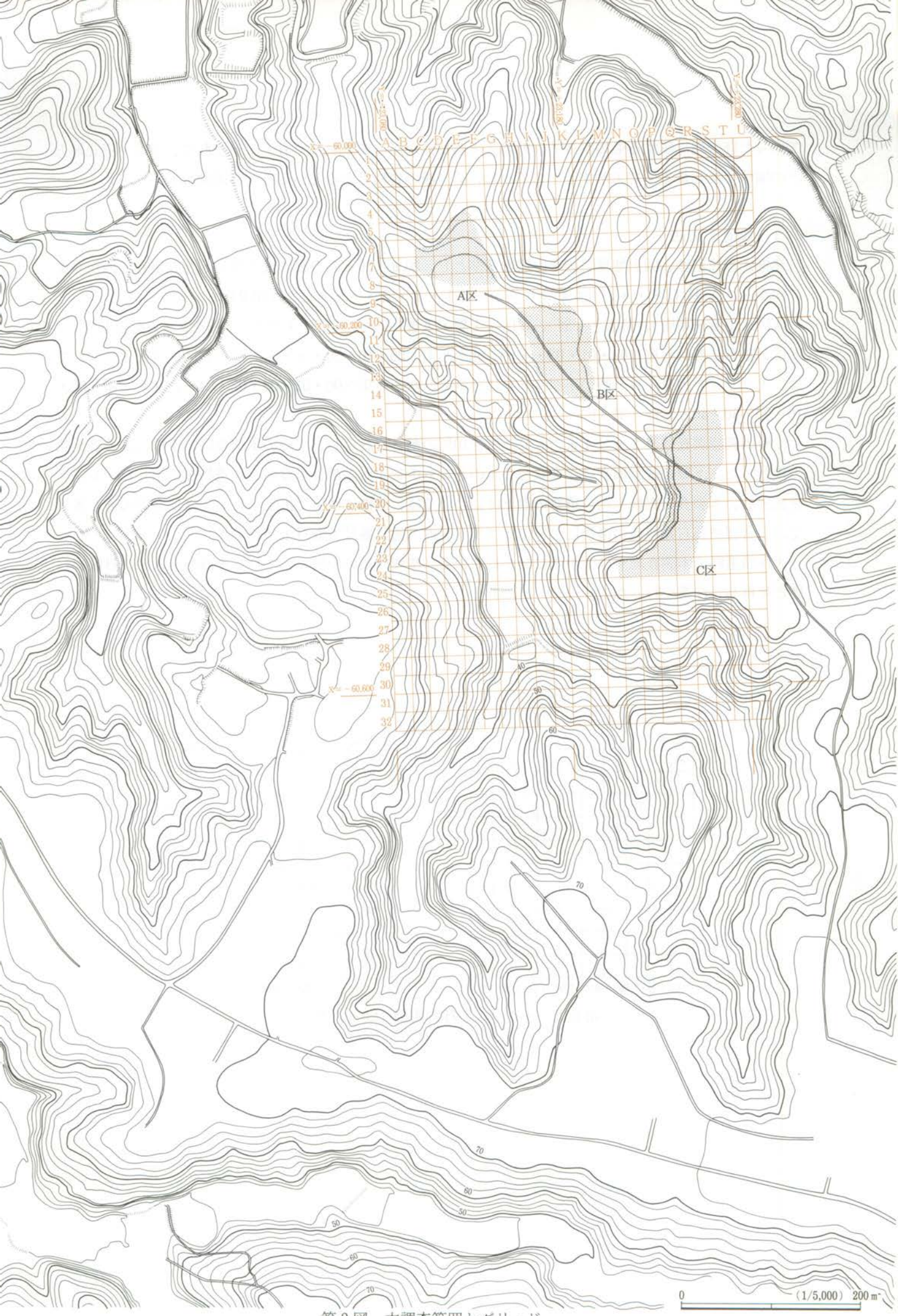
作業内容　刊行のみ

2　調査の概要

大作頭遺跡からは、旧石器時代石器出土地点が3か所、縄文時代早期の炉穴158基・土坑（陥穴を含む）49基、縄文時代中期の住居跡4軒、奈良時代に設営されたと思われる方形周溝状遺構3基が検出されている。このほか、縄文時代早期・中期・後期の土器群が出土しているが、量的には早期の土器が主体である。

大作頭遺跡の主要な成果は、縄文時代早期の子母口式土器の出土である。子母口式土器は市原市域での出土例は希薄であったため、今回の多量の出土は、今後の市原市域及びその周辺地域での早期の遺跡の立地を考える上で貴重な成果であるといえる。さらに大作頭遺跡で出土した子母口式土器は、検出例が希薄

第１図　確認調査対象範囲と本調査範囲



第2図　本調査範囲とグリッド

であった終末期に属するものが多く、野島式土器につながる要素を多く有する土器群や、中部・東北地方との関係を推し量る上で欠かすことのできない第一級の資料であるといえる（巻頭図版参照）。

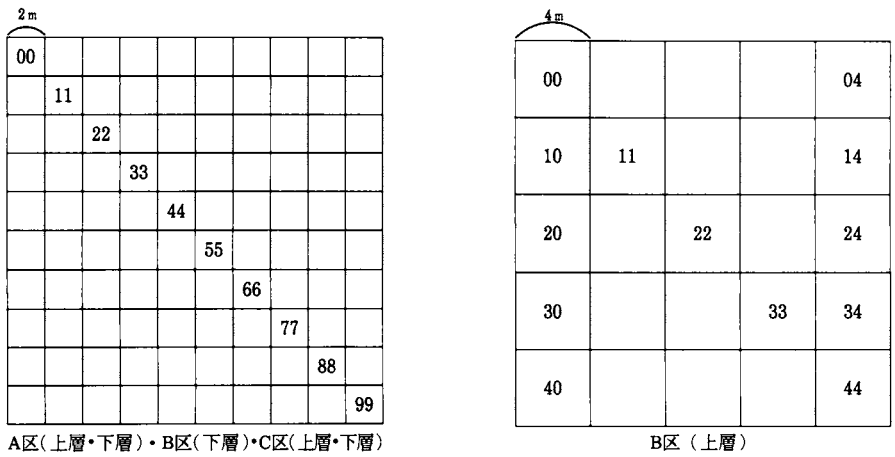
3　調査の方法

発掘区の設定は、国土地理院国家座標を基準とし、20ｍ×20ｍの方眼の大グリッドを設定し、西から東に向かってA-B-C・・・、北から南に向かって1・2・3・・・とした（第2図）。

A区（上層・下層）、B区（下層）、C区（上層・下層）については、大グリッド内を2ｍ方眼の小グリッドに分割し、西から東へ00・01・02・・・、北から南へ00・10・20・・・とした。B区（下層）については、大グリッド内を4ｍ方眼の小グリッドに分割し、西から東へ00・01・02・03・04・、北から南へ00・10・20・30・40とした（第3図）。

上層の確認調査は、2ｍ×4ｍのトレンチを10％の割合で設定し、上層の本調査は、重機による表土除去後行った。下層の確認調査は、2ｍ×2ｍのトレンチを4％の割合で設定し、遺物を検出したトレンチを拡張し、本調査を実施した。遺物の取上げについては、遺構に伴って出土したものは遺構内の通し番号で、包含層や旧石器時代の遺物についてはグリッド内の通し番号で取り上げた。

大作頭遺跡の本調査地点は3か所に分かれている。整理作業の段階で、これらを西からA区、B区、C区と呼称し、作業を行った。



第3図　小グリッド呼称用例（20ｍ大グリッド）

第2節　遺跡の位置と周辺の遺跡

1　遺跡の位置

大作頭遺跡は、市原市今富字大作1,066ほかに所在する。市原市は、房総半島の中央部から東京湾に向けて、ほぼ南北に市域を有し、その長さは約36kmにも及ぶ。市域の中央には養老川が流れ、下流域の右岸は市原台地と呼ばれる。台地の北側には村田川が流れ、台地の南側には小櫃川が流れている。大作頭遺跡は、養老川と小櫃川に挟まれた台地上の、養老川下流域を開析する支谷奥部の台地上に位置する。台地の標高は約65ｍ～70ｍである。遺跡周辺には養老川へ向かう大小の谷が樹枝状に刻まれている。

2　周辺の遺跡（第4図）

大作頭遺跡周辺では、養老川中・下流域の沖積地を臨む台地上に展開されているような大規模な集落（国分寺台遺跡群など）は確認されていない。また、大規模な開発に伴う発掘調査も行われていないので、考古学的な成果は少ないといえよう。当該地域での本格的かつ継続的な発掘調査は、大作頭遺跡と同様の、東関東自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査が初めてといって過言ではない。

このような状況であるので、大作頭遺跡周辺の遺跡の様相は不明な部分が多いが、大作頭遺跡は早期の子母口式期を中心とする遺跡であることから、ここでは、大作頭遺跡周辺の早期の遺跡の様子について記しておきたい。なお、ここで記す海保野口遺跡・百目木遺跡・下椎木遺跡・志保地遺跡・ヤジ山遺跡は、大作頭遺跡と同様、東関東自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査が実施された遺跡であり、その概要は海保野口遺跡の報告書[1]中に示されている。

海保野口遺跡[2]では、芽山式期を中心とする時期の炉穴が166基検出され、その他縄文時代中期後半の住居跡が16軒検出されている。唐沢遺跡[3]では、鵜ヶ島台式期～芽山式期を中心とする時期の土器片や炉穴が検出され、その他早期の撚糸文土器・沈線文土器なども出土している。山見塚遺跡[4]では、早期の集石遺構が1基検出されているほか、撚糸文土器・条痕文土器が散発的に出土している。百目木遺跡[5]では、早期の炉穴が10基検出されている。下椎木遺跡[6]では、早期の炉穴が17基、陥穴が1基検出されている。外迎山遺跡[7]では、芽山上層式期を中心とする時期の住居跡1軒のほか、炉穴も多く検出されている。志保地遺跡[8]では、早期の陥穴が12基、土坑が1基検出されている。ヤジ山遺跡[9]では、早期の炉穴・陥穴・土坑が多数検出されている。

注1　森本和男　1998『東関東自動車道(千葉・富津線)埋蔵文化財調査報告書1－市原市海保野口遺跡－』（財）千葉県文化財センター

2　前掲注1

3　木對和紀　1987『外迎山遺跡・唐沢遺跡・山見塚遺跡』　（財）市原市文化財センター

4　前掲注3

5　（財）千葉県文化財センター　1992『千葉県文化財センター年報No.17－平成3年度－』

6　（財）千葉県文化財センター　1991『千葉県文化財センター年報No.16－平成2年度－』

7　前掲注3

8　前掲注6

9　（財）千葉県文化財センター　1990『千葉県文化財センター年報No.15－平成元年度－』　前掲注5

第4図　遺跡の位置と周辺の遺跡

第2章　大作頭遺跡A区

大作頭遺跡A区では、旧石器時代の石器出土地点が2か所、縄文時代の炉穴35基・土坑12基・住居跡1軒、歴史時代の方形周溝状遺構1基が検出されている。このほか、遺構外からは縄文時代早期を中心とする時期の土器片や、これに伴うものと思われる礫が出土している。

遺跡の中心となる時期は、炉穴・土坑が設営された縄文時代早期である。炉穴・土坑出土土器や遺構外出土土器は、これまで検出例の乏しかった子母口式期から野島式期にかけてのものが主体であり、貴重な資料である。

前章でふれたとおり、大作頭遺跡は調査地点が3か所に分かれており、これらを西からA区、B区、C区と呼称し、各区を章ごとに記載することとした。章中では、時代順（古い順）に節を設定し、各時代の中では、遺構と遺物に分けて記載することを基本とした（旧石器時代を除く）。写真図版の掲載については、本文中の章立てや節の構成に連動することが望ましいと思われたが、レイアウトの都合から、各区の遺構をまとめて掲載し、その後に各区の遺物を掲載するという体裁をとった。

第1節　旧石器時代

1　基本層序

大作頭遺跡A区における関東ローム層（立川ローム層）の分層・呼称方法は、当センターの一般的な基準[1]に従った。これらを示すと、

Ⅲ層　黄褐色　ソフトローム層

Ⅳ層　黄褐色　ハード・ローム層の上部硬質部

Ⅴ層　暗褐色　武蔵野分層第1黒色帯

Ⅵ層　黄褐色　下半にATの層準を含む

Ⅶ層　暗褐色　武蔵野分層のⅦ層　第2黒色帯上部層

Ⅸ層　暗褐色　第2黒色帯下部層

　Ⅸa層　上部明色部

　Ⅸb層　中部間層帯

　Ⅸc層　下部暗色帯

Ⅹ層　黄褐色　立川ローム最下部層

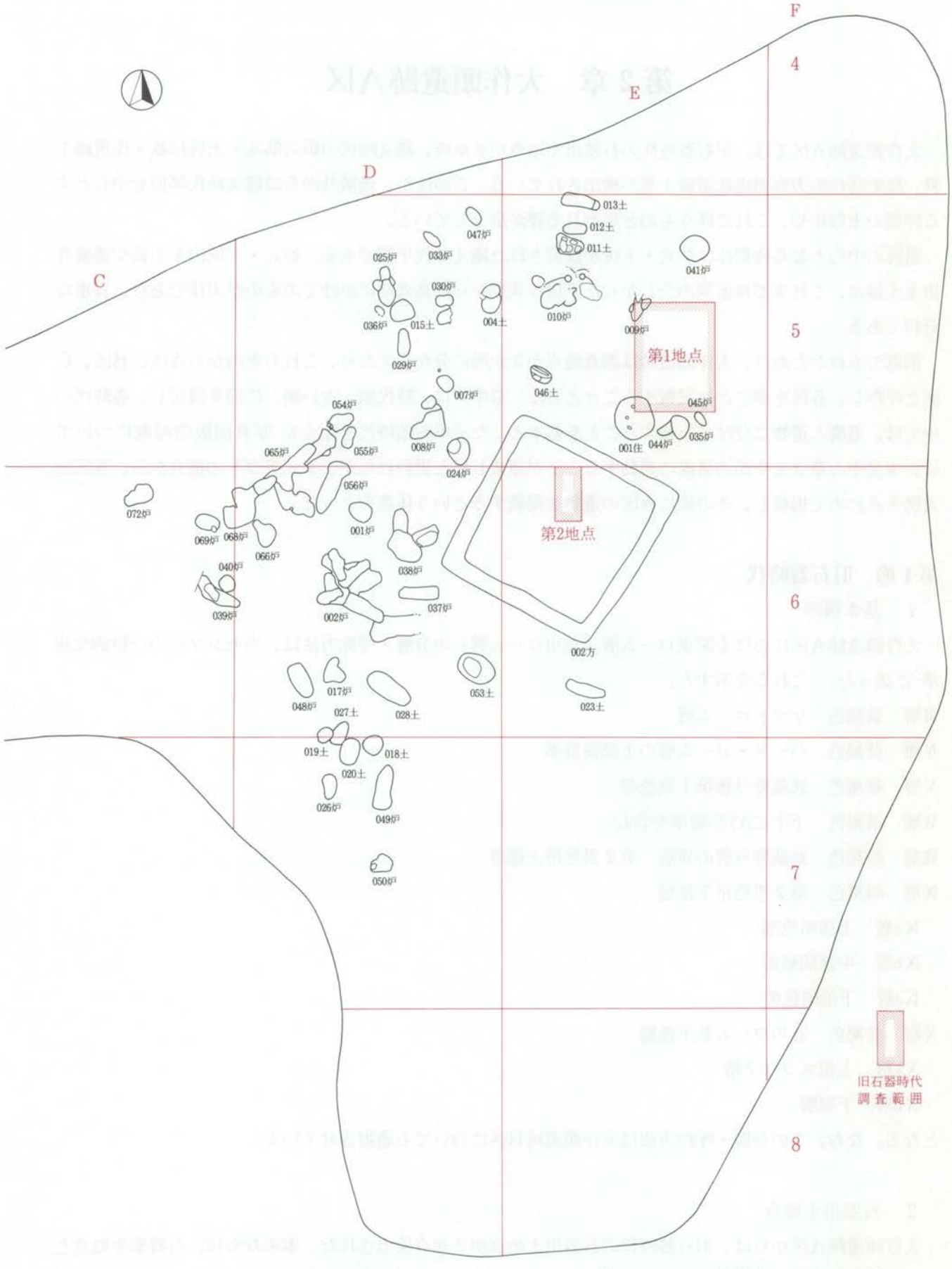
　Ⅹa層　上部スコリア帯

　Ⅹb層　下部層

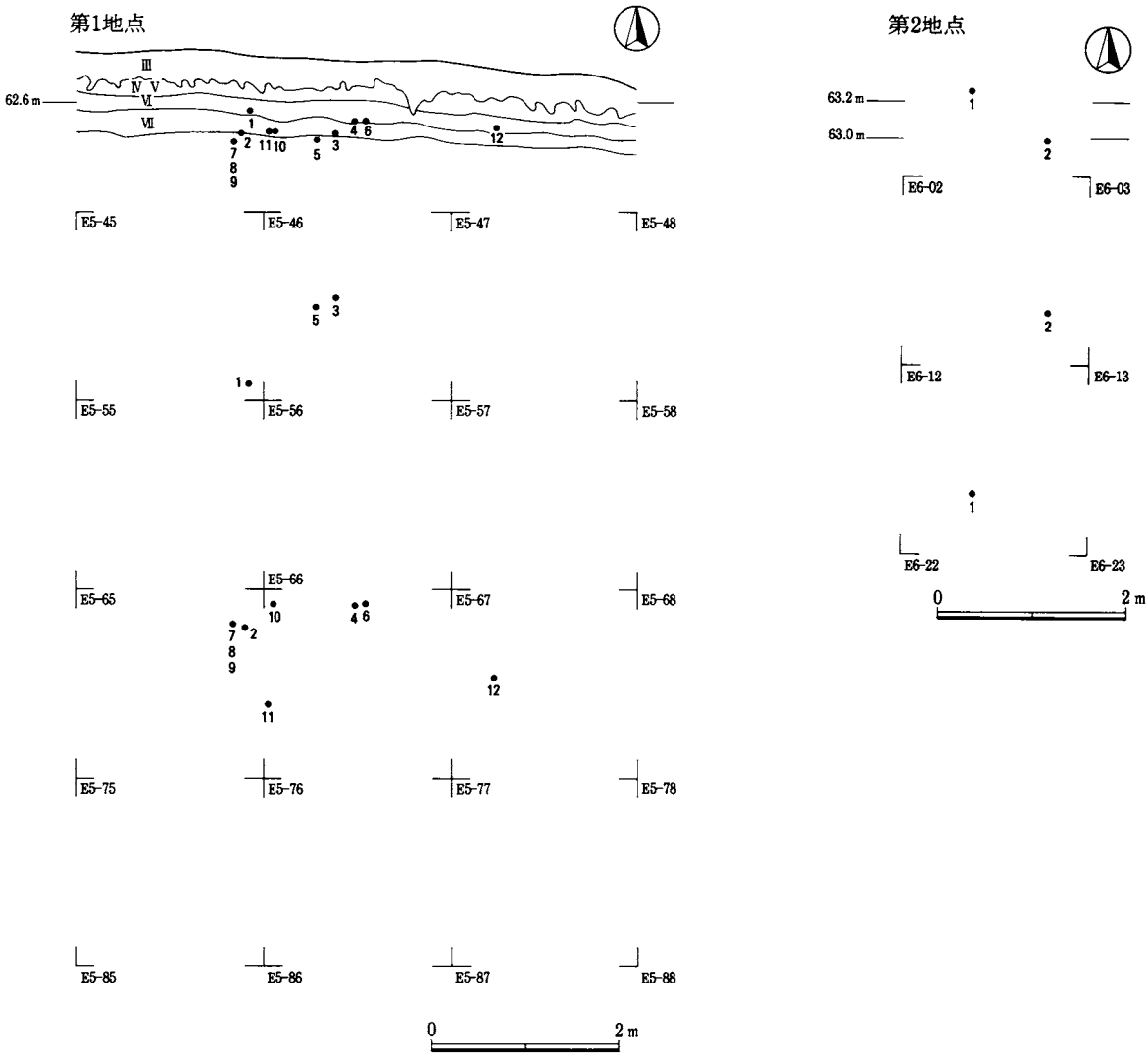
となる。なお、この分層・呼称方法は大作頭遺跡B区においても適用させている。

2　石器出土地点

大作頭遺跡A区からは、旧石器時代の石器出土地点が2地点検出された。本来ならば、石器集中地点として報告するべきであるが、2点のみ出土した地点（第2石器出土地点）があることから、集中地点と呼称することは実体にそぐわないと判断した。したがって、ここでは石器出土地点として報告することとし


F
4
E
D
C
5
6
7
8
013土
012土
011土
047炉
033炉
025炉
041炉
030炉
036炉
015土
004土
010炉
009炉
第1地点
029炉
046土
007炉
045炉
054炉
035炉
044炉
001住
065炉
055炉
008炉
024炉
056炉
072炉
001炉
第2地点
069炉
068炉
066炉
040炉
038炉
039炉
037炉
002炉
002方
017炉
053土
048炉
027土
028土
023土
019土
018土
020土
026炉
049炉
050炉
旧石器時代
調査範囲
0
(1/400)
20 m

第5図　A区全測図



第６図　A区旧石器時代石器出土状況図

た。また、出土石器に関するデータは、出土石器一覧表（第１表）に記載しているので、本文中での重複は避けることとした。

（１）第１石器出土地点（第７図、図版22）

E5-65グリッドを中心に石器等が12点出土した地点である。石器出土層位は、Ⅵ層からⅦ層である。器種は、フレイクが主体であり、石材は、頁岩・メノウ・安山岩が主体である。第１石器出土地点は、平面的な分布から、E5-46グリッドを中心とするブロックとE5-65グリッドを中心とするブロックに、分割して捉えることもできるが、両者のブロックで出土層位・器種・石器石材の差異は認められない。

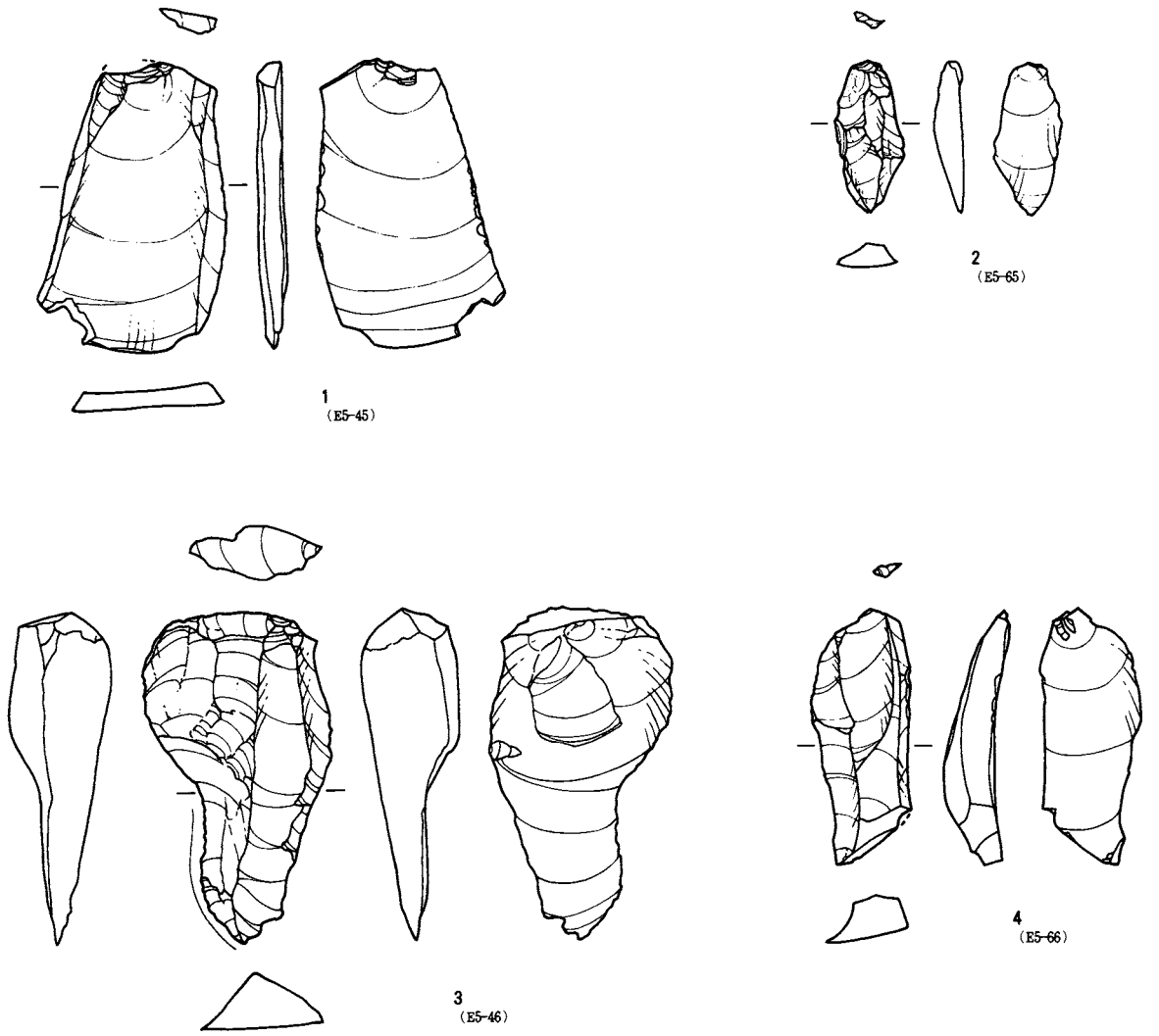
第１出土地点は、平面的な分布状況が散漫であり、垂直分布にもばらつきが認められることから、同一文化層中の単独のブロックと捉えることは困難である。現段階では、性格は不明であるといわざるを得ない。

（２）第２石器出土地点（第７図、図版22）

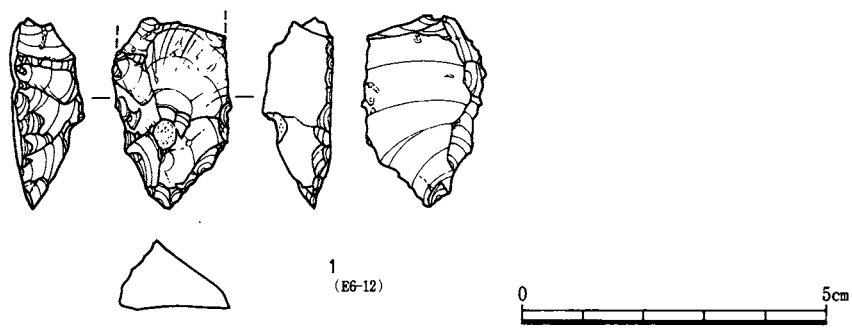
E6-02・E6-12グリッドから石器等が２点出土した地点である。石器出土層位はⅣ層とⅥ層である。器種はナイフ形石器とチップで、石材は２点ともに黒曜石である。

第2石器出土地点は、2点のみの出土であり、出土レベルも離れていることから、性格は不明であるといわざるを得ない。

第1石器出土地点



第2石器出土地点



第7図　A区旧石器時代石器実測図

A区　1地点

番　号	グリッド	層　位	器　種	石　材	長　×　幅　×　厚 (cm)	重（g）	図番号
1	E5-45	Ⅵ	フレイク	安山岩	4.80 × 3.10 × 0.30	6.10	7−1
2	E5-65	Ⅶ	フレイク	珪質頁岩	2.50 × 1.10 × 0.50	0.99	7−2
3	E5-46	Ⅶ	フレイク	メノウ	5.50 × 3.40 × 1.40	18.80	7−3
4	E5-66	Ⅵ	フレイク	メノウ	4.20 × 1.70 × 1.00	5.00	7−4
5	E5-46	Ⅶ	フレイク	メノウ	3.80 × 2.50 × 1.10	8.80	
6	E5-66	Ⅵ	チップ	チャート			
7	E5-65	Ⅶ	フレイク	頁岩	6.30 × 3.20 × 1.20	21.40	
8	E5-65	Ⅶ	フレイク	頁岩	3.10 × 1.20 × 0.70	1.60	
9	E5-65	Ⅶ	チップ	頁岩	1.10 × 0.50 × 0.30	0.17	
10	E5-66	Ⅶ	フレイク	安山岩	7.00 × 4.00 × 2.70	34.30	
11	E5-66	Ⅶ	チップ	安山岩			
12	E5-67	Ⅵ	礫	砂岩			

A区　2地点

番　号	グリッド	層　位	器　種	石　材	長　×　幅　×　厚 (cm)	重（g）	図番号
1	E6-12	Ⅳ	ナイフ形石器	黒曜石	3.10 × 1.90 × 1.00	4.50	7−1
2	E6-02	Ⅵ	チップ	黒曜石			

第1表　A区旧石器時代石器一覧表

第2節　縄文時代

1　遺構

（1）炉穴

大作頭遺跡A区からは35基の炉穴が検出されている。この35基という数字は、調査段階で炉穴としてカウントした数である。複数の掘込みと複数の燃焼部が認められるものであっても、調査段階で一つの遺構番号を付したものについては、1基として扱っている。調査段階での認識に依拠している。

実測図の掲載方法は、燃焼部と考えられる範囲（地山に熱を受けた痕跡が認められる範囲）と、土層断面中の焼土の範囲を、スクリーントーンで示した（用例参照）。掘込み自体の覆土については、調査段階での記録が比較的省略されていることから、特に説明が必要と考えられるもの以外は省略している。

炉穴実測図の掲載に際しては、番号順に掲載することを基本としたが、レイアウトの都合上、一部順序が前後しているものがある。ただし、その場合であっても、事実記載は、番号順に記している。なお、異なる遺構番号の炉穴が重複・近接し、同一挿図中に掲載されている場合の資料提示は、最も若い遺構番号の位置に準拠しているが、事実記載は番号順に記している。

001号炉穴（第8図、図版2）

楕円形の浅い掘込みで、底面中央部に燃焼部が認められる。燃焼部はよく焼けているが、焼土の堆積はあまり多くはない。001号炉穴の設営時期は、覆土中から出土した土器（第16図）から、子母口式期と考えられる。

002号炉穴（第8図、図版2）

楕円形の掘込みが重複している炉穴である。厳密には炉穴群として捉えるべきものである。燃焼部は9か所認められているが、北側の楕円形の燃焼部は、プランから推測すると3か所の燃焼部の重複である可能性が高い。したがって、合計12か所の燃焼部が認められることとなる。1基の掘込みに1か所の燃焼部が設けられるという前提に立つならば、12基の炉穴が重複する炉穴群と考えられる。調査段階の断面観察からは、各々の掘込みの新旧関係は捉えられなかった。

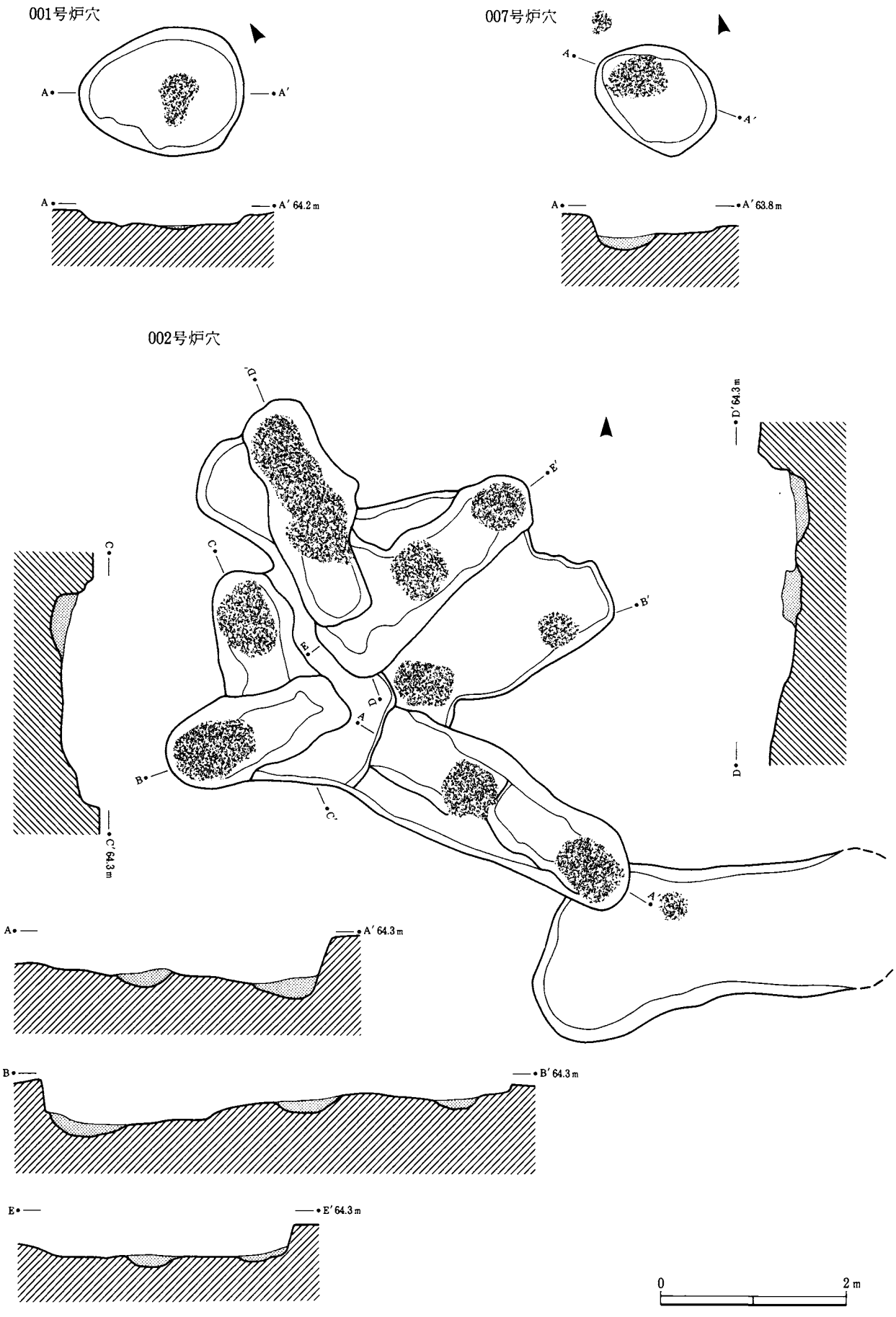
燃焼部はどれも比較的よく焼けており、焼土の堆積も多い。002号炉穴の設営時期は、覆土中から出土した土器（第16図）から、子母口式期と考えられる。

007号炉穴（第8図、図版2）

楕円形の浅い掘込みで、底面北部に燃焼部が検出された。燃焼部付近には若干の段差が認められる。燃焼部はよく焼けており、焼土の堆積も多い。007号炉穴からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。掘込み外の北側に燃焼部が検出された。この燃焼部はよく焼けている。おそらくこの燃焼部を伴う掘込みは削平され、燃焼部のみが残ったものと判断される。

008号炉穴（第9図、図版2）

不整形の掘込みに3か所の燃焼部が認められる。南側の燃焼部は比較的よく焼けており、焼土の堆積も多い。北側の楕円形の掘込みは、覆土中に焼土の堆積は認められなかった。また、底面や壁面に熱を受けた痕跡も認められなかった。したがって、この掘込み自体が炉穴であるとは考えがたい。しかし、プラン確認の際には、南側の炉穴との覆土の差異が認められなかった。このような理由から、この掘込みが南側の明瞭な炉穴とかけ離れた時期に設営されたとは考えがたく、一体のものであると判断した。008号炉穴からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。



第8図　A区炉穴実測図（1）

009号炉穴（第９図、図版２）

長楕円形の２基の掘込みが重複する炉穴群である。南北方向の掘込みには燃焼部は認められていないが、北端の撹乱によって壊されている可能性が高いと考えられる。燃焼部は比較的よく焼けているが、焼土の堆積は顕著ではない。009号炉穴からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

010号炉穴（第９図）

６か所の燃焼部と不整形の浅い掘込みからなる炉穴群である。壁の大半は削平されたものと思われ、個々の掘込みの本来のプランは判然としない。燃焼部はあまりよく焼けていない。焼土の堆積も少ない。010号炉穴の設営時期は、覆土中から出土した土器（第16図）から、子母口式期と考えられる。

017号炉穴（第９図、図版２）

長楕円形の掘込みが２基重複する炉穴群である。掘込みは深く、しっかりとしている。燃焼部はよく焼けており、焼土の堆積も多い。017号炉穴からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

024号炉穴（第９図、図版２）

不整円形の浅い掘込みと、土坑状の掘込みからなる。土坑状の深い掘込みが炉穴の一部として機能していたのか、もしくは全く別の土坑であるかは判断できないが、炉穴のプランの確認の段階では、土坑状の掘込みのプランは認識できなかった。燃焼部はよく焼けており、焼土の堆積も多い。024号炉穴の設営時期は、覆土中から出土した土器（第16図）から、子母口式期と考えられる。

025号炉穴（第10図、図版２）

４基の掘込みと、３か所の燃焼部からなる。南北方向に重複する２基の掘込みは長楕円形を呈する。この２基の掘込みに壊される南北の２基の掘込みは、本来は１基の掘込みである可能性もある。最低３基の炉穴が重複する炉穴群である。掘込みは深く、しっかりとしている。燃焼部はよく焼けており、焼土の堆積も多い。掘込みの覆土は暗褐色土を主体とする。025号炉穴の設営時期は、覆土中から出土した土器（第16図）から、子母口式期と考えられる。

026号炉穴（第９図、図版３）

楕円形のやや深い掘込みの炉穴である。燃焼部の範囲は狭いが、よく焼けており、焼土の堆積も多い。026号炉穴からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

029号炉穴（第10図、図版３）

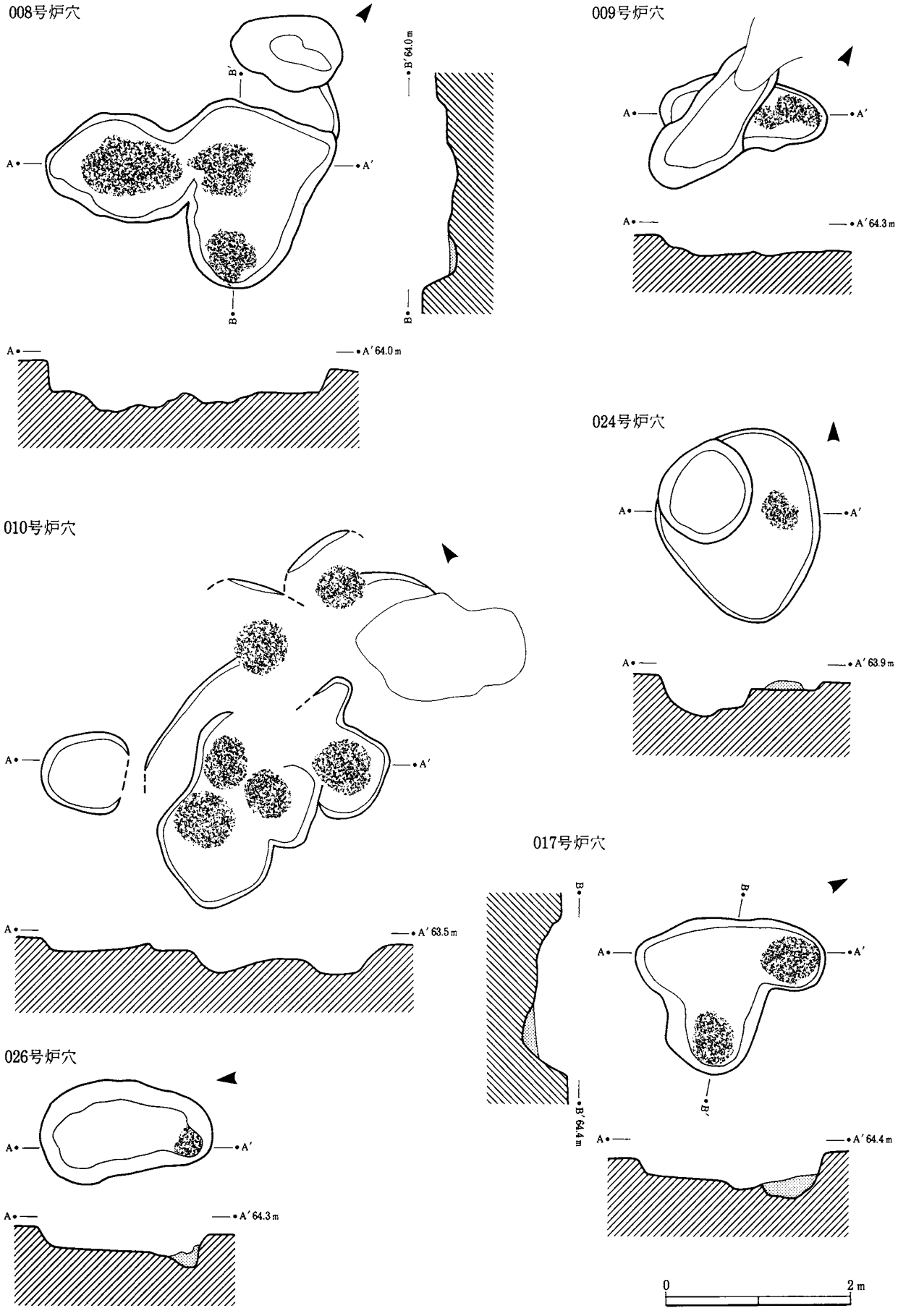
楕円形の掘込みの南半に燃焼部が認められる。掘込みは比較的深い。燃焼部は比較的よく焼けており、焼土の堆積も多い。覆土は暗褐色土を主体とする。

掘込み外の西側に燃焼部が検出された。この燃焼部はよく焼けている。おそらくこの燃焼部を伴う掘込みは削平され、燃焼部のみが残ったものと判断される。

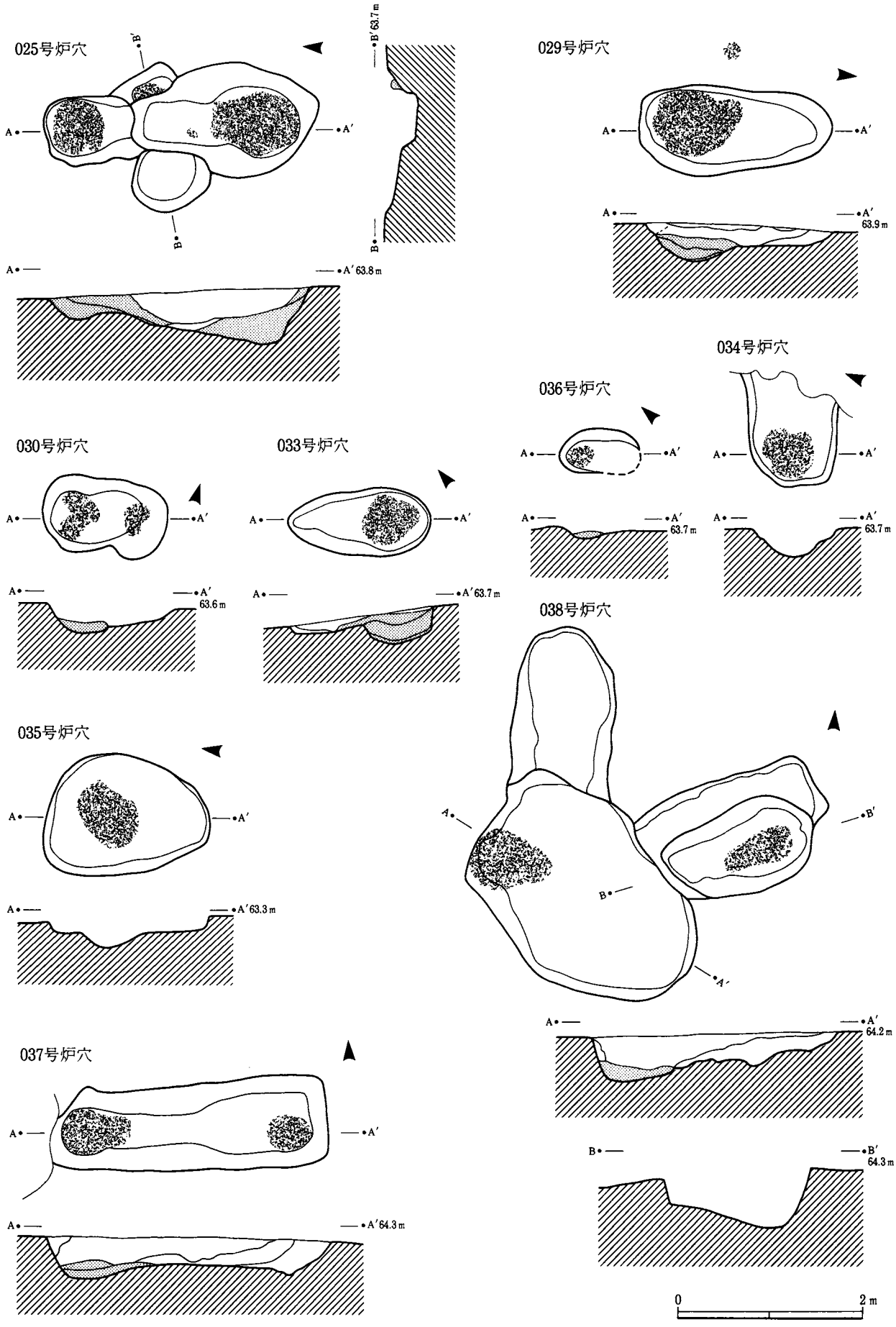
029号炉穴からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

030号炉穴（第10図）

楕円形の掘込みに、２か所の燃焼部が認められる。西側の燃焼部はよく焼けており、焼土の堆積も多い。東側の燃焼部は、比較的よく焼けているが、焼土の堆積は少ない。030号炉穴の設営時期は、覆土中から出土した土器（第17図）から、子母口式期と考えられる。



第9図　A区炉穴実測図（2）



第10図　A区炉穴実測図（3）

033号炉穴（第10図、図版３）

楕円形の深い掘込みに、燃焼部が認められる。燃焼部の部分は掘込みが深く、別個の土坑のようでもある。燃焼部はよく焼けており、焼土の堆積は非常に多い。033号炉穴からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

034号炉穴（第10図）

楕円形の掘込みに燃焼部が認められる。掘込みの大半は撹乱によって壊されている。燃焼部はよく焼けているが、焼土の堆積は少ない。034号炉穴からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

035号炉穴（第10図、図版３）

楕円形の浅い掘込みに、燃焼部が認められる。燃焼部はよく焼けているが、焼土の堆積も多い。035号炉穴からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

036号炉穴（第10図、図版３）

楕円形と思われる掘込みに、燃焼部が認められる。掘込みは浅く、壁の1/3程度は削平されている。燃焼部の範囲は狭いが、よく焼けており、焼土の堆積も多い。036号炉穴の設営時期は、覆土中から土器（第17図）は出土しているものの、詳細な時期は不明の土器である。したがって、036号炉穴の詳細な設営時期も不明であるといわざるを得ない。

037号炉穴（第10図、図版３）

やや角張った楕円形の掘込みに、２か所の燃焼部が認められる。燃焼部は掘込みの東西の端部に形成されており、本来は２基の炉穴の重複であったと考えられる。掘込みは深く、燃焼部は比較的よく焼けており、西側の燃焼部付近での焼土の堆積が比較的多い。掘込みの覆土は暗褐色土を主体とする。掘込み東側の壁付近に土器が集中して出土している。037号炉穴の設営時期は、覆土中から出土した土器（第17図）から、子母口式期と考えられる。

038号炉穴（第10図、図版４）

楕円形の４基の掘込みと、２か所の燃焼部からなる。燃焼部を有する掘込みは深く、西側の燃焼部は、多くの焼土を伴う。２基の燃焼部を有する掘込みによって、他の２基の掘込みの燃焼部が壊されているものと考えられる。したがって、038号炉穴は４基の炉穴の重複した姿であると考えられる。掘込みの覆土は暗褐色土を主体とする。038号炉穴の設営時期は、覆土中から出土した土器（第17図）から、子母口式期と考えられる。

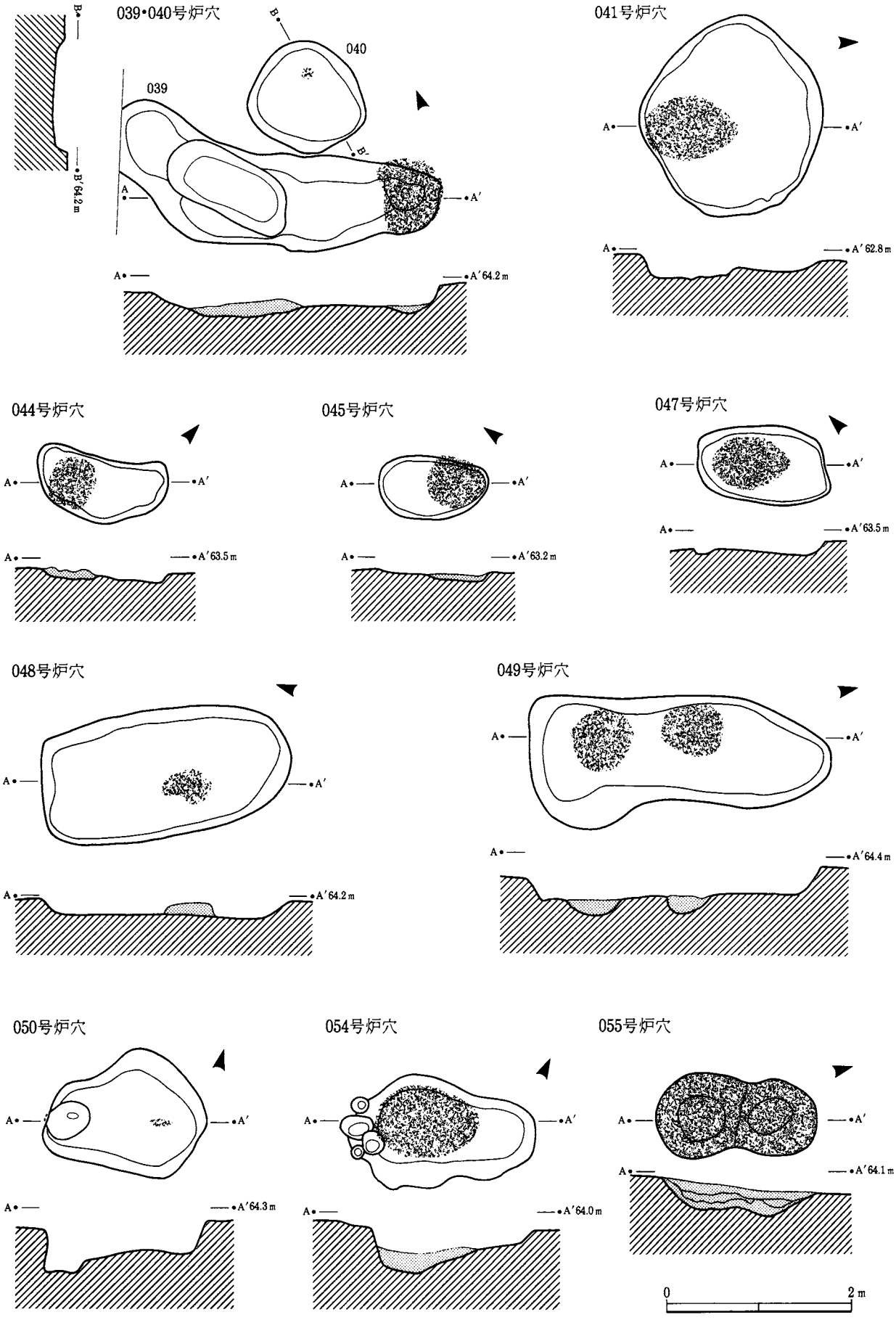
039号炉穴（第11図、図版４）

長楕円形の掘込みの東端に燃焼部が認められる。燃焼部はよく焼けており、焼土も多く堆積している。掘込みの西端は、東側からのプランから考えると、やや北側に屈曲していることから、本来は別個の掘込みであった可能性が考えられる。

掘込み中央のやや西側に楕円形の掘込みがあり、この掘込み内には焼土が堆積している。燃焼部は認められないことから、長楕円形の掘込みによって燃焼部が壊された炉穴であった可能性が考えられる。039号炉穴からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

040号炉穴（第11図、図版４）

円形の浅い掘込みで、極めて狭い範囲の燃焼部が認められる。燃焼部は比較的よく焼けているが、焼土の堆積は認められない。040号炉穴からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。



第11図　A区炉穴実測図（4）

041号炉穴（第11図、図版４）

円形の掘込みに燃焼部が認められる。燃焼部は比較的よく焼けているが、焼土の堆積も比較的多い。041号炉穴からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

044号炉穴（第11図、図版４）

楕円形の浅い掘込みに、燃焼部が認められる。燃焼部はよく焼けており、焼土の堆積も多い。044号炉穴からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

045号炉穴（第11図、図版４）

楕円形の浅い掘込みに、燃焼部が認められる。燃焼部は掘込み全体の半分程度の規模を有しており、あまりよく焼けていない。焼土の堆積は比較的多い。045号炉穴からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

047号炉穴（第11図、図版４）

楕円形の浅い掘込みに、燃焼部が認められる。燃焼部は掘込み全体の半分程度の規模を有しており、あまりよく焼けていない。焼土の堆積は比較的多い。047号炉穴からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

048号炉穴（第11図、図版４）

楕円形の浅い掘込みに、燃焼部が認められる。燃焼部は掘込みの規模に比べ小さなものであるが、あまりよく焼けていない。焼土の堆積は比較的多い。048号炉穴からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

049号炉穴（第11図、図版４）

長楕円形の掘込みに、燃焼部が２か所認められる。掘込みは深く、燃焼部は比較的よく焼けており、焼土の堆積も多い。掘込みの南側はプランがやや膨らんでおり、北側の細身のプランとは異なる。２か所の燃焼部の存在を考えると、２基の炉穴の重複と考えられる。049号炉穴からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

050号炉穴（第11図、図版５）

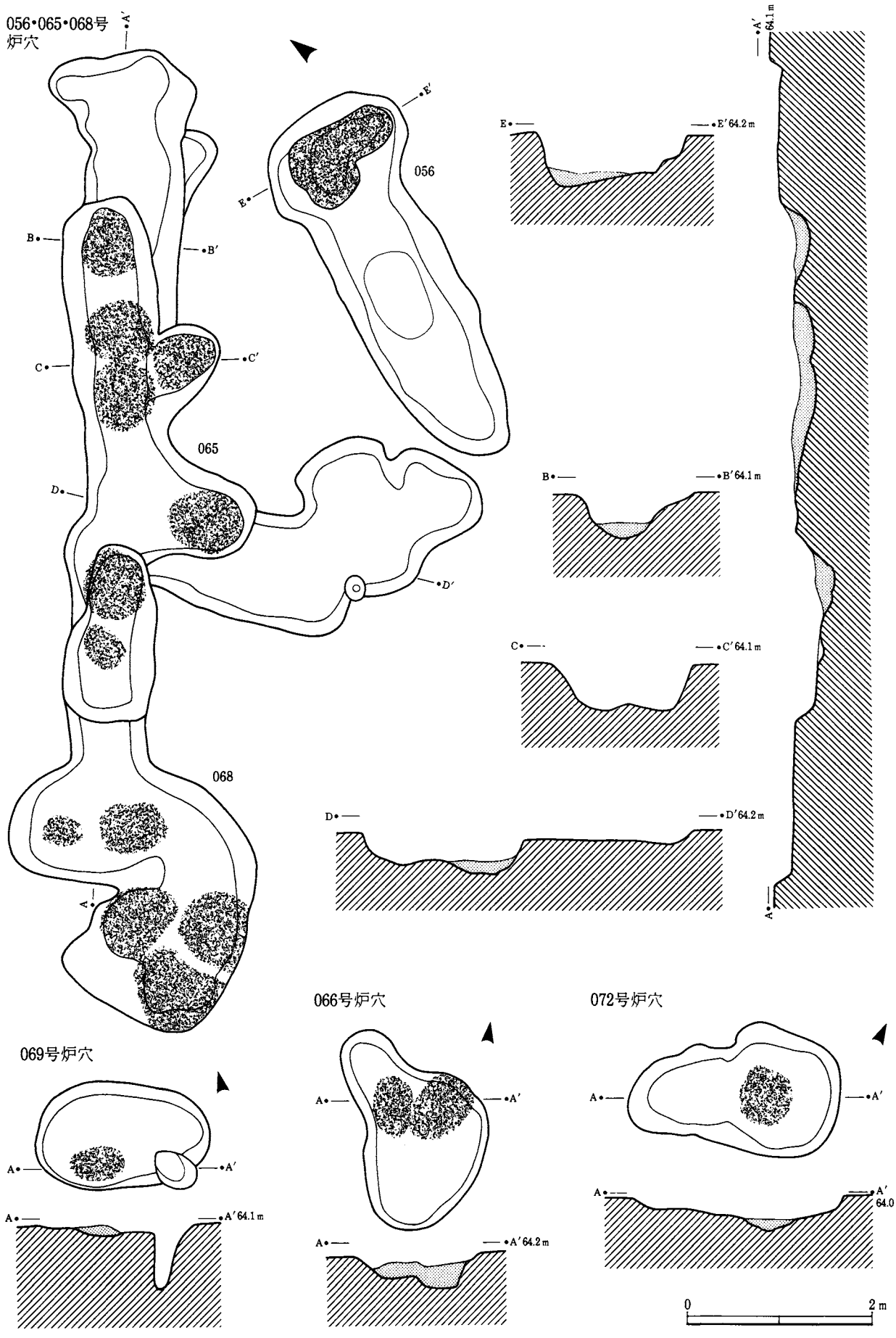
不整形の深い掘込みに、極めて狭い範囲の燃焼部が認められる。燃焼部はあまりよく焼けていない。焼土の堆積もほとんど認められない。掘込み西側のピットが本跡に伴うか否かは不明である。050号炉穴からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

054号炉穴（第11図、図版５）

楕円形の掘込みに、燃焼部が認められる。燃焼部は掘込み全体の半分以上の規模を有しており、よく焼けている。焼土の堆積も多い。054号炉穴の設営時期は、覆土中から出土した土器（第17図）から、子母口式期と考えられる。掘込み西側の浅いピット群が本跡に伴うか否かは不明である。

055号炉穴（第11図、図版５）

楕円形の皿状の掘込みに、焼土が充填している。掘込みの全面にわたり受熱の痕跡が認められる。掘込みが削平された炉穴の燃焼部であろうと思われる。掘込みのプランや断面形態から考えて、２か所の燃焼部であろうと考えられる。燃焼部はよく焼けている。055号炉穴からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。



第12図　A区炉穴実測図（5）

056号炉穴（第12図）

長楕円形のプランを基本とするが、北側で東西方向に膨らみ、全体的にはT字状のプランを呈する。掘込みは深く、北側の膨らんだ部位に、燃焼部が認められる。燃焼部はよく焼けており、焼土の堆積も多い。プラン中央部には楕円形の浅い凹みが認められる。056号炉穴の設営時期は、覆土中から出土した土器（第17図）から、子母口式期と考えられる。

065号炉穴（第12図、図版４）

後述する068号炉穴と重複する。調査段階では、プラン全体の南西側の５か所の燃焼部と、この燃焼部を有する掘込みを068号炉穴と認識し、それ以外の部分をすべて065号炉穴と認識している。

065号炉穴は、北東から南西方向に重複する長楕円形の掘込みと、アメーバ状に突出する掘込みからなる。燃焼部が７か所確認されているが、重複（新規の炉穴の掘込みの設営）の際に壊された燃焼部の存在を考えれば、７か所以上の炉穴の重複であったことが考えられる。掘込みはしっかりとしており、焼土の堆積も多い。

プラン中央部の北東方向の突出部（燃焼部）の覆土上層から土器片がまとまって出土している。065号炉穴の設営時期は、覆土中から出土した土器（第17図）から、子母口式期と考えられる。

066号炉穴（第12図、図版５）

不整形の掘込みに、燃焼部が２か所認められる。プランを詳細に見ると、楕円形の掘込みの北西部に、小規模な楕円形の掘込みが突出しているように観察される。２か所の燃焼部の存在を考えると、２基の炉穴の重複であろうと考えられる。燃焼部はよく焼けており、焼土の堆積も多い。066号炉穴からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

068号炉穴（第12図、図版５）

065号炉穴と重複する炉穴である。逆C字状を呈する浅い掘込みに、５か所の燃焼部が認められる。掘込みのプランから最低２基の炉穴の重複であろうと考えられるが、燃焼部が５か所も認められることから、幾つかの掘込みが削平されてしまったものと考えられる。燃焼部は比較的よく焼けているが、焼土の堆積はあまり多くない。068号炉穴の設営時期は、覆土中から出土した土器（第17図）から、子母口式期と考えられる。

069号炉穴（第12図、図版６）

楕円形の浅い掘込みに燃焼部が認められる。燃焼部はあまりよく焼けておらず、焼土の堆積もあまり多くない。掘込みの南西側のピットが本跡に伴うか否かは不明である。069号炉穴からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

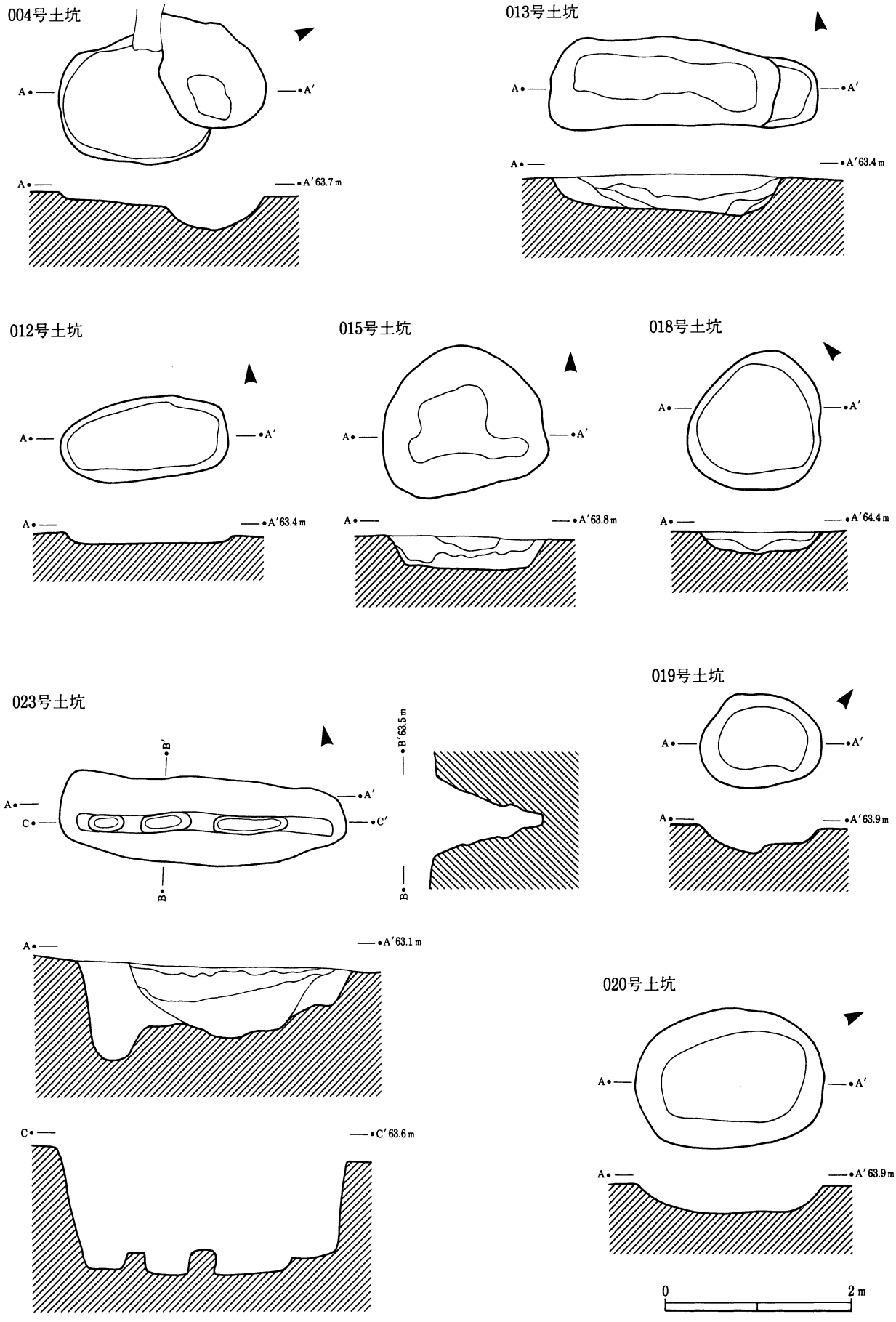
072号炉穴（第12図　図版12）

楕円形の掘込みに、燃焼部が認められる。燃焼部はよく焼けており、焼土の堆積も多い。072号炉穴の設営時期は、覆土中から出土した土器（第17図）から、子母口式期と考えられる。

（２）土坑

大作頭遺跡A区からは12基の土坑が検出されている。この中には、形態から考えて陥穴と判断されるものもあり、それについては本文中に明記している。

土坑の設営時期については、覆土中から出土した土器片の時期に準拠しているが、土器片が出土している土坑は２基のみである。したがって、土器片の出土していない大半の土坑については、時期はおろか、



第13図　A区縄文時代土坑実測図（1）

縄文時代に属するものであるかという基本的な疑問がある。しかし、これらの土坑については、調査段階で、確認面のレベルや覆土から考えて縄文時代に属すると判断していることから、縄文時代に属するものとして扱うこととした。

土器片の出土していない土坑の、詳細な設営時期は不明であるが、炉穴の設営時期（早期）・住居跡の設営時期（中期）・包含層の形成時期（早期・中期・後期）のいずれかに相当するものと考えられる。

土坑の土層断面の注記について、提示の必要があると判断されるもののみ本文中に記している。また、複数の掘込みが重複し、本来は複数基の土坑であると判断されるものであっても、調査段階で一つの遺構番号を付したものについては、1基として扱っている。

004号土坑（第13図）

隅丸方形の浅い掘込みと、不整円形の掘込みからなる。不整円形の掘込みのほうが深く、本来は2基の別個の土坑であった可能性も考えられる。004号土坑の設営時期は、覆土中から出土した土器（第18図）から、子母口式期と考えられる。

012号土坑（第13図、図版6）

長楕円形の浅い掘込みで、底面は極めて平坦である。012号土坑からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

013号土坑（第13図、図版6）

隅丸長方形の掘込みが2基重複する土坑である。底面には撹乱による凹凸が認められる。覆土は暗褐色土を主体にローム粒を多く含むものである。東側の掘込みは深さが5㎝にも満たない。極めて浅い掘込みである。013号土坑の設営時期は、覆土中から出土した土器（第18図）から、子母口式期と考えられる。

015号土坑（第13図、図版6）

不整円形の掘込みで、底面は平坦である。西側と南側は、風倒木痕と考えられる撹乱によって壊されており、図示した実測図は、かろうじて確認することのできた上端と下端であり、土層断面も遺存状態が良好な地点のものである。覆土の最下層は焼土層であるが、純粋な焼土層ではなく、暗褐色土を多く含むものである。焼土層を除去した段階で、掘込みの底面を観察したが、受熱の痕跡（燃焼部）は認められなかったので、015号土坑は炉穴ではない。015号土坑からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

018号土坑（第13図、図版6）

不整円形の掘込みで、底面は比較的平坦である。覆土は暗褐色土を主体にローム粒を多く含むものである。018号土坑からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

019号土坑（第13図、図版6）

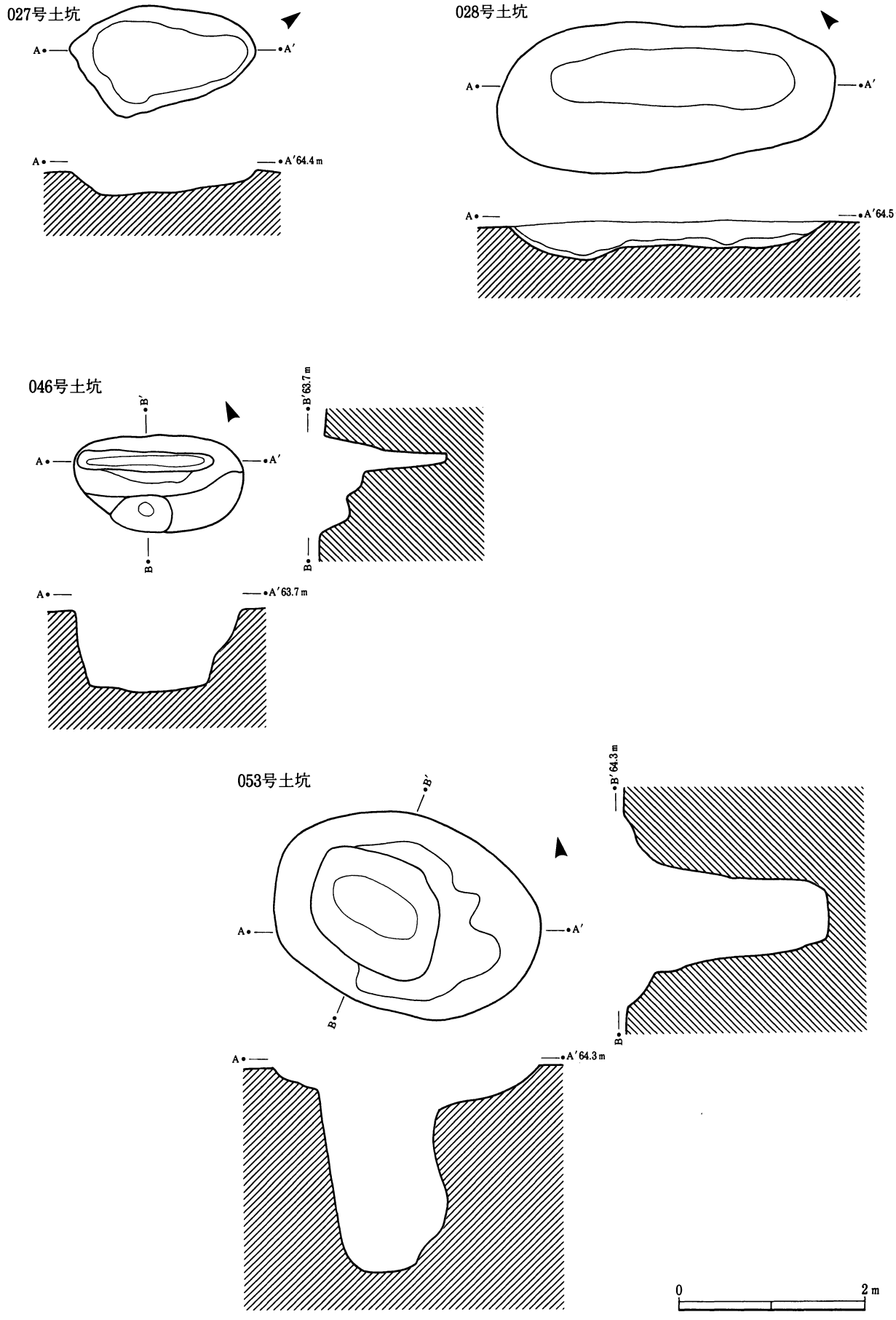
楕円形の掘込みで、底面には撹乱による凹凸が認められる。019号土坑からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

020号土坑（第13図、図版6）

楕円形の掘込みで、皿状の断面形態を呈する。020号土坑からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

023号土坑（第13図、図版6）

細長く深い掘込みであり、陥穴である。覆土の主体は、ローム粒を多く含む暗褐色土であるが、覆土を詳細に観察すると、覆土中央部にローム粒の混入が少ない部分があり、別個の掘込みがあった可能性も捨



第14図　A区縄文時代土坑実測図（2）

てきれない。ただし、調査段階ではプランや壁を確認できたわけではない。底面には、楕円形の掘込みが3か所検出された。掘込みの覆土は粘性に富むローム粒の層であった。023号土坑からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

027号土坑（第14図）

不整楕円形の掘込みで、比較的浅いものの、掘込みはしっかりとしている。底面には凹凸が多い。027号土坑からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

028号土坑（第14図）

長楕円形の掘込みで、覆土は暗褐色土を主体にローム粒を多く含むものである。極めて均質な覆土で、粘性に富み、しまりは良好である。028号土坑からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

046号土坑（第14図、図版7）

プラン全体の北側の部分は陥し穴であると考えられる。この陥穴の南側を囲むように形成されている浅い掘込みは、覆土が均質な暗褐色土であり、底面もしまりに欠け、明瞭に確認できたわけではない。したがって、陥穴の廃絶後の崩壊・崩落した部分ではないかと考えられる。また、この掘込み内のピット状の掘込みも、明瞭に掘込みとして確認できたわけではなく、撹乱の可能性が高い。

陥穴の覆土は、ローム粒を多く含む暗褐色土で、粘性に富み、しまりは良好である。046号土坑からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

053号土坑（第14図、図版7）

円筒形の深い掘込みと、この掘込みを囲うような浅い掘込みからなる。この浅い掘込みは、覆土が均質な暗褐色土であり、底面もしまりに欠け、明瞭に確認できたわけではない。したがって、円筒形の掘込みの廃絶後の崩壊・崩落した部分ではないかと考えられる。

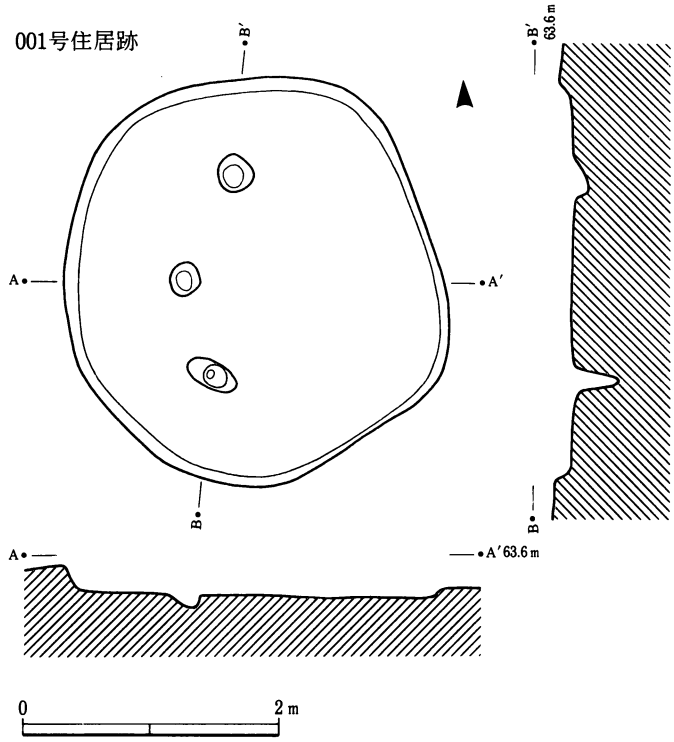
円筒形の掘込みは、覆土は暗褐色土を主体にローム粒・ローム塊を多く含み、粘性に富むものである。053号土坑からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

（3）住居跡

001号住居跡（第15図、図版7）

おおむね円形を呈するプランである。壁高は10cm程度で、極めて浅い掘込みである。壁は漸移層中に形成されており、しっかりと確認されたわけではない。床面はソフトローム層中に形成されているが、しまりに乏しく、明瞭な硬化面は確認されていない。柱穴は3本検出したが、しっかりとした掘込みを有するものはない。南側の柱穴の深さが30cm程度で、唯一深いものであるが、他の2本の深さは10cm足らずであり、柱穴であると断定はできない。炉は確認できなかった。住居跡であるという根拠に乏しい遺構であるが、調査段階での認識に準拠し、住居跡として報告することとした。

住居跡の覆土からは少量の早期の土器片（第19図）が出土している。しかし、これらは床面直上や柱穴内から出土したものではないので、住居跡の設営時期を示す根拠には乏しい。遺構外からは早期の土器片が多く出土しているので、これらが混入したものと考えることもできる。現段階では、早期（子母口式期）に設営された可能性がある。また、001号住居跡が、大作頭遺跡B区での2軒の住居跡（中期後半・第39図）の規模・形態に類似することから、中期後半に設営された可能性も指摘しておかなければならない。



第15図　A区縄文時代住居跡実測図

2　遺物

大作頭遺跡A区から出土した縄文時代の遺物は、土器・石器・礫に限られる。このうち実測図を提示するものは土器と石器であり、礫については出土状況等についての記載を行うものとする。

土器は、遺構ごとに掲載し、その後に遺構外出土を掲載した。掲載順序は、遺構出土については、遺構の事実記載の順番に従っている。遺構外出土については、型式ごとの分類に準拠するのではなく、A区内での各時期別の土器片の分布状況が概観できるように、大グリッドごとに掲載した。掲載する土器の取捨選別の段階で、図示不可能な小破片や、細別時期が不明な条痕のみの破片・無文の破片は掲載しないものとした。胎土中に繊維を含む土器については、断面中にドットを付しておいた。

石器は、大作頭遺跡A区での石器組成（縄文時代早期の炉穴・土坑を主体とする遺跡の石器組成）を概観できるように、出土地点ごと（遺構ごと・グリッドごと）による提示ではなく、器種ごとに掲載することを基本とした。実測図を提示した石器は、完形もしくはこれに準ずるものに限った。なお、実測図を提示しないものについては、全点にわたり器種・石材・計測値等を第2表に示した。実測図に示した石器についても同様の作業を行っている。石器実測図に用いているスクリーントーンの用例は凡例に示している。

（1）土器

大作頭遺跡A区から出土した縄文土器は、遺構内・遺構外出土に関わらず、早期の子母口式土器が主体であり、少量の田戸上層式土器、極少量の撚糸文土器や加曽利B式土器が認められるにすぎない。したがって、大作頭遺跡A区で検出された縄文時代の遺構のうち、時期不明である遺構の大半は、早期の子母口式期に設営された可能性が高いと考えることができる。

土器の事実記載に際しては、拓影図・断面図・写真（いずれも縮尺は1/3）によって確認できる要素については省略する。事実記載はあくまで、拓影図等によって表現することのできない要素を記す方法である。内面の拓影図については、遺存状態が良好なものや、特殊なものについては示している。内面の調整の有無や状態については、拓影図で示していないものについては、その都度記載している。土器型式名については、遺構出土のものに関しては、遺構の設営時期を推し量る際に重要であることから、その都度記載した。遺構外出土のものに関しては、明確にする必要があるものに限り記載し、全点にわたり記載しているわけではない。

子母口式土器は市原市域のみならず、千葉県内での出土例はあまり多くない。また、大作頭遺跡（A区・B区・C区）出土の子母口式土器は、その終末期の様相をよく示した土器群であり、今後の引用・分析の対象となることが十分予想される。したがって、主要な土器群については巻頭のカラー図版に示し、文様・施文方法・口唇部加飾の詳細を示すために接写を行い（図版43～48、縮尺は任意）、今後の活用に向けての便宜を図っている。

条痕のみの土器・擦痕のみの土器・無文土器など、形式学的な特徴に乏しい土器については、胎土・焼成や有文土器の量的な多さから、子母口式土器と判断したものが多い。現実には田戸上層式土器の新しい部分から野島式土器の古い部分の土器も少なからず含まれている可能性が高い。しかし、破片資料でこれらを厳密に区別することは困難であることから、ここでの子母口式土器とは、若干の時間幅（田戸上層式土器の新しい部分から野島式土器の古い部分）を有していることを明記しておきたい。

また、条痕としたものの中には、貝殻条痕と絡条体条痕が含まれている。明確に絡条体条痕であると判断されるものはそのように記しているが、明確に区別できないものは単に条痕と記している。

a　炉穴出土土器

001号炉穴出土土器（第16図、図版23）

1の器表面が、条痕であるのか、沈線であるのかは不明である。内面には条痕が認められる。胎土・焼成等から判断して、子母口式土器であろうと思われる。

002号炉穴出土土器（第16図、図版23）

4の内外面には条痕が認められる。5の器表面には縦横に条痕が認められ、内面は擦痕が認められる。6は胴部下半の破片で、器表面には縦横に条痕が認められ、内面には縦位方向の条痕が認められる。

002号炉穴出土土器はおおむね子母口式土器であると思われるが、5は野島式土器の可能性もある。

010号炉穴出土土器（第16図、図版23）

1の器表面は条痕であるが、内面は擦痕である。010号炉穴出土土器はおおむね子母口式土器であると思われる。

024号炉穴出土土器（第16図、図版23）

1は小形の個体であろうと思われる。口縁下の屈曲部には刺突が施される。同様の刺突が幅狭の口唇部にも施される。2の器表面には条痕が認められる。

024号炉穴出土土器はおおむね子母口式土器であると思われる。

025号炉穴出土土器（第16図、図版23）

1の器表面には擦痕が、内面には条痕が認められる。2は内外面ともに擦痕が認められる。3の口唇部には刺突風の刻みが施される。5の内外面は、擦痕が指頭による軽易なナデ調整によって擦られている。6の器表面には条痕が、内面には擦痕が認められる。

025号炉穴出土土器はおおむね子母口式土器であると思われる。

030号炉穴出土土器（第17図、図版23）

1は口縁部外面に絡条体圧痕が施される。内外面ともに深い擦痕が認められる。子母口式土器である。

036号炉穴出土土器（第17図、図版23）

1の器表面は撚糸文が施される。内面は折り返し口縁風に肥厚し、無文である。一見すると早期前半の撚糸文土器であるが、胎土・焼成からは沈線文系土器群や条痕文系土器群に伴うように思われ、判然としない。時期不明の土器である。

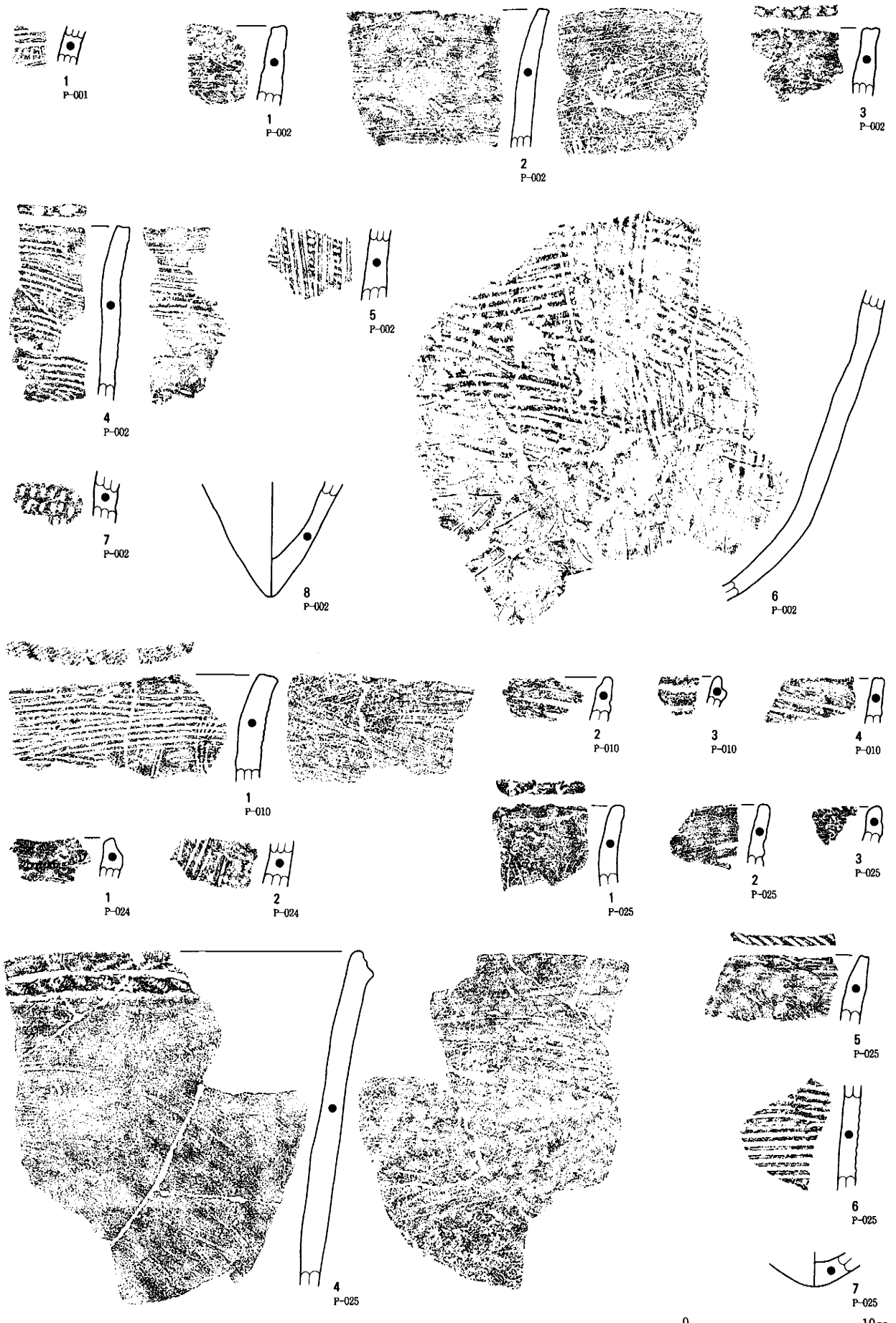
037号炉穴出土土器（第17図、図版23）

1の内面には器表面同様の条痕が認められる。4の器表面は擦痕調整で、内面は条痕調整である。内面の条痕は、子母口式土器の条痕というよりも野島式土器のしっかりとした条痕に近い。破片下半には横位方向に刺突列が巡り、刺突列以下は無文となる。1～4は子母口式土器であるが、4は野島式に近い様相を多分に有している。

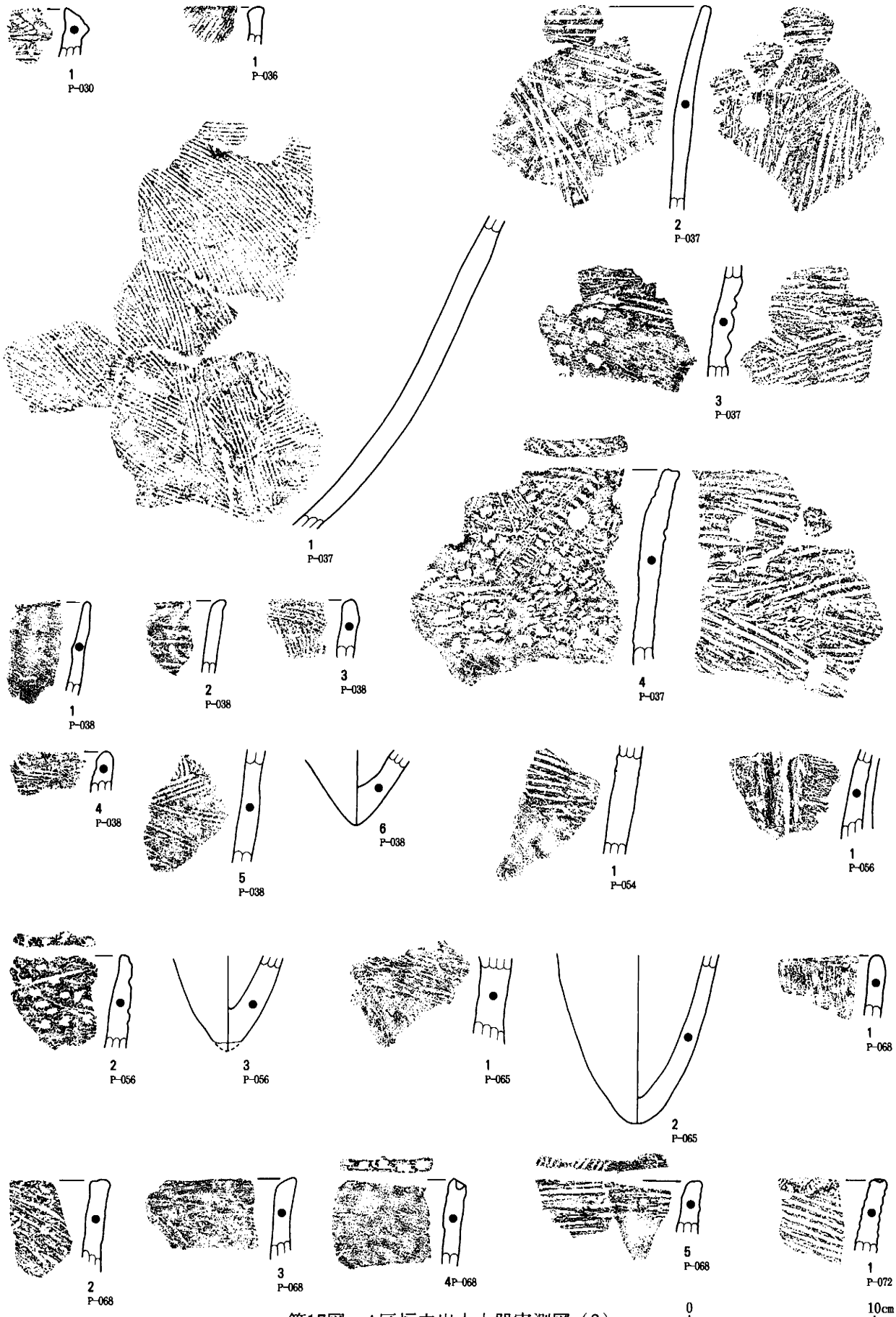
038号炉穴出土土器（第17図、図版23）

1・2は器表面に軽易な擦痕が認められる。3の器表面は、口縁部では横位方向の条痕が、以下の部分では縦位の条痕が認められる。5の内面には、器表面同様の条痕が認められる。

1～6は子母口式土器である。



第16図　A区炉穴出土土器実測図（1）



第17図　A区炉穴出土土器実測図（2）

054号炉穴出土土器（第17図、図版23）

1は底部に近い部位の破片で、内外面ともに条痕が認められる。子母口式土器であろう。

056号炉穴出土土器（第17図、図版23）

1は断面形態が三角形に近い隆帯が貼付され、隆帯より右側には条線（条痕？）が、隆帯の貼付後に施され、隆帯より右側は無文となる。2は刺突以外に、沈線が認められる。

1～3は子母口式土器であるが、1は野島式に近い様相を多分に有している。

065号炉穴出土土器（第17図、図版23）

1は極めて脆弱な焼成で、器表面に条痕が施される。1・2共に胎土・焼成から判断して子母口式土器であろうと思われる。

068号炉穴出土土器（第17図、図版23）

1の器表面には軽易な擦痕が認められる。2は内外面ともに雑な擦痕が認められる。3の断面形態は田戸上層式土器風であるが、胎土・焼成は子母口式土器である。5の器表面には条痕が認められる。

1～5は子母口式土器である。

072号炉穴出土土器（第17図、図版23）

1の内外面には、沈線風の効果を有する条痕が認められる。子母口式土器である。

b　土坑出土土器

004号土坑出土土器（第18図、図版24）

1の器表面には条線風の沈線が施される。内面には擦痕が認められる。2は破片上端に、断面形態が扁平な三角形を呈する隆帯が横位に貼付され、内面には条痕が施される。3は内外面ともに条痕が施される。いずれの破片も詳細な時期を知る決め手に欠けるが、胎土・焼成から判断して、子母口式土器であろうと思われる。

013号土坑出土土器（第18図、図版24）

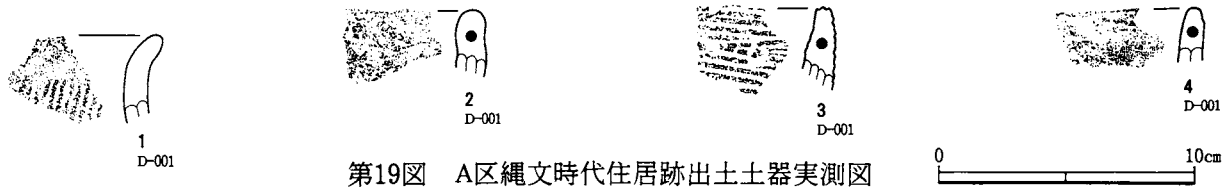
1は内外面ともに擦痕が認められる。子母口式土器である。

第18図　A区縄文時代土坑出土土器実測図

c　住居跡出土土器

001号住居跡出土土器（第19図、図版24）

1は井草式土器である。2は内外面ともに軽易な擦痕が認められる。3は内外面ともに条痕が認められる。2～4は子母口式土器であろうと思われる。



第19図　A区縄文時代住居跡出土土器実測図

d　遺構外出土土器

ここでは、遺構外から出土した縄文土器を扱う。遺構外出土については、型式ごとの分類に準拠するのではなく、A区内での各時期別の土器片の分布状況が概観できるように、大グリッドごとに掲載した。なお、縄文時代以外の遺構（A区では002号方形周溝状遺構）から出土した縄文土器についても、遺構外出土土器としてここに提示している。

遺物番号は大グリッドごとに更新し、出土した小グリッドが判明しているものについては、その小グリッド名を遺物番号の脇に記している。

D４区出土土器（第20図、図版24）

１は堅緻な焼成で、内外面ともに軽易な擦痕が認められる。２は内外面ともに条痕が認められる。５の破片上端は隆帯に連なるようである。７は隆帯が縦位に貼付され、隆帯脇には沈線風のナゾリが認められる。口唇部には刻みが施される。D４区出土土器は、おおむね子母口式土器である。

D５区出土土器（第20図、図版24）

３・４は内外面ともに擦痕が認められる。６は024号炉穴出土土器１と同一個体であろう。８の器表面には条痕が認められる。９・10は同一個体で、口唇部にも条痕が認められる。９の口唇部には竹管によるC字状の刺突が認められる。12の器表面には条痕が認められる。この条痕は、縦位方向を基本とするが、破片上半では横位方向のものが加わる。内面に顕著な調整痕は認められない。16は隆帯上に刺突が施される。17は隆帯上に絡条体圧痕が施される。18の器表面は擦痕が認められ、縦位の隆帯脇は、沈線風のナゾリが認められる。20の器表面の破片上半には、半裁竹管による平行沈線文と刺突列が施される。破片下半は無文となる。内面の上端部には、器表面同様に、半裁竹管による平行沈線文と刺突列が施される。20の口縁部は一部しか残っていないが、内面の並行沈線文が口縁に沿って施されている可能性が強く、波状を呈する個体である可能性が高い。一見すると、中部地方に出自を求めることのできる破片であるが、内面の刺突に注目するならば東北地方の常世式土器風でもある。いずれにしろ、大作頭遺跡では子母口式土器の範疇に納まる破片である。

D５区出土土器は、おおむね子母口式土器である。

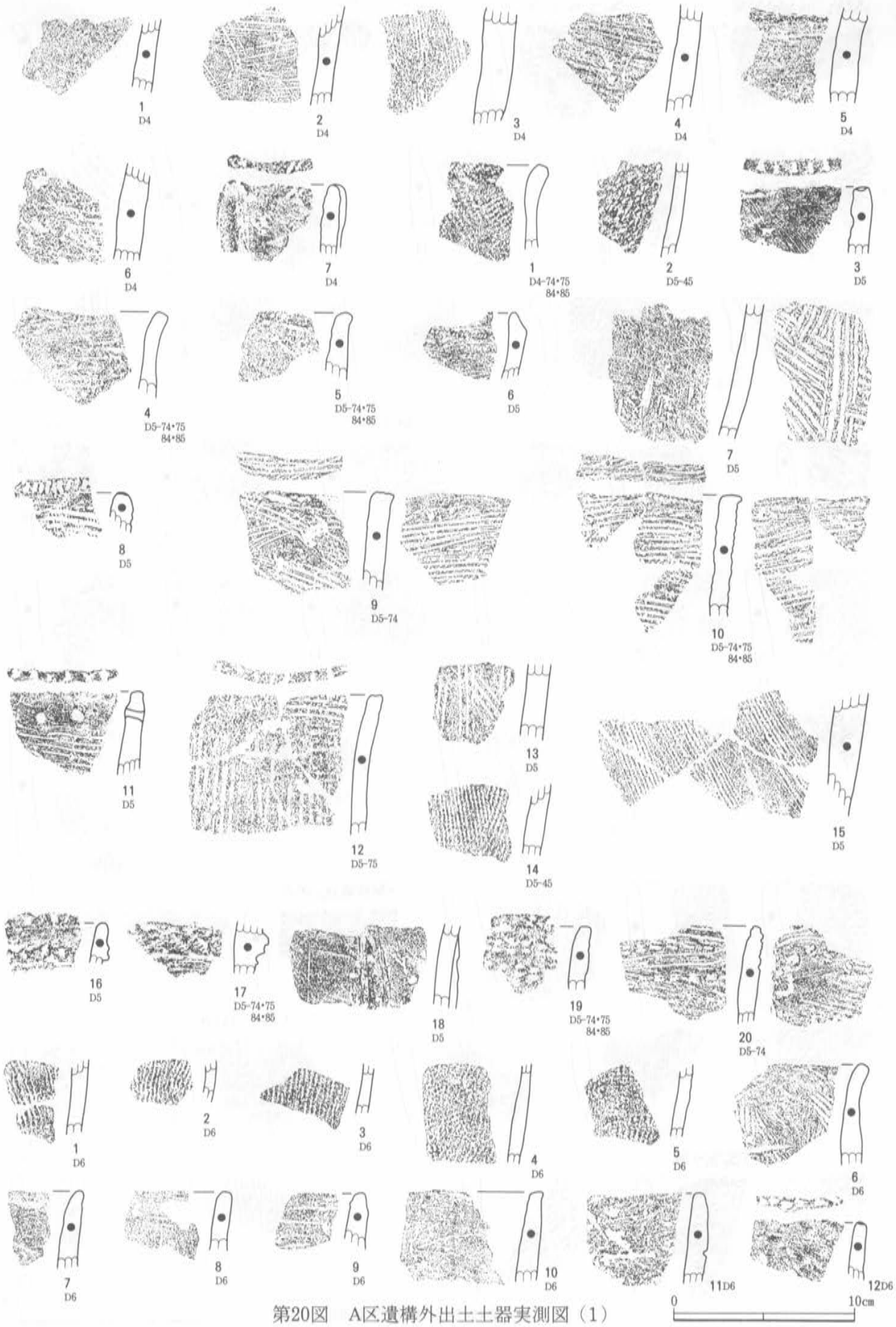
D６区出土土器（第20・21図、図版24・25）

１～５は撚糸文土器である。６は器表面にわずかながら条痕が認められ、内面には擦痕が認められる。７～９・13・14は内面に擦痕が認められる。15は口唇面にも条痕が認められる。16は口唇面に刻みが施される。17は肥厚する口縁部に絡条体圧痕が認められる。18は口縁端部に半裁竹管による弧状の意匠が施される。破片右上には縦位の細沈線が施される。20は二列の刺突列が縦位に施される。

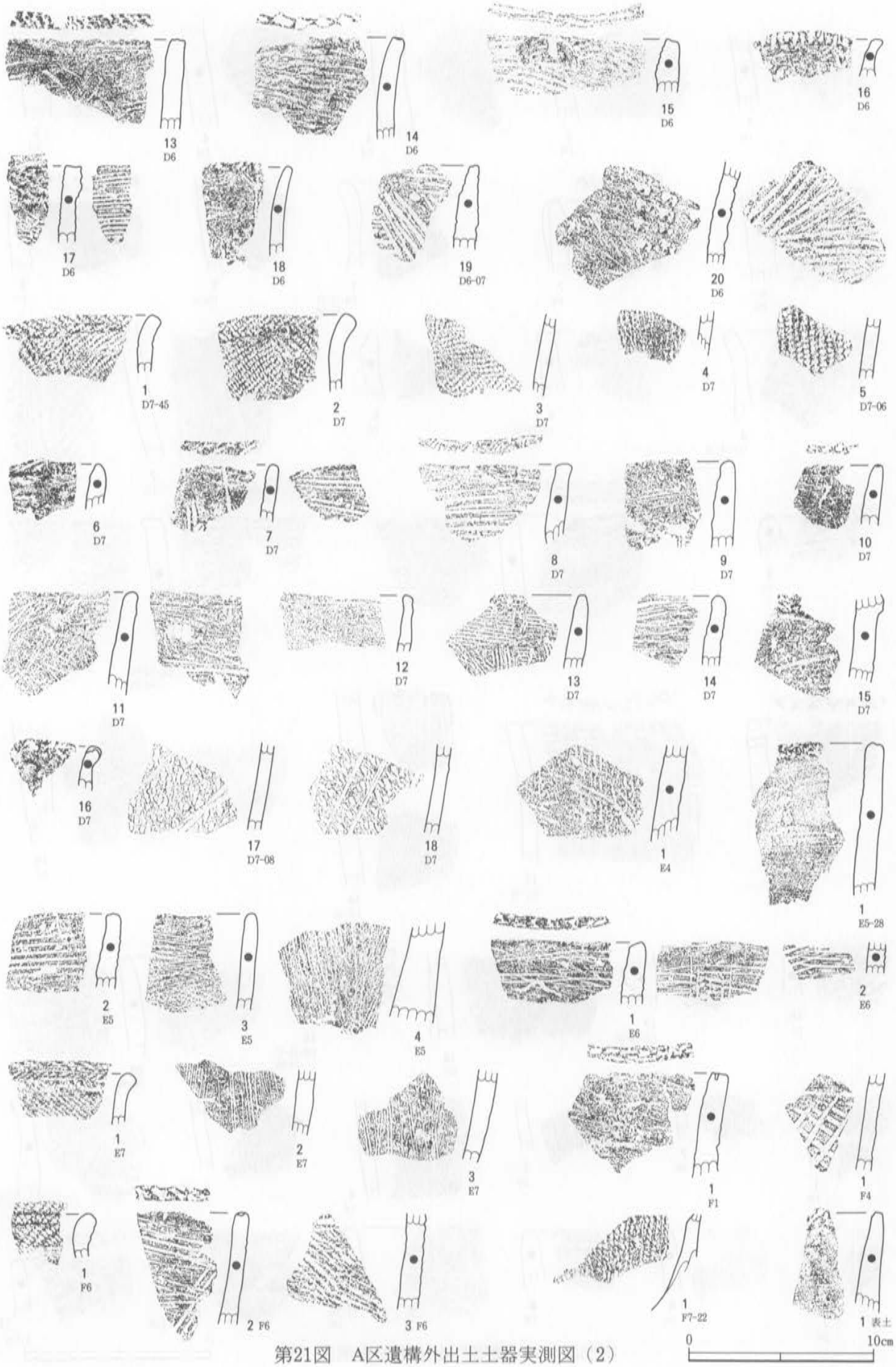
D６区出土土器は、１～５を除き、子母口式土器である。

D７区出土土器（第21図、図版25）

１～５は撚糸文土器である。６は口唇面と内面に条痕が認められる。７は内外面ともに間隔がまばらな



第20図　A区遺構外出土土器実測図（1）



第21図　A区遺構外出土土器実測図（2）

条痕が認められる。口唇部には刻みが施される。8の器表面は、条痕調整が指頭によって磨り消されるような調整である。口唇部には、絡条体圧痕がわずかに認められる。13・14は内外面ともに条痕が認められる。15は横位の隆帯が貼付され、内面に軽易な擦痕が認められる。16は薄手で、口唇部には絡条体圧痕が認められる。17・18は後期中葉に属する破片である。

D7区出土土器は、1～5、17・18を除き、子母口式土器である。

E4区出土土器（第21図、図版25）

1は内外面ともに条痕が認められる。子母口式土器であると思われる。

E5区出土土器（第21図、図版25）

1は内外面ともに擦痕が認められる。口唇部には刻みが施される。3は内面にも条痕が認められる。4は底部に近い部位の破片で、器表面のみに条線が認められる。

E5区出土土器は、4をのぞき子母口式土器である。4は中期後半の条線のみの個体の胴部下半（底部付近）の破片であろう。

E6区出土土器（第21図、図版25）

2の器表面は、条痕ではなく集合沈線である。1は子母口式土器である。2は不明である。

E7区出土土器（第21図、図版25）

1は撚糸文土器、2・3は中期後半の条線のみの個体の破片である。

F1区出土土器（第21図、図版25）

1は内外面ともに軽易な擦痕が認められる。口唇部には刺突が施される。子母口式土器である。

F4区出土土器（第21図、図版25）

1は後期中葉の破片で、格子目の沈線が施される。

F6区出土土器（第21図、図版25）

1は撚糸文土器である。2・3は内外面ともに条痕が認められる。2・3は子母口式土器である。

F7区出土土器（第21図、図版25）

1は撚糸文土器の底部に近い部位の破片である。

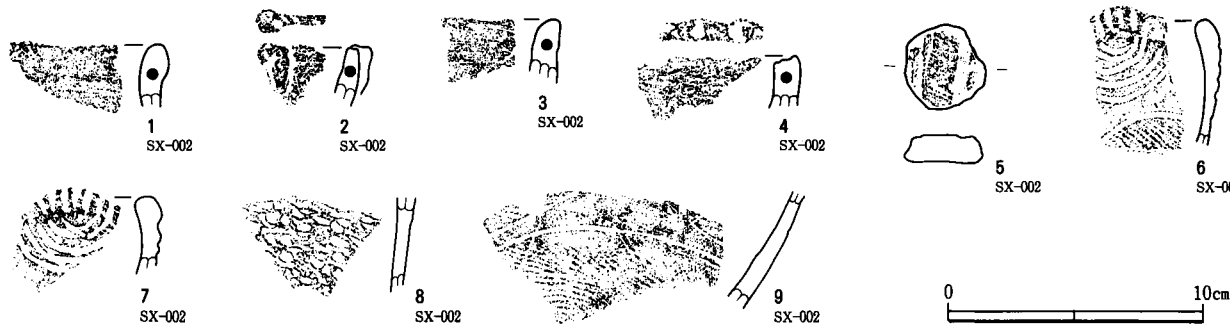
表土出土土器（第21図、図版25）

1は内外面ともに擦痕が認められる。口唇部には刻みが施される。子母口式土器である。

002号方形周溝状遺構出土土器（第22図、図版24）

1は口縁端部が若干肥厚し、器表面には軽易な擦痕が認められる。2は薄手の個体で、口縁部に逆U字状もしくは逆J字状も貼付文が施される。口唇部には刻みが施される。5は土器片製円盤である。幅5㎜程度の板状工具による沈線が施され、内面には軽易な擦痕が認められる。

1～5は子母口式土器と思われる。6～9は後期中葉の破片である。



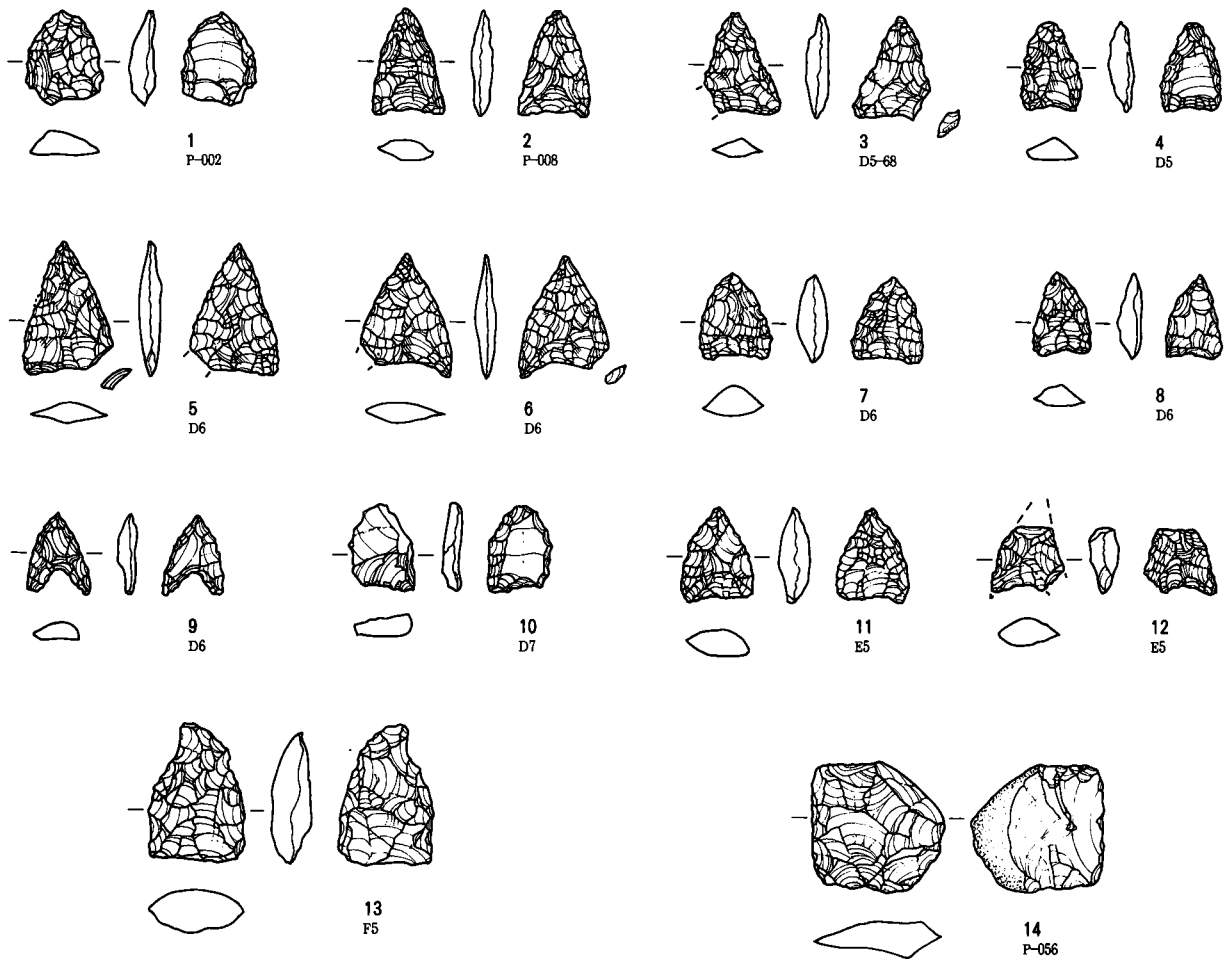
第22図　A区遺構外出土土器実測図（3）

（２）石器（第23･24図、図版38･39）

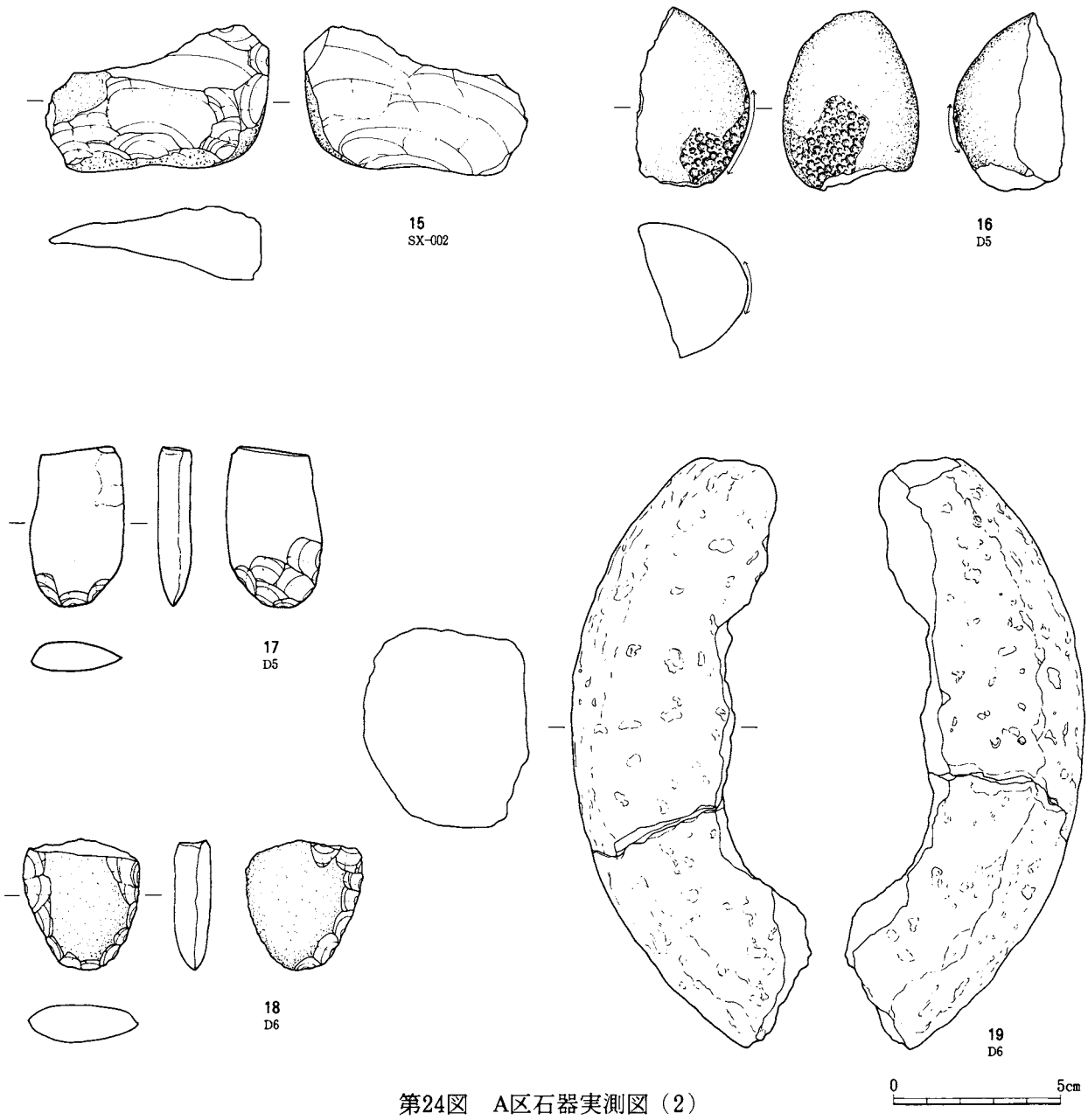
石器は、大作頭遺跡A区での石器組成を示すことを第一の目的とした。したがって、出土地点ごとによる提示ではなく、器種ごとに掲載することを基本とした。

実測図を提示した石器は、完形もしくはこれに準ずるものに限った。なお、実測図を提示しないものについては、全点にわたり器種・石材・計測値等を石器一覧表（第２表）に示した。実測図に示した石器についても同様の作業を行っている。石器実測図に用いているスクリーントーンの用例は凡例に示している。

実測図は、剥片石器（第23図、図版38）と礫素材の石器（礫石器　第24図、図版39）に分けて提示している。なお、事実記載に関わる要素は、すべて石器一覧表に記しているので、ここでの重複は避ける。



第23図　A区石器実測図（1）



第24図　A区石器実測図（2）

遺構・グリッド	名　称	石　材	長×幅×厚 (cm)	重量 (g)	図番号	遺構・グリッド	名　称	石　材	長×幅×厚 (cm)	重量 (g)	図番号
002号方形周溝状遺構	フレイク	黒曜石	1.4× 2.3× 0.5	1.3		007号炉穴	チップ	黒曜石			
002号方形周溝状遺構	コア	黒曜石	1.6× 1.8× 0.9	3.7		007号炉穴	フレイク	黒曜石	0.9× 0.8× 0.2	0.08	
002号方形周溝状遺構	フレイク	黒曜石	3.2× 1.1× 0.4	1		007号炉穴	チップ	黒曜石			
002号方形周溝状遺構	コア	黒曜石	1.7× 1.3× 1	2.5		008号炉穴	フレイク	黒曜石	0.8× 2× 0.6	0.45	
002号方形周溝状遺構	フレイク	チャート	1.5× 1.3× 0.5	1.3		008号炉穴	フレイク	黒曜石	1.9× 2.9× 0.9	5.1	
002号方形周溝状遺構	フレイク	黒曜石	1.8× 0.7× 0.6	0.63		008号炉穴	フレイク	黒曜石	1.8× 1.5× 0.3	0.65	
002号方形周溝状遺構	フレイク	黒曜石	0.8× 1.2× 1	1		008号炉穴	フレイク	黒曜石	1.4× 1.4× 0.6	0.5	
002号方形周溝状遺構	フレイク	黒曜石	1.4× 0.8× 0.5	0.4		008号炉穴	フレイク	黒曜石	1.1× 0.9× 0.2	0.12	
002号方形周溝状遺構	チップ	黒曜石				008号炉穴	フレイク	黒曜石	1.2× 0.6× 0.1	0.07	
002号方形周溝状遺構	フレイク	黒曜石	0.9× 1.2× 0.3	0.3		008号炉穴	フレイク	黒曜石	2.1× 1.6× 0.6	1.4	
002号方形周溝状遺構	RF	黒曜石	1.3× 1.8× 0.4	1.1		008号炉穴	フレイク	黒曜石	1.9× 0.7× 0.4	0.72	
002号方形周溝状遺構	RF	黒曜石	1.3× 1.2× 0.3	0.63		008号炉穴	石鏃	チャート	2.1× 1.4× 0.4	1	23−2
002号方形周溝状遺構	石鏃	黒曜石	1× 1.1× 0.4	0.5		008号炉穴	チップ	黒曜石			
002号方形周溝状遺構	打斧未製品	砂岩	6.8× 4.2× 2	54.9	24−15	008号炉穴	チップ	黒曜石			
002号方形周溝状遺構	フレイク	黒曜石	1.6× 1.3× 0.3	0.55		008号炉穴	コア	黒曜石	4.8× 2.9× 1.2	15.2	
002号方形周溝状遺構	RF	黒曜石	2.7× 2.4× 0.9	5		008号炉穴	フレイク	頁岩	1.1× 0.9× 0.3	0.33	
002号方形周溝状遺構	フレイク	黒曜石	2.3× 1.9× 0.9	2.5		008号炉穴	チップ	黒曜石			
002号方形周溝状遺構	フレイク	黒曜石	1.7× 2.2× 1.1	3.5		008号炉穴	チップ	黒曜石			
002号方形周溝状遺構	フレイク	黒曜石	1.8× 1.2× 0.9	2.1		008号炉穴	チップ	黒曜石			
002号方形周溝状遺構	フレイク	黒曜石	2.8× 1.7× 0.5	1.8		010号炉穴	石鏃未製品	黒曜石	1.4× 1.8× 0.7	1.2	
002号方形周溝状遺構	フレイク	黒曜石	1.9× 1.5× 0.5	1.1		011号土坑	石鏃	黒曜石	1.2× 1.3× 0.3	0.51	
002号方形周溝状遺構	フレイク	黒曜石	2× 1.7× 1	2.4		015号土坑	フレイク	黒曜石	2.2× 2.2× 0.3	1.2	
002号方形周溝状遺構	フレイク	黒曜石	1.8× 1.8× 0.5	1.2		024号炉穴	フレイク	黒曜石	2.8× 1.8× 0.5	1.75	
002号方形周溝状遺構	磨石	砂岩	4.3× 3.6× 3.1	67.2		024号炉穴	フレイク	黒曜石	1.1× 0.5× 0.1	0.09	
002号方形周溝状遺構	フレイク	黒曜石	1.2× 1.2× 0.4	0.47		024号炉穴	石鏃	黒曜石	1.7× 1.1× 0.3	0.65	
002号方形周溝状遺構	フレイク	黒曜石	1.2× 0.9× 0.3	0.24		024号炉穴	フレイク	黒曜石	2.2× 2.9× 1.2	4	
002号方形周溝状遺構	チップ	黒曜石				024号炉穴	フレイク	黒曜石	1.1× 0.8× 0.5	0.44	
001号炉穴	フレイク	黒曜石	1.8× 1.3× 0.3	0.78		025号炉穴	RF	黒曜石	3.4× 2.2× 1.2	9.2	
002号炉穴	フレイク	黒曜石	1.1× 1.3× 0.4	0.57		025号炉穴	コア	黒曜石	1.6× 2.6× 1.4	5.7	
002号炉穴	フレイク	黒曜石	2.8× 1.6× 0.6	3		029号炉穴	フレイク	黒曜石	1.8× 0.9× 0.4	0.44	
002号炉穴	チップ	黒曜石				029号炉穴	チップ	黒曜石			
002号炉穴	フレイク	黒曜石	1× 0.8× 0.2	0.19		029号炉穴	チップ	黒曜石			
002号炉穴	フレイク	黒曜石	1.5× 1× 0.3	0.32		029号炉穴	チップ	黒曜石			
002号炉穴	フレイク	黒曜石	0.9× 1.2× 0.7	0.55		029号炉穴	チップ	黒曜石			
002号炉穴	石鏃	チャート	1.6× 1.4× 0.4	0.99	23−1	030号炉穴	フレイク	黒曜石	1.2× 1.9× 0.4	0.57	
002号炉穴	フレイク	黒曜石	2.1× 1.6× 0.6	1.5		030号炉穴	フレイク	黒曜石	1.3× 0.9× 0.1	0.15	
002号炉穴	RF	珪質頁岩	2× 2× 0.7	2.4		033号炉穴	チップ	黒曜石			
004号土坑	コア	黒曜石	2.3× 3.4× 0.9	5.4		034号炉穴	フレイク	黒曜石	2.3× 1.2× 0.5	1.8	
004号土坑	RF	黒曜石	1.2× 1.7× 0.3	0.84		034号炉穴	フレイク	黒曜石	2.2× 1.4× 0.4	1.1	
004号土坑	フレイク	黒曜石	1.5× 1× 0.2	0.3		037号炉穴	フレイク	黒曜石	0.9× 0.7× 0.3	0.11	
004号土坑	フレイク	黒曜石	1.7× 0.7× 0.3	0.42		038号炉穴	フレイク	黒曜石	1.8× 2.2× 0.6	1.4	
004号土坑	チップ	黒曜石				039号炉穴	石鏃未製品	黒曜石	2.8× 1.8× 0.8	3.4	
004号土坑	チップ	黒曜石				039号炉穴	石鏃	黒曜石	1.3× 1.3× 0.4	0.73	
004号土坑	チップ	黒曜石				039号炉穴	石鏃	黒曜石	0.8× 0.9× 0.3	2.9	
004号土坑	チップ	黒曜石				039号炉穴	フレイク	黒曜石	3.2× 1.2× 0.6	0.41	
004号土坑	チップ	黒曜石				041号炉穴	フレイク	黒曜石	2× 1.9× 0.6	2.2	
004号土坑	チップ	黒曜石				047号炉穴	RF	チャート	2× 1× 0.6	1	
004号土坑	チップ	黒曜石				047号炉穴	フレイク	黒曜石	1.7× 0.8× 0.7	0.56	
004号土坑	チップ	黒曜石				056号炉穴	楔形石器	チャート	2.7× 2.5× 0.7	4.3	23−14
004号土坑	チップ	黒曜石				D5-17	フレイク	黒曜石	2.4× 1.2× 0.3	0.97	
004号土坑	チップ	黒曜石				D5-17	フレイク	黒曜石	1× 1.2× 0.3	0.27	
004号土坑	チップ	黒曜石				D5-26	チップ	黒曜石			
004号土坑	チップ	黒曜石				D5-57	フレイク	黒曜石	2.2× 1.3× 0.6	1.2	
004号土坑	チップ	黒曜石				D5-57	チップ	黒曜石			
004号土坑	チップ	黒曜石				D5-68	フレイク	黒曜石	2× 2× 0.6	2	
004号土坑	チップ	黒曜石				D5-68	石鏃	黒曜石	1.2× 2.1× 0.4	0.83	23−3
007号炉穴	フレイク	チャート	1.8× 1.3× 0.4	0.97		D5-74	フレイク	黒曜石	1.3× 2.1× 0.5	1.1	
007号炉穴	フレイク	黒曜石	1.6× 1.2× 0.4	0.49		D5-84	フレイク	黒曜石	1.3× 1.4× 0.3	0.48	
007号炉穴	フレイク	黒曜石	1.7× 0.5× 0.2	0.13		D5-84	チップ	黒曜石			
007号炉穴	石鏃	黒曜石	0.9× 0.6× 0.3	0.14		D5-84	チップ	黒曜石			
007号炉穴	フレイク	黒曜石	2.9× 1.4× 0.7	1		D5-84	チップ	黒曜石			
007号炉穴	フレイク	黒曜石	1.3× 1× 0.1	0.18		D5-88	フレイク	黒曜石	1.8× 2× 0.9	2.7	
007号炉穴	フレイク	黒曜石	1.2× 1.7× 0.4	0.68		D5	ポイント	ホルンフェルス	4.6× 2.7× 1.8	16.6	24−17
007号炉穴	チップ	黒曜石				D5	フレイク	黒曜石	3.4× 1.4× 0.7	3.3	

第2表　A区縄文時代石器一覧表（1）

遺構・グリッド	名　称	石　材	長×幅×厚 (cm)	重量 (g)	図番号	遺構・グリッド	名　称	石　材	長×幅×厚 (cm)	重量 (g)	図番号
D5	フレイク	黒曜石	2× 1.3× 0.3	0.69		D6	フレイク	黒曜石	1.5× 1.7 0.9	1.9	
D5	石鏃	黒曜石	1.6× 1.2× 0.4	0.73	23－4	D6	石鏃	黒曜石	1.6× 1× 0.4	0.58	23－8
D5	フレイク	黒曜石	1.6× 0.9× 0.4	0.36		D6	フレイク	黒曜石	1.5× 2.2× 0.4	0.96	
D5	フレイク	黒曜石	1× 1× 0.1	0.13		D7-08	フレイク	黒曜石	1.5× 2.1× 0.6	1.2	
D5	敲石	石英斑岩	5.5× 4.1× 2.8	73.5	24－16	D7-08	フレイク	黒曜石	0.7× 1.6× 0.5	0.49	
D6-05	フレイク	黒曜石	1.5× 1.3× 0.6	1.32		D7-08	フレイク	黒曜石	1.8× 1.7× 1	2.6	
D6-06	フレイク	ホルンフェルス	3.1× 1.5× 0.6	2.4		D7	フレイク	黒曜石	2.3× 1.9× 0.4	1.1	
D6-56	フレイク	黒曜石	2.4× 2.3× 0.5	2.2		D7	石鏃	黒曜石	1.6× 1.3× 0.4	0.75	23－10
D6	石鏃	流紋岩	1.6× 1.1× 0.4	0.41	23－9	D7	フレイク	黒曜石	1.4× 2.1× 0.2	0.33	
D6	フレイク	黒曜石	1.1× 1.1× 0.2	0.2		D7	フレイク	黒曜石	1× 1.4× 0.2	0.25	
D6	コア	黒曜石	3.4× 2.4× 1.8	10.6		D7	フレイク	黒曜石	1.6× 0.9× 0.2	0.26	
D6	コア	黒曜石	1.7× 1.9× 1.1	3.3		D7	フレイク	安山岩	1.3× 2.9× 0.8	2.7	
D6	石鏃	黒曜石	2.4× 1.7× 0.4	1.3	23－5	D7	フレイク	黒曜石	1.4× 2.2× 0.6	1.6	
D6	フレイク	黒曜石	1.2× 1.2× 0.1	0.19		D7	フレイク	黒曜石	2.2× 2.6× 1.1	4	
D6	フレイク	黒曜石	1.7× 1.5× 0.5	1.3		D7	フレイク	黒曜石	1.4× 3× 0.3	1.2	
D6	フレイク	黒曜石	1.5× 2× 1.8	2.1		D7	フレイク	黒曜石	3× 1.6× 1	3.8	
D6	フレイク	黒曜石	2.3× 1.2× 1	1.8		E5-28	コア	黒曜石	2.3× 3.6× 1	7.6	
D6	石鏃	黒曜石	2.2× 1.7× 0.4	1.2	23－6	E5-62	フレイク	黒曜石	1.8× 1.4× 0.7	1.1	
D6	石鏃	黒曜石	1.7× 1.4× 0.6	1.2	23－7	E5-65	フレイク	黒曜石	2.5× 2.3× 0.4	1.4	
D6	フレイク	黒曜石	1.4× 1.7× 0.3	0.65		E5-83	フレイク	黒曜石	2.7× 2.4× 1.1	5.2	
D6	フレイク	黒曜石	2.1× 1× 0.3	0.48		E5-83	フレイク	黒曜石	0.6× 1.3× 0.5	0.53	
D6	フレイク	黒曜石	0.9× 1.1× 0.7	0.84		E5-83	フレイク	黒曜石	1.3× 0.6× 0.1	0.12	
D6	フレイク	黒曜石	1.2× 1.4× 0.3	0.51		E5	磨石	砂岩	8.4× 6.9× 4.7	322	
D6	フレイク	黒曜石	1.2× 1.5× 0.4	0.37		E5	磨石	石英斑岩	8× 5.4× 3.4	155.5	
D6	ポイント	ホルンフェルス	3.8× 3.4× 1.1	19.9	24－18	E5	石鏃	黒曜石	1.8× 1.4× 0.6	1.3	23－11
D6	チップ	黒曜石				E5	石鏃	黒曜石	1.2× 1.4× 0.6	1	23－12
D6	チップ	黒曜石				E5	フレイク	黒曜石	1.3× 0.7× 0.1	0.08	
D6	チップ	黒曜石				E5	フレイク	黒曜石	1.1× 0.7× 0.4	0.36	
D6	チップ	黒曜石				E5	フレイク	チャート	1.7× 3.5× 1	6.6	
D6	チップ	黒曜石				E5	フレイク	黒曜石	1.7× 1.5× 0.4	0.97	
D6	石皿	安山岩	8.8× 6× 4.6	285.5	24－19	E7-70	フレイク	黒曜石	1.6× 3.3× 0.7	2.3	
D6	石皿	安山岩	12.4× 5.6× 5	447.7	24－19	F5	石鏃	チャート	2.7× 2× 1.8	4.2	23－13
D6	フレイク	黒曜石	2.3× 2.2× 1.2	5.7		F6-01	フレイク	黒曜石	1.2× 2× 0.3	0.39	

第２表　A区縄文時代石器一覧表（２）

（３）礫

大作頭遺跡A区の遺構外からは散発的に礫が出土している。顕著な集中範囲は形成されておらず、各小グリッドでの出土数は、ゼロもしくは５点以下が主体である。10点以上の礫が出土している小グリッドは、D５-74・75・84・85の４グリッドのみである。

なお、大作頭遺跡A区から出土している礫は、B区・C区から出土している礫と大きさ・重量に差はない。B区で出土した大量の礫については、第３章で詳細に分析しているので、A区の礫の分析は行っていない。

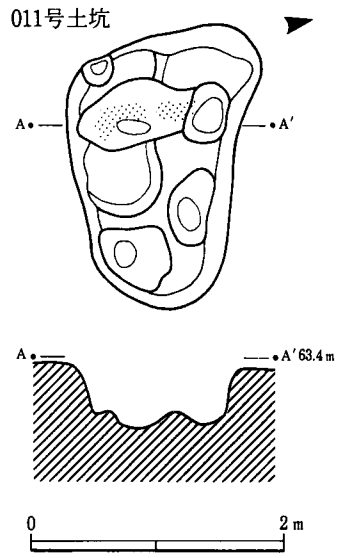
第3節　歴史時代

1　遺構

大作頭遺跡A区からは、歴史時代に属すると考えられる遺構は、2基検出されている。011号土坑と002号方形周溝状遺構であるが、011号土坑からは設営時期を示す遺物は出土していない。011号土坑については、調査段階での所見（覆土の観察）から、歴史時代に属するものと判断されており、これに従っている。

011号土坑（第25図）

不整方形を呈する。掘込みの深さは約50cmである。底面には楕円形プランのピットが6基認められているが、このピットは明瞭な掘込みを有するものではなく、底面に形成されている凹部のような印象が強い。土坑の底面には白色粘土粒が認められた。覆土は暗褐色土を主体に黒色土を多く含むもので、縄文時代の覆土とは明らかに異なり、歴史時代に堆積した覆土であると考えられる。性格は不明である。

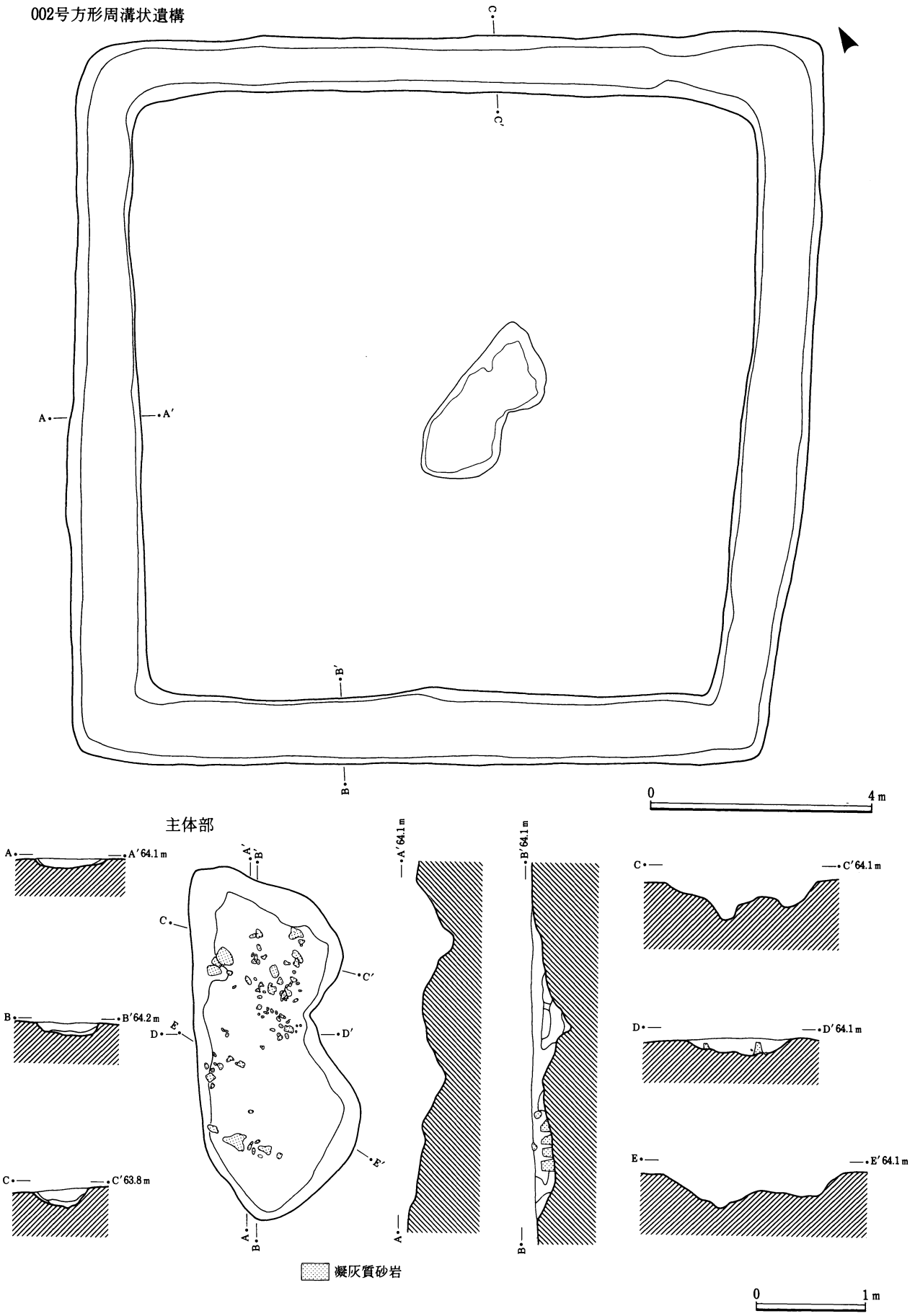


第25図　A区歴史時代土坑実測図

002号方形周溝状遺構（第26図、図版7）

東西約13.5m、南北約13.0mの規模を有する方形周溝状遺構である。溝の幅は約1.0～1.5mで、掘込みは軟弱で、深さも20cm弱程度である。溝の覆土は、暗褐色土を主体に黒色土を多く含むものであった。

方台部中央のやや東側から、主体部が検出された。長軸長約3.1mの不整長方形のプランである。平均的な深さは20cm足らずであり、底面は凹凸が激しい。長軸方向の断面を観察する限りでは、皿状の掘込みが2基重複しているようにも捉えることができるが、土層断面からはそのような状況を認めることはできない。底面からは凝灰質砂岩のブロックが多く検出された。凝灰質砂岩のブロックの分布状況から、これらは本来的な位置を示しているものではなく、後世の撹乱により、散乱してしまった可能性が高い。方形周溝状遺構の軸と、主体部の軸が一致しない。これについても、主体部の掘込みのプランが、本来の形態ではなく、後世の撹乱による掘削で、形が変わってしまった可能性が高いと考えられる。ただし、この主体部が002号方形周溝状遺構に確実に伴うという根拠があるわけではない。単独の主体部であった可能性も認めておかなければならないであろう。



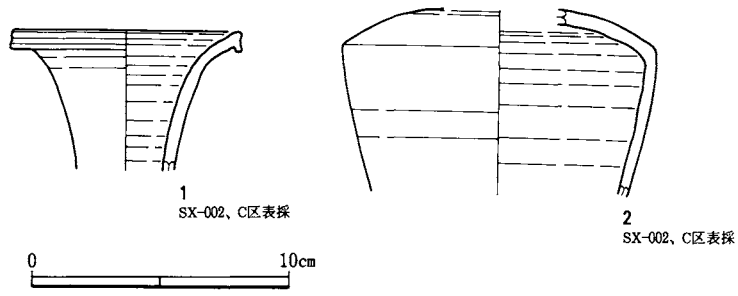
第26図　A区方形周溝状遺構実測図

方形周溝状遺構の溝内から第27図に示した須恵器が出土している。したがって、002号方形周溝状遺構の設営時期は奈良時代を中心とする時期であることが考えられる。主体部からは、設営時期を示す遺物は出土していない。

2　遺物

002号方形周溝状遺構出土土器（第27図）

1・2は002号方形周溝状遺構から出土した須恵器で、胎土・焼成等から判断して、同一個体であると考えられる。出土状況の詳細は不明である。長頸壷で、8世紀の所産であろう。



第27図　A区方形周溝状遺構出土土器実測図

注1　島立桂・新田浩三・渡辺修一　1992「下総台地における立川ローム層の層序区分」『研究連絡誌』35
（財）千葉県文化財センター

第３章　大作頭遺跡Ｂ区

大作頭遺跡Ｂ区は、旧石器時代の石器出土地点が１か所、縄文時代の炉穴62基・土坑22基・住居跡２軒、歴史時代の方形周溝状遺構１基が検出されている。このほか、遺構外からは縄文時代早期を中心とする時期の土器片や、これに伴うものと思われる礫が出土している。

遺跡の中心となる時期は、炉穴・土坑が設営された縄文時代早期である。炉穴・土坑出土土器や遺構外出土土器は、これまで検出例の乏しかった子母口式期から野島式期にかけてのものが主体であり、貴重な資料である。

第１章でふれたとおり、大作頭遺跡は調査地点が３か所に分かれており、これらを西からＡ区、Ｂ区、Ｃ区と呼称し、各区を章ごとに記載することとした。章中では、時代順（古い順から）に節を設定し、各時代の中では、遺構と遺物に分けて記載することを基本とした（旧石器時代を除く）。写真図版の掲載については、本文中の章立てや節の構成に連動することが望ましいと思われたが、レイアウトの都合から、各区の遺構をまとめて掲載し、その後に各区の遺物を掲載するという体裁をとった。

第１節　旧石器時代

１　基本層序

大作頭遺跡Ｂ区における関東ローム層（立川ローム層）の分層・呼称方法は、 大作頭遺跡Ａ区に準じている（第２章第１節参照）。これらを示すと、

Ⅲ層　黄褐色　ソフトローム層

Ⅳ層　黄褐色　ハード・ローム層の上部硬質部

Ⅴ層　暗褐色　武蔵野分層第１黒色帯

Ⅵ層　黄褐色　下半にATの層準を含む

Ⅶ層　暗褐色　武蔵野分層のⅦ層　第２黒色帯上部層

Ⅸ層　暗褐色　第２黒色帯下部層

　Ⅸa層　上部明色部

　Ⅸb層　中部間層帯

　Ⅸc層　下部暗色帯

Ⅹ層　黄褐色　立川ローム最下部層

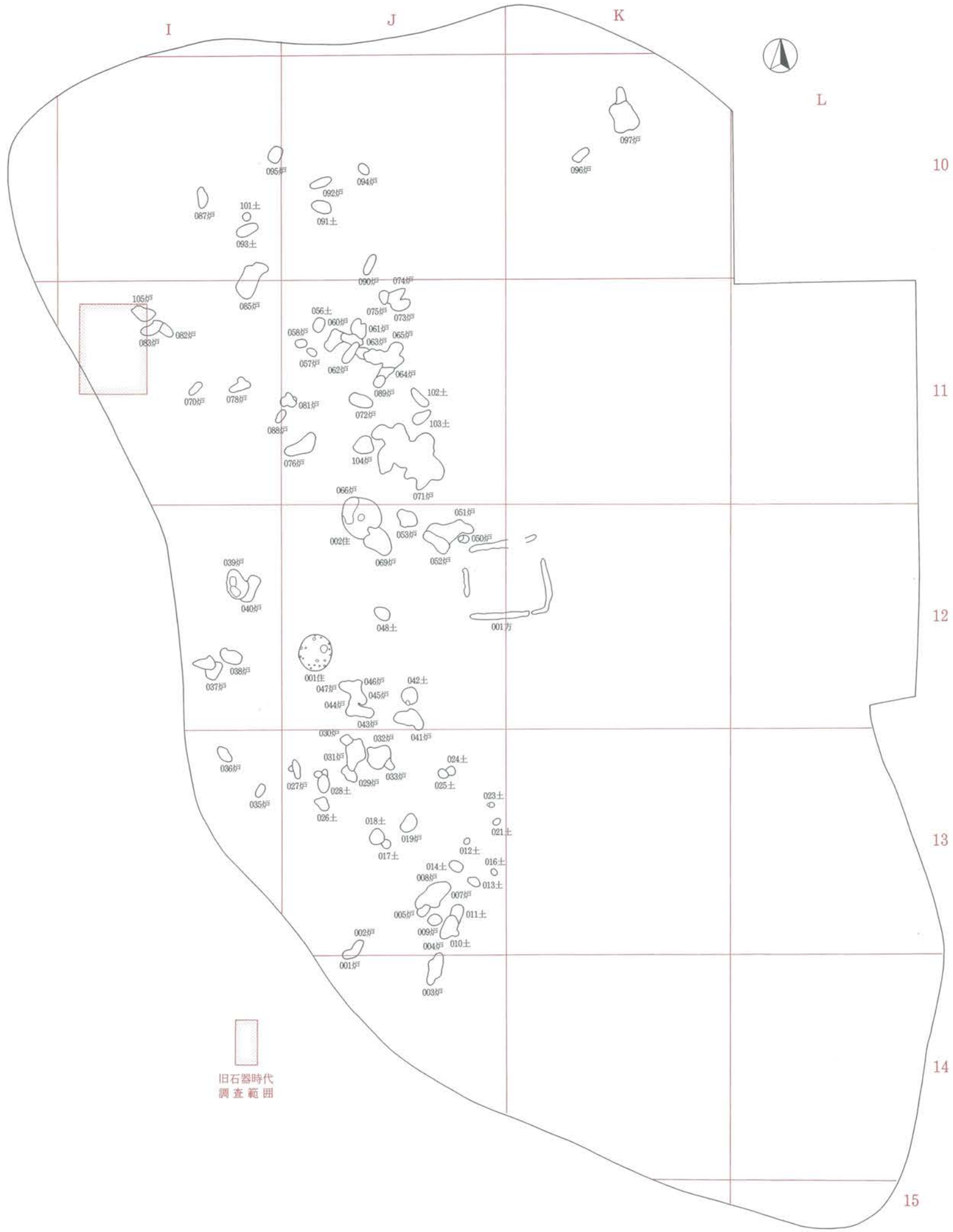
　Ⅹa層　上部スコリア帯

　Ⅹb層　下部層

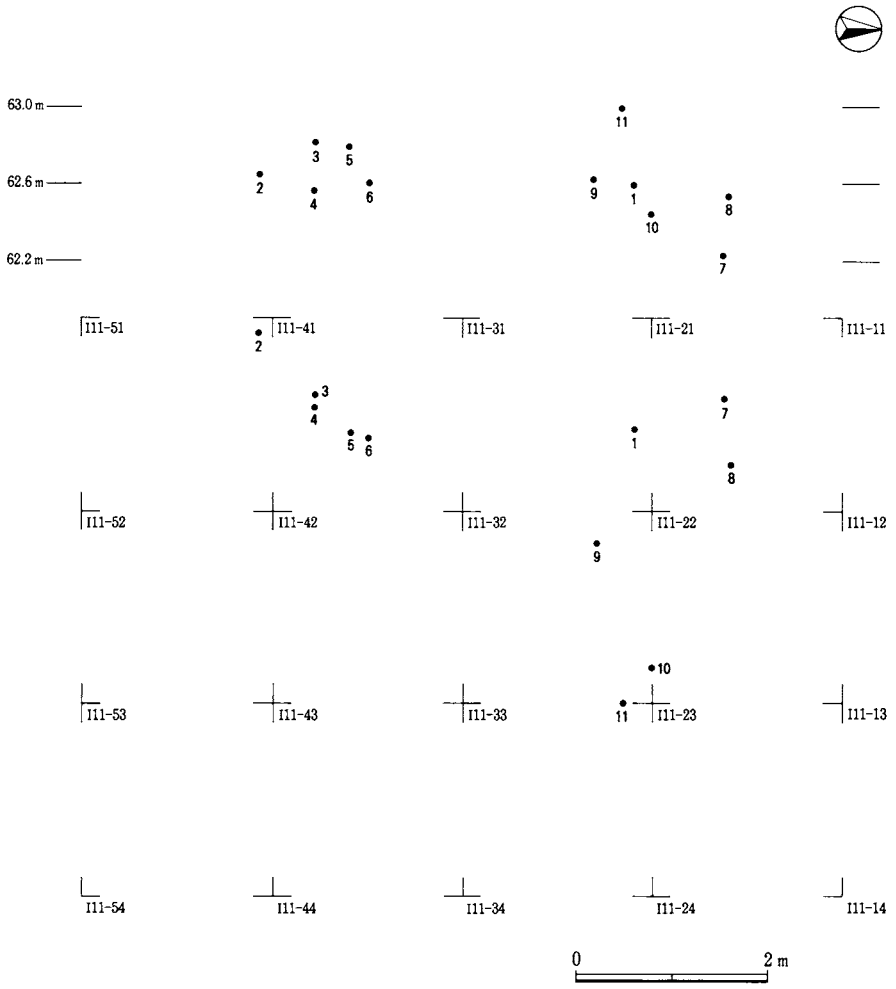
となる。

２　石器出土地点

大作頭遺跡Ｂ区からは、旧石器時代の石器出土地点が２地点検出された。本来ならば、石器集中地点として報告するべきであるが、散漫に11点が出土した地点を、集中地点と呼称することは、実体にそぐわないと判断した。したがって、ここでは石器出土地点として報告することとした。また、出土石器に関する


I
J
K
L
10
11
12
13
14
15
097炉
096炉
095炉
094炉
092炉
091土
101土
087炉
093土
090炉
074炉
085炉
105炉
082炉
083炉
056土
060炉
075炉
073炉
058炉
061炉
065炉
063炉
057炉
062炉
064炉
070炉
078炉
081炉
089炉
102土
072炉
103土
088炉
076炉
104炉
071炉
066炉
051炉
053炉
050炉
002住
069炉
052炉
039炉
040炉
048土
001方
038炉
037炉
001住
047炉
046炉
045炉
042土
044炉
043炉
030炉
032炉
041炉
036炉
031炉
033炉
024土
027炉
028土
029炉
025土
035炉
023土
026土
018土
019炉
021土
017土
012土
014土
016土
008炉
013土
007炉
005炉
011土
009炉
002炉
004炉
010土
001炉
003炉
旧石器時代
調査範囲
0
(1/400)
20 m

第28図　B区全測図



第29図　B区旧石器時代石器出土状況図

データは、出土石器一覧表（第３表）に記載しているので、本文中での重複は避けることとした。

表採資料の中から、旧石器時代に属すると思われる石器が３点出土している。これらは厳密には石器出土地点からの出土ではないものの、便宜的にここで報告することとする。

（１）第１石器出土地点（第30図、図版22）

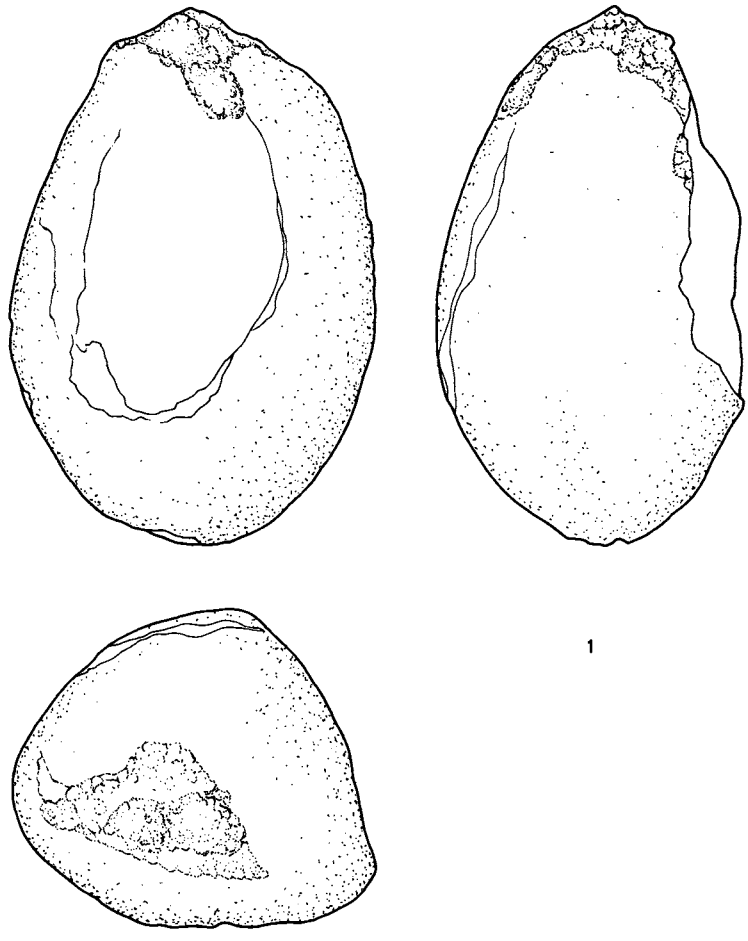
Ⅰ11-21・31・41グリッドを中心に石器等が11点出土した地点である。石器出土層位はⅦ層を中心とする。器種は、フレイク・礫が主体であり、石材は、チャートが主体である。

第１出土地点は、平面的な分布状況が散漫であり、同一文化層中の単独のブロックと捉えることは困難である。現段階では、性格は不明であるといわざるを得ない。

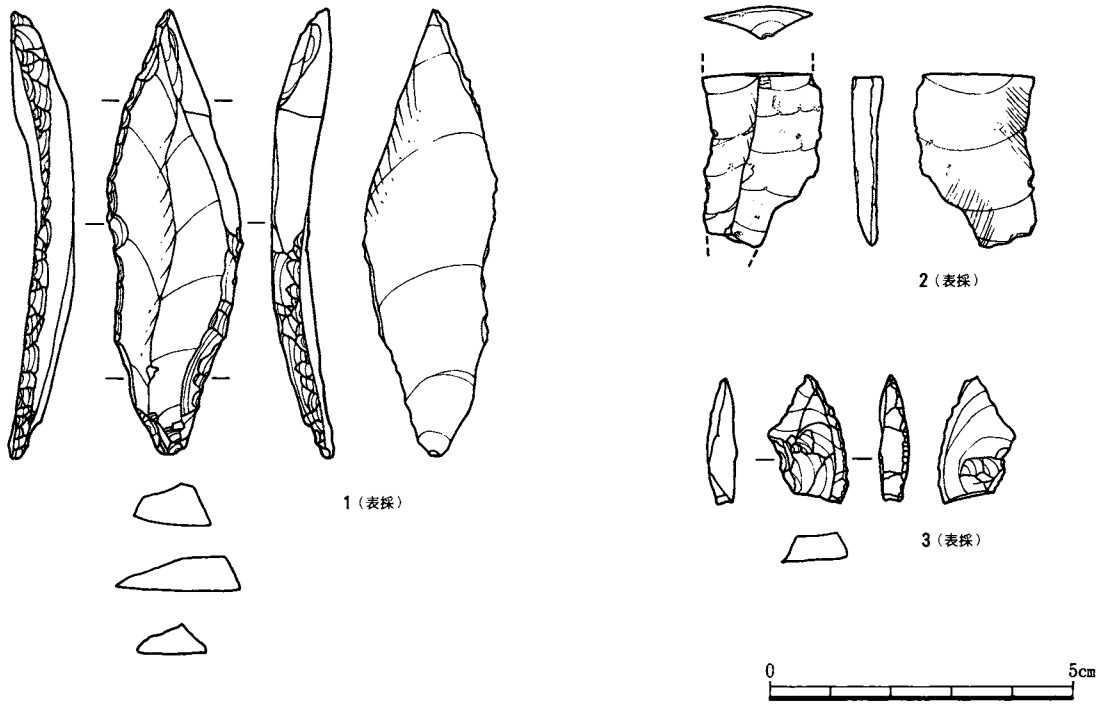
（２）縄文時代包含層出土の石器（第30図、図版22）

縄文時代の包含層から、旧石器時代に属すると思われる石器が３点出土している。１・３はナイフ形石器で、２はフレイクである。

石器出土地点



表採



第30図　B区旧石器時代石器実測図

B区　1地点

番　号	グリッド	層　位	器　種	石　材	長 × 幅 × 厚 (cm)	重（g）	図番号
1	I 11-21	Ⅶ上部	敲石	砂岩	8.70 × 6.30 × 5.20	293.10	30−1
2	I 11-41	Ⅶ上部	礫	砂岩	2.90 × 2.40 × 1.30	10.40	
3	I 11-31	Ⅵ	フレイク	チャート	2.80 × 4.10 × 0.70	5.00	
4	I 11-31	Ⅶ上部	フレイク	チャート	2.40 × 1.20 × 0.60	1.40	
5	I 11-31	Ⅶ下部	フレイク	チャート	3.30 × 3.30 × 1.30	9.00	
6	I 11-31	Ⅵ下部	チップ	チャート			
7	I 11-11	Ⅶ下部	フレイク	チャート	3.90 × 4.00 × 1.10	4.40	
8	I 11-11	Ⅶ上部	フレイク	チャート	3.70 × 2.20 × 1.80	7.00	
9	I 11-22	Ⅶ上部	礫	チャート	3.60 × 3.30 × 3.10	36.90	
10	I 11-22	Ⅶ下部	礫	チャート	5.00 × 4.10 × 3.20	61.30	
11	I 11-23	Ⅶ上部	フレイク	安山岩	5.90 × 4.20 × 1.80	340.10	

B区　2地点

番　号	グリッド	層　位	器　種	石　材	長 × 幅 × 厚 (cm)	重（g）	図番号
1	H9	—	ナイフ形石器	流紋岩	7.20 × 2.10 × 0.70	9.80	30−1
2	H9	−	フレイク	黒曜石	2.90 × 1.90 × 0.50	2.10	30−2
3	M13-00	−	ナイフ形石器	チャート	2.10 × 1.20 × 0.30	0.96	30−3

第3表　B区旧石器時代石器一覧表

第2節　縄文時代

1　遺構

（1）炉穴

大作頭遺跡B区からは64基の炉穴が検出されている。この64基という数字は、調査段階で炉穴としてカウントした数である。複数の掘込みと複数の燃焼部が認められるものであっても、調査段階で一つの遺構番号を付したものについては、1基として扱っている。調査段階での認識に依拠している。

実測図の掲載方法は、燃焼部と考えられる範囲（地山に熱を受けた痕跡が認められる範囲）と、土層断面中の焼土の範囲を、スクリーントーンで示した（用例参照）。掘込み自体の覆土については、調査段階での記録が比較的省略されていることから、特に説明が必要と考えられるもの以外は省略している。

炉穴実測図の掲載に際しては、番号順に掲載することを基本としたが、レイアウトの都合上、一部順序が前後しているものがある。ただし、その場合であっても、事実記載は、番号順に記している。なお、異なる遺構番号の炉穴が重複・近接し、同一挿図中に掲載されている場合の資料提示は、最も若い遺構番号の位置に準拠しているが、事実記載は番号順に記している。

001号・002号炉穴（第31図、図版7）

西側の燃焼部を001号炉穴、北側の燃焼部を002号炉穴として、調査を行った。土層断面の観察から、001号炉穴の方が新規の設営であると考えられる。燃焼部はあまりよく焼けていないが、焼土の堆積は多い。001号炉穴・002号炉穴からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

003号・004号炉穴（第31図、図版7）

長楕円形の掘込みが2基重複する炉穴群で、西側の掘込みを003号炉穴、東側の掘込みを004号炉穴として調査した。共に掘込みの南北端に燃焼部を有する炉穴で、掘込みは極めてしっかりとしている。燃焼部は比較的よく焼けており、焼土の堆積は多い。

003号炉穴・004号炉穴の設営時期は、覆土中から出土した土器（第40図、003号炉穴・004号炉穴のどちらから出土したかは不明）から、子母口式期と考えられる。

005号・007号・008号炉穴（第31図、図版8）

6か所の燃焼部が検出された炉穴群で、南西側の2か所の燃焼部を有する小規模な掘込みを005号炉穴とした。不整楕円形の大きな掘込みを基本的には008号炉穴として調査したが、南東側の壁面から検出された2か所の燃焼部は007号炉穴と呼称した。

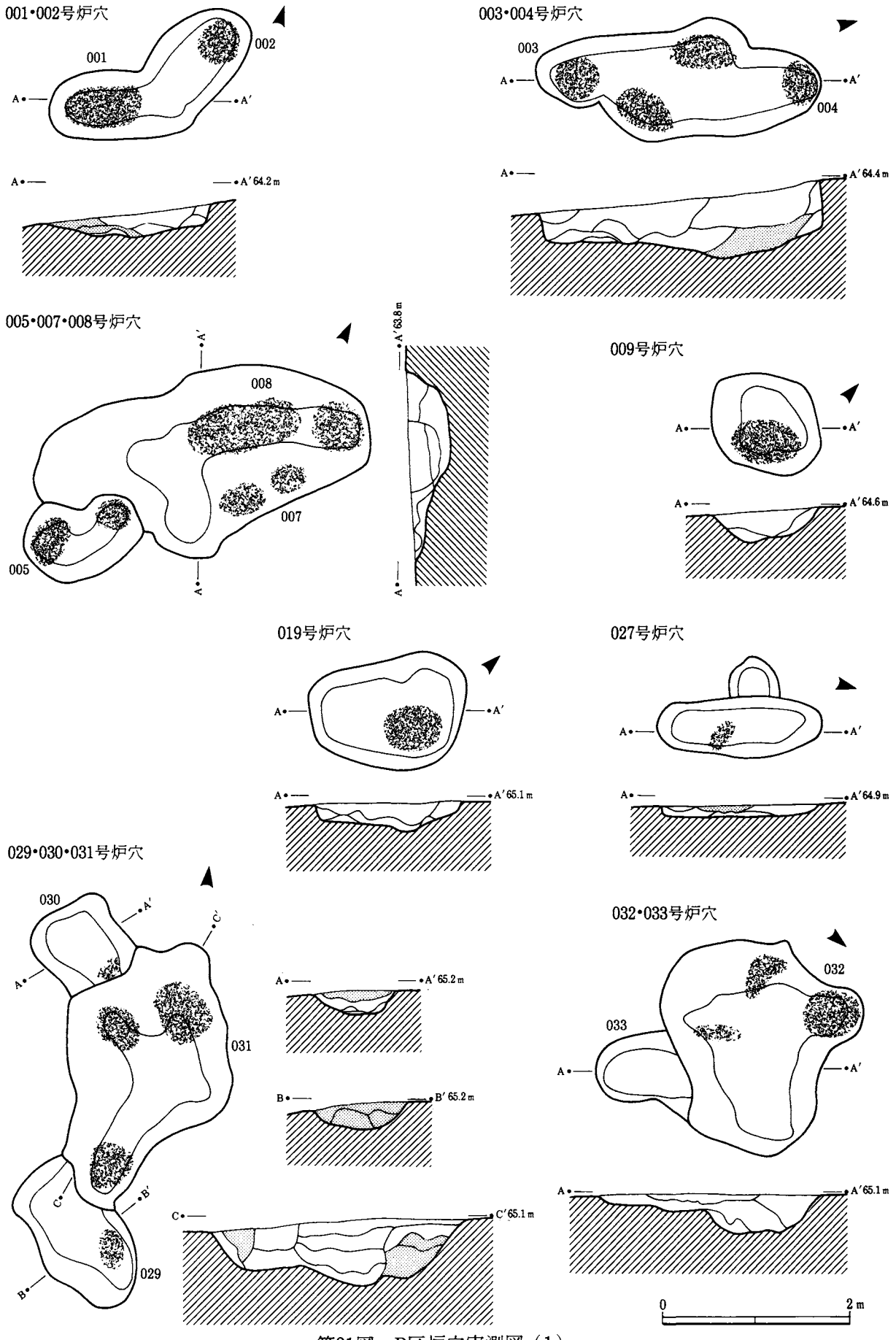
いずれの炉穴も燃焼部はあまりよく焼けておらず、焼土の堆積は多くない。土層断面を観察すると、008号炉穴の覆土中に007号炉穴が形成されているようにも観察できる。005号炉穴・007号炉穴からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。008号炉穴の設営時期は、覆土中から出土した土器（第40図）から、子母口式期と考えられる。

009号炉穴（第31図、図版8）

隅丸方形風の掘込みに燃焼部が認められる。掘込みは比較的しっかりとしている。燃焼部は比較的よく焼けているが、焼土の堆積は少ない。009号炉穴からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

019号炉穴（第31図、図版8）

不整長方形の掘込みに燃焼部が認められる。壁は直に立ち上がり、掘込みはしっかりとしている。燃焼



第31図　B区炉穴実測図（1）

部は比較的よく焼けているが、焼土の堆積は少ない。019号炉穴からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

027号炉穴（第31図、図版８）

長楕円形の浅い掘込みと、この掘込みに壊される長楕円形風の掘込みからなる。長楕円形の掘込みの中央やや東側に、小規模な燃焼部が認められる。燃焼部はあまりよく焼けておらず、焼土は覆土上層にやや多く認められる。027号炉穴の設営時期は、覆土中から出土した土器（第40図）から、子母口式期と考えられる。

029号・030号・031号炉穴（第31図、図版８）

３基の掘込みからなる炉穴群である。中央の３か所の燃焼部を有する、規模の大きい不整形の掘込みを031号炉穴とした。031号炉穴に壊される南側の不整楕円形の掘込みを029号炉穴とし、031号炉穴に壊される北側の長方形の掘込みを030号炉穴として調査を行った。いずれの燃焼部もよく焼けており、焼土の堆積は極めて多い。土層断面の観察では、031号炉穴は北側の焼土層が切られていることから、単独の炉穴ではなく重複している様相を指摘することもできよう。029号炉穴・030号炉穴・031号炉穴の設営時期は、覆土中から出土した土器（第40図）から、いずれも子母口式期と考えられるが、030号炉穴は、明瞭な野島式土器が含まれていることから、野島式期に設営された可能性が高い。

032号・033号炉穴（第31図、図版８）

不整楕円形の大きな掘込み（032号炉穴）と、この掘込みに壊される楕円形の小さな掘込み（033号炉穴）からなる。燃焼部は032号炉穴の掘込み内に３か所認められる。燃焼部は比較的よく焼けているが、焼土の堆積は少ない。土層断面の観察では、032号炉穴と033号炉穴は明瞭に切り合い関係を捉えられない。032号炉穴の設営時期は、覆土中から出土した土器（第40図）から、子母口式期と考えられる。033号炉穴からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

035号炉穴（第32図、図版８）

楕円形の掘込みで、北に向かうにしたがい掘込みは深くなる。燃焼部はよく焼けており、焼土の堆積も多い。035号炉穴からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

036号炉穴（第32図、図版９）

楕円形の掘込みで、掘込みの中央部に燃焼部が認められる。燃焼部はよく焼けており、焼土の堆積も多い。036号炉穴からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

037号炉穴（第32図）

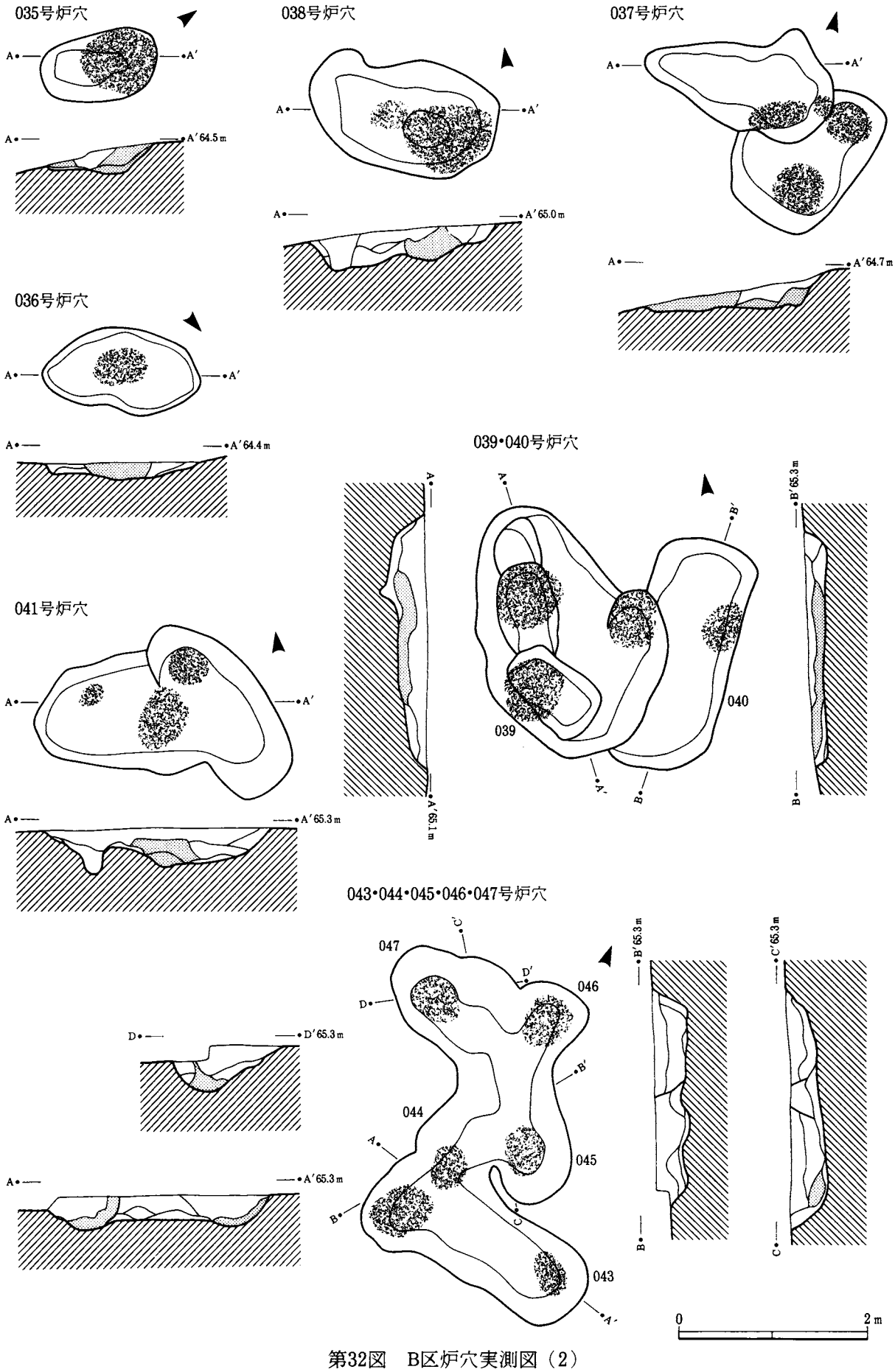
不整楕円形の掘込みが２基重複する炉穴で、燃焼部は４か所認められる。２基の掘込みの新旧関係は不明である。燃焼部は比較的よく焼けており、焼土の堆積も多い。037号炉穴からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

038号炉穴（第32図、図版９）

不整楕円形の掘込みで、燃焼部は２か所認められる。燃焼部はよく焼けており、焼土の堆積も多い。038号炉穴からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

039号・040号炉穴（第32図、図版９）

西側の不整楕円形の掘込みを039号炉穴、東側の長方形の掘込みを040号炉穴として調査した。039号炉穴の３か所の燃焼部は、いずれもよく焼けており、焼土の堆積も比較的多い。西側の底面には小規模な楕



第32図　B区炉穴実測図（2）

円形の掘込みが連続して設けられており、この部分に燃焼部が認められる。東側の突出部にも燃焼部が認められる。このように、掘込みの変化している部分に燃焼部が認められていることから、複数の炉穴が重複した結果が、039号炉穴であると考えることができよう。

040号炉穴は、燃焼部はあまりよく焼けていないが、焼土の堆積は多い。039号炉穴・040号炉穴の設営時期は、覆土中から出土した土器（第40図、039号炉穴・040号炉穴のどちらから出土したかは不明）から、子母口式期と考えられる。

041号炉穴（第32図、図版９）

楕円形の掘込みが２基重複するように捉えられる炉穴である。燃焼部は３か所認められ、いずれも比較的よく焼けており、焼土の堆積もやや多い。041号炉穴の設営時期は、覆土中から出土した土器（第40図）から、子母口式期と考えられる。

043号・044号・045号・046号・047号炉穴（第32図）

複数の楕円形の掘込みが重複する炉穴群で、全体的にはアメーバ状のプランを呈する。燃焼部は、個々の楕円形の掘込みの端部に認められる。いずれもよく焼けているが、焼土の堆積は多くない。

043号炉穴・044号炉穴・045号炉穴・046号炉穴・047号炉穴は、個々の燃焼部から土器片が出土している。したがって、土器片が出土している燃焼部に番号を付したもので、個々の掘込みに番号を付したものではない。南西端の燃焼部のみ土器片が出土していない。土器片はいずれも子母口式土器が主体であり、炉穴群の設営時期を示しているものと思われる。

050号・051号・052号炉穴（第33図、図版９）

不整形の大規模な掘込みを051号炉穴、南西側の瓢箪形の掘込みを052号炉穴として調査し、これら２基の掘込みに近接するピット状の掘込みを050号炉穴とした。050号炉穴は燃焼部が認められないことから、客観的には炉穴であると断定しがたいが、覆土は051号炉穴・052号炉穴に酷似し、覆土中に散発的に焼土が認められている。また、複雑に重複する炉穴群の、掘込みの浅い部分が削平された場合では、その深い部分が単独に設営されているような様相を呈する可能性があることから、調査の段階で050号炉穴として扱っている。

051号炉穴の掘込みは極めてしっかりとしている。051号炉穴・052号炉穴の燃焼部はよく焼けているが、焼土の堆積は多くない。050号炉穴からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。051号炉穴・052号炉穴の設営時期は、覆土中から出土した土器（第41図）から、子母口式期と考えられる。

053号炉穴（第33図、図版９）

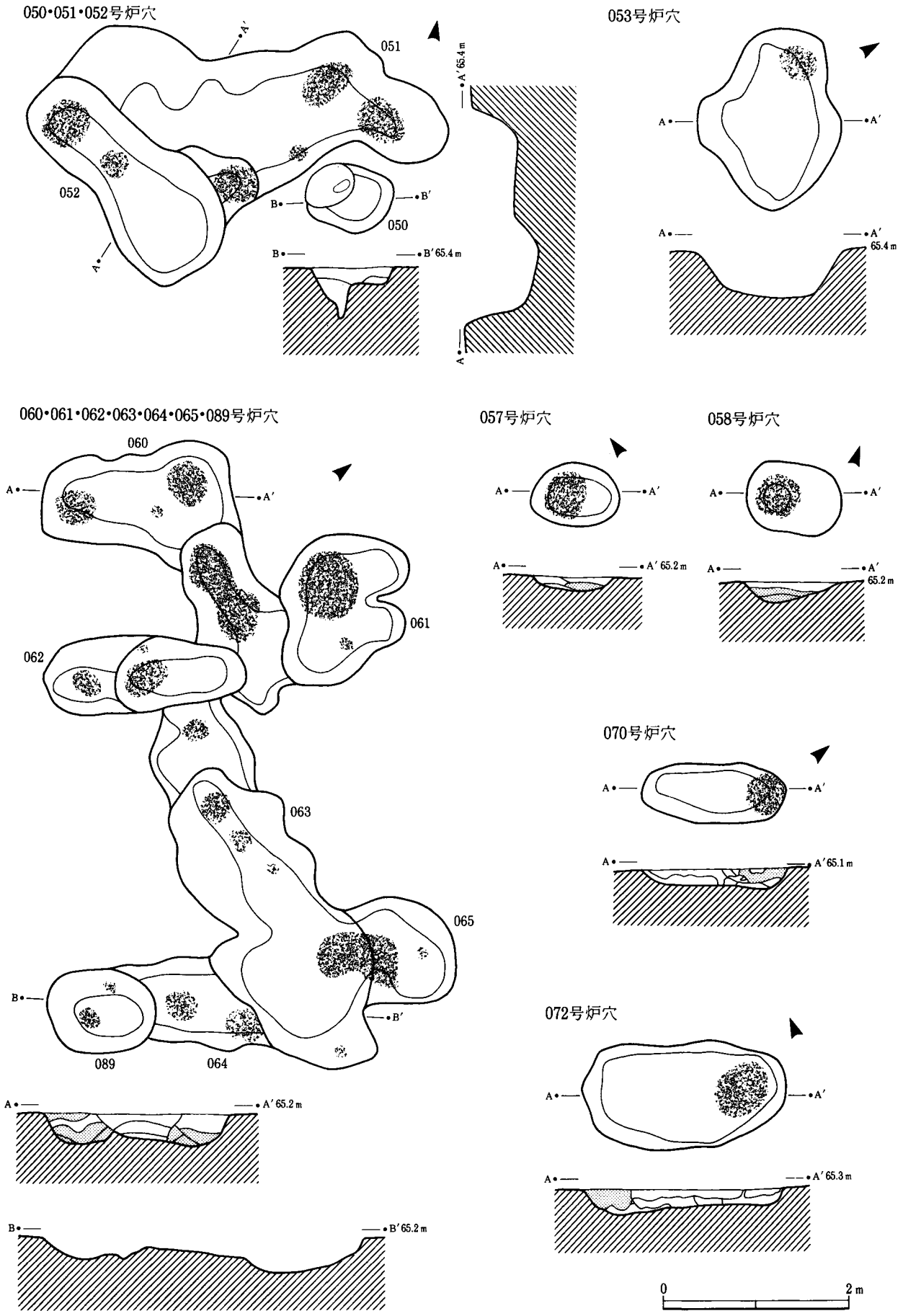
楕円形の掘込みに燃焼部が認められる。掘込みは深く、燃焼部はよく焼けているが、焼土の堆積は多くない。053号炉穴からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

057号炉穴（第33図、図版９）

楕円形の掘込みに燃焼部が認められる。燃焼部は比較的よく焼けているが、焼土の堆積は多くない。057号炉穴の設営時期は、覆土中から出土した土器（第41図）から、子母口式期と考えられる。

058号炉穴（第33図、図版10）

楕円形の掘込みに燃焼部が認められる。掘込みは深く、燃焼部はよく焼けているが、焼土の堆積は多くない。058号炉穴の設営時期は、覆土中から出土した土器（第41図）から、子母口式期と考えられる。



第33図　B区炉穴実測図（3）

060号・061号・062号・063号・064号・065号・089号炉穴（第33図、図版10・11）

楕円形を基本とする掘込みが複数基重複するプランである。18か所の燃焼部が認められる。個々の掘込みの呼称方法は、調査段階での認識に準拠している。061号炉穴と062号炉穴の間の掘込みと、062号炉穴と063号炉穴の間の掘込みには、調査の段階で番号が付されておらず、遺物も出土していないことから、報告に際しても番号を付していない。

掘込みは、いずれも比較的しっかりとしており、焼土の堆積も多い。燃焼部は、規模の大きいもの（範囲の広いもの）ほどよく焼けている。複雑な重複関係を呈しており、最低でも掘込みの数だけの重複関係を考えることができるが、060号炉穴の土層断面から、単独の掘込みであっても、複数基の重複であることも考えられることから、燃焼部の数（18か所）程度の重複が想定される炉穴群である。

064号炉穴は、掘込み中央部の、覆土の上層から下層にかけて土器が多く出土している。ただし、焼成が脆弱な無文土器が主体であったため、図示したものは限られた。061号炉穴・063号炉穴・064号炉穴・065号炉穴の設営時期は、覆土中から出土した土器（第41図）から、子母口式期と考えられる。060号炉穴・062号炉穴・089号炉穴からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

066号炉穴（第34図、図版10・11）

002号住居跡の下から検出された炉穴である。不整楕円形の掘込みに、燃焼部が1か所認められる。燃焼部は比較的よく焼けており、焼土の堆積は多い。燃焼部付近から土器が多く出土したが、焼成が脆弱な無文土器が主体であったため、図示したものは限られた。066号炉穴の設営時期は、これら燃焼部付近から出土した土器や、覆土中から出土した土器（第42図）から、子母口式期と考えられる。

069号炉穴（第34図、図版11）

002号住居跡の下から検出された炉穴であるが、部分的に新旧をまちがえて調査を行っている。不整形の浅い掘込みに、燃焼部が4か所認められる。燃焼部はあまりよく焼けておらず、焼土の堆積も少ない。069号炉穴の設営時期は、覆土中から出土した土器（第42図）から、子母口式期と考えられる。

070号炉穴（第33図、図版11）

楕円形の掘込みに、燃焼部が1か所認められる。燃焼部は比較的よく焼けており、焼土の堆積も比較的多い。070号炉穴からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

071号炉穴（第34図、図版11）

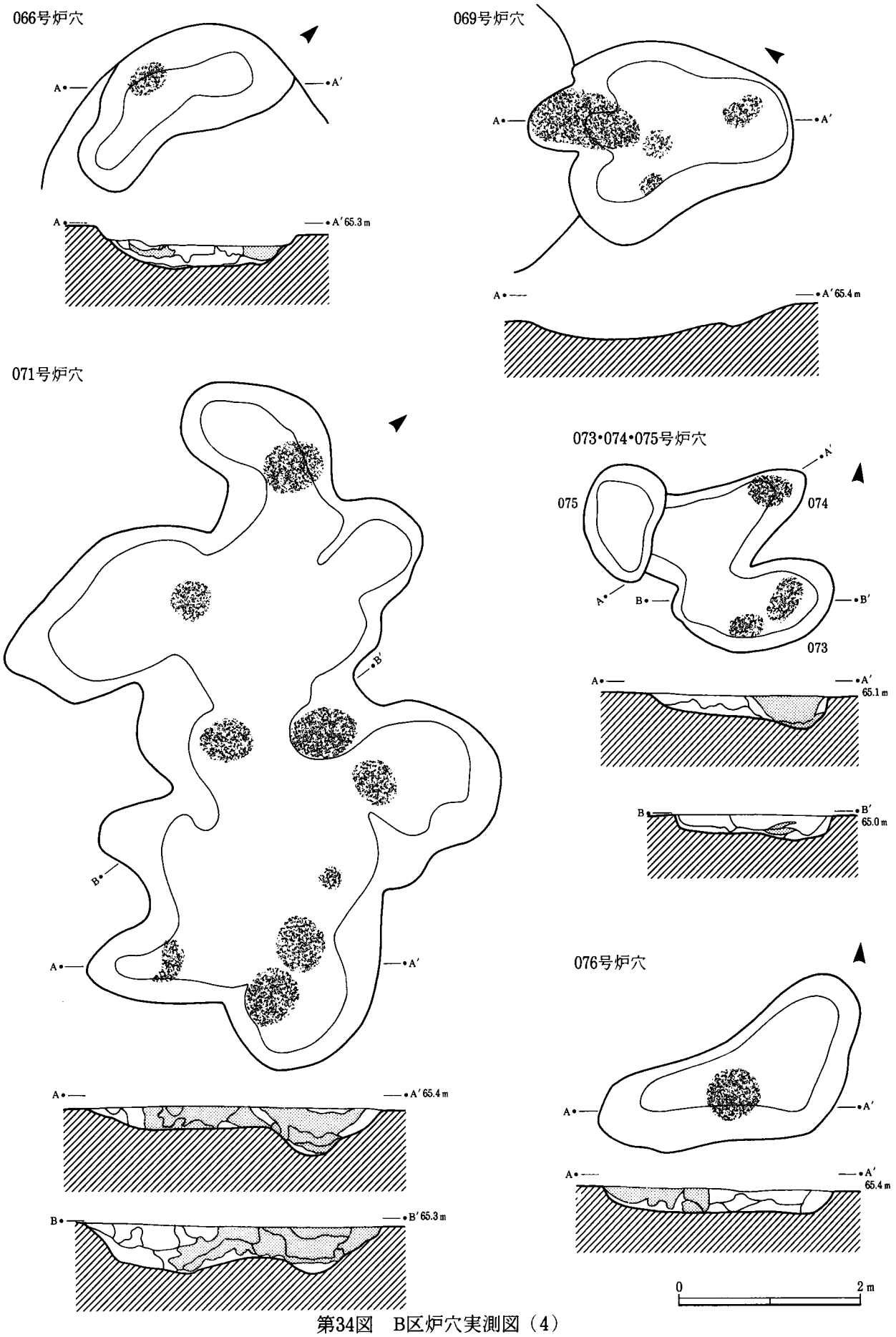
楕円形を基本とする掘込みが複数基重複するプランである。9か所の燃焼部が認められる。燃焼部は、規模の大きいもの（範囲の広いもの）ほどよく焼けている。掘込み全面にわたって、焼土の堆積は多い。土層断面から、個々の掘込みの範囲や重複関係を明らかにすることはできなかった。071号炉穴の設営時期は、覆土中から出土した土器（第42図）から、子母口式期と考えられる。

072号炉穴（第33図、図版11）

楕円形の掘込みに、燃焼部が1か所認められる。燃焼部は比較的よく焼けており、焼土の堆積も比較的多い。この炉穴からは土器が1点出土しているが（第43図、撚糸文土器）、これをもって設営時期とすることは、他の炉穴の設営時期と隔たりがあり、困難であろうと思われる。

073号・074号・075号炉穴（第34図、図版12）

燃焼部を有する楕円形の2基の掘込み（073号炉穴・074号炉穴）と、楕円形の小規模な掘込み（075号炉穴）からなる。075号炉穴は燃焼部が認められないことから、客観的には炉穴であると断定しがたいが、



第34図　B区炉穴実測図（4）

覆土は073号炉穴・074号炉穴に酷似し、覆土中に散発的に焼土が認められている。また、複雑に重複する炉穴群の、掘込みの浅い部分が削平された場合では、その深い部分が単独に設営されているような様相を呈する可能性があることから、調査の段階で075号炉穴として扱っている。

073号炉穴・074号炉穴の燃焼部はよく焼けており、焼土の堆積も多い。074号炉穴の設営時期は、覆土中から出土した土器（第43図）から、子母口式期と考えられる。073号炉穴・075号炉穴からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

076号炉穴（第34図、図版12）

不整楕円形の掘込みに、燃焼部が1か所認められる。燃焼部は比較的よく焼けており、焼土の堆積も比較的多い。076号炉穴の設営時期は、覆土中から出土した土器（第43図）から、子母口式期と考えられる。

078号炉穴（第35図、図版12）

楕円形の掘込みに1か所の燃焼部を有する炉穴が、2基重複している炉穴群である。燃焼部は比較的よく焼けており、焼土の堆積も比較的多い。078号炉穴からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

081号炉穴（第35図、図版12）

楕円形の掘込みが2基重複するような炉穴である。燃焼部は比較的よく焼けており、焼土の堆積も比較的多い。081号炉穴の設営時期は、覆土中から出土した土器（第43図）から、子母口式期と考えられる。

082号・083号炉穴（第35図）

楕円形の掘込みが2基重複するような炉穴である。083号炉穴が082号炉穴を壊すように設営されており、082号炉穴の燃焼部は、083号炉穴により壊されているものと思われる。083号炉穴の燃焼部は比較的よく焼けており、082号炉穴・083号炉穴の焼土の堆積は比較的多い。共に土器は出土していないので、設営時期は不明である。

085号炉穴（第35図）

規模の大きい不整長円形の掘込みに、燃焼部が4か所認められる。不整形のプランから考えて、燃焼部の数（4か所）程度の炉穴が重複しているものと考えられる。燃焼部はいずれも比較的よく焼けており、焼土の堆積も比較的多い。085号炉穴の設営時期は、覆土中から出土した土器（第43図）から、子母口式期と考えられる。

087号炉穴（第35図、図版12）

楕円形の掘込みに、燃焼部が1か所認められる。燃焼部は比較的よく焼けており、焼土の堆積も比較的多い。087号炉穴からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

088号炉穴（第35図、図版12）

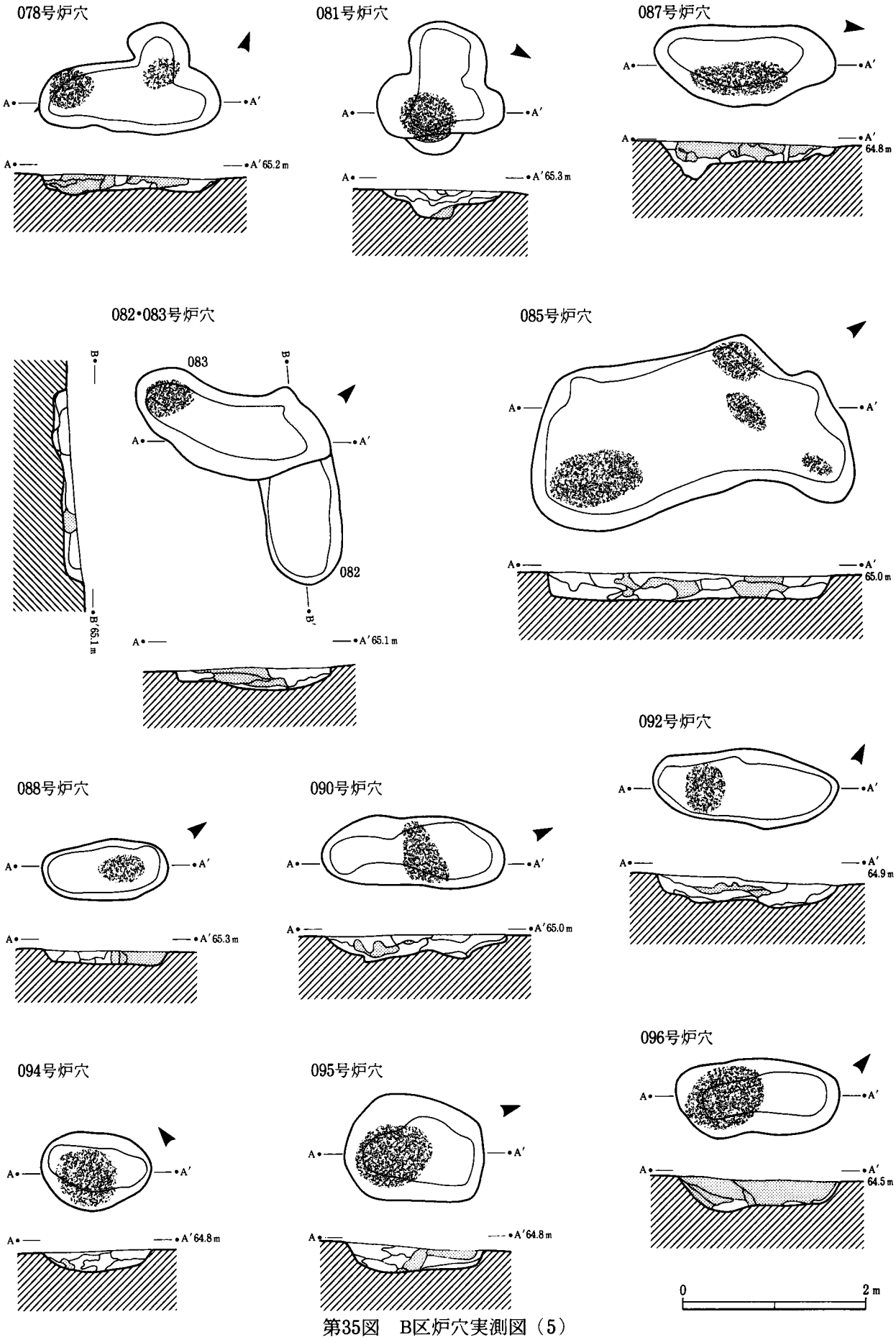
楕円形の浅い掘込みに、燃焼部が1か所認められる。燃焼部は比較的よく焼けており、焼土の堆積も比較的多い。088号炉穴の設営時期は、覆土中から出土した土器（第43図）から、子母口式期と考えられる。

090号炉穴（第35図、図版12）

楕円形の掘込みに、燃焼部が1か所認められる。燃焼部は比較的よく焼けており、焼土の堆積も比較的多い。090号炉穴からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

092号炉穴（第35図、図版13）

楕円形の掘込みに、燃焼部が1か所認められる。燃焼部は比較的よく焼けており、焼土の堆積も比較的



第35図　B区炉穴実測図（5）

多い。092号炉穴からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

094号炉穴（第35図、図版13）

楕円形の掘込みに、燃焼部が1か所認められる。燃焼部は比較的よく焼けており、焼土の堆積は少ない。094号炉穴からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

095号炉穴（第35図）

楕円形の掘込みに、燃焼部が1か所認められる。燃焼部は比較的よく焼けており、焼土の堆積も比較的多い。095号炉穴からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

096号炉穴（第35図、図版13）

楕円形の掘込みに、燃焼部が1か所認められる。燃焼部は比較的よく焼けており、焼土の堆積は多い。096号炉穴の設営時期は、覆土中から出土した土器（第43図）から、子母口式期と考えられる。

097号炉穴（第36図、図版13）

不整方形の掘込みと、長楕円形の掘込みからなる。燃焼部は3か所認められる。長楕円形の掘込みは、不整方形の掘込みに壊されている。燃焼部はよく焼けており、焼土の堆積も多い。097号炉穴の設営時期は、覆土中から出土した土器（第44図）から、子母口式期と考えられる。

104号炉穴（第36図）

不整円形の浅い掘込みに、燃焼部が1か所認められる。燃焼部は比較的よく焼けており、焼土の堆積は少ない。104号炉穴からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

105号炉穴（第36図）

楕円形の掘込みに、燃焼部が3か所認められる。西側の燃焼部は掘込み外にまで及ぶ。燃焼部はいずれもよく焼けており、焼土の堆積も比較的多い。105号炉穴からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

（2）土坑

大作頭遺跡B区からは22基の土坑が検出されている。土坑の設営時期については、覆土中から出土した土器片の時期に準拠しているが、土器片が出土している土坑は3基である。したがって、土器片の出土していない大半の土坑については、時期はおろか、縄文時代に属するものであるかという基本的な疑問がある。しかし、これらの土坑については、調査段階で、確認面のレベルや覆土から考えて縄文時代に属すると判断していることから、縄文時代に属するものとして扱うこととした。

土器片の出土していない土坑の、詳細な設営時期は不明であるが、炉穴の設営時期（早期）・住居跡の設営時期（中期）・包含層の形成時期（早期・中期・後期）のいずれかに相当するものと考えられる。

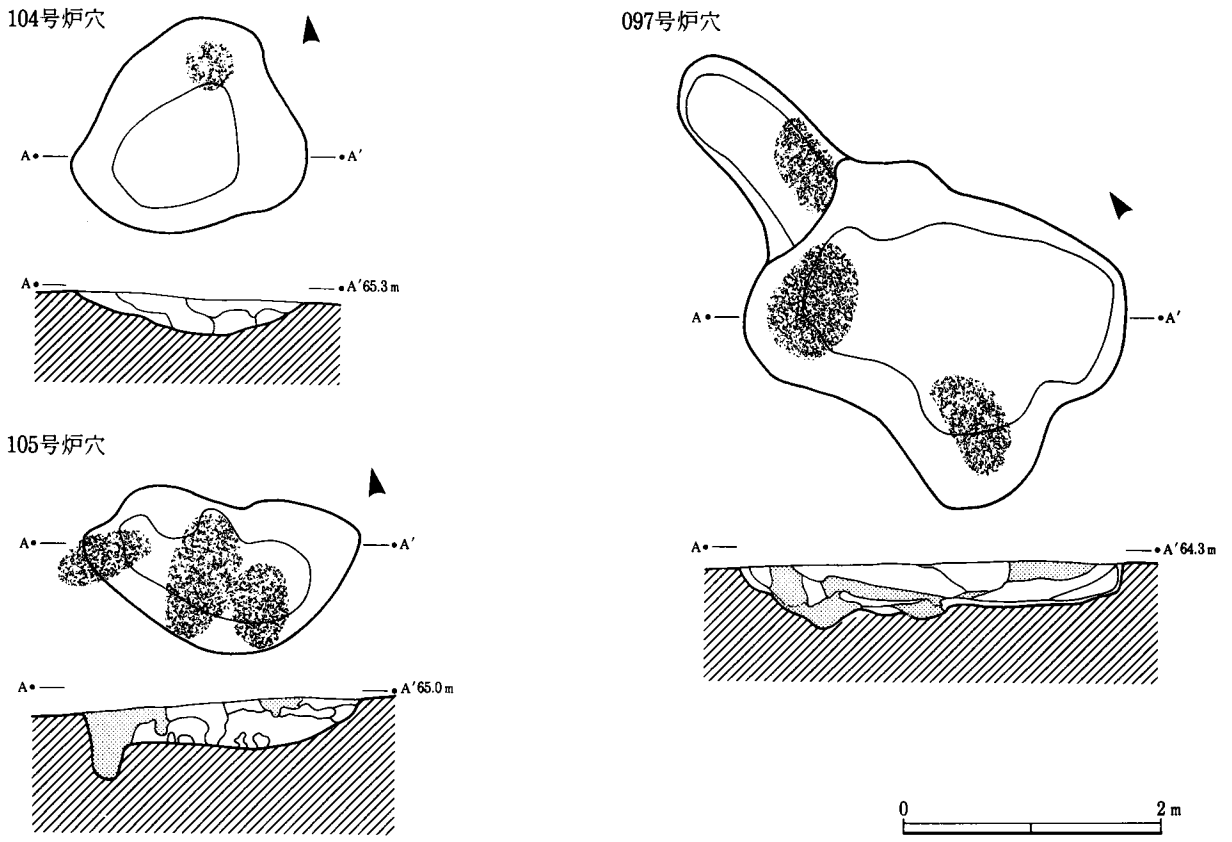
土坑の土層断面の注記について、提示の必要があると判断されるもののみ本文中に記している。また、複数の掘込みが重複し、本来は複数基の土坑であると判断されるものであっても、調査段階で一つの遺構番号を付したものについては、1基として扱っている。

010号土坑（第37図、図版13）

楕円形の掘込みで、011号土坑よりも新規の設営である。覆土は暗褐色土を主体とする。010号土坑からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

011号土坑（第37図、図版13）

楕円形の浅い掘込みで、010号土坑に壊される。覆土は暗褐色土を主体とする。011号土坑からは土器は



第36図　B区炉穴実測図（6）

出土していないので、設営時期は不明である。

012号土坑（第37図、図版13）

ピット状の浅い掘込みで、覆土は暗褐色土を主体とする。012号土坑からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

013号土坑（第37図、図版13）

楕円形の掘込みで、東側では掘込みがやや深くなる。覆土は暗褐色土を主体とする。013号土坑からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

014号土坑（第37図、図版13）

隅丸方形風の浅い掘込みで、覆土は暗褐色土を主体とする。014号土坑からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

016号土坑（第37図、図版13）

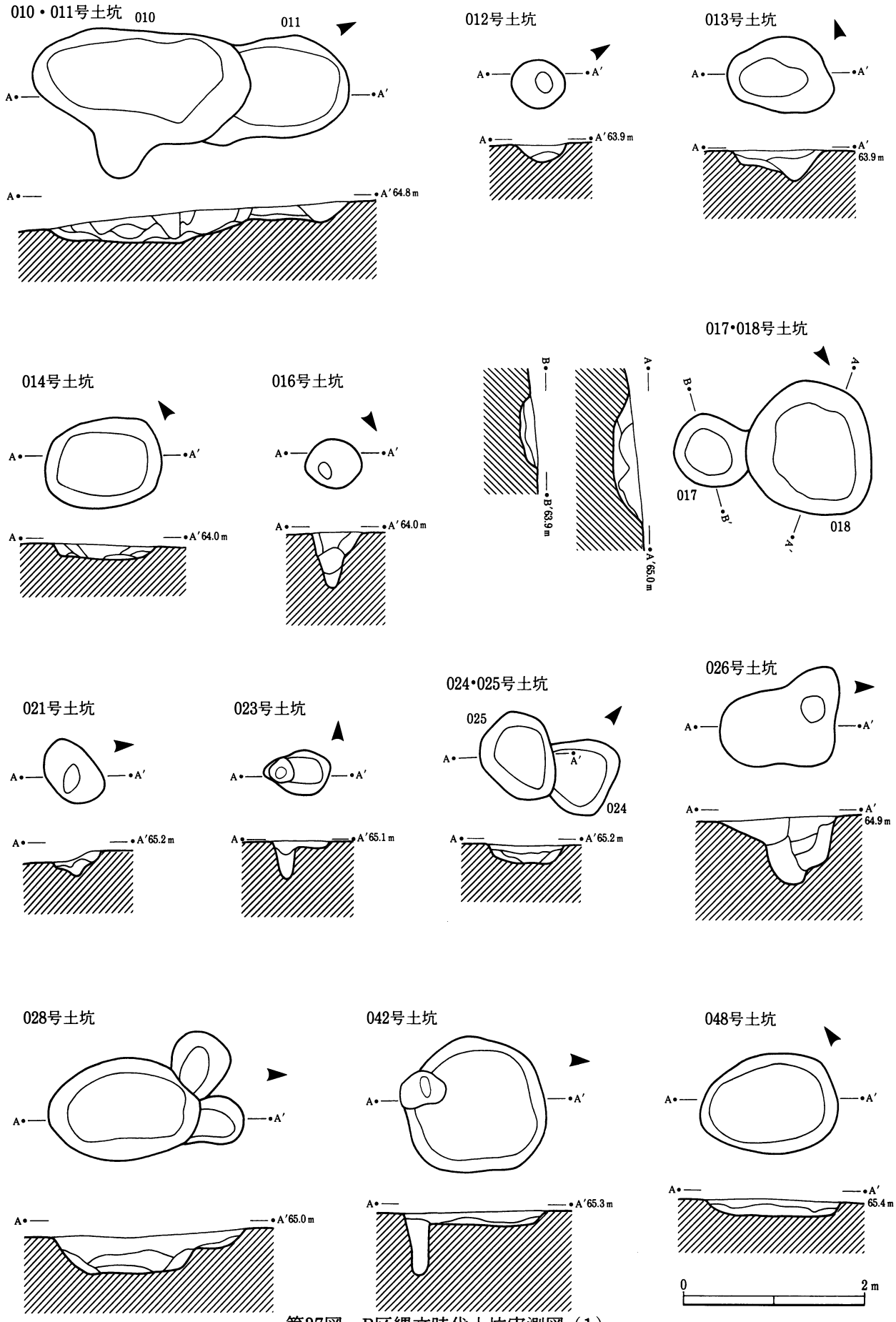
ピット状の浅い掘込みで、覆土は暗褐色土を主体とする。016号土坑からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

017号土坑（第37図）

円形のピット状の掘込みで、断面は皿状を呈する。覆土は暗褐色土を主体とする。017号土坑からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。018号土坑との新旧関係は不明である。

018号土坑（第37図）

円形の掘込みで、断面は皿状を呈する。覆土は暗褐色土を主体とする。018号土坑の設営時期は、覆土



第37図　B区縄文時代土坑実測図（1）

中から出土した土器（第45図）から、撚糸文土器の時期と考えられる。しかし、1片のみの出土で、炉穴の形成時期と異なることから、断定はできない。

021号土坑（第37図）

ピット状の浅い掘込みで、覆土は暗褐色土を主体とする。021号土坑からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

023号土坑（第37図、図版14）

楕円形の掘込みと、深いピット状の掘込みからなる。いずれの掘込みも、覆土は暗褐色土を主体とする。023号土坑からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

024号土坑（第37図、図版14）

浅い円形の掘込みで、025号土坑に壊される。覆土は暗褐色土を主体とする。024号土坑からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

025号土坑（第37図、図版14）

浅い円形の掘込みで、覆土は暗褐色土を主体とする。025号土坑の設営時期は、覆土中から出土した土器（第45図）から、撚糸文土器の時期と考えられる。しかし、1片のみの出土で、炉穴の形成時期と異なることから、断定はできない。

026号土坑（第37図）

不整形の深い掘込みで、覆土は暗褐色土・ローム粒を主体とする。026号土坑からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

028号土坑（第37図、図版14）

楕円形の比較的深い掘込みである。北側の2基の円形の浅い掘込みが、楕円形の掘込みに伴うか否かは不明である。いずれの掘込みも覆土は暗褐色土が主体である。028号土坑からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

042号土坑（第37図、図版14）

円形の浅い掘込みで、南側のピット状の掘込みが、円形の掘込みに伴うか否かは不明である。いずれの掘込みも覆土は暗褐色土が主体である。042号土坑からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

048号土坑（第37図、図版14）

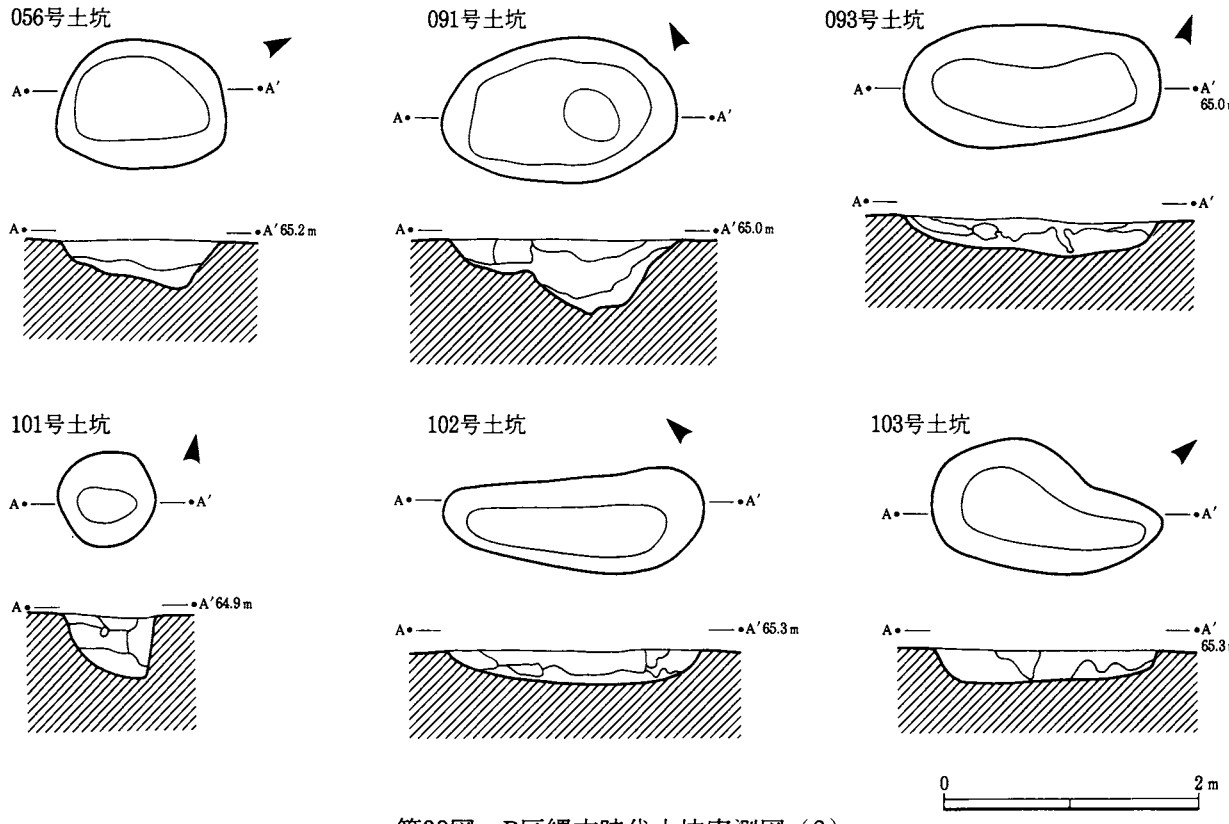
楕円形の浅い掘込みで、覆土は暗褐色土が主体である。048号土坑からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

056号土坑（第38図、図版14）

楕円形の比較的深い掘込みで、北側では掘込みが若干深くなる。覆土は暗褐色土が主体である。056号土坑からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

091号土坑（第38図、図版14）

楕円形の掘込みで、東側の掘込みは深いので、本来は2基の土坑が重複していたのかもしれないが、土層断面からは明瞭に捉えられない。覆土は暗褐色土が主体である。091号土坑からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。



第38図　B区縄文時代土坑実測図（2）

093号土坑（第38図、図版15）

長楕円形の浅い掘込みで、覆土は暗褐色土が主体である。093号土坑の設営時期は、覆土中から出土した土器（第45図）から、子母口式期と考えられる。

101号土坑（第38図）

ピット状の浅い掘込みで、覆土は暗褐色土を主体とする。101号土坑からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

102号土坑（第38図、図版15）

長楕円形の浅い掘込みで、覆土は暗褐色土が主体である。102号土坑からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

103号土坑（第38図、図版15）

不整の長楕円形の浅い掘込みで、覆土は暗褐色土が主体である。103号土坑からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

（３）住居跡

001号住居跡（第39図、図版15･16）

円形のプランで、壁高は遺存状態が良好な部分で約25cmである。壁の下半はソフトローム層に形成されていることから、プランはしっかりとしている。住居跡の覆土は、暗褐色土を主体にローム粒を少量含むものであった。

柱穴は17本検出されているが、いずれも深度が10cm前後で浅い。柱穴配置や深度の差から主柱穴を抽出することは不可能であった。床面はソフトローム面に形成されているが、硬化面は確認できなかった。東端からは埋甕炉が検出された。キャリパー形土器（第46図）の上半を正位に埋設したもので、口縁部が３cm程度、床面よりも突出している。土器は受熱による脆弱化が内面の全面に認められるが、器壁が剥落するほどではない。埋甕炉内の覆土は、黒褐色土を主体に灰を含むもので、焼土の混入は極めて少ない。埋甕と掘込みの間の覆土は、ローム粒・暗褐色土を主体とするしまり良好なものである。掘込みの壁面も比較的よく焼けている。

住居跡西端の床面から、中期後半に属すると考えられる土器が出土している（図版15　右列２段目）。受熱もしくは風化により、脆弱化が進行し、遺物取上げの段階で崩壊してしまった。整理作業の段階で接合・復元に努めたが、図示できる程度までの復元は不可能であった。

001号住居跡の設営時期は、埋甕炉の土器から考えて、加曽利ＥⅡ式期もしくは加曽利ＥⅢ式期であろうと思われる。

002号住居跡（第39図、図版16）

円形のプランで、壁高は遺存状態が良好な部分で約20cmである。壁の下半はソフトローム層に形成されていることから、プランはしっかりとしている。066号炉穴・069号炉穴の調査の段階で、新旧関係を誤認して、壁の一部を壊してしまった。住居跡の覆土は、暗褐色土を主体にローム粒を少量含むものであった。

柱穴は、何度も床面の精査を行ったが、検出できなかった。床面はソフトローム面に形成されているが、硬化面は確認できなかった。

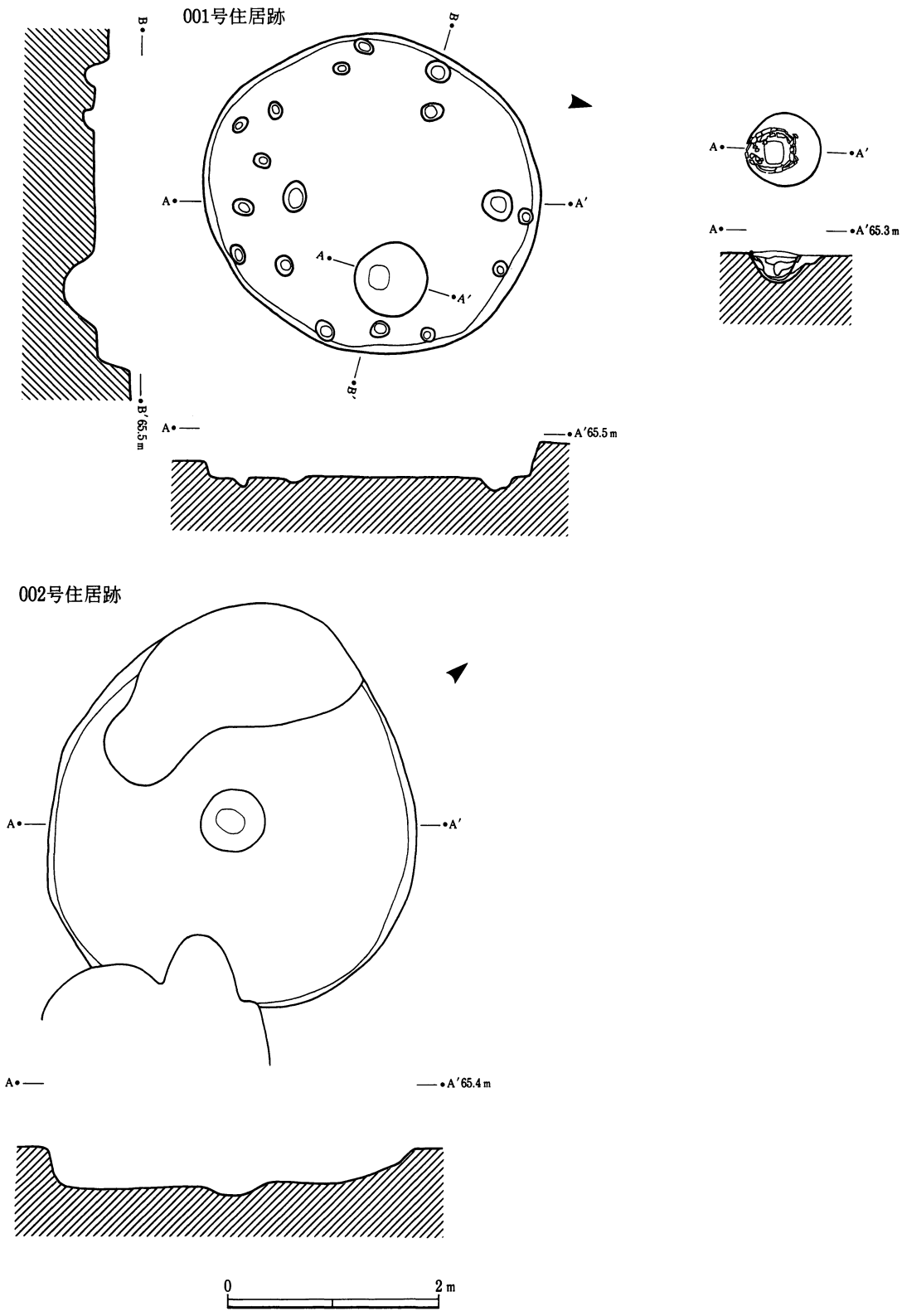
002号住居跡の設営時期は、覆土から出土した土器から考えて、加曽利ＥⅢ式期もしくは加曽利ＥⅣ式期であろうと思われ、001号住居跡よりも新しい時期の設営である。

２　遺物

大作頭遺跡Ｂ区から出土した縄文時代の遺物は、土器・石器・礫に限られる。このうち実測図を提示するものは土器と石器であり、礫については出土状況（分布状況）の提示と、基礎的な分析（重量・大きさ・遺存度）を行うものとする。

土器は、遺構ごとに掲載し、その後に遺構外出土を掲載した。掲載順序は、遺構出土については、遺構の事実記載の順番に従っている。遺構外出土については、型式ごとの分類に準拠するのではなく、Ａ区内での各時期別の土器片の分布状況が概観できるように、大グリッドごとに掲載した。掲載する土器の取捨選別の段階で、図示不可能な小破片や、細別時期が不明な条痕のみの破片・無文の破片は掲載しないものとした。胎土中に繊維を含む土器については、断面中にドットを付しておいた。

石器は、大作頭遺跡Ｂ区での石器組成（縄文時代早期の炉穴・土坑を主体とする遺跡の石器組成）を概観できるように、出土地点ごと（遺構ごと・グリッドごと）による提示ではなく、器種ごとに掲載するこ



第39図　B区縄文時代住居跡実測図

とを基本とした。実測図を提示した石器は、完形もしくはこれに準ずるものに限った。なお、実測図を提示しないものについては、全点にわたり器種・石材・計測値等を第4表に示した。実測図に示した石器についても同様の作業を行っている。石器実測図に用いているスクリーントーンの用例は凡例に示している。

（1）土器

大作頭遺跡B区から出土した縄文土器は、遺構内・遺構外出土にかかわらず、早期の撚糸文土器や子母口式土器が主体であり、少量の田戸上層式土器・加曽利E式土器・加曽利B式土器が認められるにすぎない。

土器の事実記載に際しては、拓影図・断面図・写真（いずれも縮尺は1/3）によって確認できる要素については省略する。事実記載はあくまで、拓影図等によって表現することのできない要素を記す方法である。内面の拓影図については、遺存状態が良好なものや、特殊なものについては示している。内面の調整の有無や状態については、拓影図で示していないものについては、その都度記載している。土器型式名については、遺構出土のものに関しては、遺構の設営時期を推し量る際に重要であることから、その都度記載したが、遺構外出土のものに関しては、明確にする必要があるものに限り記載し、全点にわたり記載しているわけではない。

子母口式土器は市原市域のみならず、千葉県内での出土例はあまり多くない。また、大作頭遺跡（A区・B区・C区）出土の子母口式土器は、その終末期の様相をよく示した土器群であり、今後の引用・分析の対象となることが十分予想される。したがって、主要な土器群については巻頭のカラー図版に示し、文様・施文方法・口唇部加飾の詳細を示すために接写を行い（図版43～48、縮尺は任意）、今後の活用に向けての便宜を図っている。

条痕のみの土器・擦痕のみの土器・無文土器など、形式学的な特徴に乏しい土器については、胎土・焼成や有文土器の量的な多さから、子母口式土器と判断したものが多い。現実には田戸上層式土器の新しい部分から野島式土器の古い部分の土器も少なからず含まれている可能性が高い。しかし、破片資料でこれらを厳密に区別することは困難であることから、ここでの子母口式土器とは、若干の時間幅（田戸上層式土器の新しい部分から野島式土器の古い部分）を有していることを明記しておきたい。

また、条痕としたものの中には、貝殻条痕と絡条体条痕が含まれている。明確に絡条体条痕であると判断されるものはそのように記しているが、明確に区別できないものは単に条痕と記している。

a　炉穴出土土器

003号・004号炉穴出土土器（第40図、図版26）

1は板状工具による幅広の並行沈線間に、縦位の刻み風の沈線が施される。口唇部の刻みは、破片の左右で方向を変えている。2は器表面は絡条体条痕ではなく、単なる条痕である。子母口式土器である。

008号炉穴出土土器（第40図、図版26）

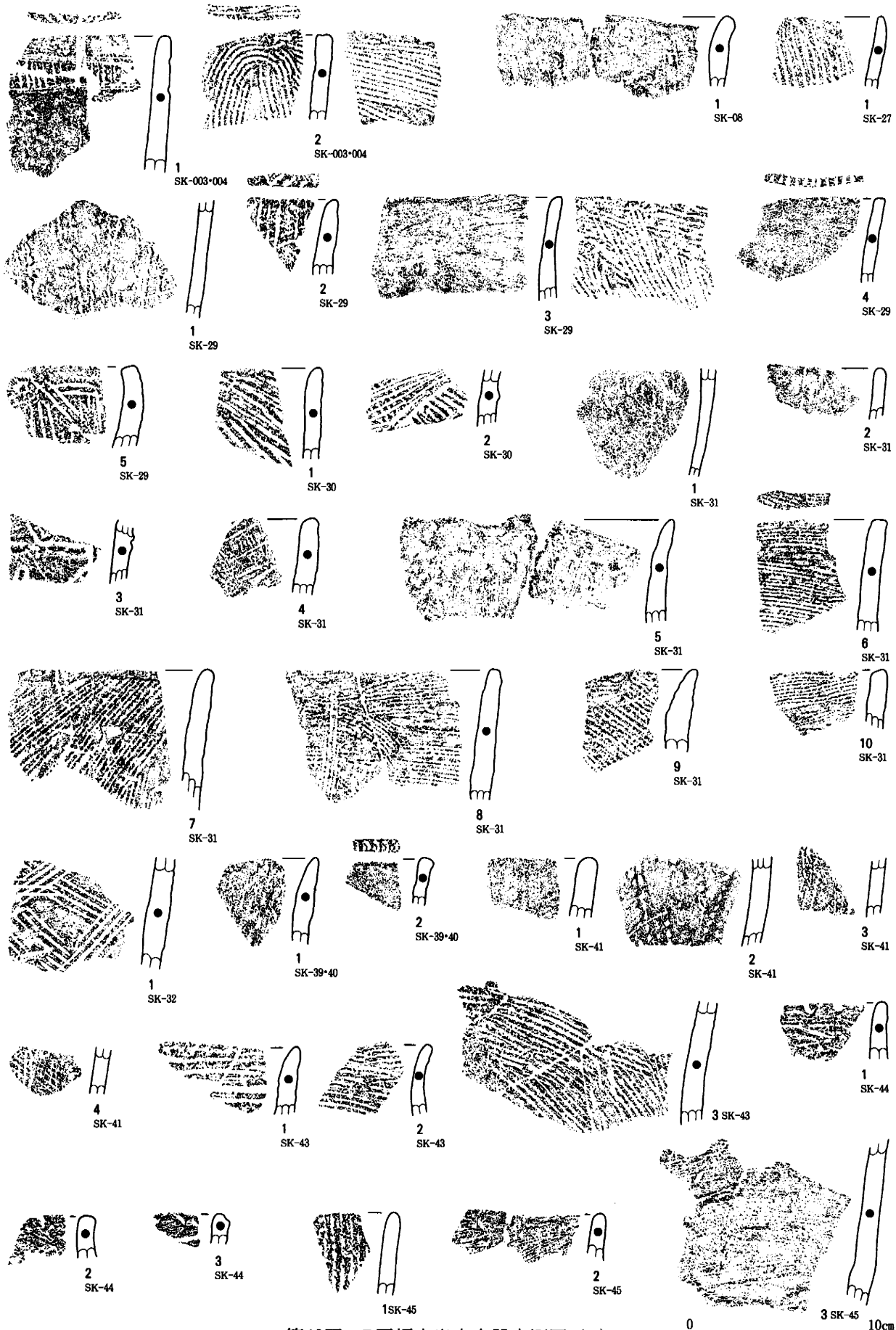
1の器表面は縦位方向の軽易な擦痕が、間隔をおいて認められる。子母口式土器である。

027号炉穴出土土器（第40図、図版26）

1は薄手の焼成で、器表面には縦位の条痕が認められる。

029号炉穴出土土器（第40図、図版26）

1は撚糸文土器である。2の器表面には縦位の条痕が認められる。口唇部は刺突風の施文が認められるが、磨滅が進行しているので、詳細は不明である。2～5は子母口式土器である。



第40図　B区炉穴出土土器実測図（1）

030号炉穴出土土器（第40図、図版26）

1の器表面には条痕が認められ、内面には擦痕が認められる。2は微隆起間に集合沈線が充填され、内面には擦痕が認められる。1は子母口式土器、2は野島式土器である。

031号炉穴出土土器（第40図、図版26）

1・2は撚糸文土器である。3は横位方向と格子目状に微隆起が貼付される。5の口縁中央部は若干の波状を呈する。6～10の内面は軽易な擦痕・条痕調整である。

3は子母口式期から野島式期にかけての所産であろう。4～10は子母口式土器である。

032号炉穴出土土器（第40図、図版26）

1の器表面は、軽易な擦痕の上に、格子目状の条痕が認められる。子母口式土器である。

039号・040号炉穴出土土器（第40図、図版26）

1は無文である。2は口唇部に刺突が認められる。共に子母口式土器である。

041号炉穴出土土器（第40図、図版26）

1～3は撚糸文土器である。4は格子目状の細沈線が施されるが、ヘラ状の工具でミガキ風に擦り消されているようである。内面の調整は雑である。子母口式土器であろうか。

043号炉穴出土土器（第40図、図版26）

2・3の内面には擦痕が認められる。1から3は子母口式土器である。

044号炉穴出土土器（第40図、図版26）

1～3は口縁端部から口唇面にかけて刻みが施される。子母口式土器である。

045号炉穴出土土器（第40図、図版26）

1は撚糸文土器である。2・3は内外面ともに擦痕が認められる。子母口式土器である。

046号炉穴出土土器（第41図、図版26）

1は薄手の焼成で、内外面ともに擦痕が認められる。2の器表面には板状工具等による幅広の沈線が認められる。3の内外面と口唇面に条痕が認められる。1～3は子母口式土器である。

047号炉穴出土土器（第41図、図版26）

1は撚糸文土器、2は子母口式土器である。

051号炉穴出土土器（第41図、図版26）

1は内外面ともに無文である。5の器表面は粗い条痕調整で、内面には擦痕が認められる。7は三角形状の太い隆帯が貼付される。1～6は子母口式土器である。7は芽山上層式土器である。

052号炉穴出土土器（第41図、図版27）

1は内外面ともに軽易な擦痕が認められる。子母口式土器であろう。

057号炉穴出土土器（第41図、図版27）

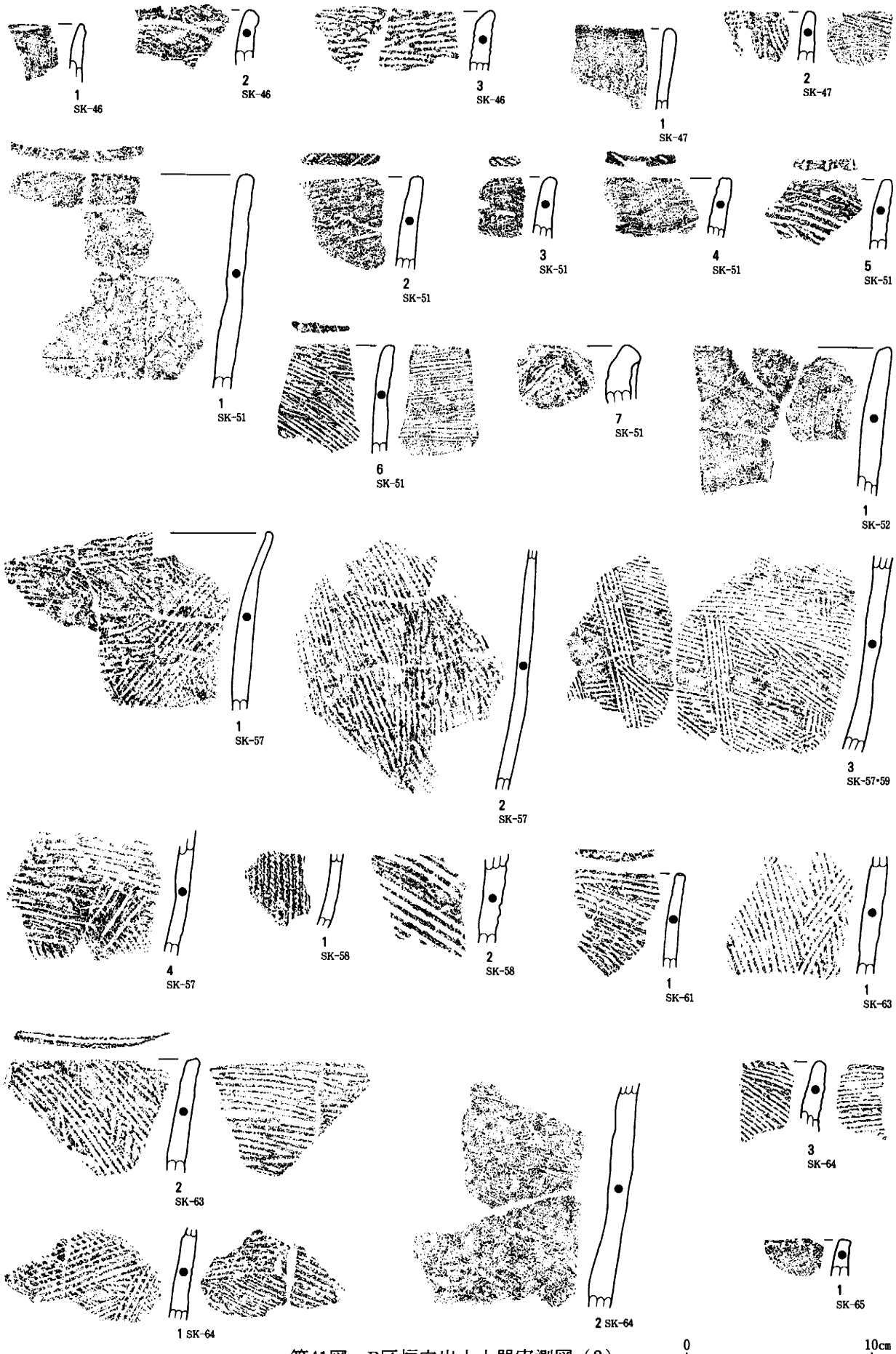
1・2・4は内面に軽易な条痕が認められる。3の内面は条痕が認められる。1～4は子母口式土器であるが、条痕がしっかりとしていること等、野島式土器である可能性も高い。

058号炉穴出土土器（第41図、図版27）

1は撚糸文土器である。2は子母口式土器であろうか。

061号炉穴出土土器（第41図、図版27）

1は内外面ともに条痕が施される。口唇には円形刺突が施される。子母口式土器である。



第41図　B区炉穴出土土器実測図（2）

063号炉穴出土土器（第41図、図版27）

1・2共に内面に条痕が認められる。2は口唇にも条痕が認められる。子母口式土器であろう。

064号炉穴出土土器（第41図、図版27）

2は無文土器である。1～3は子母口式土器であろう。

065号炉穴出土土器（第41図、図版27）

1は内外面ともに軽易な擦痕が認められる。子母口式土器である。

066号炉穴出土土器（第42図、図版27）

1・2は口唇部がフラットに調整され、器表面に擦痕が認められる。6は内外面ともに擦痕が認められる。7・10は内面にも条痕が認められる。1～10は子母口式土器である。

069号炉穴出土土器（第42図、図版27）

1・2・8は撚糸文土器である。3は内外面ともに擦痕が認められる。4は口縁左半で波状を呈する破片で、内外面ともに擦痕が認められる。破片左下には斜行する明確な沈線が認められる。口唇には刻みが認められる。9は内外面ともに擦痕が認められる。10は比較的堅緻な焼成で、内外面ともに軽易な擦痕が認められる。縦位方向に微隆起が貼付され、円形刺突列が押捺される。刺突列は横幅の広いS字状を呈する可能性が高い。子母口式土器が主体であるが、10は子母口式期の新しい部分から野島式期にかけてのものであろう。

071号炉穴出土土器（第42図、図版28）

1は撚糸文土器である。1の器表面には擦痕が、内面には条痕が認められる。5の内面は条痕である。6の器表面には擦痕が認められる。7の器表面には軽易な擦痕が認められる。口縁部には2本の微隆起が横走する。口縁に近いほうの微隆起上には、小さな円形刺突が施されるようである。2～7は子母口式土器であろう。

072号炉穴出土土器（第43図、図版28）

1は撚糸文土器である。

074号炉穴出土土器（第43図）

1は胎土・焼成から判断して、子母口式土器と思われる。

076号炉穴出土土器（第43図、図版28）

1の器表面には、わずかに条痕が認められる。子母口式土器と思われる。

081号炉穴出土土器（第43図、図版28）

1は薄手の焼成で、口縁端部には縄文もしくは絡条体圧痕が認められる。子母口式土器である。

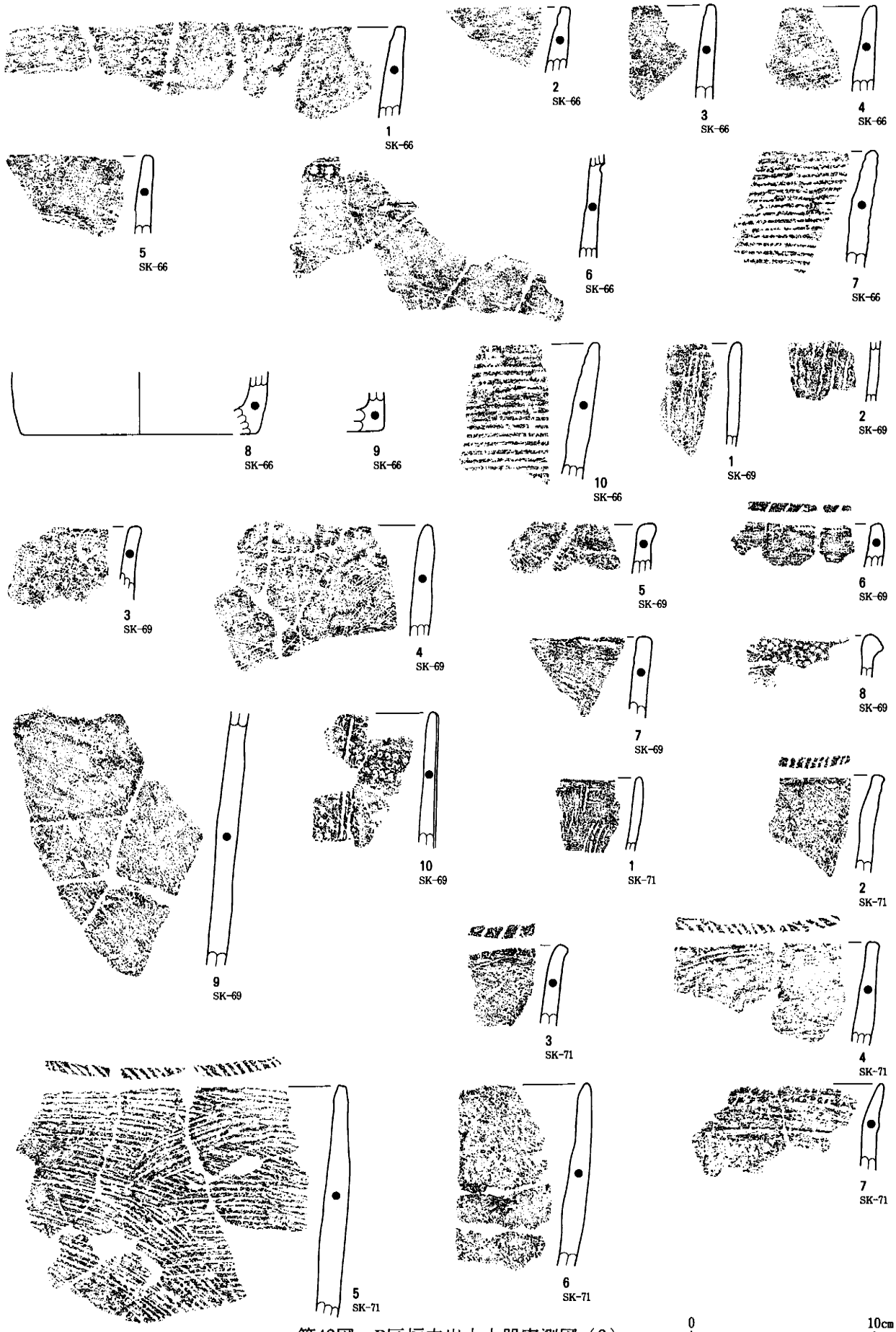
085号炉穴出土土器（第43図、図版28）

1・6は内外面ともに擦痕が認められる。5の器表面の口縁端部には2本の沈線風の意匠が認められるが、これは条痕調整によるものである可能性が高い。9の最沈線風の格子目文は条痕調整であろう。10は絡条体条痕の可能性がある。

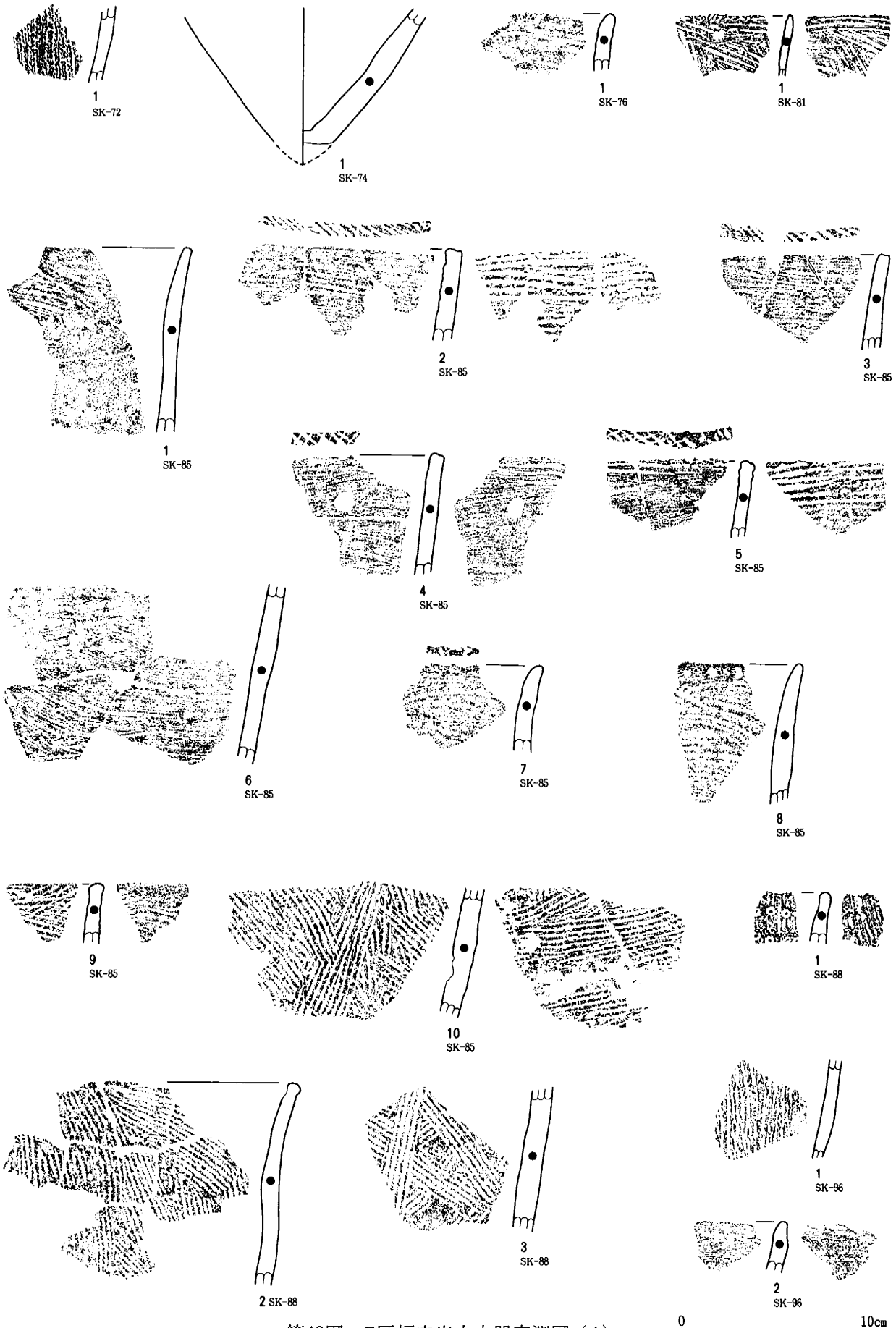
1～10は子母口式土器である。

088号炉穴出土土器（第43図、図版28）

1は円形押捺が施される。069号炉穴出土土器10同様に、刺突列が横幅の広いS字状を呈する可能性が高い。2・3は内外面ともに条痕が認められる。子母口式土器であろう。



第42図　B区炉穴出土土器実測図（3）



第43図　B区炉穴出土土器実測図（4）

096号炉穴出土土器（第43図、図版28）

1は撚糸文土器である。2は内外面ともに擦痕が認められる子母口式土器である。

097号炉穴出土土器（第44図、図版28）

1の器表面には擦痕が認められる。3・4の器表面には擦痕が、内面には条痕が認められる。1～4は子母口式土器である。

b　土坑出土土器

018号土坑出土土器（第45図、図版28）

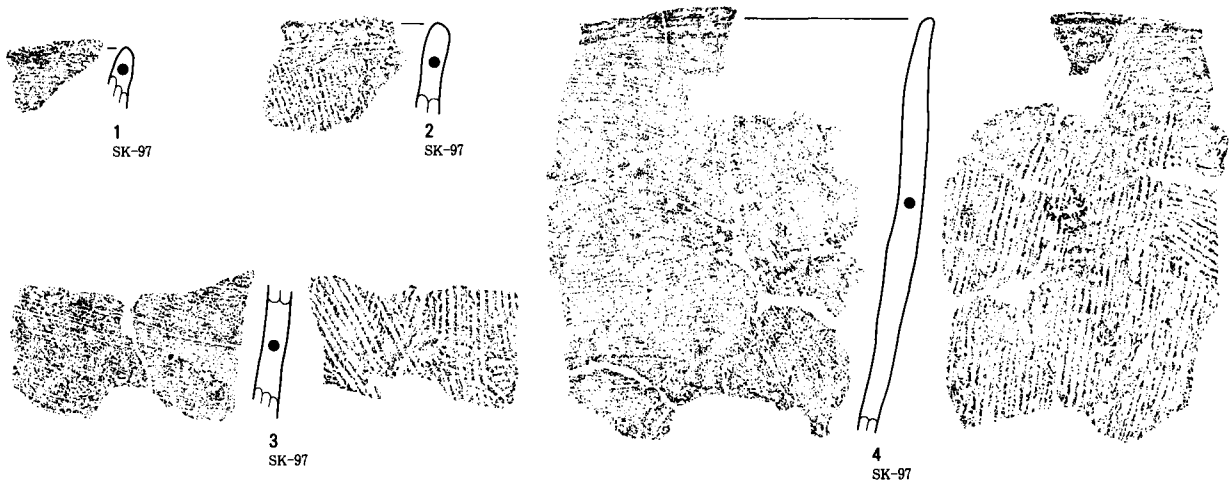
1は撚糸文土器である。

025号土坑出土土器（第45図、図版28）

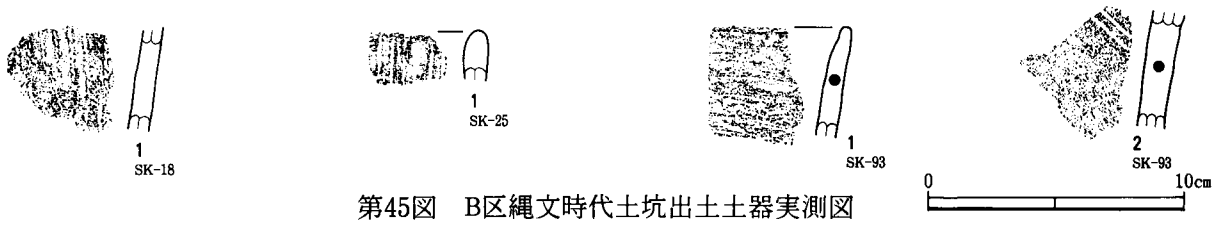
1は撚糸文土器である。

093号土坑出土土器（第45図、図版28）

1は内外面ともに擦痕が認められる。幅狭の口唇に刻みが施される。2は擦痕調整で、破片右上には2本の沈線が認められる。共に子母口式土器であろう。



第44図　B区炉穴出土土器実測図（5）



第45図　B区縄文時代土坑出土土器実測図

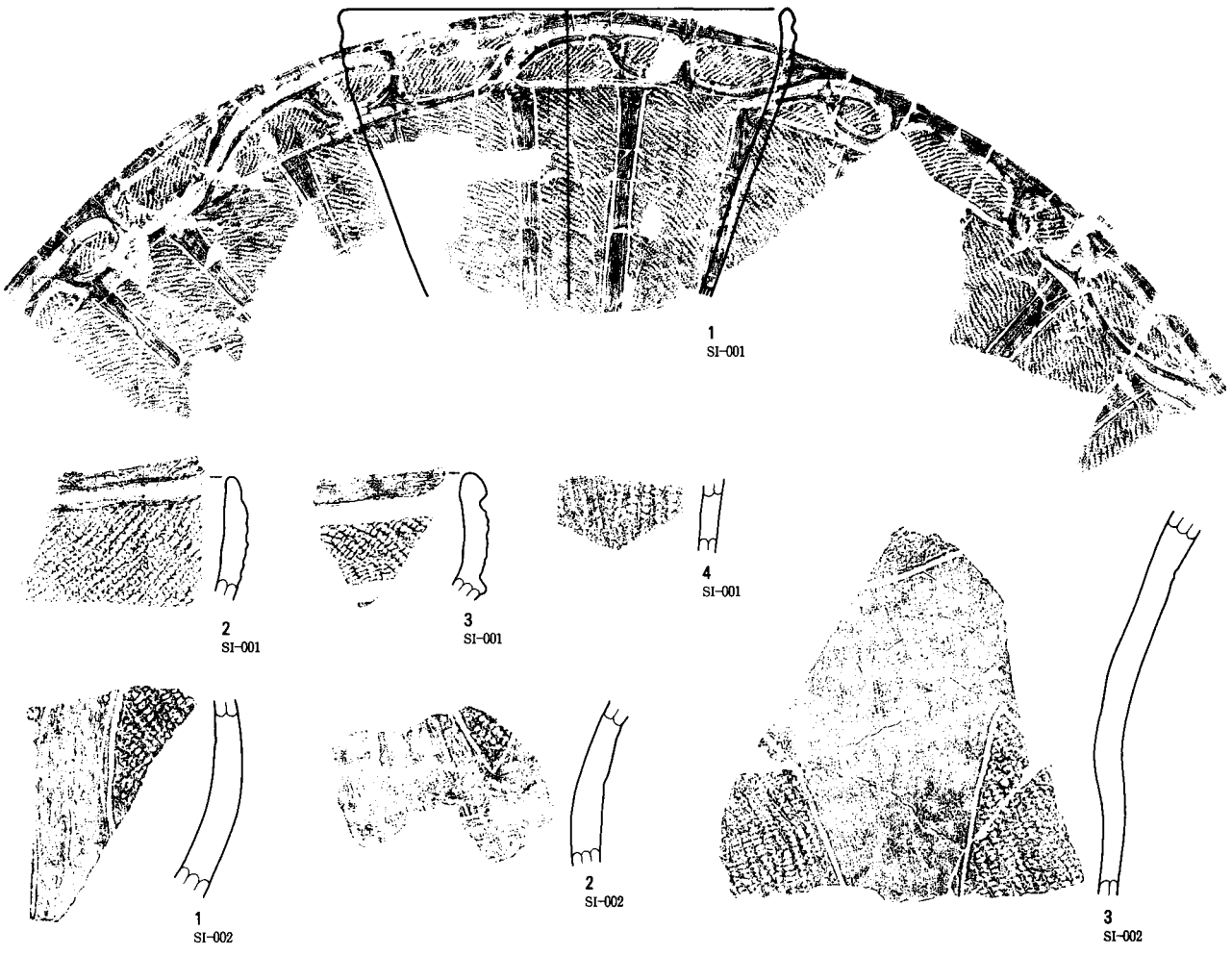
c　住居跡出土土器

001号住居跡出土土器（第46図、図版29）

1は埋甕炉に用いられたキャリパー形土器で、口縁部と胴部を区別する隆帯は認められない。渦巻文を起源とする円形区画文下の隆帯や、楕円区画文下の肥厚によって区別される。2・3も1に近い時期の所産である。4は撚糸文土器である。1は加曽利EⅡ式期もしくは加曽利EⅢ式期であろうと思われる。2・3は加曽利EⅢ式土器である。

002号住居跡出土土器（第46図、図版29）

1～3は同一個体で、加曽利EⅢ式期もしくは加曽利EⅣ式期であろうと思われる。



第46図　B区縄文時代住居跡出土土器実測図

0　10cm

d　遺構外出土土器

ここでは、遺構外から出土した縄文土器を扱う。遺構外出土については、型式ごとの分類に準拠するのではなく、B区内での各時期別の土器片の分布状況が概観できるように、大グリッドごとに掲載した。なお、遺物番号は大グリッドごとに更新し、出土した小グリッドが判明しているものについては、その小グリッド名を遺物番号の脇に記している。

H７区出土土器（第47図、図版29）

１～３は沈線が施される土器で、三戸式土器である。

H８区出土土器（第47図、図版29）

１は太めの短沈線が横位に施される土器で、田戸下層式土器である。

Ｉ８区出土土器（第47図、図版29）

１・３・９は撚糸文土器である。２は深い刺突が施され、口唇にも刺突が施される。子母口式土器である。４～８は後期中葉に属する破片である。

Ｉ９区出土土器（第47図、図版29）

１の器表面には擦痕が認められる。３・４の内外面には条痕が認められる。５は縦位の隆帯の両脇に沈線が充填される。内面には条痕が認められる。１～４は子母口式土器であろうか。５は野島式土器である。

Ｉ10区出土土器（第47図、図版29）

１・２は撚糸文土器である。５は縦位の微隆起が貼付される。６の口縁端部から口唇部にかけて刻みが施される。７・８は平行沈線が施される。８は波状口縁の部分の破片である。９～13は、条痕調整のようでもあるが、沈線ではないかと思われる。内面には軽易な擦痕が認められる。

５～17は、子母口式土器ではなく、野島式土器の古い部分が主体なのではなかろうか。

Ｉ11区出土土器（第47･48図、図版29･30）

１は撚糸文土器である。２は田戸下層式土器である。３～６は太い沈線（凹線）や半裁竹管による深い刺突文が施される。田戸下層式土器であろうか。８・９は条痕調整の上に斜方向の沈線が施される。10の口縁の左端は、波状部へ連なるようである。縦位の微隆起が貼付され、破片下端では横位の沈線がこの微隆起を切る。破片上半でも斜方向の沈線が微隆起を切る。基本的には横位・斜位の区画文間に、縦位の沈線が充填されるという構成である。14は中期後半のキャリパー形土器の胴部破片であろう。

７～13は野島式土器の古い部分を中心とする破片であろう。

Ｉ12区出土土器（第48図、図版30）

１・２は内外面ともに擦痕が認められる。子母口式土器であろう。

Ｊ４区出土土器（第48図、図版30）

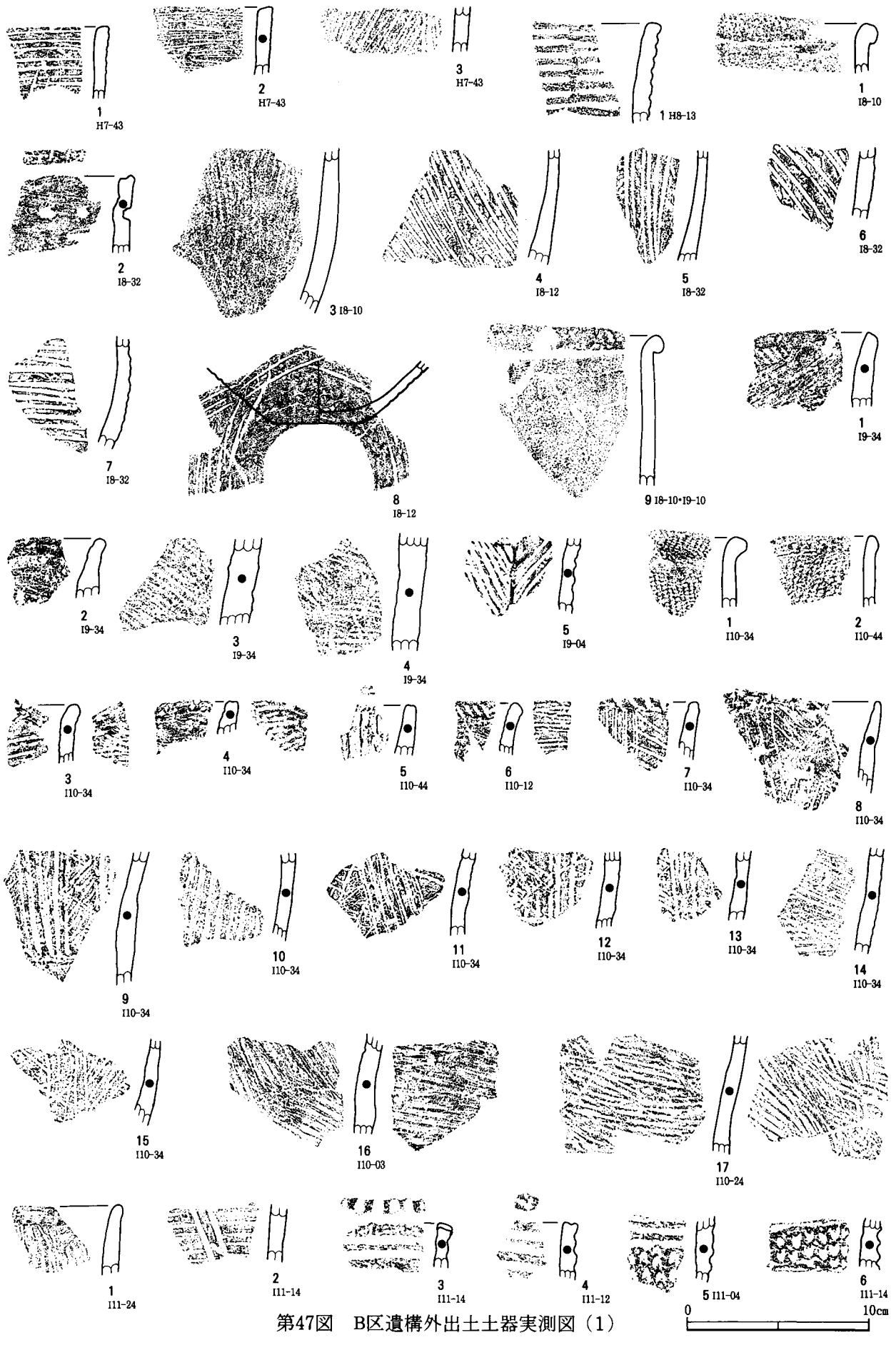
１・２は後期中葉に属する破片である。

Ｊ９区出土土器（第48図、図版30）

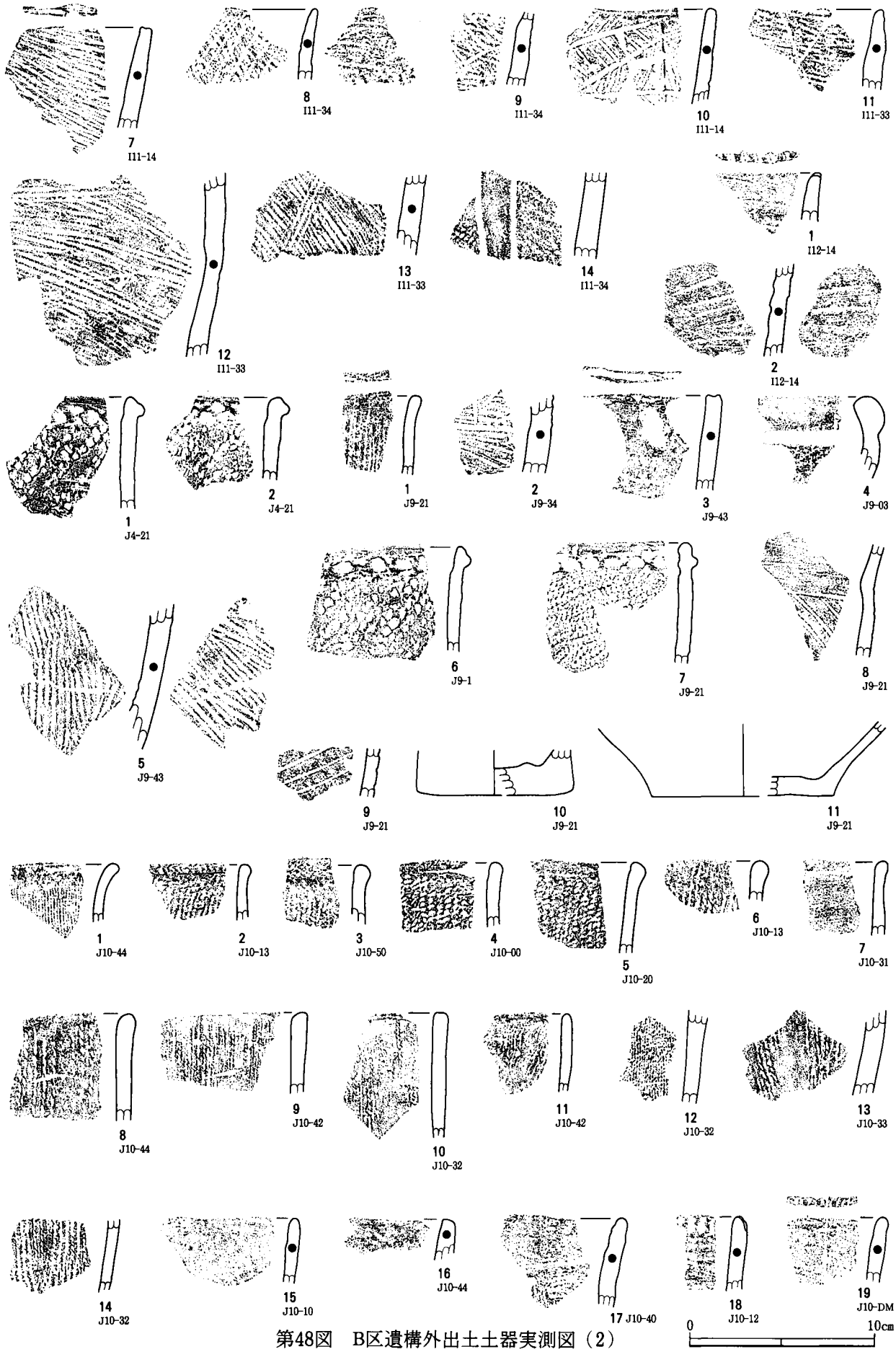
１は撚糸文土器である。２は浅い沈線と刺突が施される。野島式土器であろうか。３は内外面ともに擦痕が施され、口唇に沈線が施される。子母口式土器であろう。４は中期後半の鉢形土器の破片であろう。６～11は後期中葉に属する破片であろう。

Ｊ10区出土土器（第48･49図、図版30･31）

１～14は撚糸文土器で、井草式土器・稲荷台式土器が主体である。25の口縁は平縁である。31の口縁端



第47図　B区遺構外出土土器実測図（1）



第48図　B区遺構外出土土器実測図（2）

部は剥落している。32は口縁下に横位の微隆起が巡り、微隆起以下の部分には条痕が認められる。33は縦横に微隆起が貼付され、沈線が充填される。34の口唇には条痕が認められる。39～41は脆弱な焼成で、貝殻腹縁文が縦位に施される。42・43は胎土に繊維を多量に含み、隆帯が横位に施される。44・45は中期後半に属し、46～52は後期中葉以降の破片である。

15～32はおおむね子母口式土器で、33は野島式土器である。34～36も野島式土器であろうか。39～42は早期でも芽山上層式土器よりも新しい時期の所産の可能性が高い。

Ｊ11区出土土器（第49～52図、図版31～33）

1～58は撚糸文土器であり、稲荷台式土器が主体である。60の器表面には擦痕が認められる。67～69は、条痕ではなく沈線が施されているようである。70の器表面は灰色味の強い黄灰色を呈し、異質な印象が強い。薄手であるが軟質な焼成である。幅広の微隆帯上に刺突が施されるが、この微隆帯は貼付されたものではなく、刺突施文域外に凹線が施された結果、微隆帯上を呈しているようでもある。刺突や焼成は常世式土器を髣髴とさせる。74の破片上半は条痕の上に沈線が施される。78～87は中期後半に属する破片である。88～91は後期中葉に属するものである。

59～66などは子母口式土器であろうと思われる。67～69・74は野島式土器で、75は早期でも芽山上層式土器よりも新しい時期の所産の可能性が高い。

Ｊ12区出土土器（第52・53図、図版33・34）

1から42は撚糸文土器で、稲荷台式土器が主体である。43は田戸下層式土器である。47は口縁端部というよりも口縁上端に刻みが施される。49は破片上半に横位の隆帯が巡り、隆帯以上の部分には斜行する沈線が、隆帯以下の部分には横走する細沈線が施される。53の口縁上部の横位の沈線風のものは条痕によるものである。56～62・65・66は中期後半に属し、63・64は後期中葉に属する。

44～48・55は子母口式土器で、49～54は野島式土器であろう。

Ｋ８区出土土器（第54図、図版34）

1は撚糸文土器で、2は最沈線が施される野島式土器であろう。

Ｋ９区出土土器（第54図、図版34）

1は撚糸文土器で、2・3は後期中葉以降の破片であろう。3は底部と胴部の境界部位に刻みが施される。

Ｋ10区出土土器（第54図、図版34）

1～7は撚糸文土器で、稲荷台式土器が主体である。8・10は前期に属し、9は中期後半に属する。

Ｋ11区出土土器（第54図、図版34）

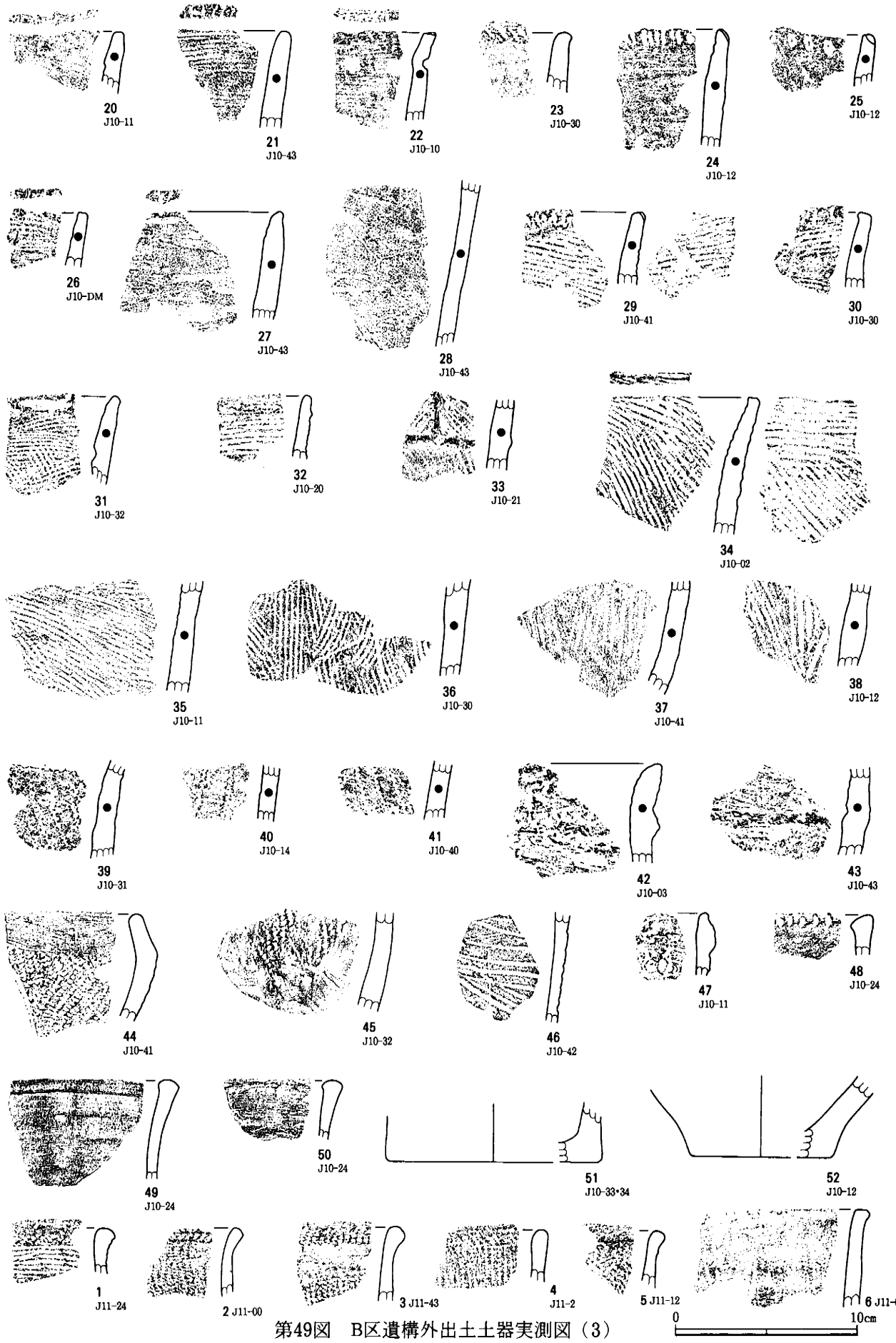
1・3は撚糸文土器である。2・4は子母口式土器である。5・6は中期後半に属し、7は後期中葉に属する。

Ｋ12区出土土器（第54図、図版34・35）

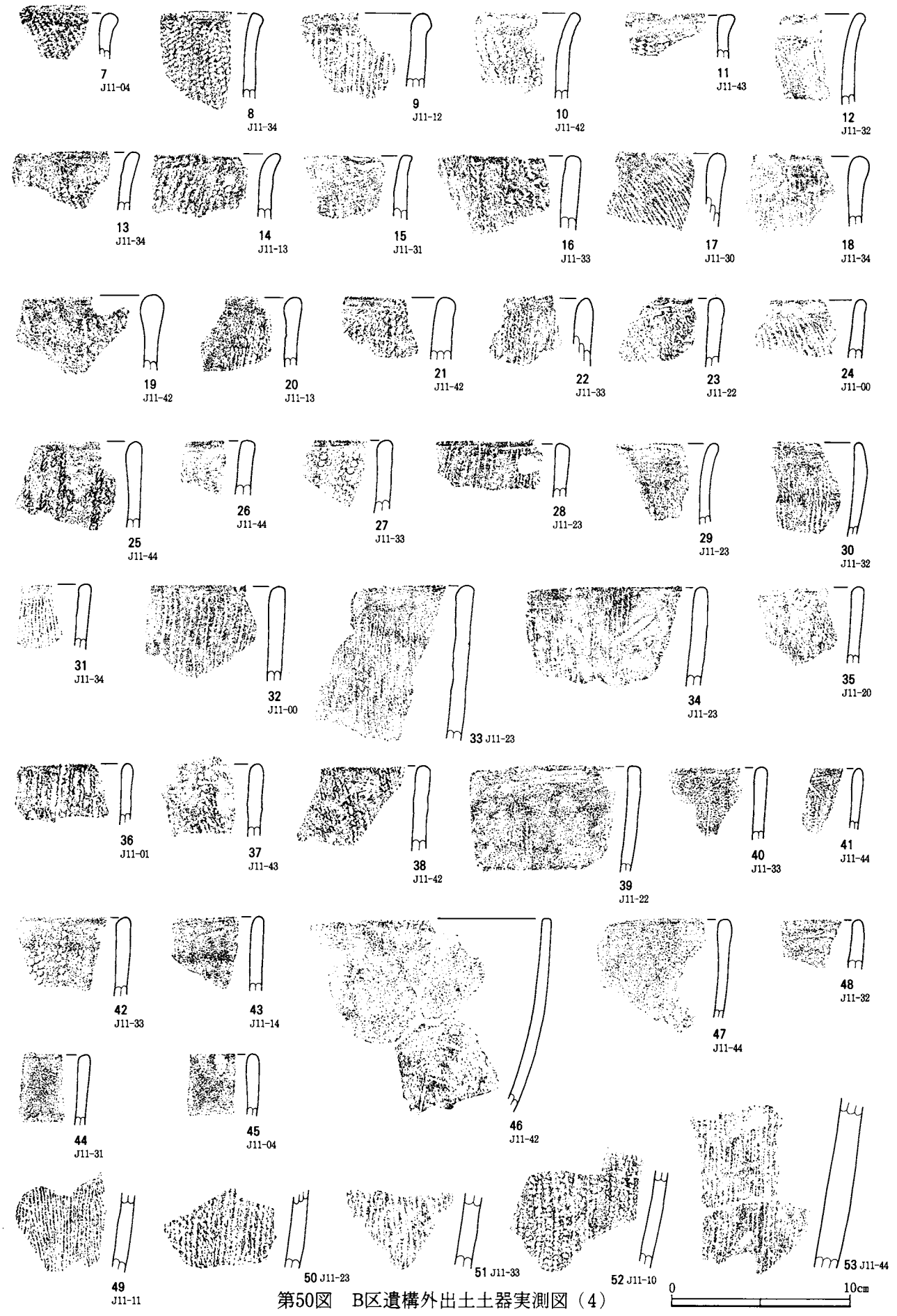
1～12は撚糸文土器で、稲荷台式土器が主体である。15は胎土・焼成から子母口式土器と思われる。14は後期中葉に属する。13は凹線が横走するもので、晩期に属するものであろうか。

Ｋ13区出土土器（第54図、図版35）

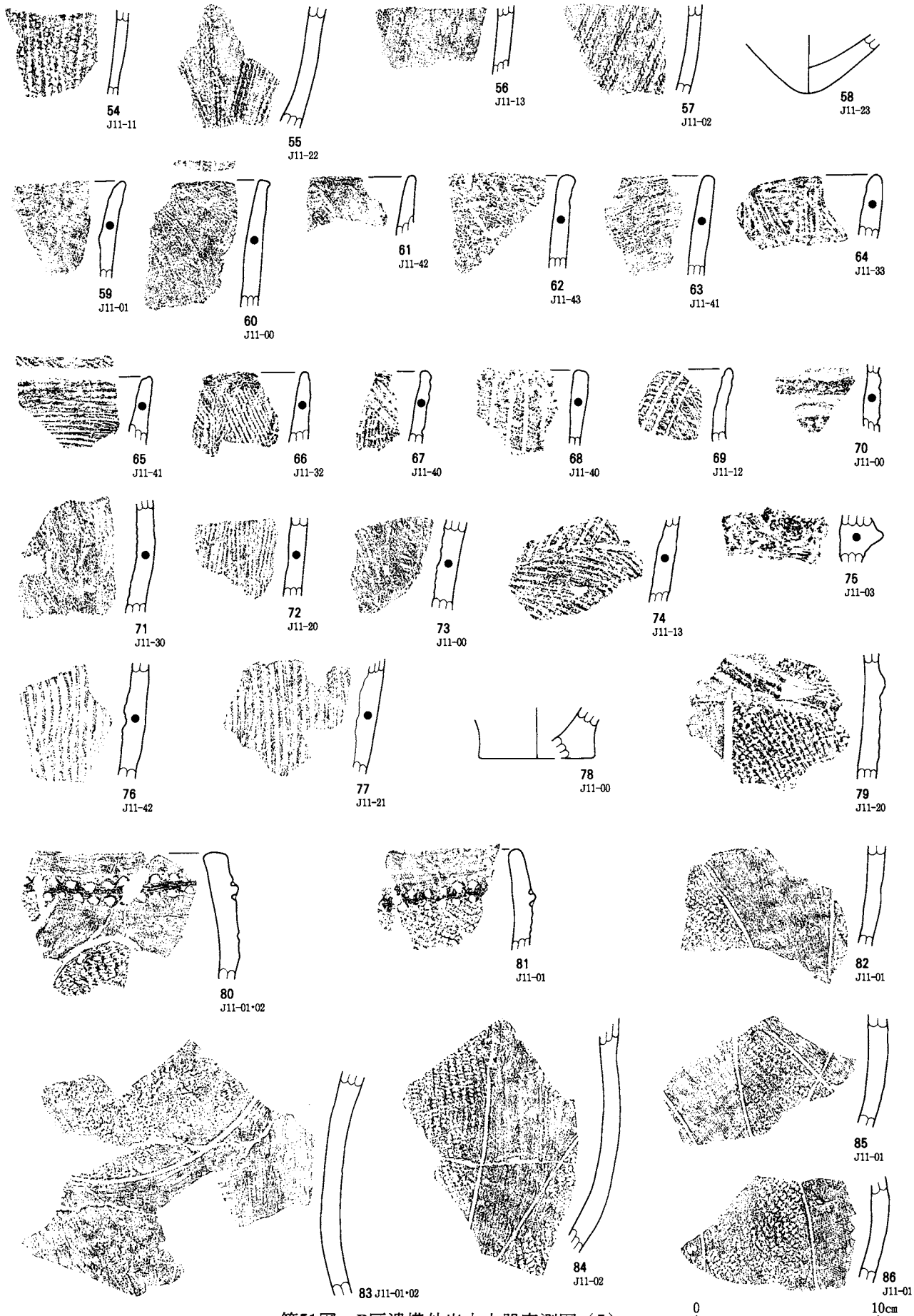
1は後期後半に属する。



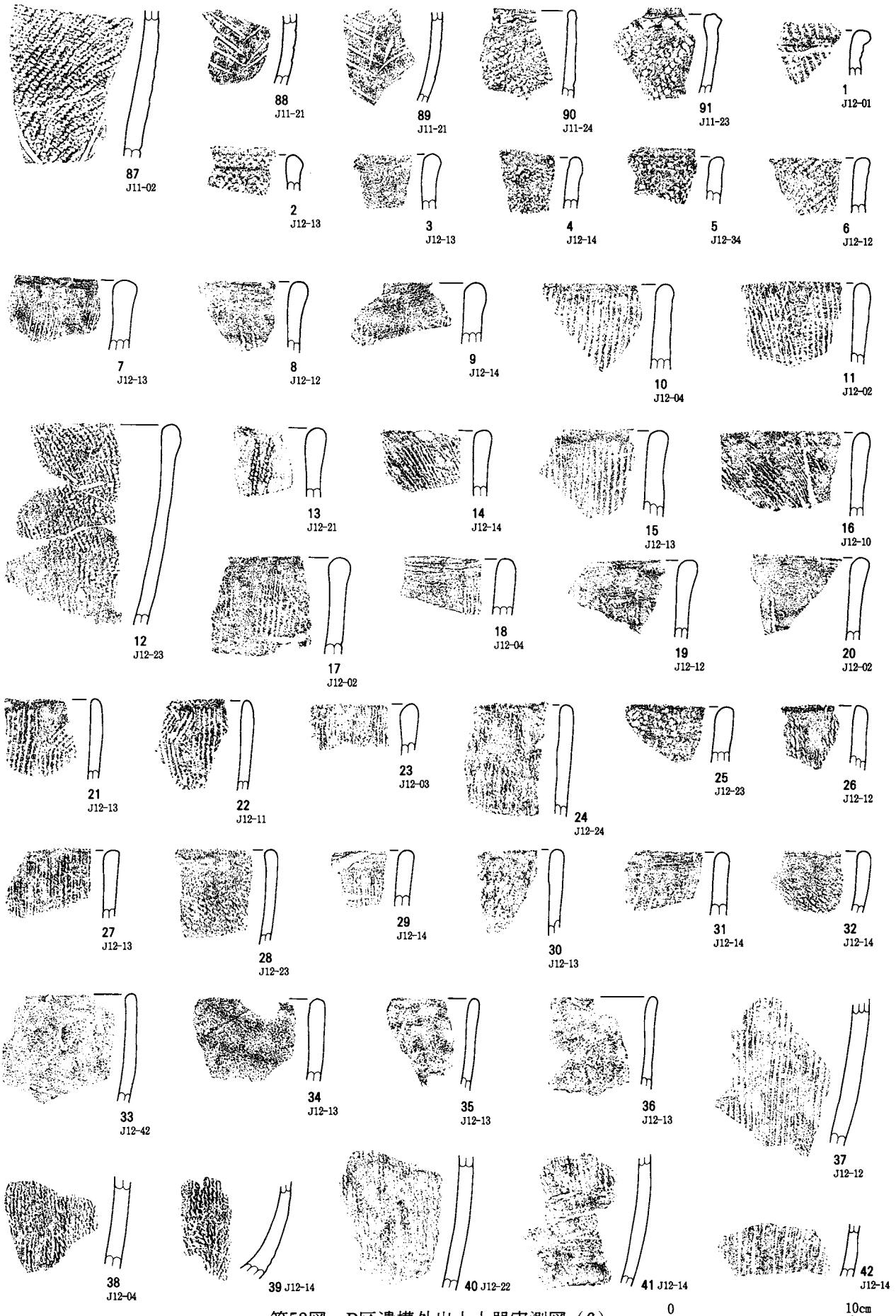
第49図　B区遺構外出土土器実測図（3）



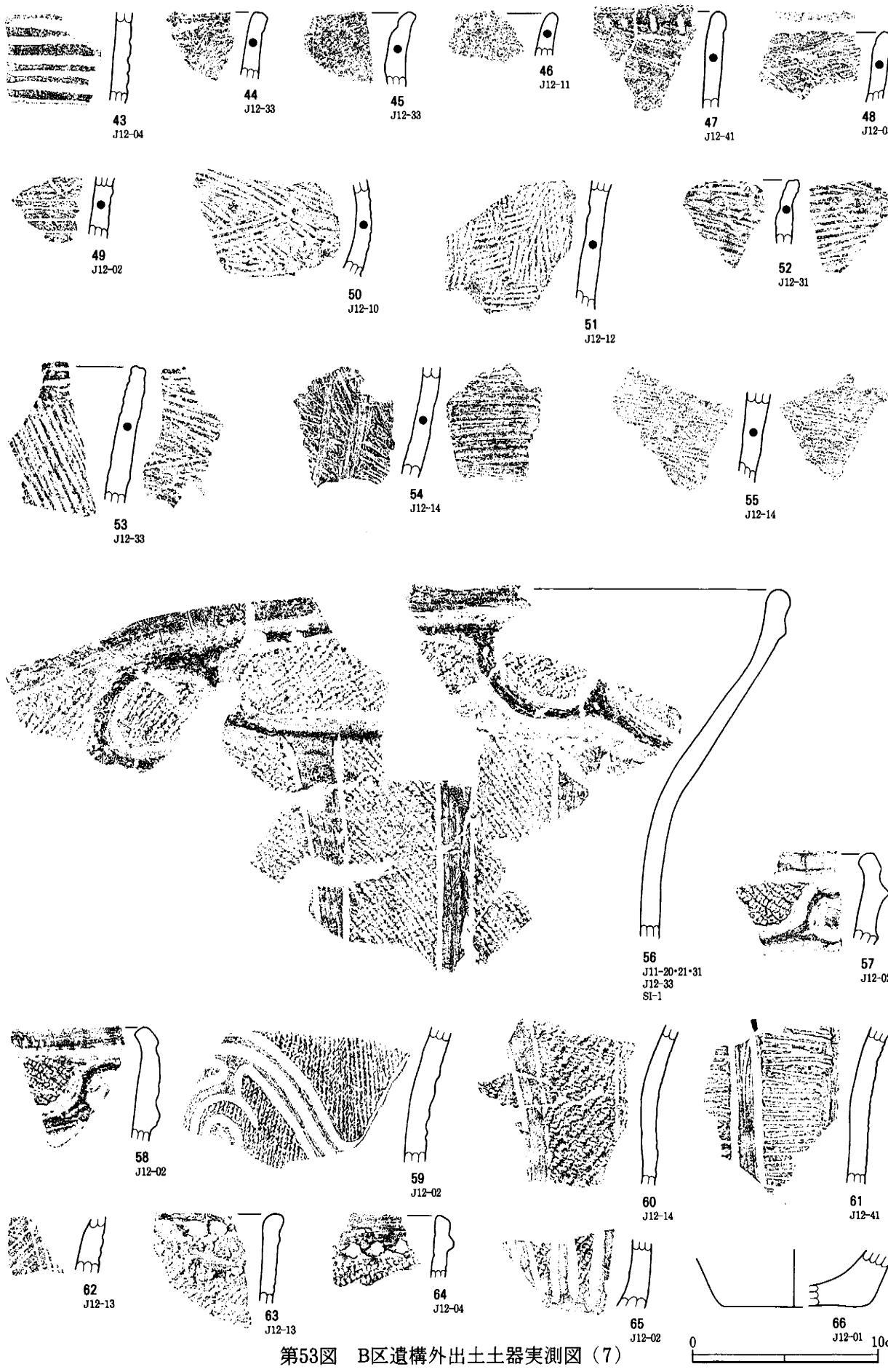
第50図　B区遺構外出土土器実測図（4）



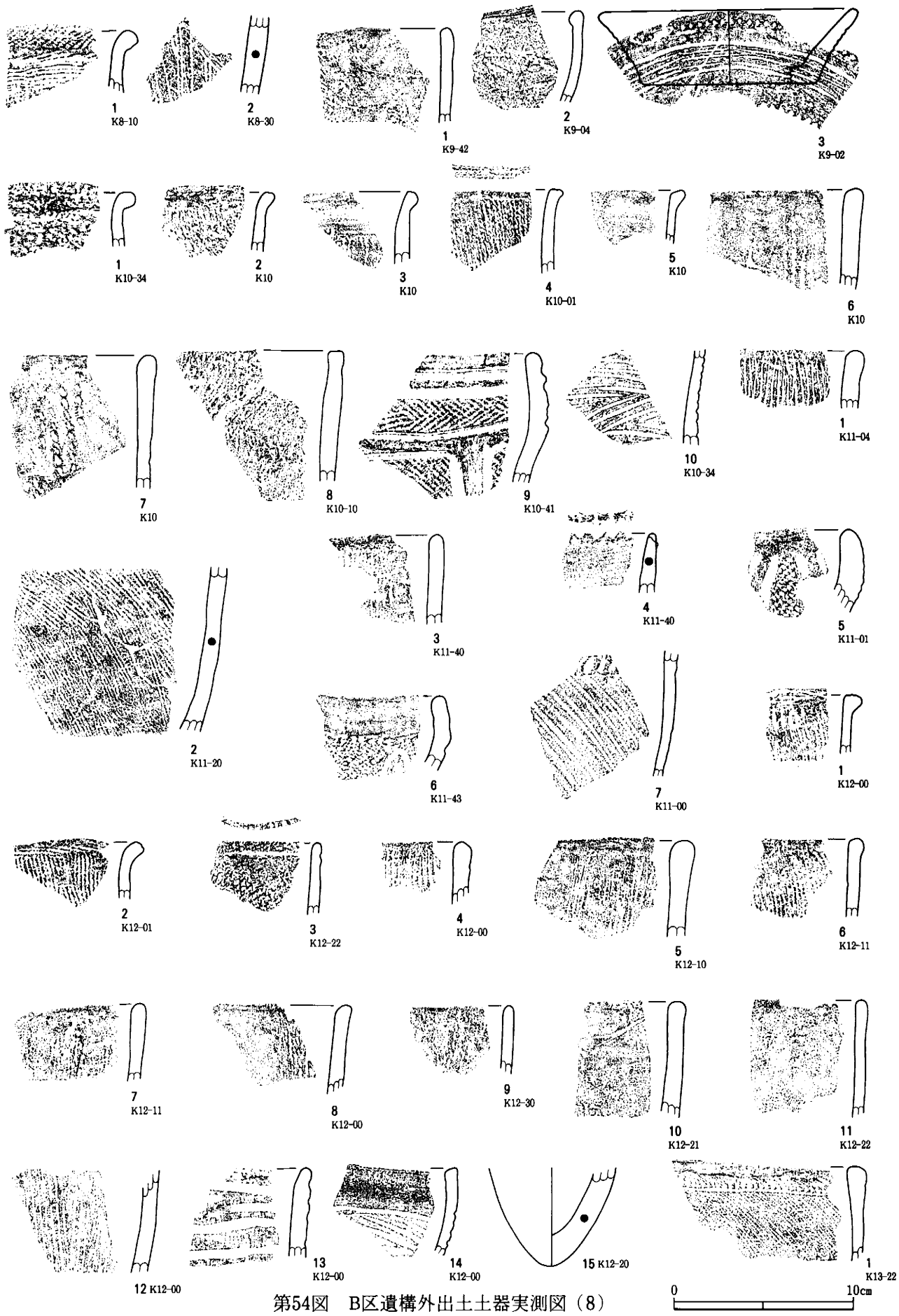
第51図　B区遺構外出土土器実測図（5）



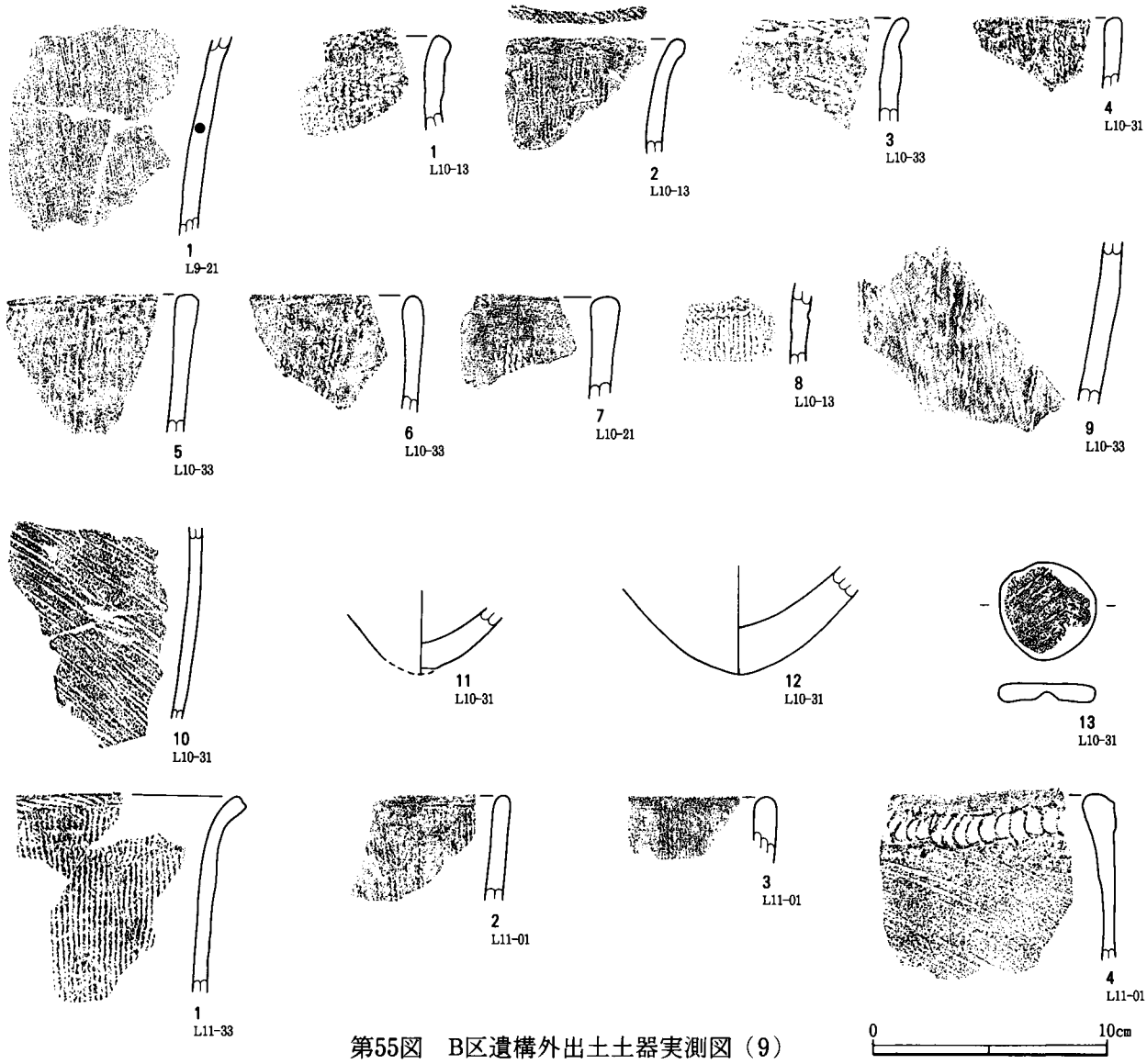
第52図　B区遺構外出土土器実測図（6）



第53図　B区遺構外出土土器実測図（7）



第54図　B区遺構外出土土器実測図（8）



第55図　B区遺構外出土土器実測図（9）

L 9区出土土器（第55図、図版35）

1は撚糸文土器である。

L10区出土土器（第55図、図版35）

1～9・11・12は撚糸文土器で、稲荷台式土器が主体である。8は口縁下の破片で、横位の絡条体圧痕が施される。13は後期後半以降の粗製土器であろう。13は稲荷台式土器の土器片を再利用した円盤で、内面側に穿孔が認められる。

L11区出土土器（第55図、図版35）

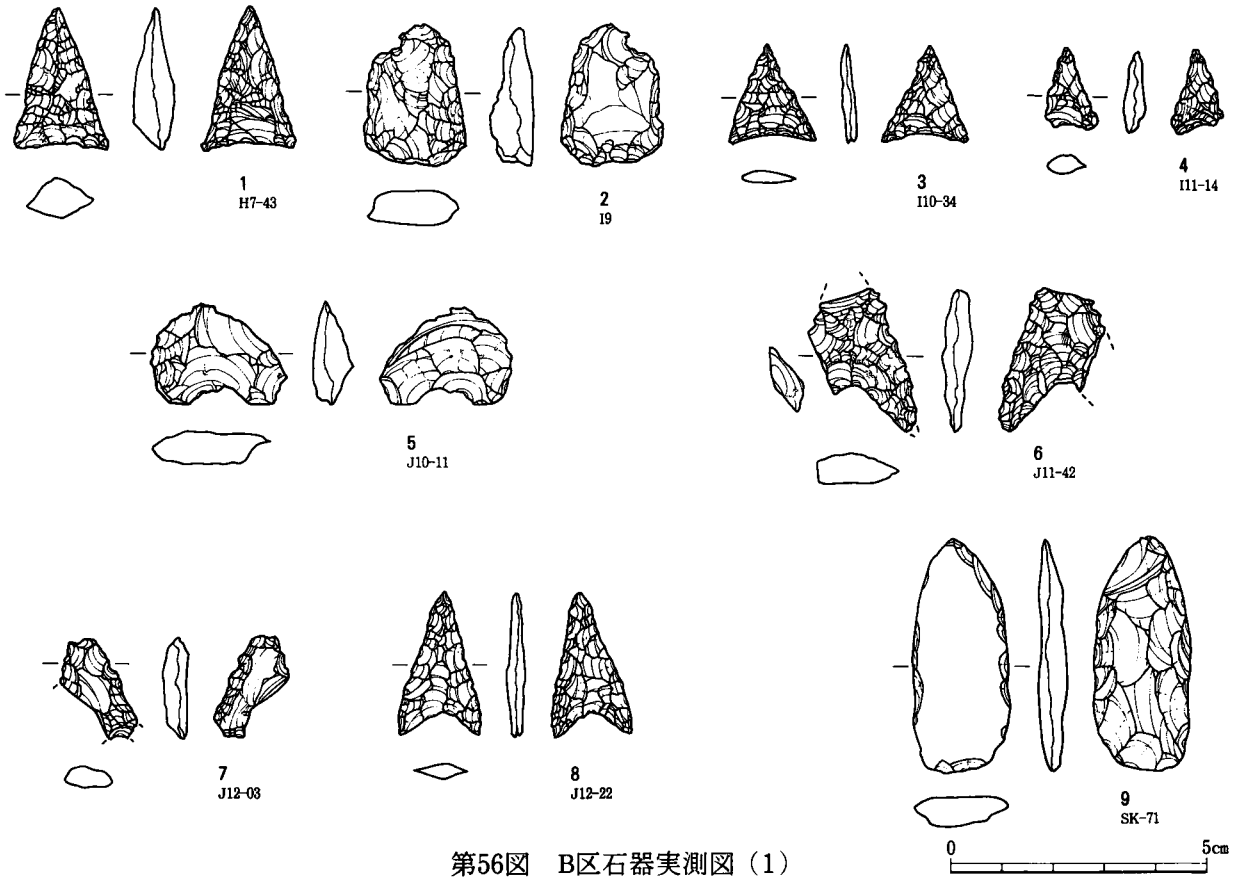
1～3は撚糸文土器で、4は後期後半以降の破片である。

（２）石器（第56図、図版38）

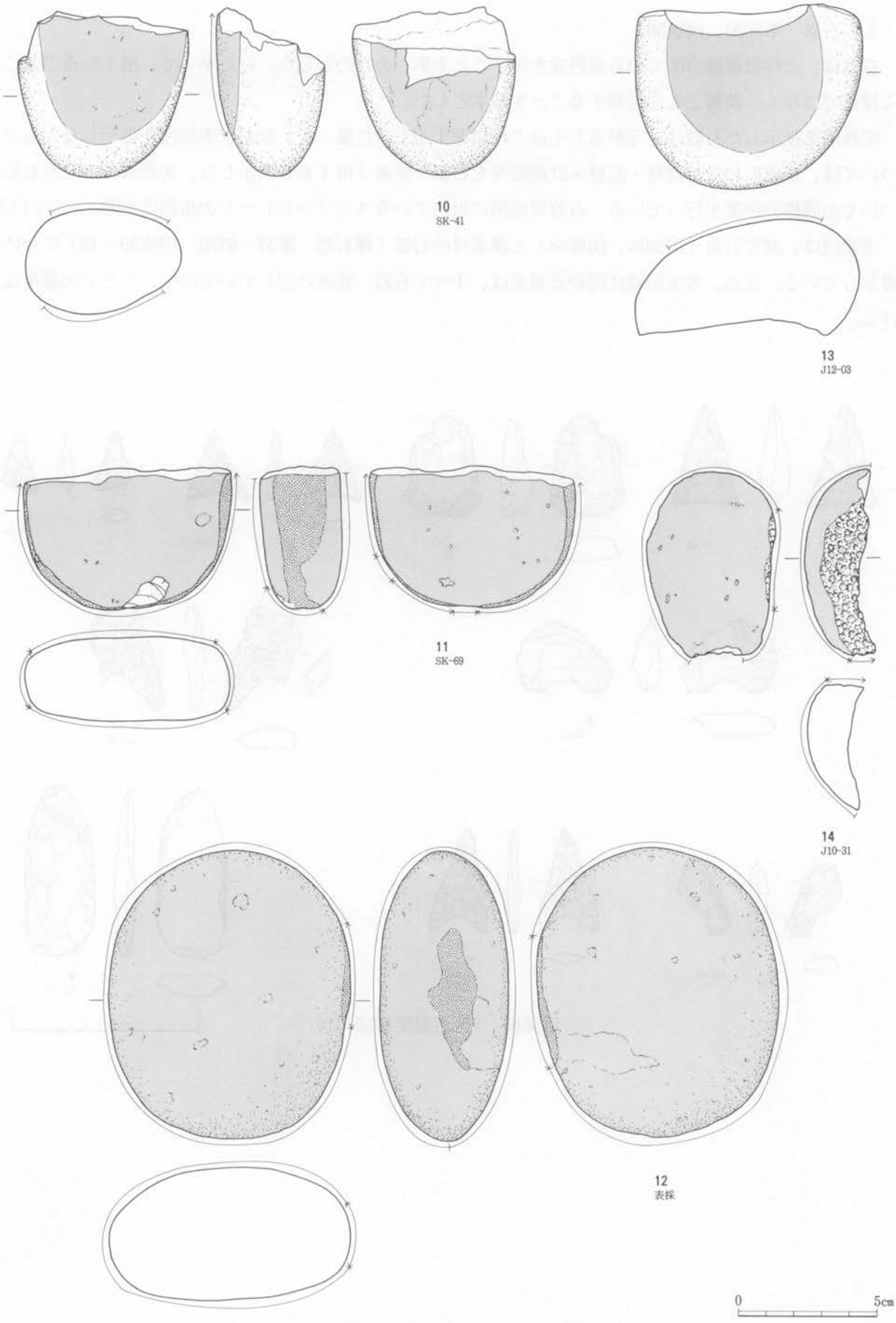
石器は、大作頭遺跡B区での石器組成を示すことを第一の目的とした。したがって、出土地点ごとによる提示ではなく、器種ごとに掲載することを基本とした。

実測図を提示した石器は、完形もしくはこれに準ずるものに限った。なお、実測図を提示しないものについては、全点にわたり器種・石材・計測値等を石器一覧表（第４表）に示した。実測図に示した石器についても同様の作業を行っている。石器実測図に用いているスクリーントーンの用例は凡例に示している。

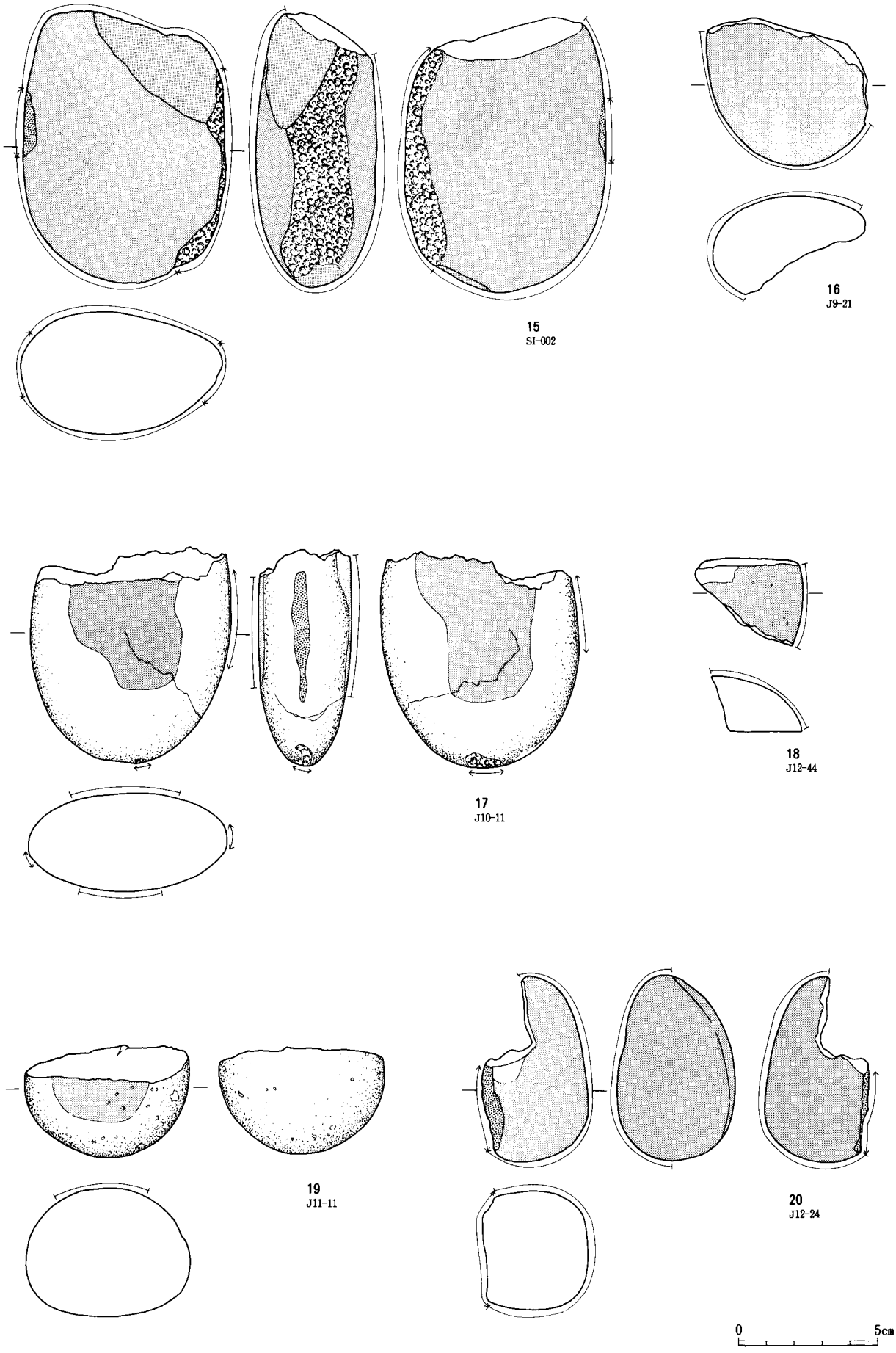
実測図は、剥片石器（第56図、図版38）と礫素材の石器（礫石器　第57～67図　図版39～42）に分けて提示している。なお、事実記載に関わる要素は、すべて石器一覧表に記しているので、ここでの重複は避ける。



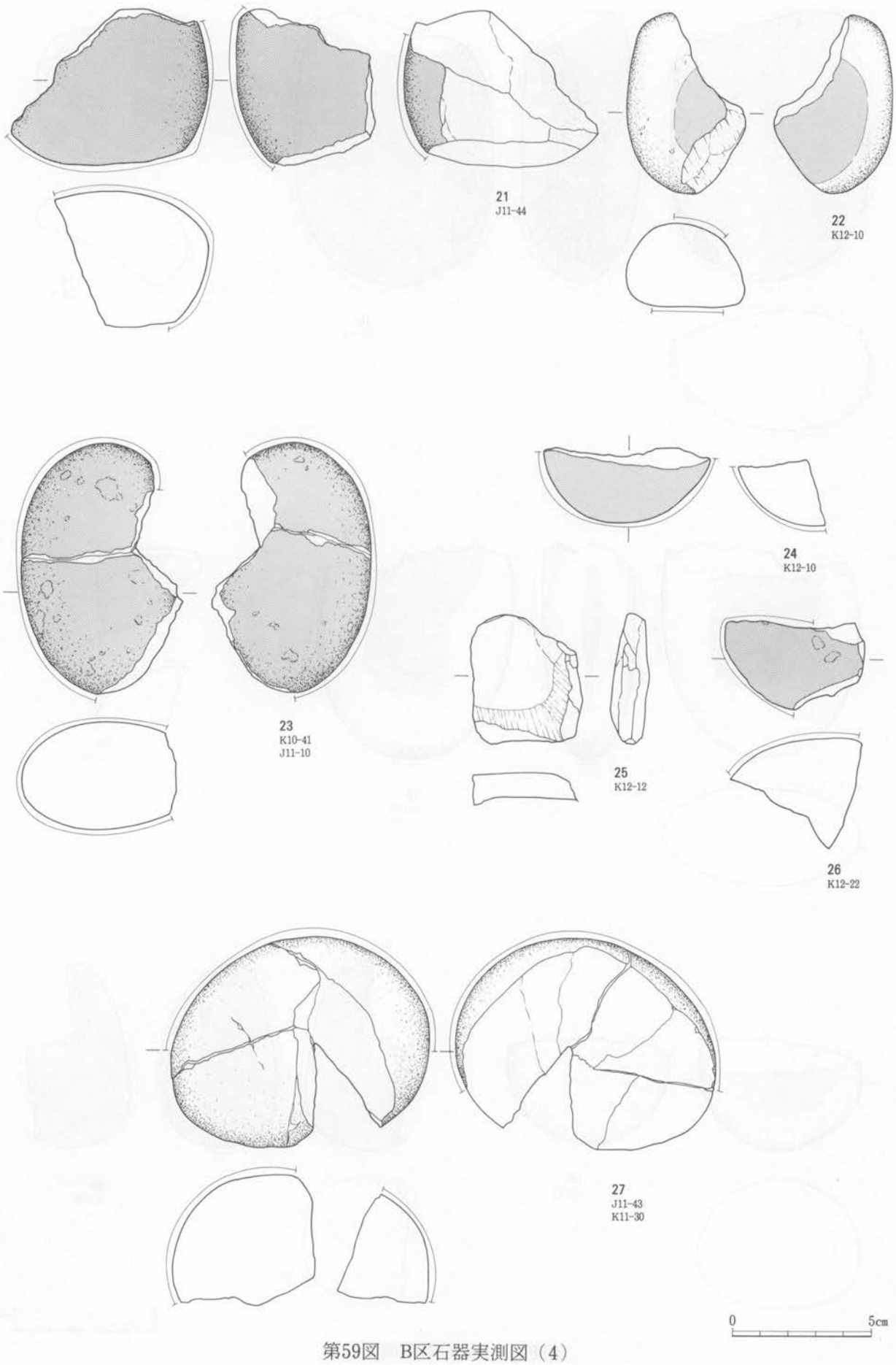
第56図　B区石器実測図（1）



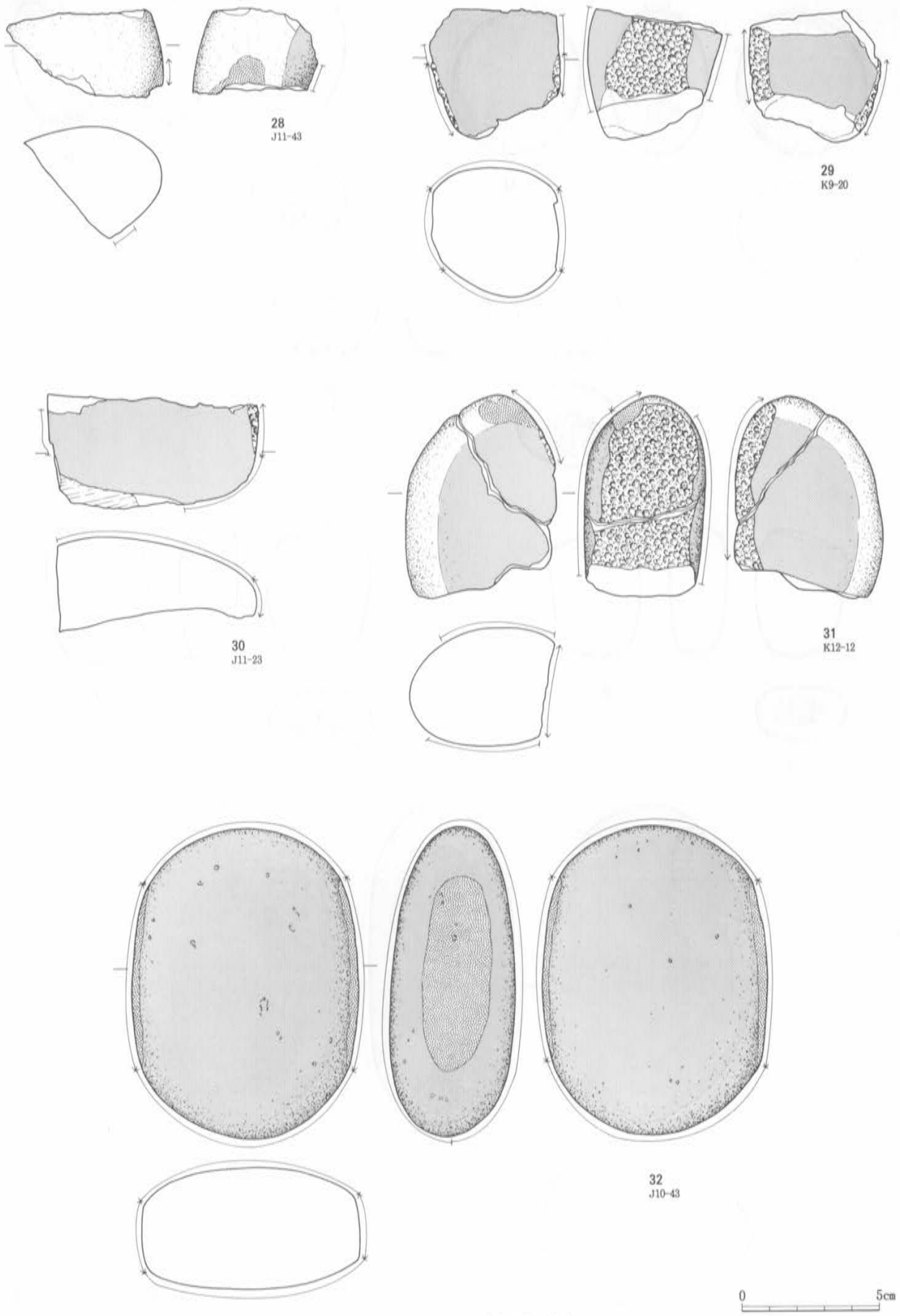
第57図　B区石器実測図（2）



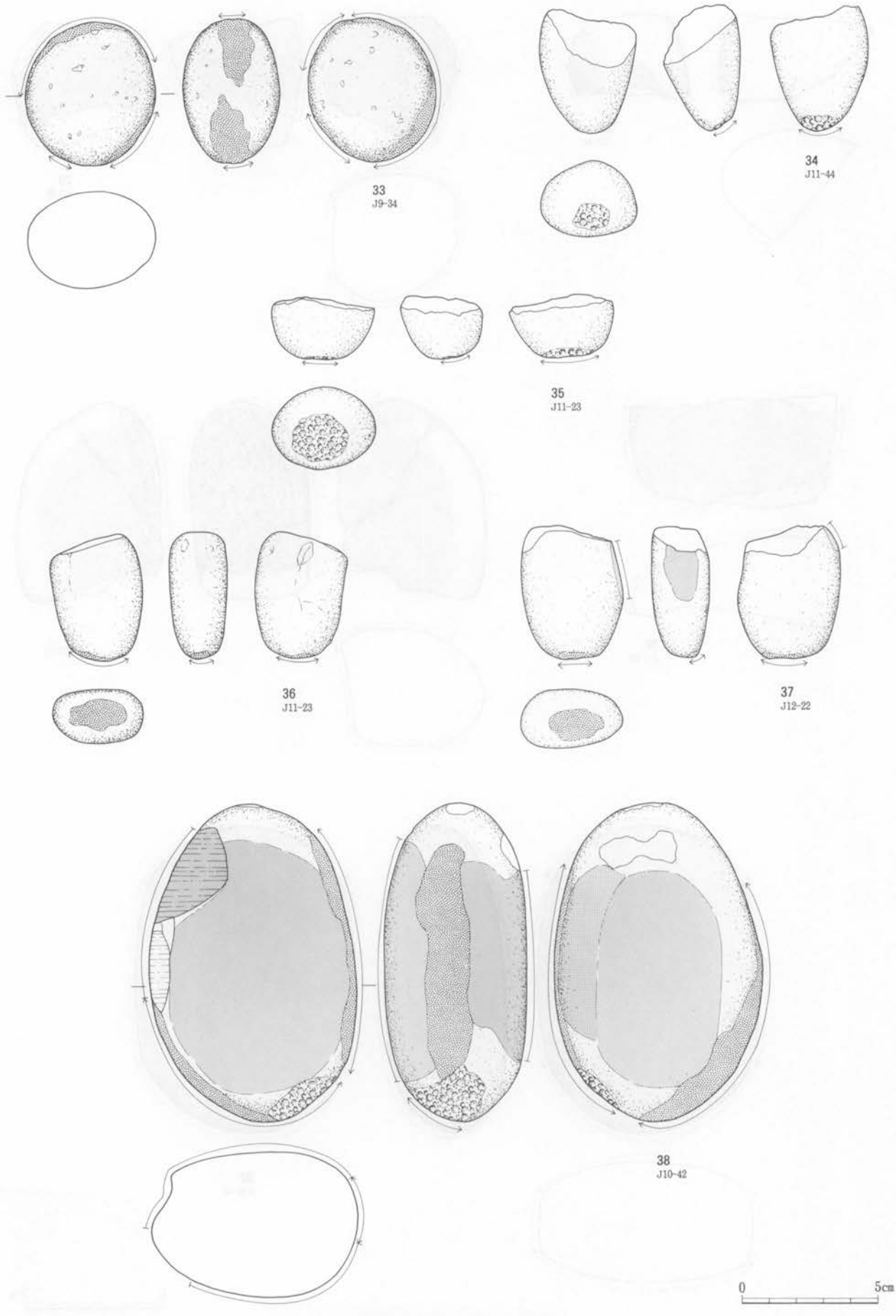
第58図　B区石器実測図（3）



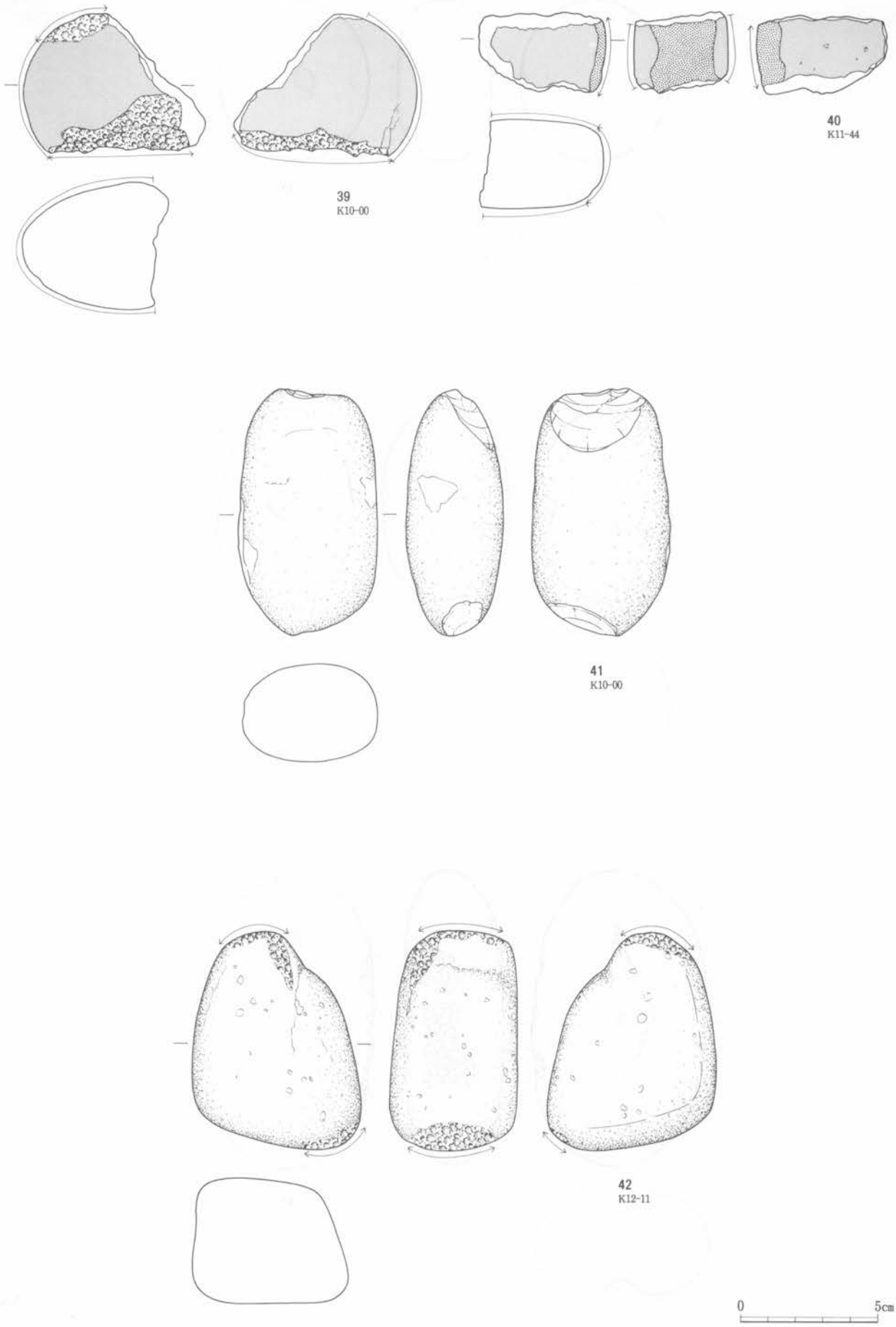
第59図　B区石器実測図（4）



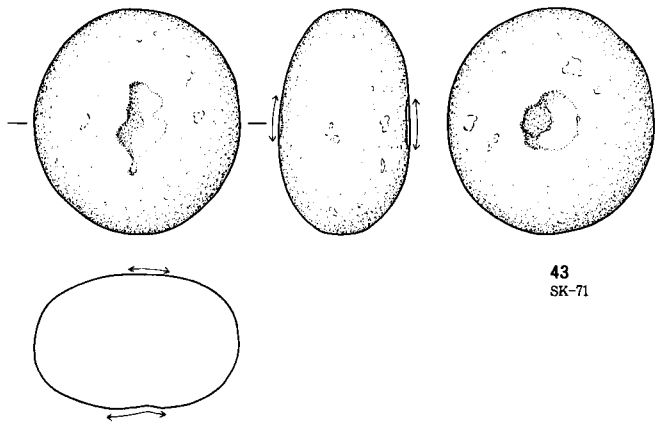
第60図　B区石器実測図（5）



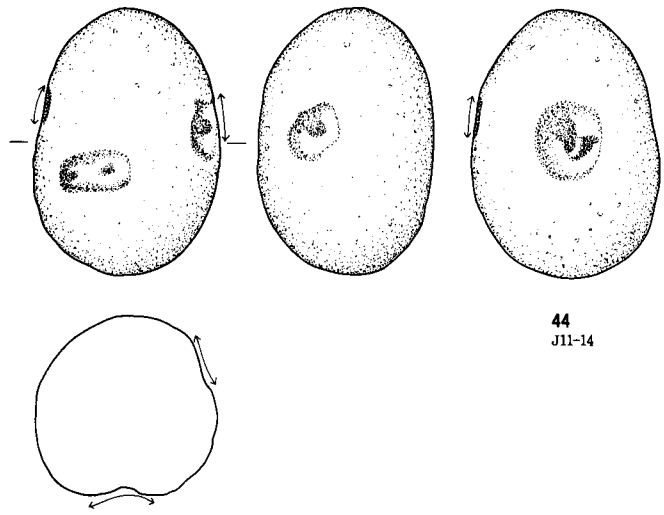
第61図　B区石器実測図（6）



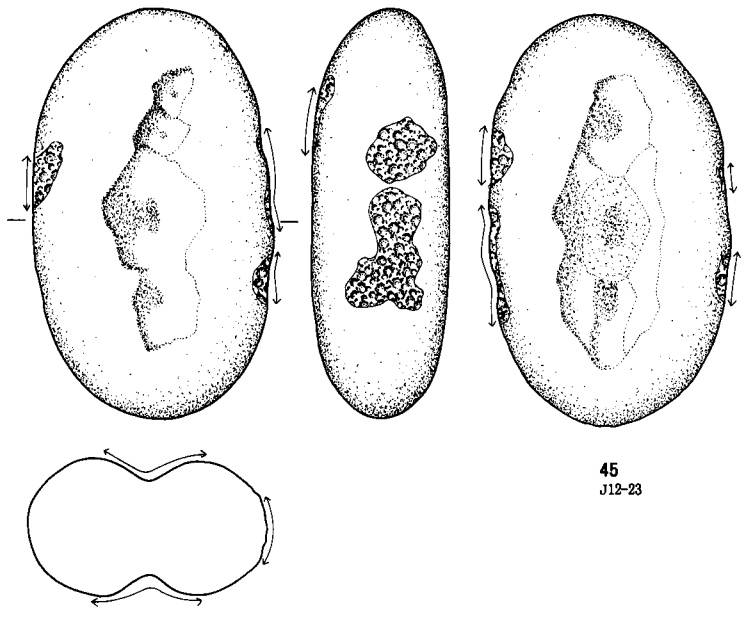
第62図　B区石器実測図（7）



43
SK-71



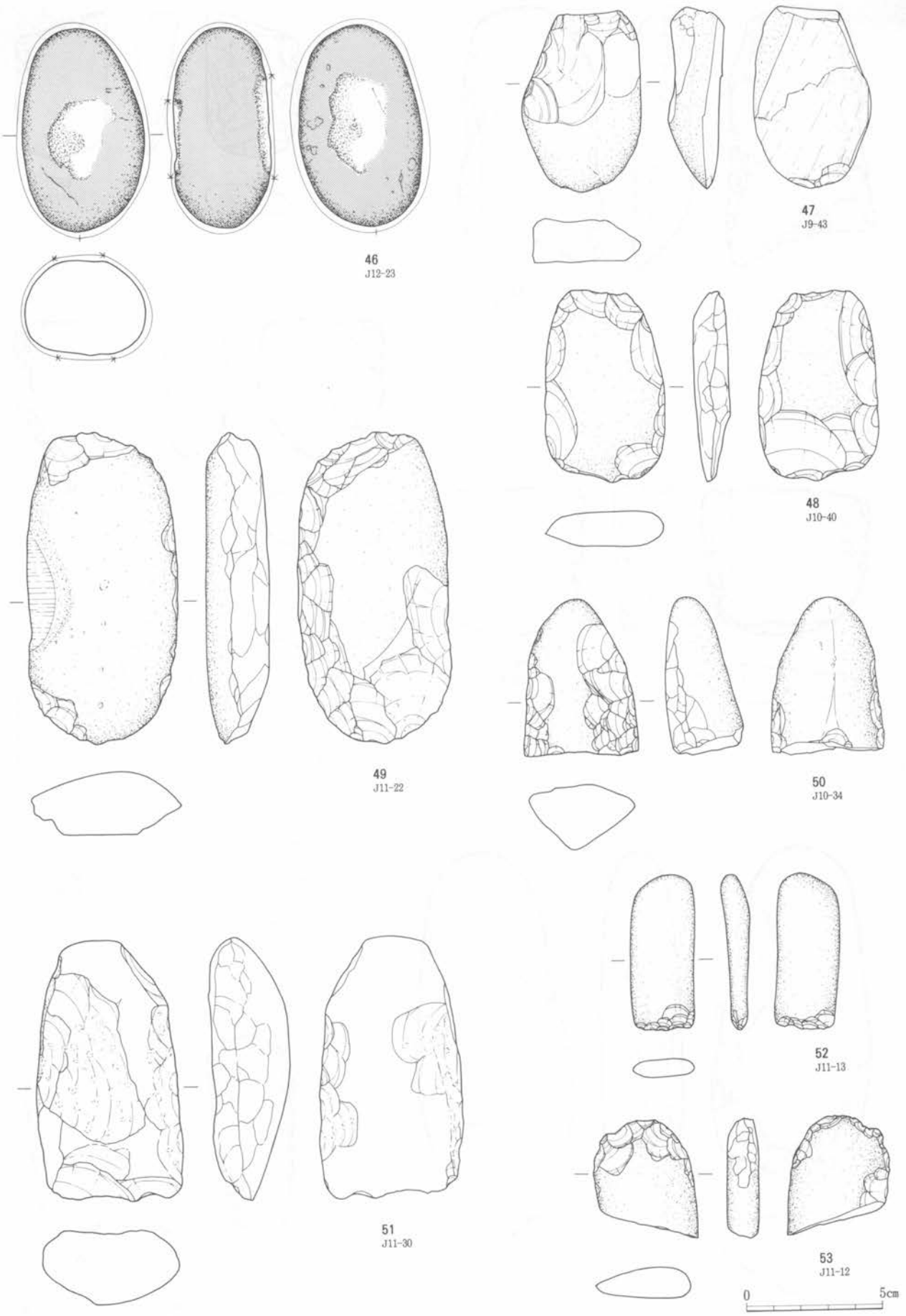
44
J11-14



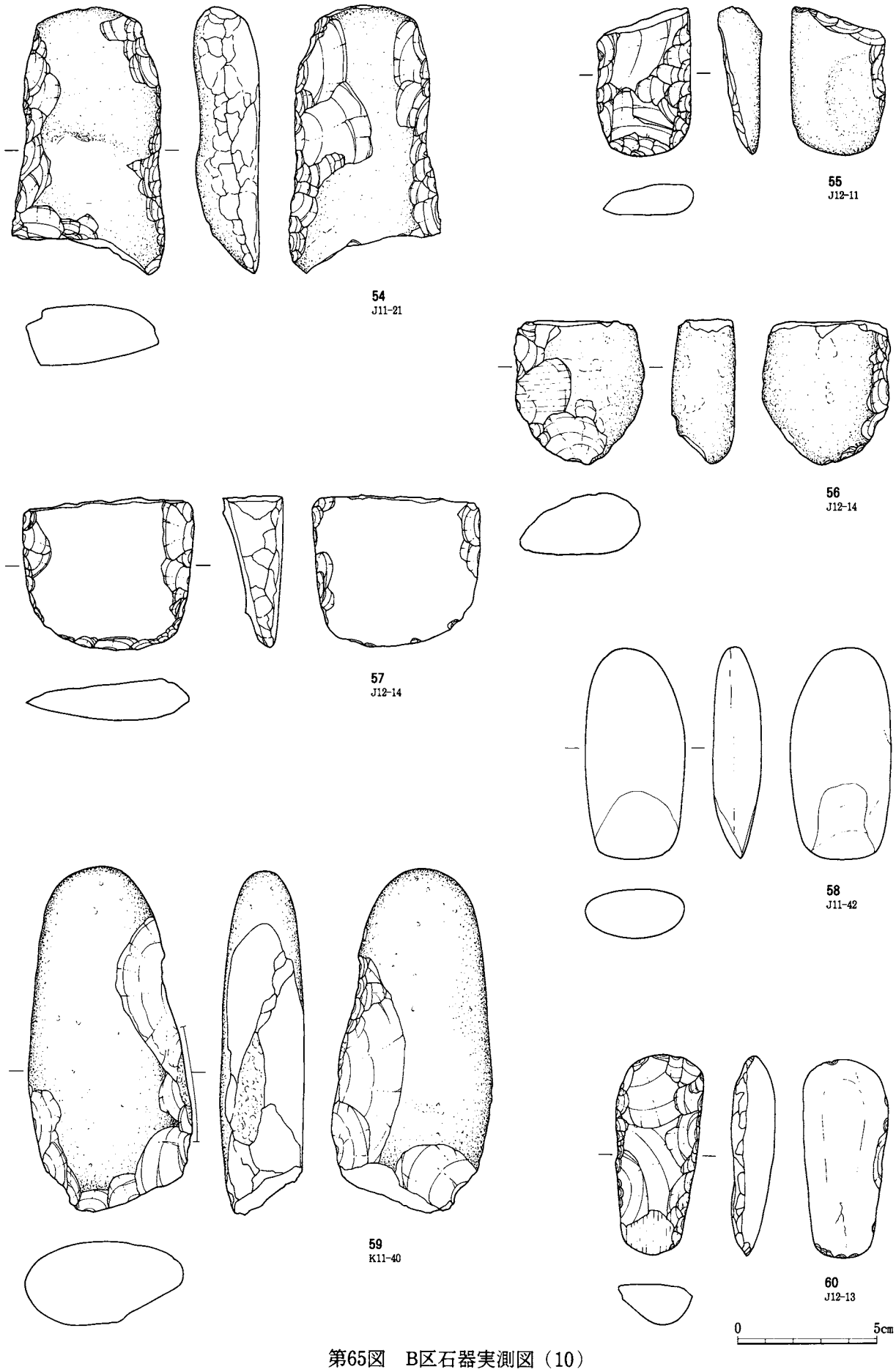
45
J12-23

0 5cm

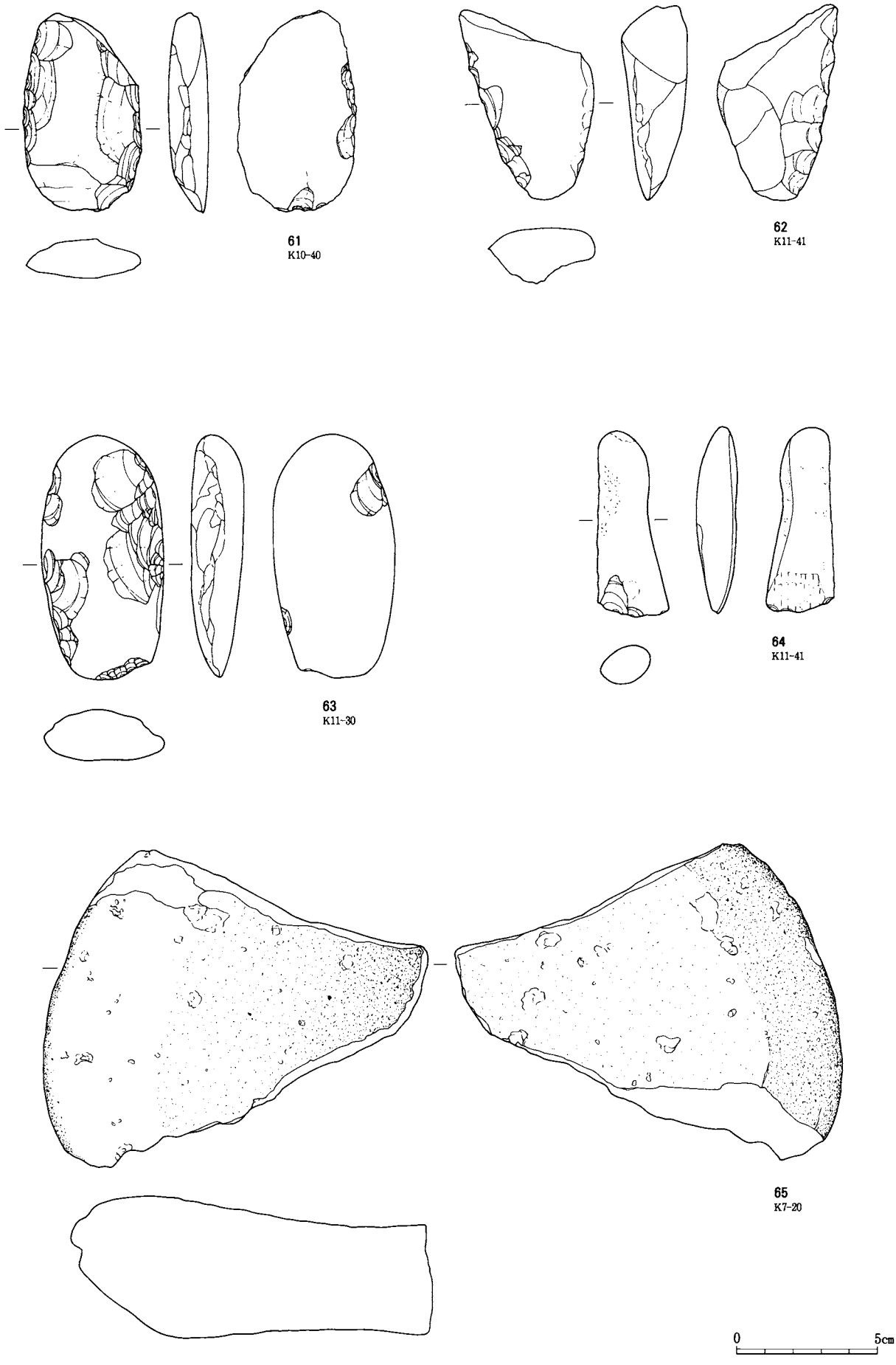
第63図　B区石器実測図（8）



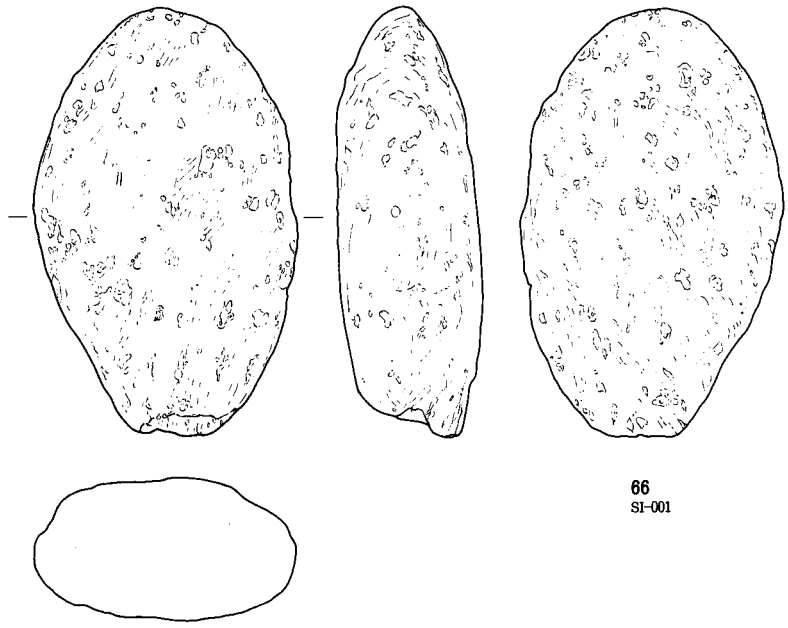
第64図　B区石器実測図（9）

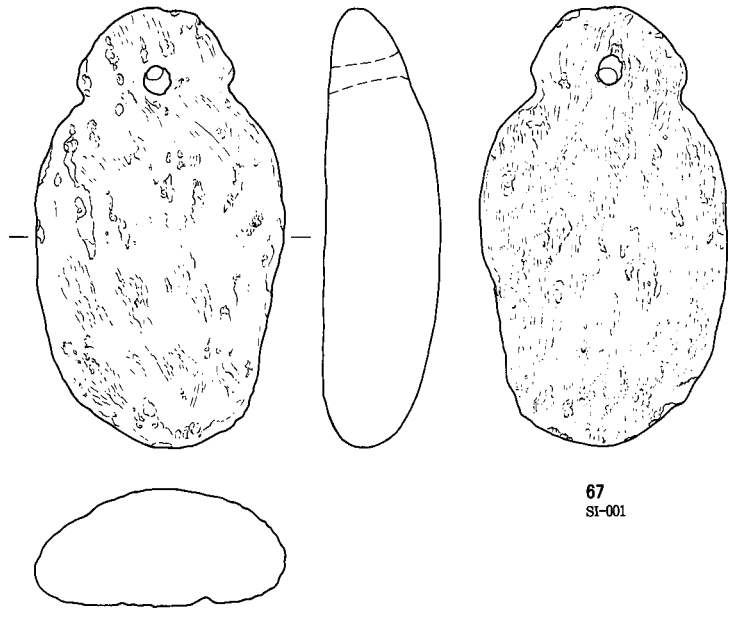


第65図　B区石器実測図（10）



第66図　B区石器実測図（11）





第67図　B区石器実測図（12）

遺構・グリッド	名　称	石　材	長×幅×厚 (cm)	重量 (g)	図番号	遺構・グリッド	名　称	石　材	長×幅×厚 (cm)	重量 (g)	図番号
001号住居跡	軽石	軽石	11.3× 6.8× 3.8	28.5	68－66	J 11-11	磨石	閃緑岩	5.9× 4.5× 3.6	133.7	59－19
001号住居跡	軽石製品	軽石	11.4× 6.5× 3	55.8	68－67	J 11-43	磨石	砂岩	6.1× 5× 2.6	63.9	60－27
038号炉穴	RF	黒曜石	2.2× 3.8× 0.6	3.8		J 11-44	磨石	砂岩	7.3× 5.7× 5.5	215.1	60－21
041号炉穴	磨石	安山岩	6.3× 5.7× 3.9	156.3	58－10	J 12-03	磨石	砂岩	8.5× 6.6× 4.4	309.2	58－13
J 11－22	敲石	安山岩	10.3× 8.6× 4.7	651.3	58－12	J 12-04	磨石	砂岩	4.5× 3.7× 1.6	31.1	
J 11－22	磨石	砂岩	4.6× 4.3× 4.1	100.3		J 12-24	磨石	砂岩	6.5× 4.1× 3.6	118.3	59－20
069号炉穴	敲石	安山岩	7.5× 5.1× 2.9	201	58－11	J 12-44	磨石	砂岩	4.2× 3× 2.1	28	59－18
071号炉穴	凹石	閃緑岩	6.1× 5.5× 3.5	158.9	64－43	K9-20	磨石	砂岩	4.9× 4.8× 4.7	132.3	61－29
071号炉穴	フレイク	チャート	2.3× 2.9× 0.5	2.6		K10-41	磨石	流紋岩	5.3× 4.2× 3.8	86.5	60－23
071号炉穴	ポイント	ホルンフェルス	4.6× 1.9× 0.6	5.9	57－9	K11-21	磨石	砂岩	8.7× 5.2× 2.8	96.8	
002号住居跡	磨石	砂岩	10× 7.2× 4.3	436.1	59－15	K11-30	磨石	砂岩	7× 4.6× 4	121.6	60－27
H8-13	コア	石英岩	2.2× 1.3× 1.3	5.6		K11-30	磨石	砂岩	7.7× 4.2× 3.4	138.6	60－27
I 10-14	フレイク	黒曜石	1.4× 1.5× 0.4	0.85		K12-10	磨石	砂岩	6.5× 4.4× 3.1	89.6	60－22
I 10-23	フレイク	黒曜石	1.8× 1.6× 0.5	1.2		K12-12	磨石	砂岩	5.4× 4.2× 2.5	62.6	61－31
I 10-32	フレイク	黒曜石	3.8× 2.4× 0.8	8.1		K12-12	磨石	砂岩	4.7× 3.8× 1.1	27.9	60－25
I 10-33	フレイク	黒曜石	1.6× 1.7× 0.2	0.58		K12-12	磨石	砂岩	6.6× 5.7× 4.4	167.7	61－31
I 10-34	フレイク	黒曜石	2× 1.4× 0.7	1.8		K12-22	磨石	ホルンフェルス	4.9× 4.1× 3	50.2	60－26
I 10-34	フレイク	黒曜石	1.9× 1.9× 0.7	1.9		K12-35	磨石	砂岩	6× 3.2× 2.6	51.3	60－24
I 10-34	コア	黒曜石	2.1× 1.5× 1.3	3.5		J 9-34	敲石	流紋岩	5.4× 4.7× 3.5	122.1	62－33
J 9-43	フレイク	黒曜石	1.7× 0.8× 0.4	0.55		J 10-42	敲石	砂岩	11.5× 7.7× 5.4	653.2	62－38
J 10-02	フレイク	安山岩	4.9× 2.2× 0.6	7.8		J 10-43	敲石	閃緑岩	11.1× 8.2× 4.6	692.9	61－32
J 10-21	フレイク	黒曜石	1.2× 1.3× 0.4	0.71		J 11-23	敲石	砂岩	3.8× 2.2× 3.1	31.2	62－35
J 10-21	チップ	黒曜石				J 11-23	敲石	チャート	4.6× 3.3× 2	49.3	62－36
J 10-22	RF	黒曜石	2.4× 1.7× 0.9	3.3		J 11-43	敲石	砂岩	5.7× 4.4× 3.3	78.5	61－28
J 10-30	RF	黒曜石	2.1× 1.8× 0.8	3.4		J 11-44	敲石	砂岩	4.2× 3.6× 3	47.5	62－34
J 10-31	フレイク	黒曜石	1.3× 1× 0.2	0.19		J 12-22	敲石	砂岩	4.9× 3.7× 2.2	54.7	62－37
J 10-33	フレイク	黒曜石	0.9× 0.7× 0.2	0.12		K10-00	敲石	安山岩	6.7× 5.5× 4.9	140.4	63－39
J 10-41	コア	黒曜石	3.9× 2.8× 1	10.2		K10-00	敲石	ホルンフェルス	8.7× 5× 3.7	234.4	63－41
J 11-10	RF	黒曜石	2.6× 1.9× 0.6	1.9		K11-44	敲石	閃緑岩	4.4× 3.3× 2.5	69.3	63－40
J 11-12	フレイク	黒曜石	2× 1.1× 0.4	0.48		K12-11	敲石	砂岩	6.8× 5× 4	153.3	
J 11-24	フレイク	黒曜石	1.7× 1.1× 0.3	0.62		K12-11	敲石	流紋岩	8.3× 5.9× 4.5	347.4	63－42
J 11-30	フレイク	チャート	3.7× 1.5× 0.5	3.1		J 11-14	凹石	閃緑岩	6.9× 4.8× 4.6	192.8	64－44
J 11-33	フレイク	黒曜石	3.1× 2.2× 0.6	3.3		J 12-23	凹石	閃緑岩	10.5× 6.2× 3.5	327.8	64－45
J 12-02	フレイク	黒曜石	1.3× 1× 0.2	0.16		J 12-23	凹石	砂岩	7.4× 4.5× 3.9	165.2	65－46
J 12-22	フレイク	黒曜石	2.8× 1.7× 1	3.8		J 9-43	打製石斧	砂岩	6.5× 4.4× 1.7	73.2	65－47
K8-32	コア	黒曜石	4.3× 2.7× 2.3	27.3		J 10-34	打製石斧	蛇紋岩	5.5× 4.1× 2.6	69.1	65－50
K10-40	コア	黒曜石	4.4× 2.9× 1.3	13.3		J 10-40	打製石斧	ホルンフェルス	6.9× 4.3× 1.3	53.2	65－48
K11-20	フレイク	黒曜石	1.8× 1× 0.7	0.63		J 11-12	打製石斧	安山岩	4.5× 3.5× 1.1	25.3	65－53
K12-00	フレイク	黒曜石	1.1× 1.7× 0.8	1.2		J 11-13	打製石斧	頁岩	5.6× 2.3× 1	18.3	65－52
K13-00	フレイク	黒曜石	1.4× 1.6× 1.1	2.5		J 11-21	打製石斧	ホルンフェルス	9.7× 5.4× 2.3	161.4	66－54
K13-00	フレイク	黒曜石	1.1× 1.4× 0.2	0.44		J 11-22	打製石斧	安山岩	11.1× 5.5× 2.4	207.8	65－49
K13-00	フレイク	黒曜石	1.1× 1.3× 0.5	0.82		J 11-30	打製石斧	閃緑岩	9.3× 5.2× 2.7	196.7	65－51
H7-43	石鏃	黒曜石	2.7× 1.8× 0.7	2.5	57－1	J 12-11	打製石斧	ホルンフェルス	5.3× 3.4× 1.2	30.1	66－55
I 9	石鏃未製品	チャート	2.7× 1.9× 0.7	4.8	57－2	J 12-14	打製石斧	砂岩	5.7× 6× 2	75.5	66－57
I 10-34	石鏃	黒曜石	1.9× 1.6× 0.2	0.4	57－3	J 12-14	打製石斧	閃緑岩	5× 4.4× 2.3	76.3	66－56
I 11-14	石鏃	黒曜石	1.6× 0.9× 0.4	0.39	57－4	K11-40	打製石斧	安山岩	11.9× 5.7× 2.9	275.8	66－59
J 10-11	石鏃未製品	黒曜石	1.9× 2.5× 0.6	2.5	57－5	J 11-42	局部磨製石斧	ホルンフェルス	7.5× 3.6× 1.7	70.2	66－58
J 11-42	石鏃	黒曜石	2.9× 1.5× 0.6	2.3	57－6	J 12-13	局部磨製石斧	ホルンフェルス	7× 2.8× 1.7	42.3	66－60
J 12-03	石鏃	黒曜石	2.2× 0.9× 0.3	0.75	57－7	K10-40	局部磨製石斧	粘板岩	7× 4.2× 1.4	56.3	67－61
J 12-22	石鏃	頁岩	2.8× 1.6× 0.4	1	57－8	K11-30	局部磨製石斧	ホルンフェルス	8.5× 4.3× 1.8	96.2	67－63
J 9-21	磨石	砂岩	6× 5.7× 2.8	106.3	59－16	K11-41	局部磨製石斧	ホルンフェルス	6.5× 2.4× 1.2	28.8	67－62
J 10-11	磨石	砂岩	7.9× 7.1× 3.5	255.2	59－17	K11-41	局部磨製石斧	閃緑岩	7× 4.1× 2.5	70.7	67－64
J 10-31	磨石	閃緑岩	6.5× 4.5× 2	60.9	58－14	K07-20	石皿	安山岩	13.1× 10.1× 5	744.7	67－65
J 11-00	磨石	閃緑岩	6.2× 3.8× 3.8	59.6		J 10-40	軽石	軽石	3.4× 2.9× 1.7	6.9	
J 11-10	磨石	流紋岩	5.6× 5.5× 3.9	167.2	60－23	J 11-23	敲石	砂岩	7.7× 3.8× 3.8	135.6	61－30

第４表　Ｂ区縄文時代石器一覧表

（３）礫

大作頭遺跡Ｂ区からは大量の礫が検出された。これらは集石のような状況を呈していたわけではない。早期土器群の包含層の調査の際に、土器片に混じって出土するものであった。

従来、特に君津郡市域では、早期の包含層から多量に礫が出土する例は多く知られていたが、市原市域

での出土例はあまり知られてはいない。したがってここでは、基礎的な集計作業を行い、今後の整理作業に向けての基礎的なデータを提示することとした。これは、今後の東関東自動車道（千葉・富津線）の整理作業において、大作頭遺跡B区同様に、多くの礫を出土する早期の遺跡が多いことも考慮しての作業である。

なお、今回は時間的な制約から、礫の石材についての分析は行わなかった。これは礫が近隣の礫層から搬入されたことを考えれば、おのずと礫の素材は明らかになるものと考えたからである。この点について了解していただきたい。念のため分析作業の際に把握した礫の石材は、チャート・砂岩・流紋岩が主体で、粘板岩・泥岩・安山岩がこれらに次ぐものであった。

a　礫の分布

礫の平面的な分布を第69図に示した。ドット一つが100点であり、小グリッドごとにドットの個数で出土量と分布を示した。B区中央のやや南側に集中し、周辺に向かうにつれて分布量が減るという傾向を読みとることができる。子母口式期を中心とする遺構分布と比較すると、最も集中的に分布する地点は、遺構の分布が認められない地点である。このように考えると、礫の分布は、遺構の分布と補完関係を有していたこととなり、子母口式期に伴っていた可能性が指摘できる。

基礎整理の段階で、包含層から出土した土器の分布図を作成した。撚糸文土器・子母口式土器（野島式土器を含む）・加曽利E式土器を対象とした。結果として明瞭に分布傾向が読みとれるものは、第68図に示した撚糸文土器の分布であった。ドット一つが10点であり、小グリッドごとにドットの個数で出土量と分布を示した。稲荷台式土器が主体で、井草式土器が含まれる撚糸文土器の分布である。遺跡中央のやや南側に集中し、周辺に向かうにつれて分布量が減るという傾向は、礫の分布と一致する。このように考えると、礫は土器片と共に廃棄もしくは遺棄されたものと考えることができる。

b　礫の分析

礫の重量・長軸長・遺存度の集計を行った（第70図～第81図）。集計を行った小グリッドは、出土量の多い23個の小グリッドである。重量については10ｇごとの点数を示し、長軸長については１cm毎の点数を示し、遺存度は４分割ごとの点数を示した。

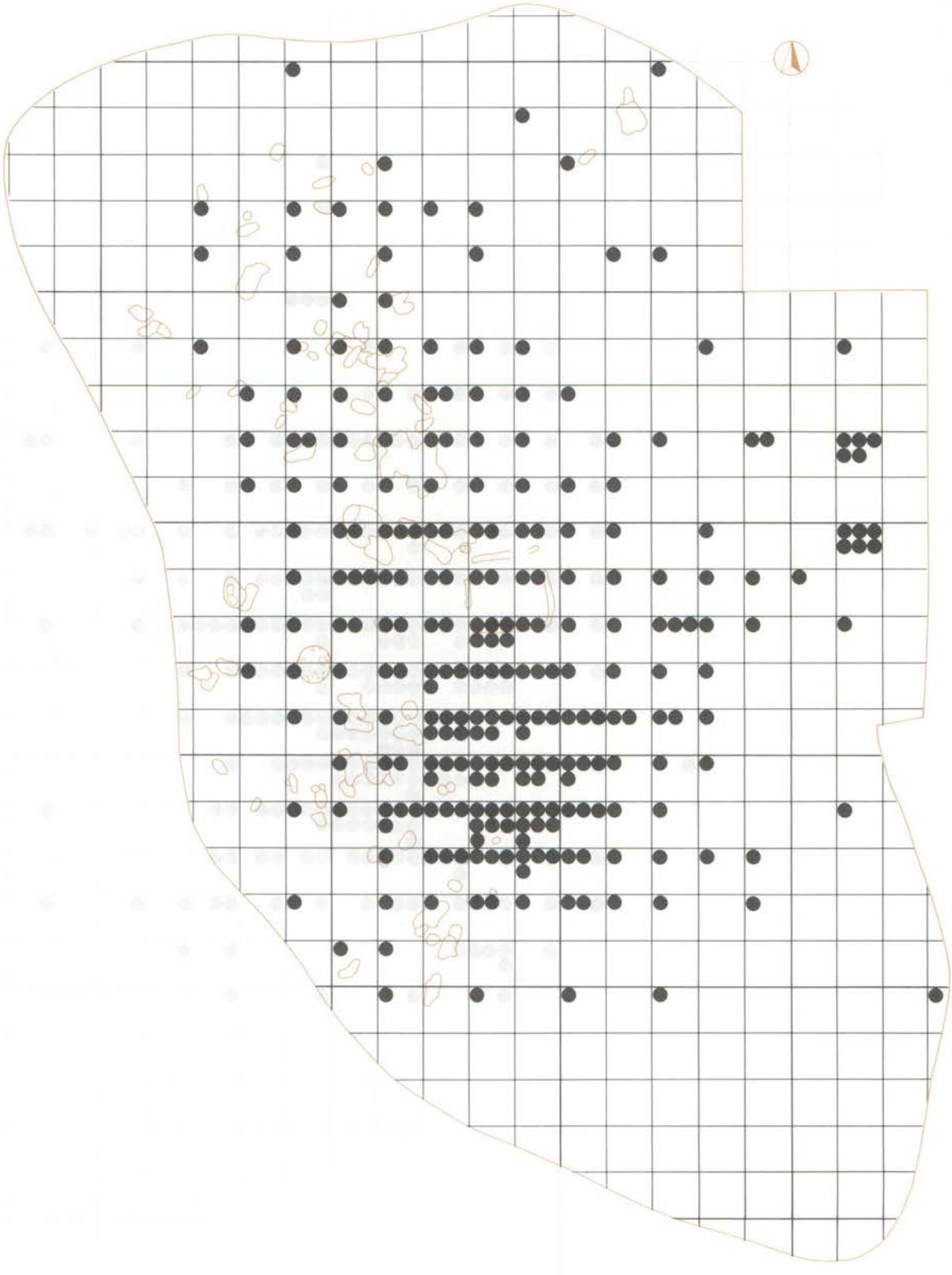
40ｇ以下の重量で、長軸長２cm～５cmの、完形の礫が用いられている傾向を読みとることができる。今後、周辺の礫層の分析から、礫が選択されて搬入されたものなのか否かが明らかになるであろう。

礫の遺存度に注目すると、一定の割合で完形ではない礫が含まれている。これは被熱等により遺跡内で破砕したことを示しているものとも考えられる。

c　小結

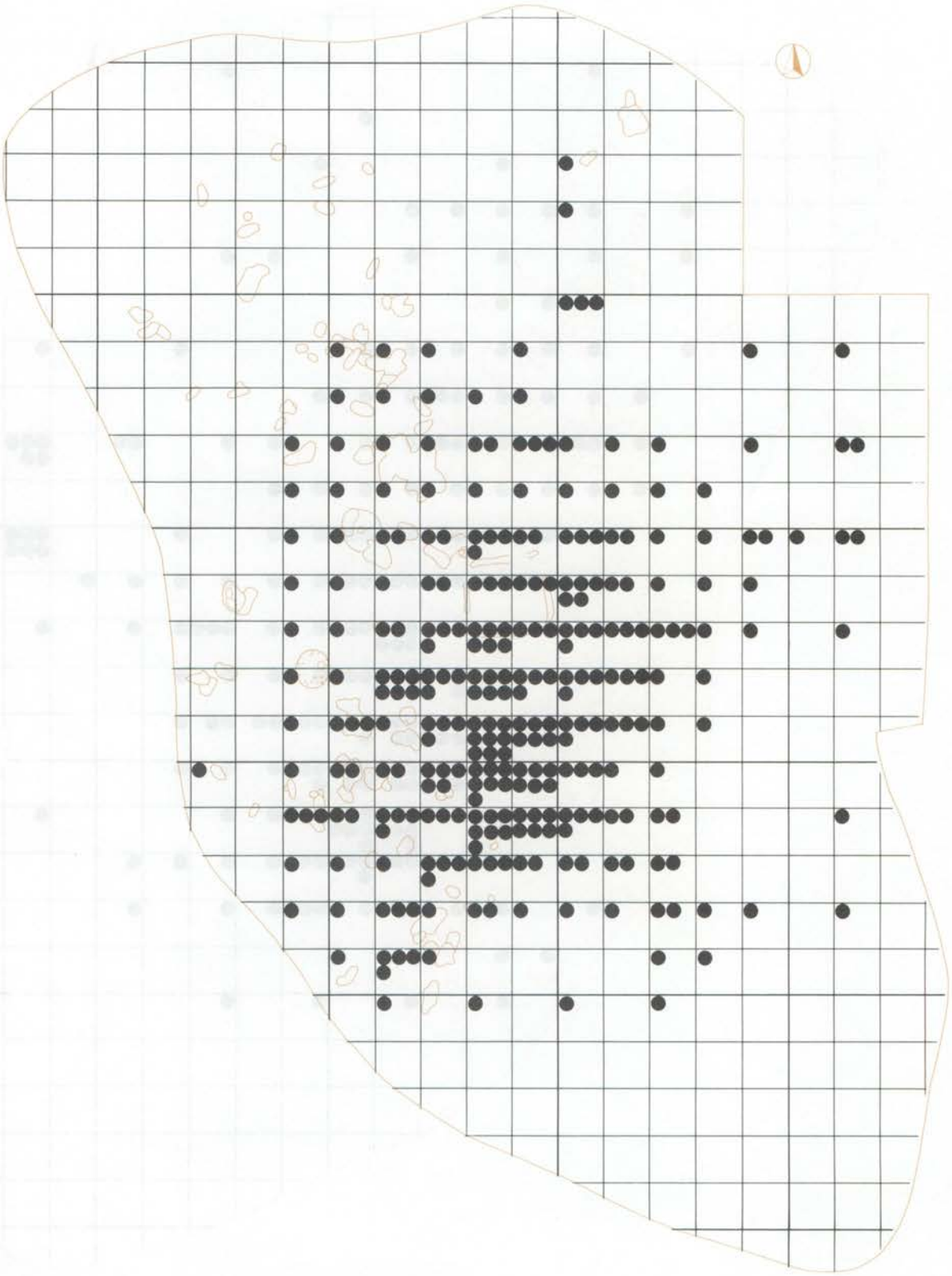
子母口式期では礫の分布が、遺構の分布と補完関係を有していたことが判明した。撚糸文期では、土器の分布と礫の分布が一致することが判明した。このように考えると、現段階では礫がどちらの段階で廃棄・遺棄されたものかを判断することはできない。想像をたくましくするならば、完形の礫と破砕した礫という２種類の構成が、時期的な差に連動する可能性もあろう。また、撚糸文期の土器・礫が、子母口式期の炉穴・土坑の設営の際に除去されて、集中的に廃棄された可能性もあろう。

現段階では礫の形成時期・性格については不明であるといわざるを得ないが、今回のデータを基礎資料として、今後の分析結果を待ちたい。



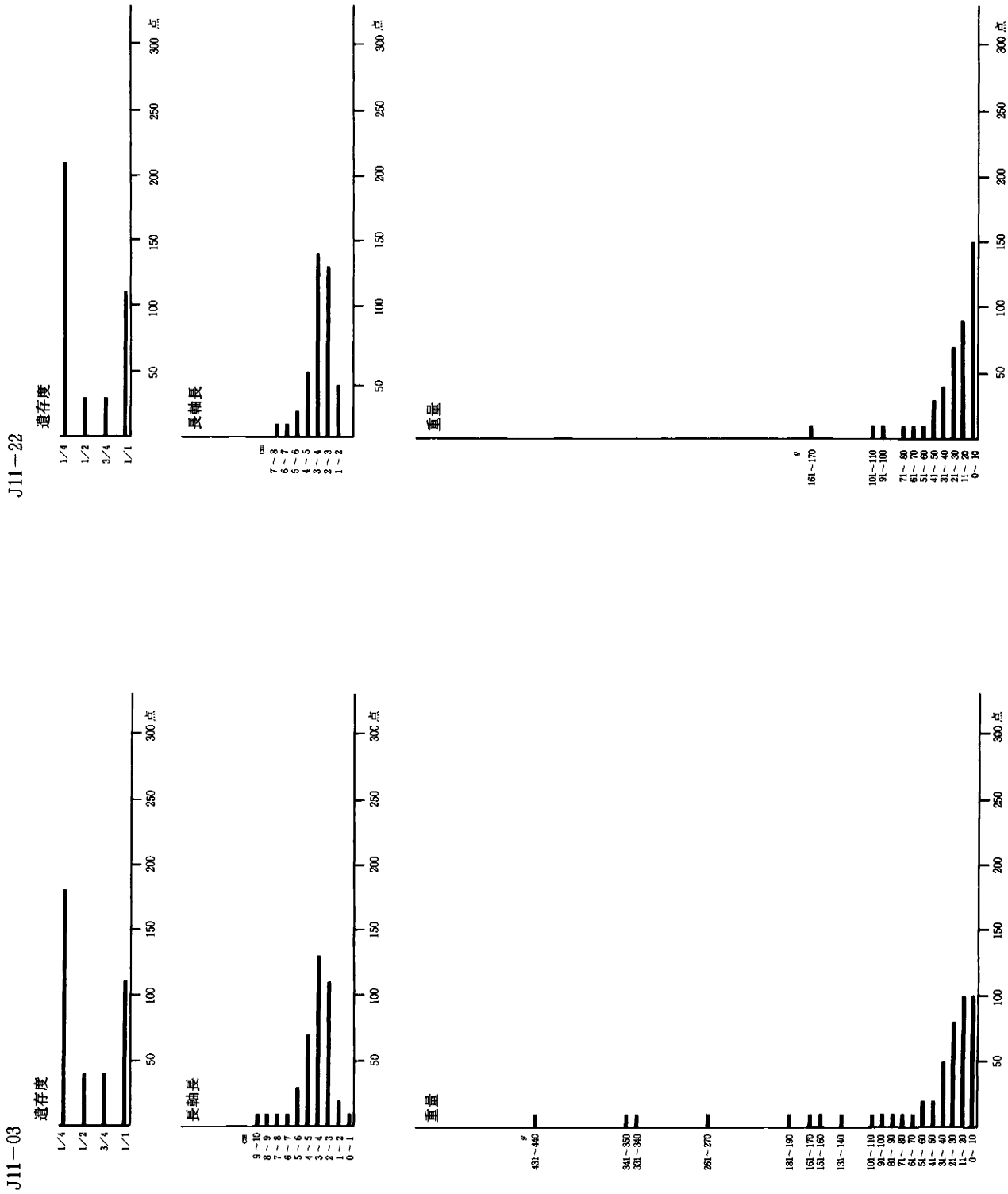
ドット1点～土器10点

第68図　B区撚糸文土器分布図

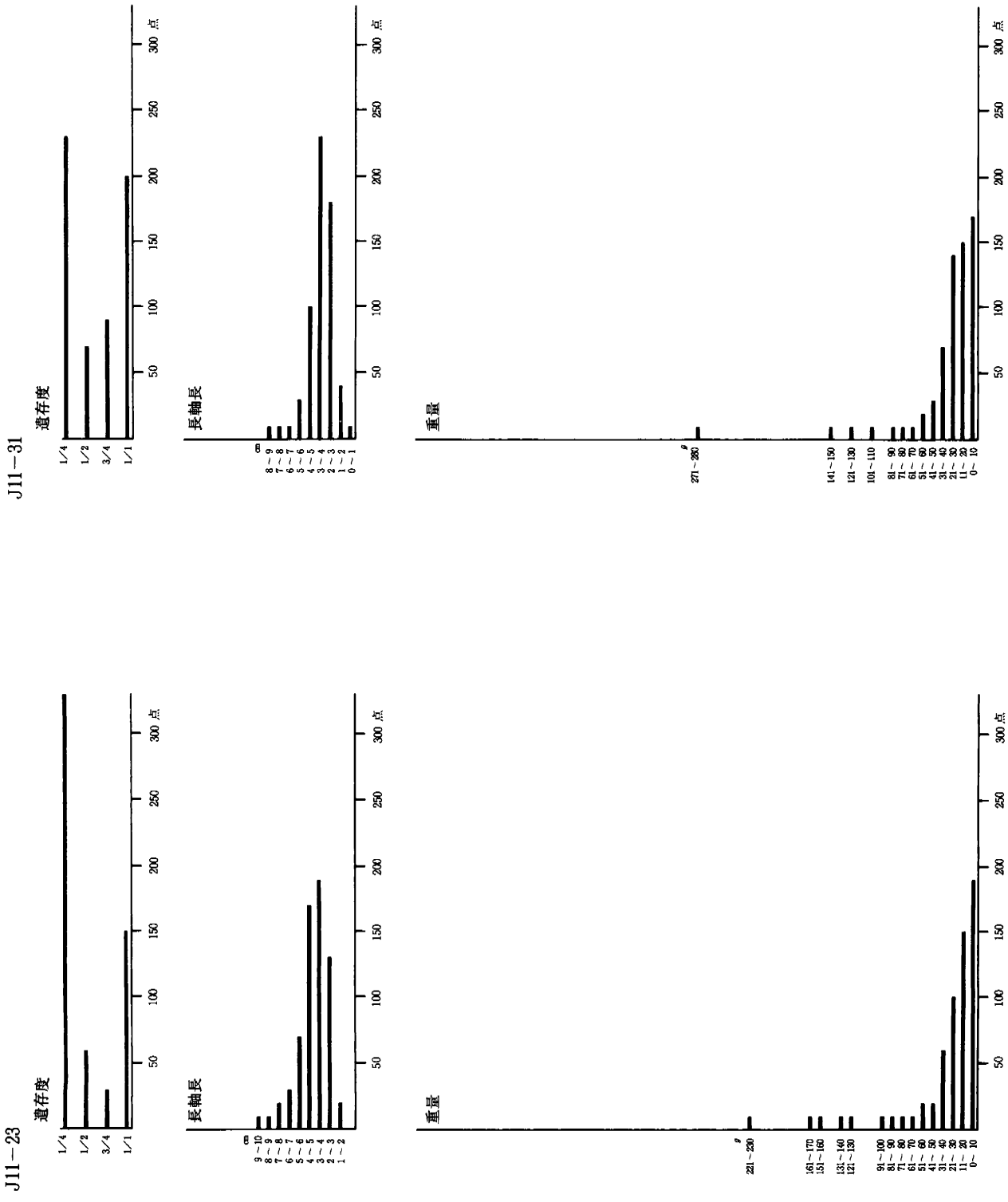


ドット1点～礫100点

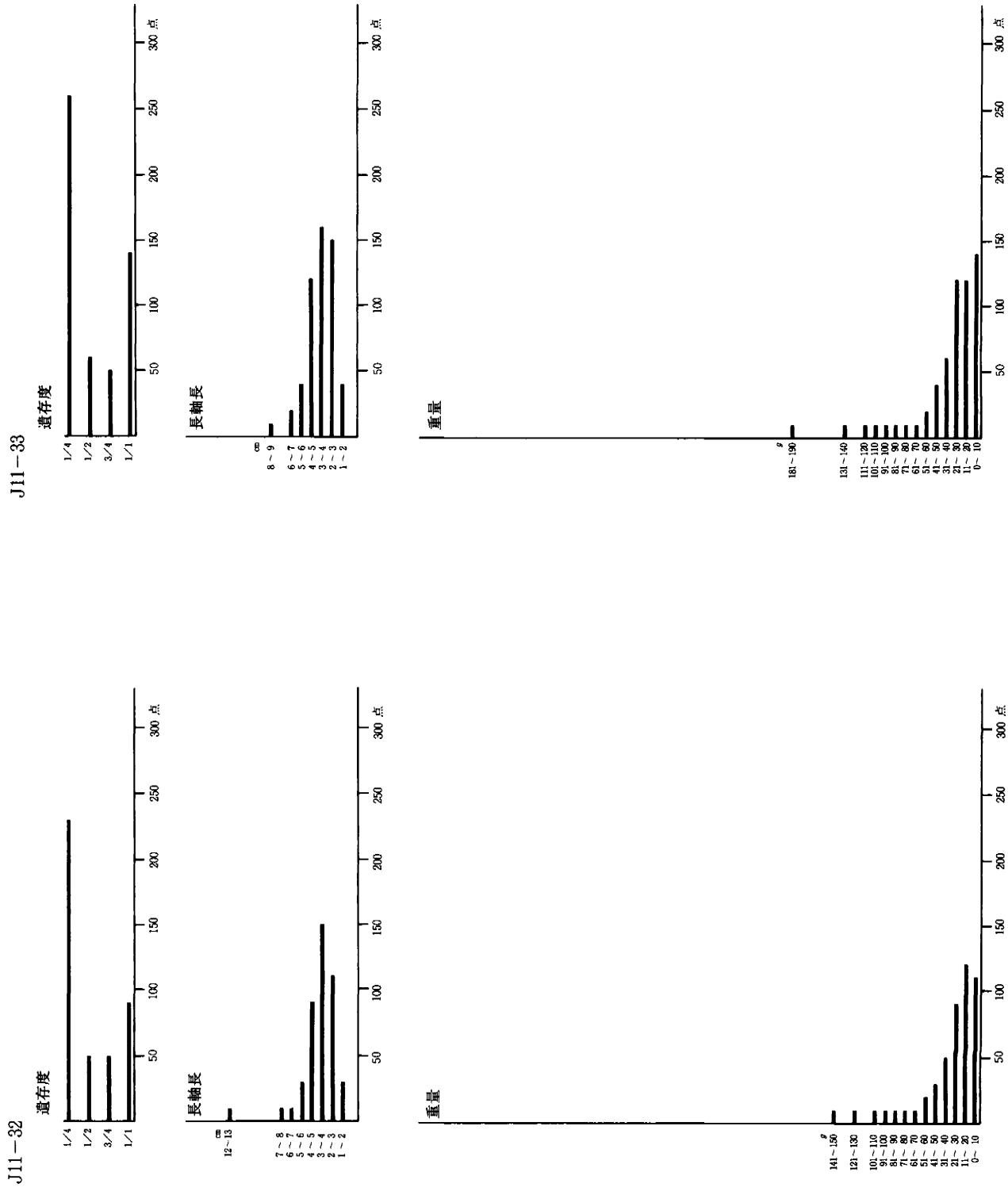
第69図　B区礫分布図



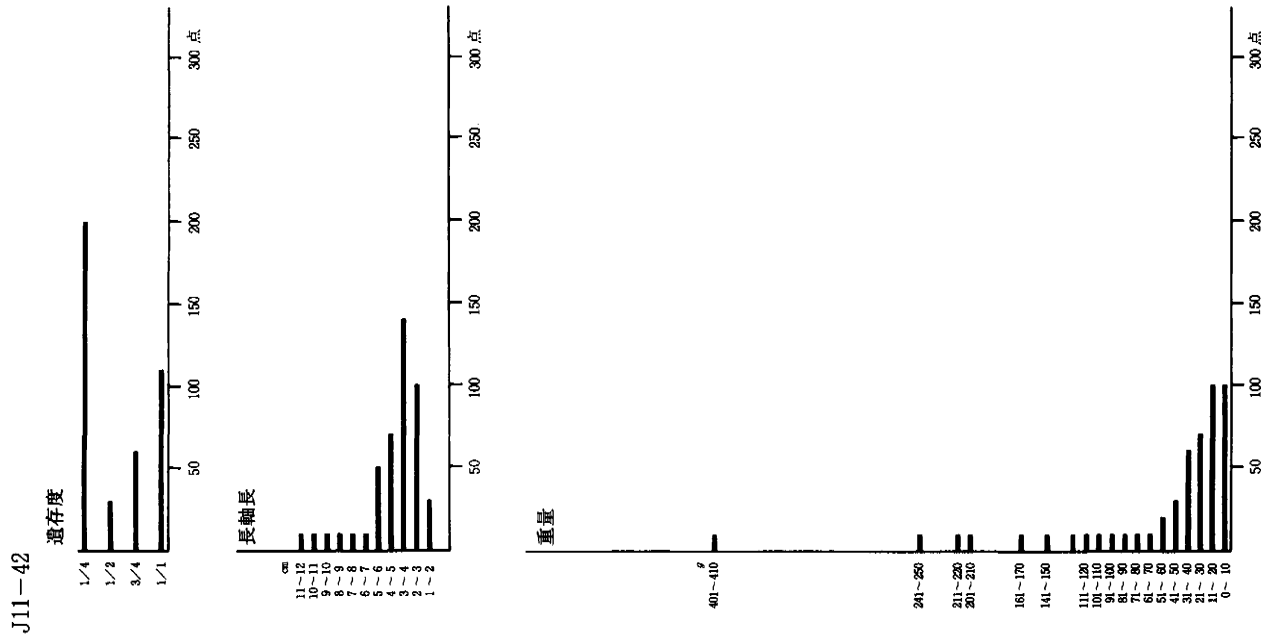
第70図　B区礫分析図（1）

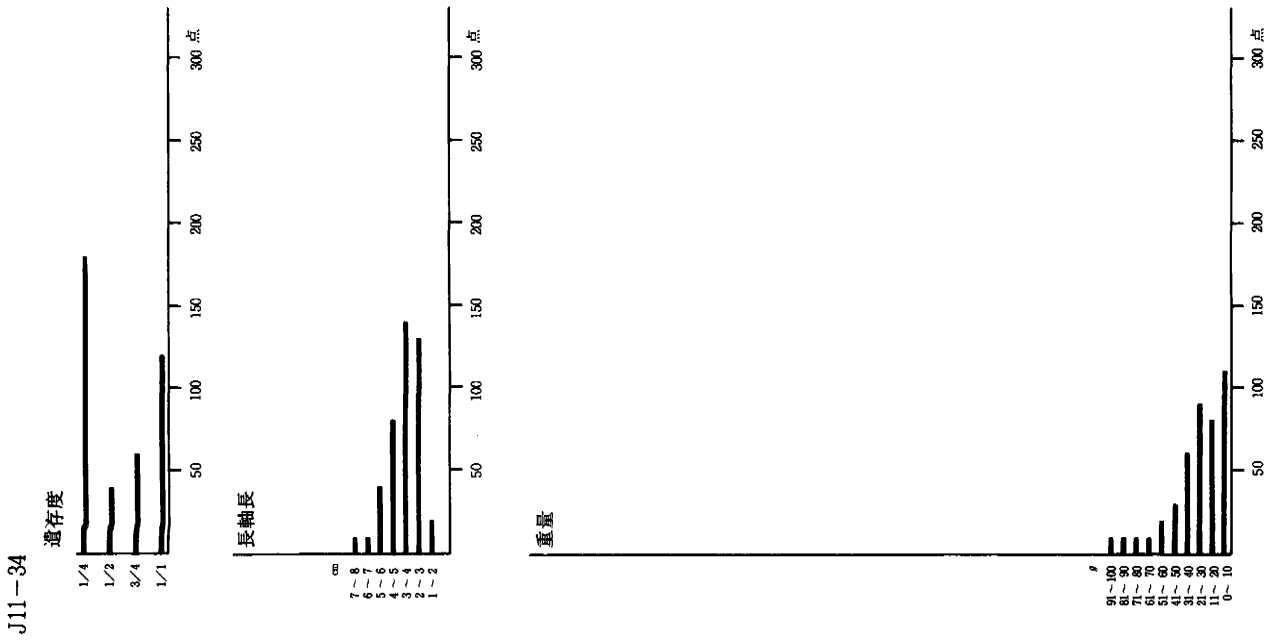


第71図　B区礫分析図（2）

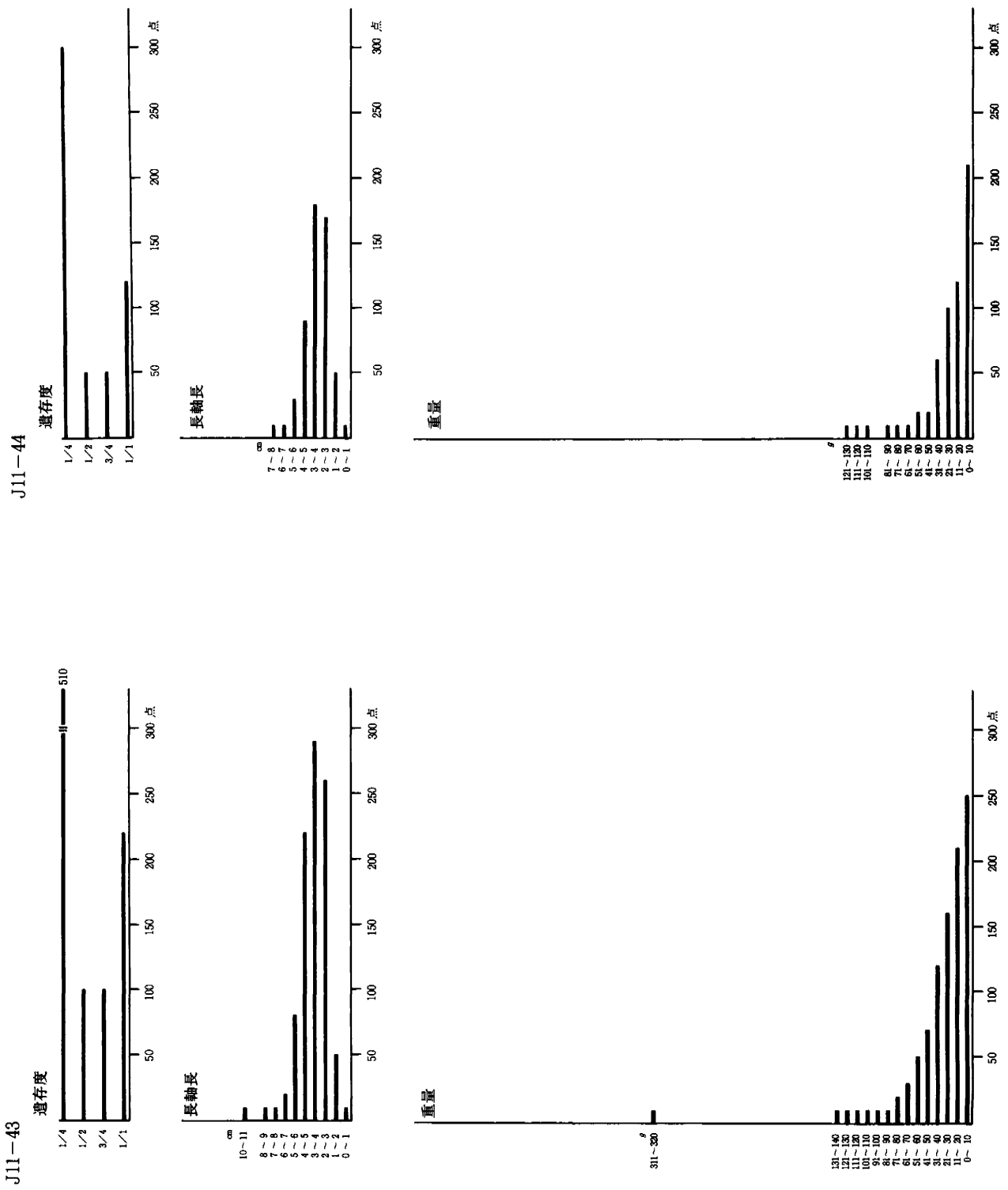


第72図　B区礫分析図（3）

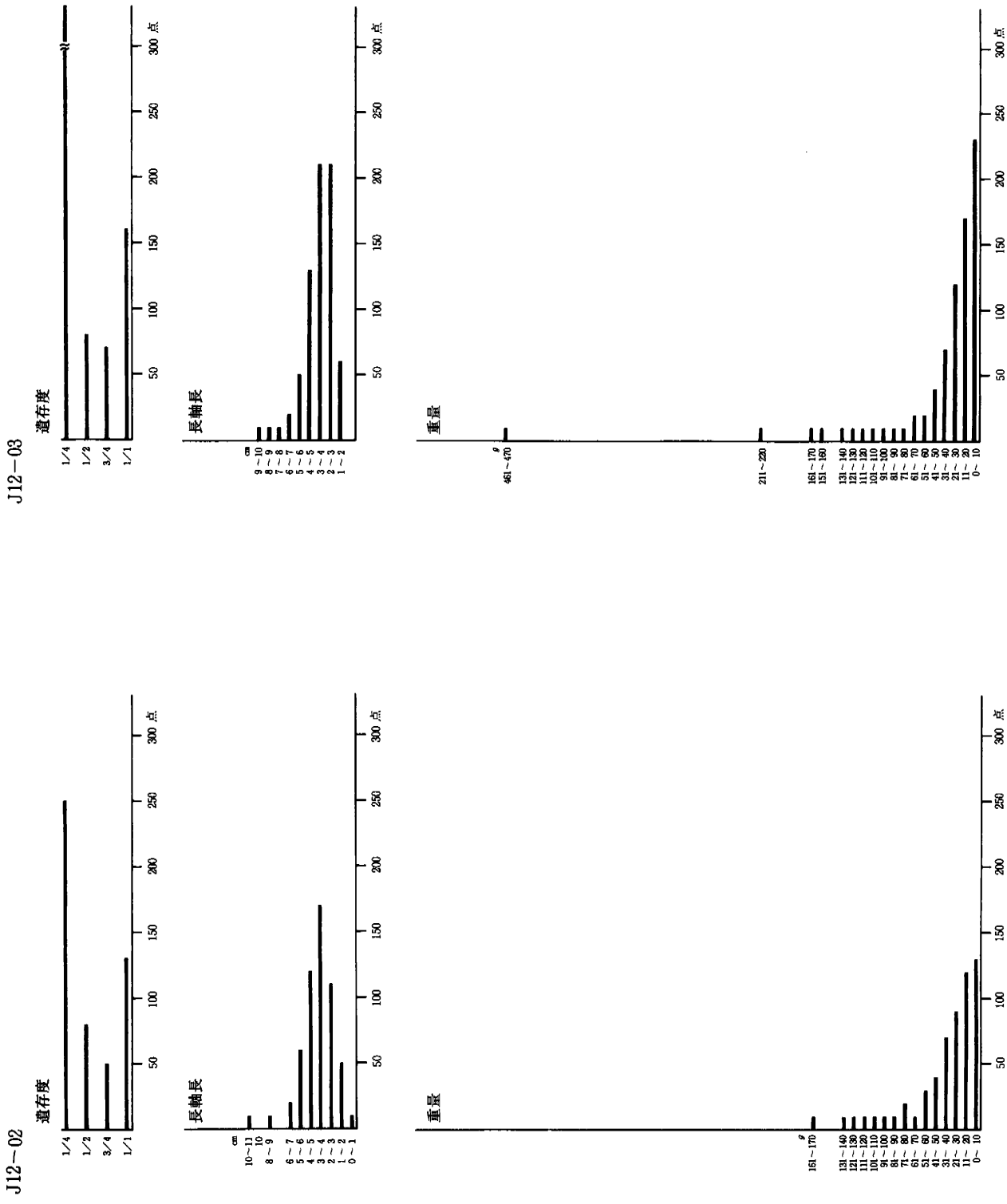




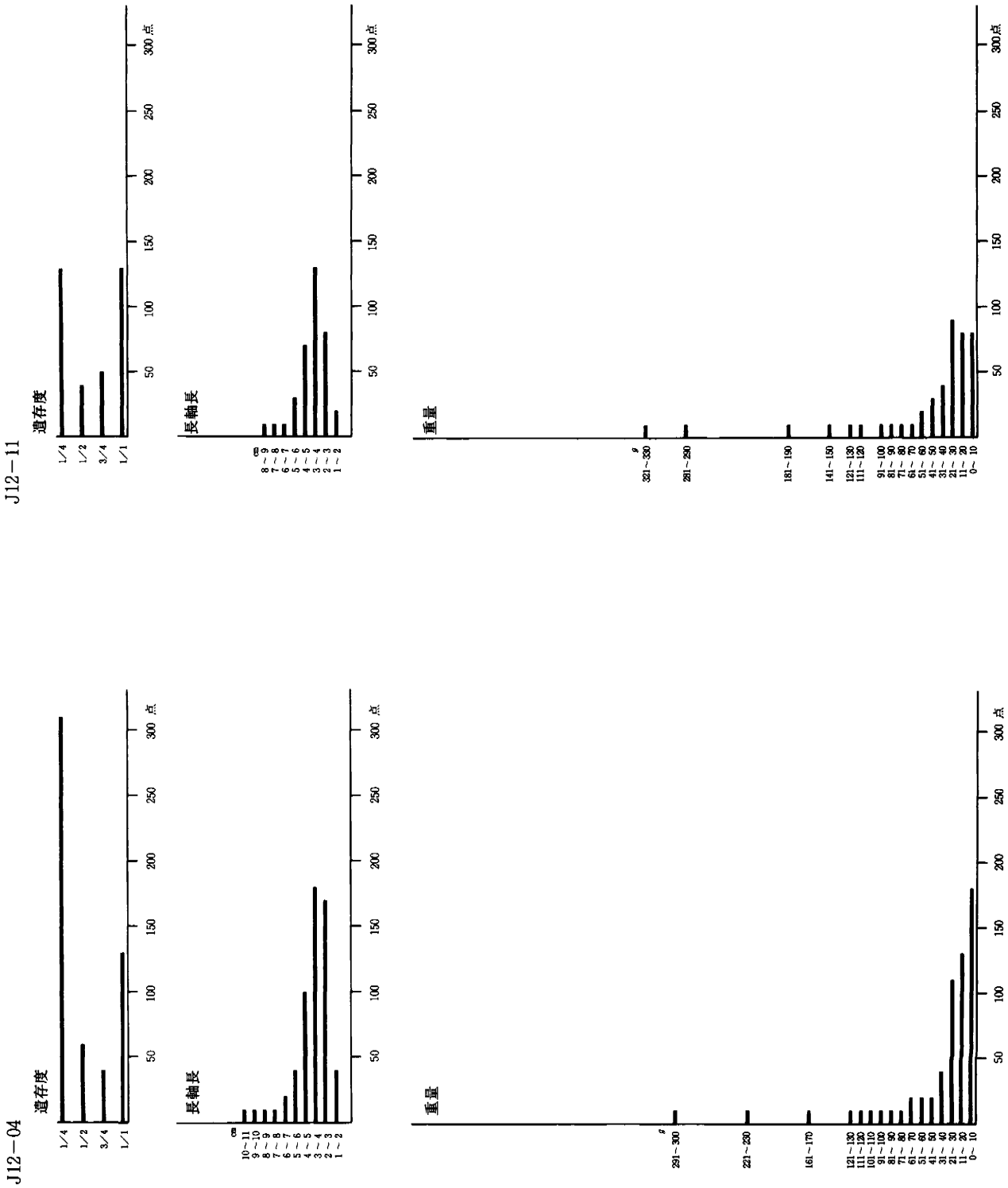
第73図　B区礫分析図（4）



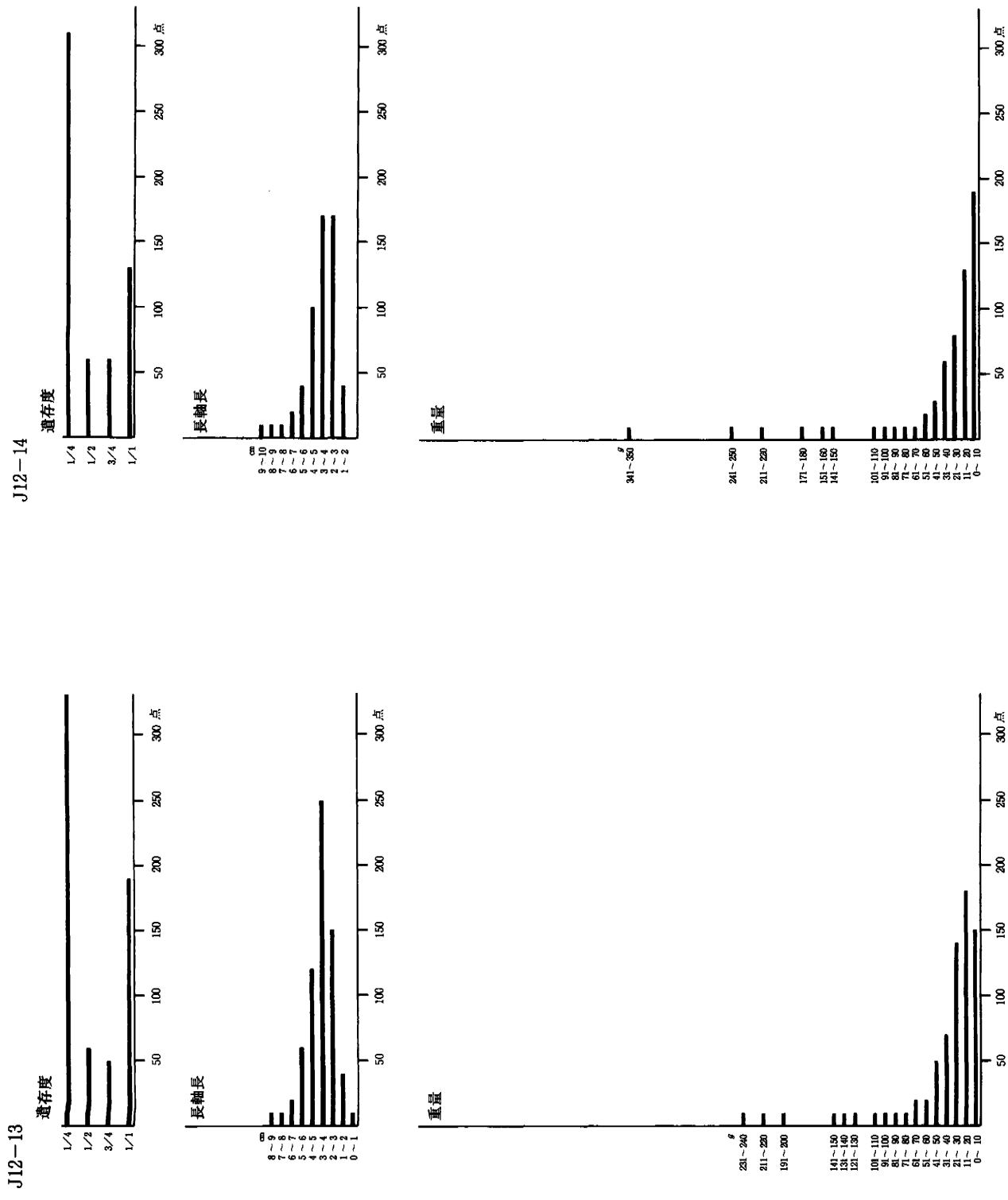
第74図　B区礫分析図（5）



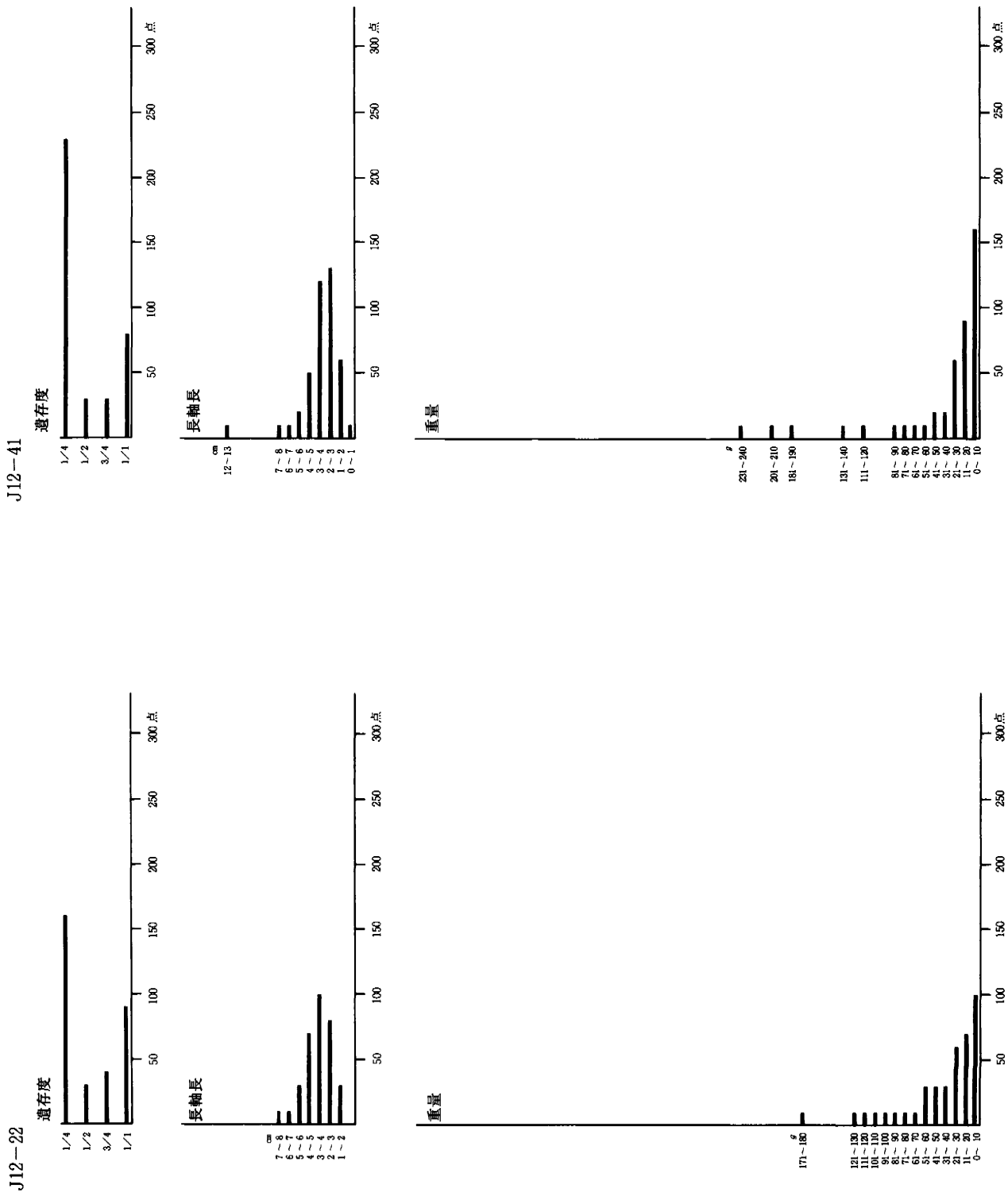
第75図　B区礫分析図（6）



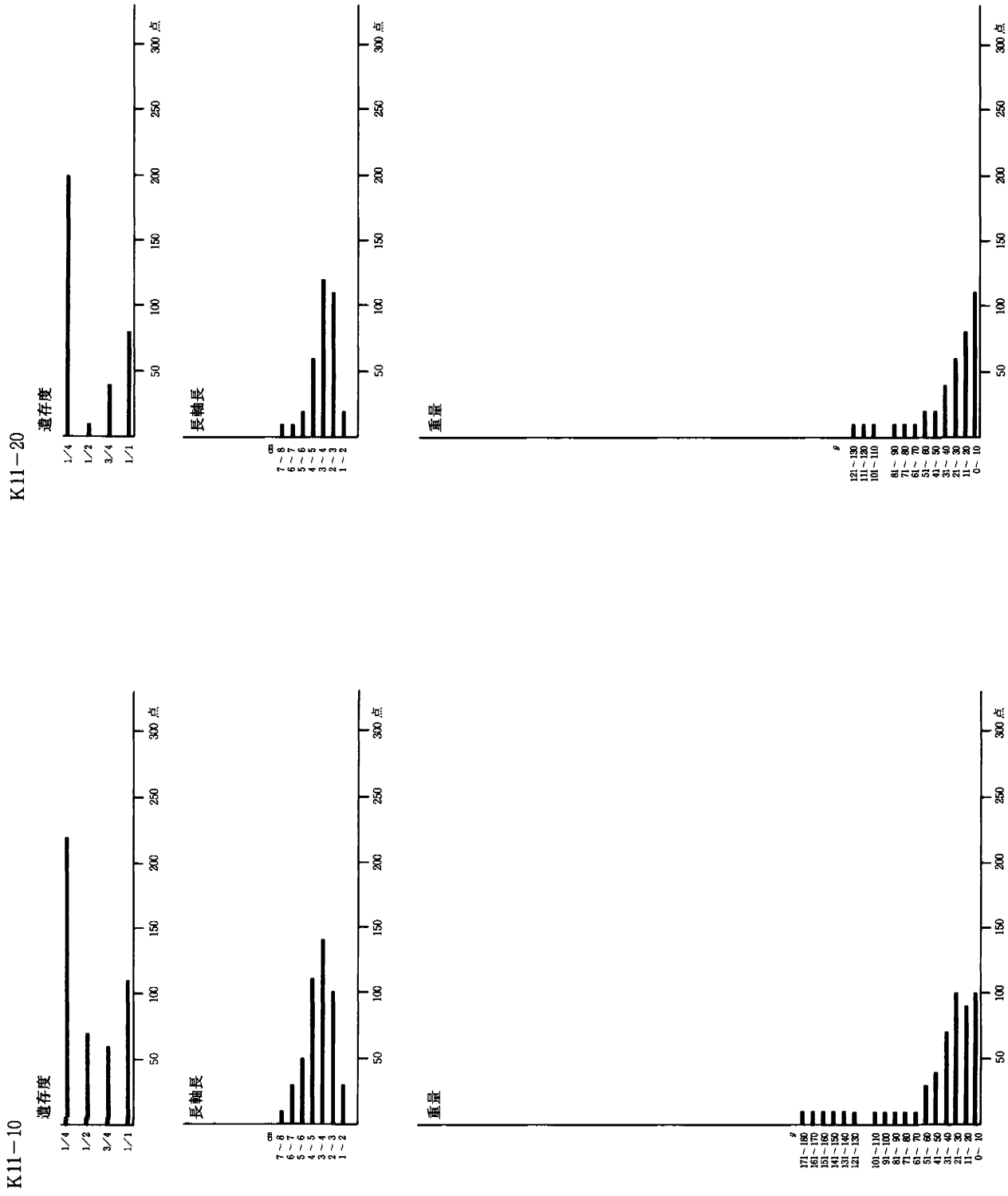
第76図　B区礫分析図（7）



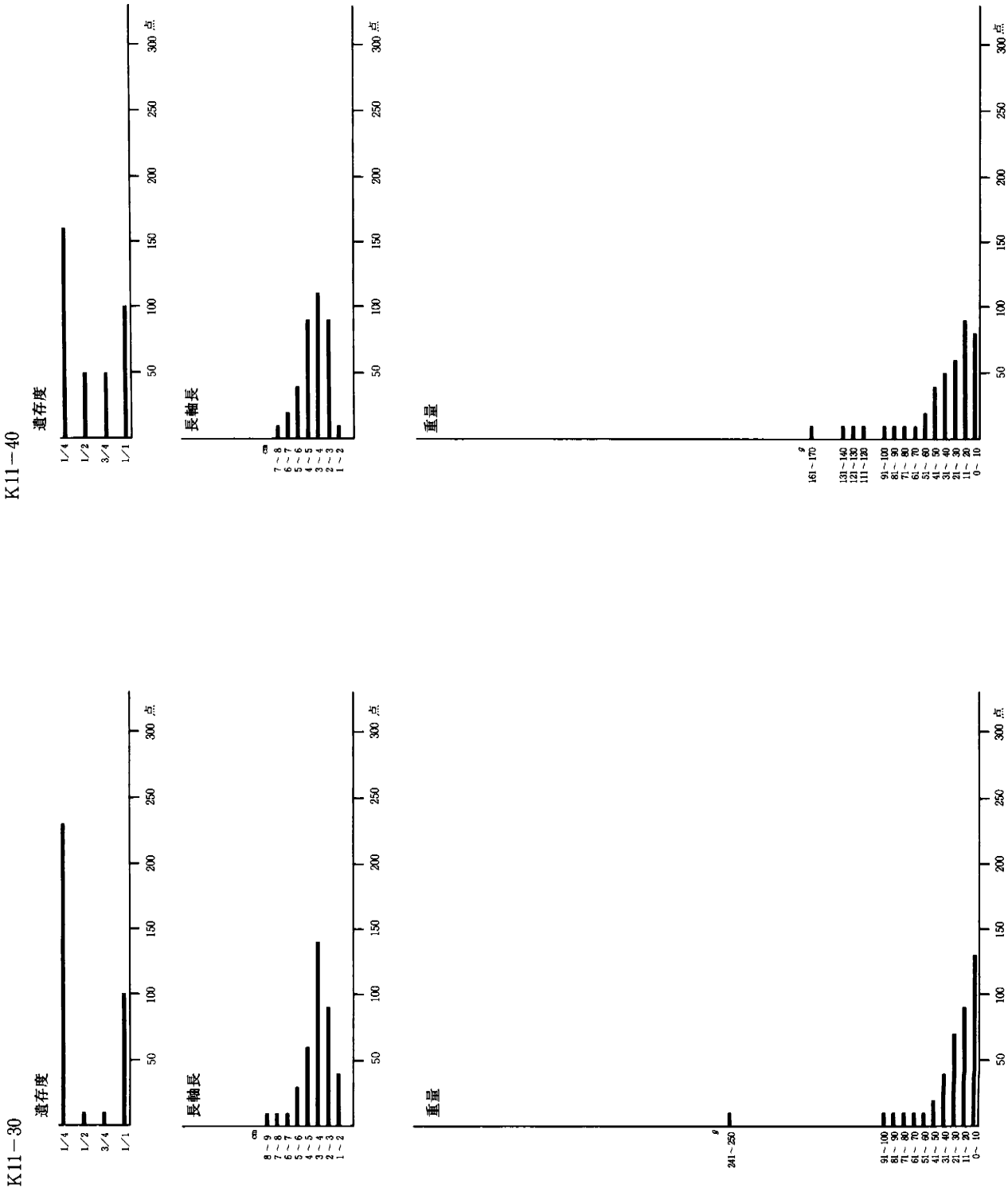
第77図　B区礫分析図（8）



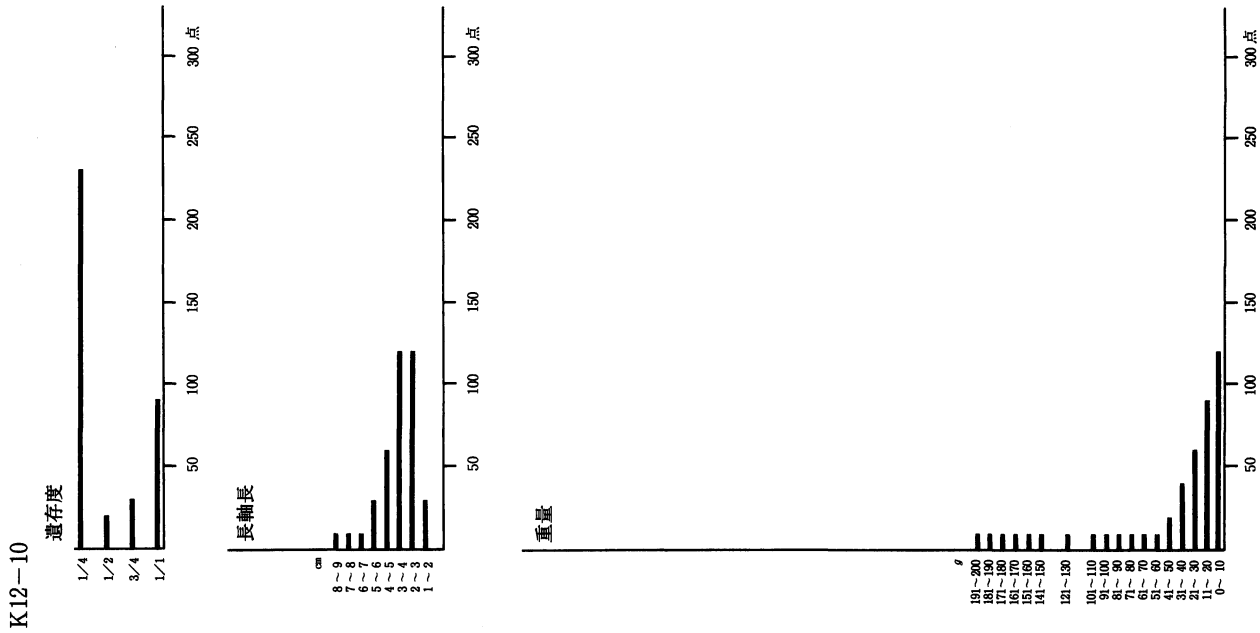
第78図　B区礫分析図（9）



第79図　B区礫分析図（10）



第80図　B区礫分析図（11）



第81図　B区礫分析図（12）

第3節　歴史時代

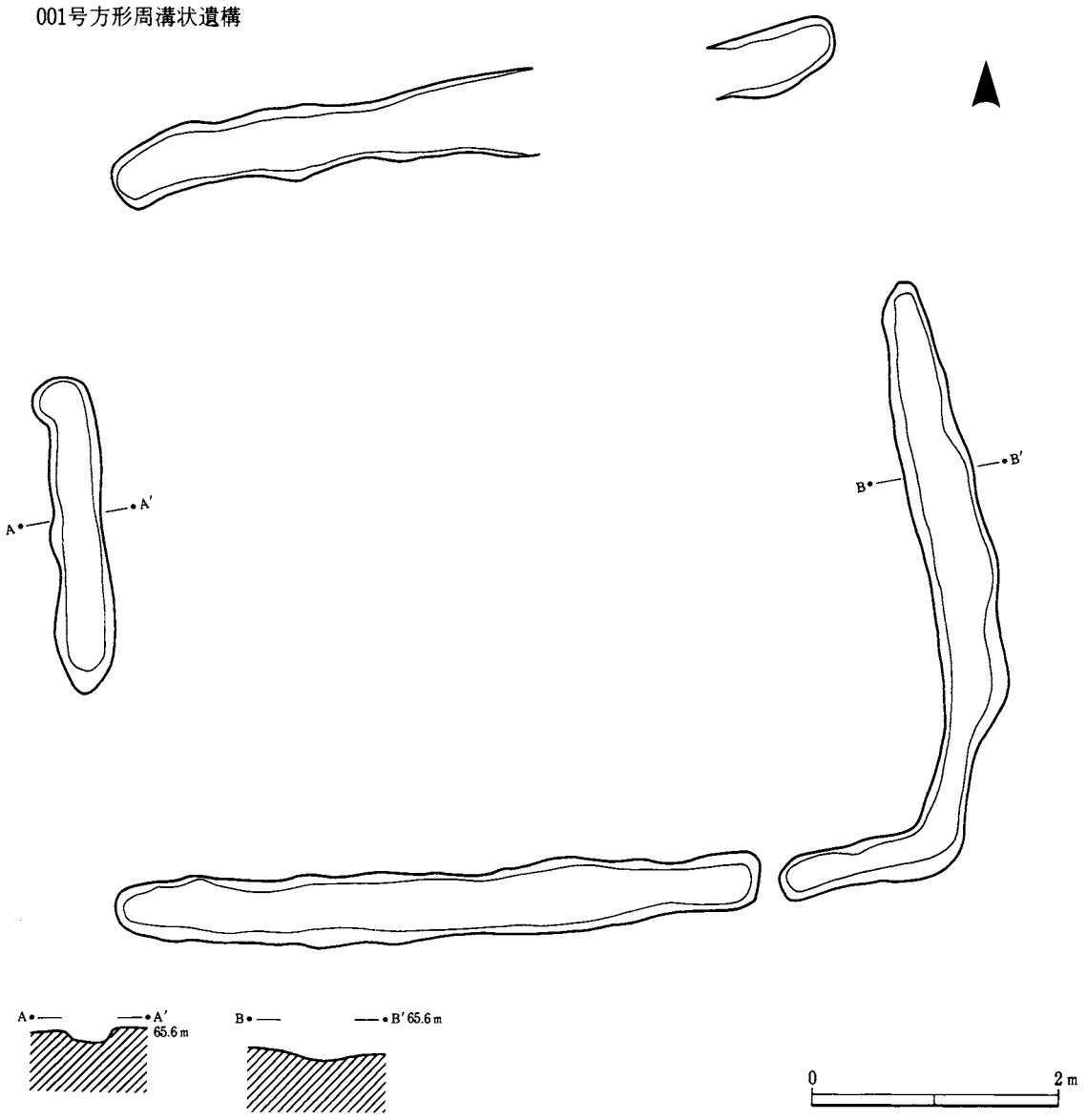
1　遺構

大作頭遺跡B区からは、歴史時代に属すると考えられる遺構は、方形周溝状遺構が1基検出されている。

001号方形周溝状遺構（第82図）

東西約7.6ｍ、南北約7.0ｍの規模を有する方形周溝状遺構である。溝の幅は約1.0ｍ～1.5ｍで、掘込みは軟弱で、深さも20cm弱程度である。溝の覆土は、暗褐色土を主体に黒色土を多く含むものであった。溝は部分的に途切れているが、これは本来的な姿ではなく、後世の耕作などで、削平されてしまったものと思われる。

方形周溝状遺構の溝内からは遺物は出土していない。したがって、001号方形周溝状遺構の設営時期は、厳密には不明である。しかし覆土は明らかに歴史時代のものであり、大作頭遺跡A区でも方形周溝状遺構が検出されていることから、大作頭遺跡A区同様、奈良時代を中心とする時期であることが考えられる。方台部からは、主体部等は検出されなかった。



第82図　B区方形周溝状遺構実測図

R
S
Q
P
O
N
16
17
18
19
20
21
22
23
24
001住
077土
069炉
061炉
063炉
068炉
064炉
065炉
066炉
062炉
057炉
076炉
042炉
070炉
059炉
080炉
048炉
052炉
027炉
081土
082炉
083炉
060炉
078炉
025炉
049土
035土
072炉
001方
073炉
024炉
071炉
074炉
075炉
054炉
044土
020炉
055炉
051炉
026（A）炉
026（B）炉
026（C）炉
031炉
017炉
056土
033土
028土
043炉
053炉
045炉
038土
050土
034炉
008炉
007炉
006炉
015炉
021炉
029土
010土
032土
004炉
019炉
041炉
002炉
003炉
011炉
014土
022炉
023炉
040炉
009炉
012炉
013炉
036炉
039炉
0
（1/800）
20 m

第83図　C区全測図

第４章　大作頭遺跡Ｃ区

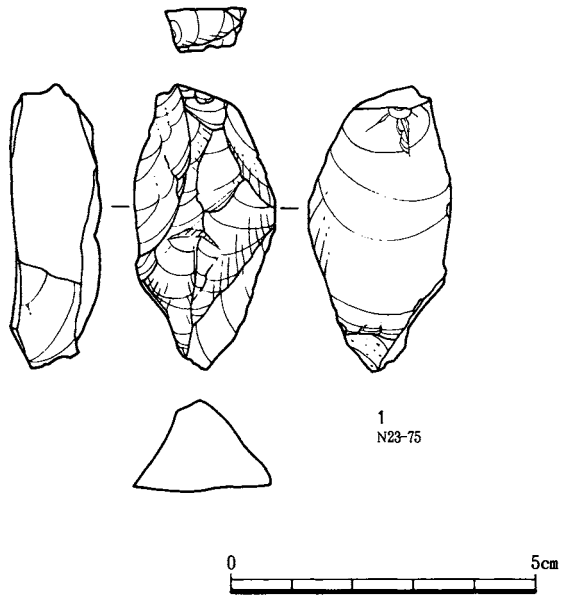
大作頭遺跡Ｃ区は、縄文時代の炉穴61基・土坑15基・住居跡１軒、歴史時代の方形周溝状遺構１基が検出されている。このほか、遺構外からは縄文時代早期を中心とする時期の土器片や、これに伴うものと思われる礫が出土している。

遺跡の中心となる時期は、炉穴・土坑が設営された縄文時代早期である。炉穴・土坑出土土器や遺構外出土土器は、いままで検出例の乏しかった子母口式期から野島式期にかけてのものが主体であり、貴重な資料である。

第１章でふれたとおり、大作頭遺跡は調査地点が３か所に分かれており、これらを西からＡ区、Ｂ区、Ｃ区と呼称し、各区を章ごとに記載することとした。章中では、時代順（古い順から）に節を設定し、各時代のなかでは、遺構と遺物に分けて記載することを基本とした（旧石器時代を除く）。写真図版の掲載については、本文中の章立てや節の構成に連動することが望ましいと思われたが、レイアウトの都合から、各区の遺構をまとめて掲載し、その後に各区の遺物を掲載するという体裁をとった。

第１節　旧石器時代

大作頭遺跡Ｃ区では旧石器時代の石器出土地点は確認されなかった。しかし、縄文時代早期の遺物包含層の調査の段階で、早期の土器群に混じって、旧石器時代に属すると思われる石器が出土した。第84図１は、N23-75地点の縄文時代早期遺物包含層から出土したフレイクである。石材は頁岩である。



第84図　Ｃ区旧石器時代石器実測図

第2節　縄文時代

1　遺構

（1）炉穴

大作頭遺跡C区からは61基の炉穴が検出されている。この61基という数字は、調査段階で炉穴としてカウントした数である。複数の掘込みと複数の燃焼部が認められるものであっても、調査段階で一つの遺構番号を付したものについては、1基として扱っている。調査段階での認識に依拠している。

実測図の掲載方法は、燃焼部と考えられる範囲（地山に熱を受けた痕跡が認められる範囲）と、土層断面中の焼土の範囲を、スクリーントーンで示した（用例参照）。掘込み自体の覆土については、調査段階での記録が比較的省略されていることから、特に説明が必要と考えられるもの以外は省略している。

炉穴実測図の掲載に際しては、番号順に掲載することを基本としたが、レイアウトの都合上、一部順序が前後しているものがある。ただし、その場合であっても、事実記載は、番号順に記している。なお、異なる遺構番号の炉穴が重複・近接し、同一挿図中に掲載されている場合の資料提示は、最も若い遺構番号の位置に準拠しているが、事実記載は番号順に記している。

002号炉穴（第85図、図版16）

長方形と円形の掘込みからなる。長方形の掘込み内に燃焼部が認められる。燃焼部はよく焼けており、焼土の堆積は極めて多い。002号炉穴の設営時期は、覆土中から出土した土器（第97図）から、子母口式期と考えられる。

003号炉穴（第85図、図版16）

楕円形の浅い掘込みに燃焼部が2か所認められる。燃焼部は共によく焼けており、焼土の堆積も多い。東側の燃焼部の焼土の堆積は極めて多い。003号炉穴の設営時期は、覆土中から出土した土器（第97図）から、子母口式期と考えられる。

004号炉穴（第85図、図版16）

長楕円形の2基の掘込みからなり、それぞれの掘込みの端部に燃焼部が認められる。燃焼部は比較的よく焼けており、焼土の堆積も多い。004号炉穴からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

006号炉穴（第85図）

燃焼部のみが残存する炉穴であろうと思われる。3か所の燃焼部からなり、よく焼けており、焼土の堆積も多い。006号炉穴からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

007号炉穴（第85図）

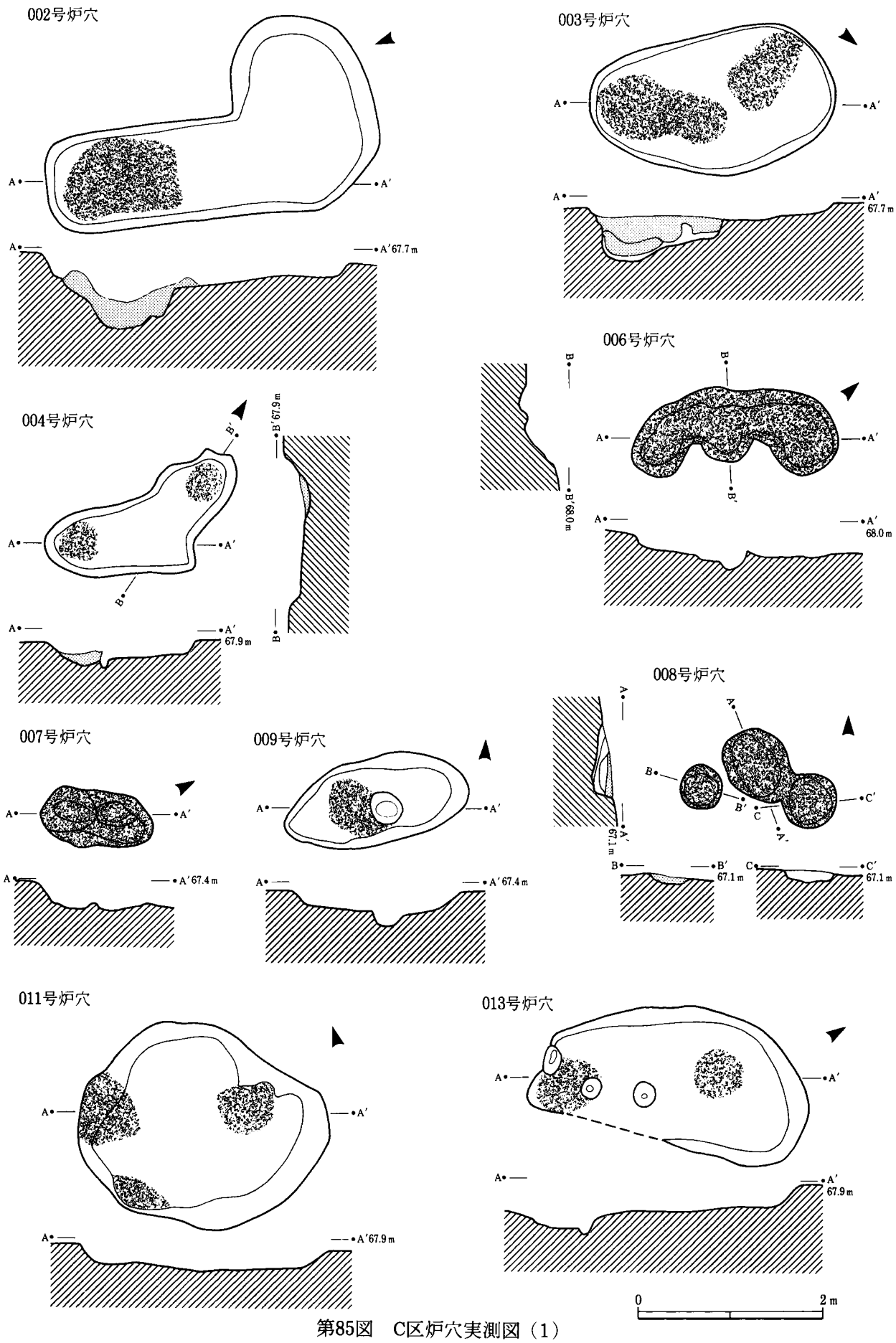
燃焼部のみが残存する炉穴であろうと思われる。2か所の燃焼部からなり、よく焼けており、焼土の堆積も多い。007号炉穴からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

008号炉穴（第85図）

燃焼部のみが残存する炉穴であろうと思われる。3か所の燃焼部からなり、よく焼けており、焼土の堆積も多い。008号炉穴からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

009号炉穴（第85図、図版17）

長楕円形の掘込みの中央に燃焼部が認められる。燃焼部が柱穴状の掘込みによって壊されているので、この柱穴状の掘込みは009号炉穴には伴わないものと思われる。燃焼部は比較的よく焼けており、焼土の堆積も比較的多い。009号炉穴からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。



第85図　C区炉穴実測図（1）

011号炉穴（第85図、図版17）

不整円形の掘込みに、3か所の燃焼部が認められる。燃焼部はあまりよく焼けていないが、焼土の堆積は比較的多い。011号炉穴からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

012号炉穴（第86図、図版17）

3基程度の浅い掘込みからなる炉穴群である。燃焼部が5か所認められることから、最低でも3基の炉穴が重複しているものと思われる。燃焼部はあまりよく焼けていないが、焼土の堆積は比較的多い。012号炉穴の設営時期は、覆土中から出土した土器（第97図）から、子母口式期と考えられる。

013号炉穴（第86図、図版17）

楕円形の浅い掘込みに、2か所の燃焼部が認められる。燃焼部が柱穴状の掘込みによって壊されているので、この柱穴状の掘込みは013号炉穴には伴わないものと思われる。燃焼部はあまりよく焼けていないが、焼土の堆積は比較的多い。013号炉穴の設営時期は、覆土中から出土した土器（第97図）から、子母口式期と考えられる。

015号炉穴（第86図、図版17）

不整形の浅い掘込みに燃焼部が認められる。燃焼部はあまりよく焼けていないが、焼土の堆積は比較的多い。015号炉穴からは土器は出土しているが（第97図）、中期に属するものであり、炉穴の設営時期を示しているとは考えがたい。したがって015号炉穴の設営時期は不明である。

016号炉穴（第86図、図版17）

楕円形掘込みに燃焼部が認められる。燃焼部はよく焼けており、焼土の堆積は多い。016号炉穴からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

017号炉穴（第86図、図版17）

不整形の浅い掘込みに燃焼部が認められる。燃焼部はあまりよく焼けていないが、焼土の堆積は比較的多い。燃焼部の直上から土器片が多く出土している。017号炉穴の設営時期は、覆土中から出土した土器（第97図）から、子母口式期と考えられる。

019号炉穴（第86図）

長楕円形の掘込みに3か所の燃焼部が認められる。燃焼部はあまりよく焼けておらず、焼土の堆積も少ない。019号炉穴からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

020号炉穴（第86図、図版17）

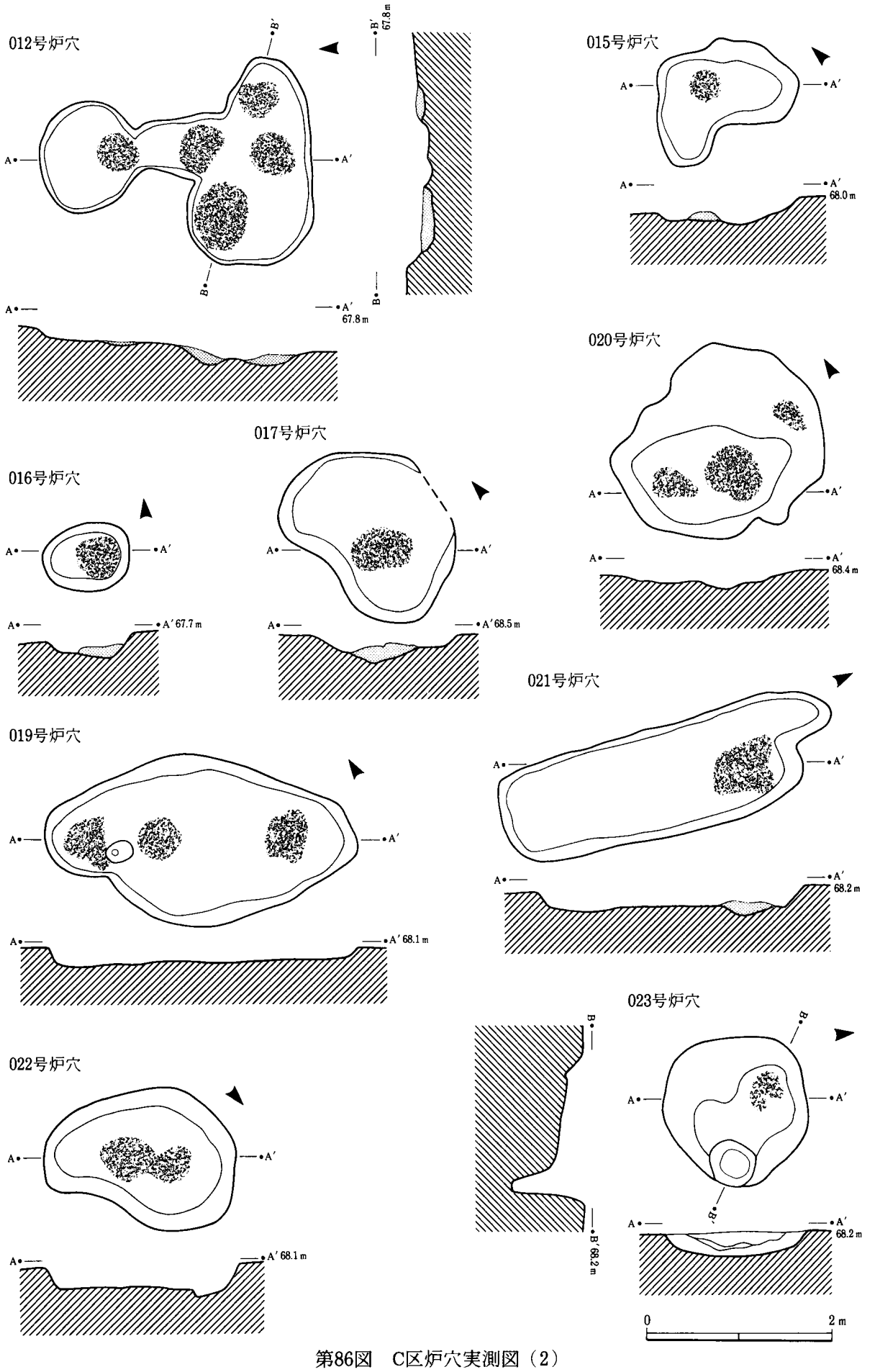
不整形の浅い掘込みに燃焼部が3か所認められる。燃焼部はよく焼けており、焼土の堆積は比較的多い。020号炉穴からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

021号炉穴（第86図、図版18）

長方形の掘込みの北側に楕円形の掘込みが突出するような形態の掘込みである。燃焼部はあまりよく焼けていないが、焼土の堆積は比較的多い。021号炉穴から撚糸文土器が出土している（第97図、図版36）が、021号炉穴の設営時期を撚糸文期とすると、本遺跡の炉穴の設営時期とはかけ離れることから、現段階では設営時期は不明であるといわざるを得ない。

022号炉穴（第86図、図版18）

不整楕円形の掘込みの中央部に燃焼部が認められる。燃焼部のプランから、2か所の燃焼部があったものと思われる。燃焼部は比較的よく焼けており、焼土の堆積は多い。022号炉穴の設営時期は、覆土中か



第86図　C区炉穴実測図（2）

ら出土した土器（第97図）から、子母口式期と考えられる。

023号炉穴（第86図、図版18）

円形の掘込みに燃焼部が認められる。東側の柱穴状の掘込みが023号炉穴に伴うか否かは不明である。燃焼部はあまりよく焼けていない。焼土の堆積は比較的多い。023号炉穴からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

024号炉穴（第87図、図版18）

不整楕円形の掘込みに燃焼部が認められる。底面には5基の柱穴状の掘込みが認められる。南側の柱穴状の掘込みの壁面には、燃焼部の受熱 が認められることから、024号炉穴に伴うものである可能性が高い。燃焼部はよく焼けているが、焼土の堆積は多くない。024号炉穴からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

025号炉穴（第87図、図版18）

不整長楕円形の掘込みの端部付近に2か所の燃焼部が認められる。燃焼部はよく焼けており、焼土の堆積も多い。北側の燃焼部の直上からは土器片が多く出土している。025号炉穴の設営時期は、覆土中から出土した土器（第98図）から、子母口式期と考えられる。

026A号炉穴（第87図、図版18）

楕円形の掘込みに燃焼部が認められる。燃焼部は比較的よく焼けており、焼土の堆積も比較的多い。026A号炉穴からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

026B号炉穴（第87図、図版18）

楕円形の掘込みに燃焼部が認められる。燃焼部は比較的よく焼けており、焼土の堆積も比較的多い。026B号炉穴からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

026C号炉穴（第87図、図版18）

楕円形の掘込みに燃焼部が認められる。燃焼部は比較的よく焼けており、焼土の堆積も比較的多い。026C号炉穴からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

027号炉穴（第87図、図版18）

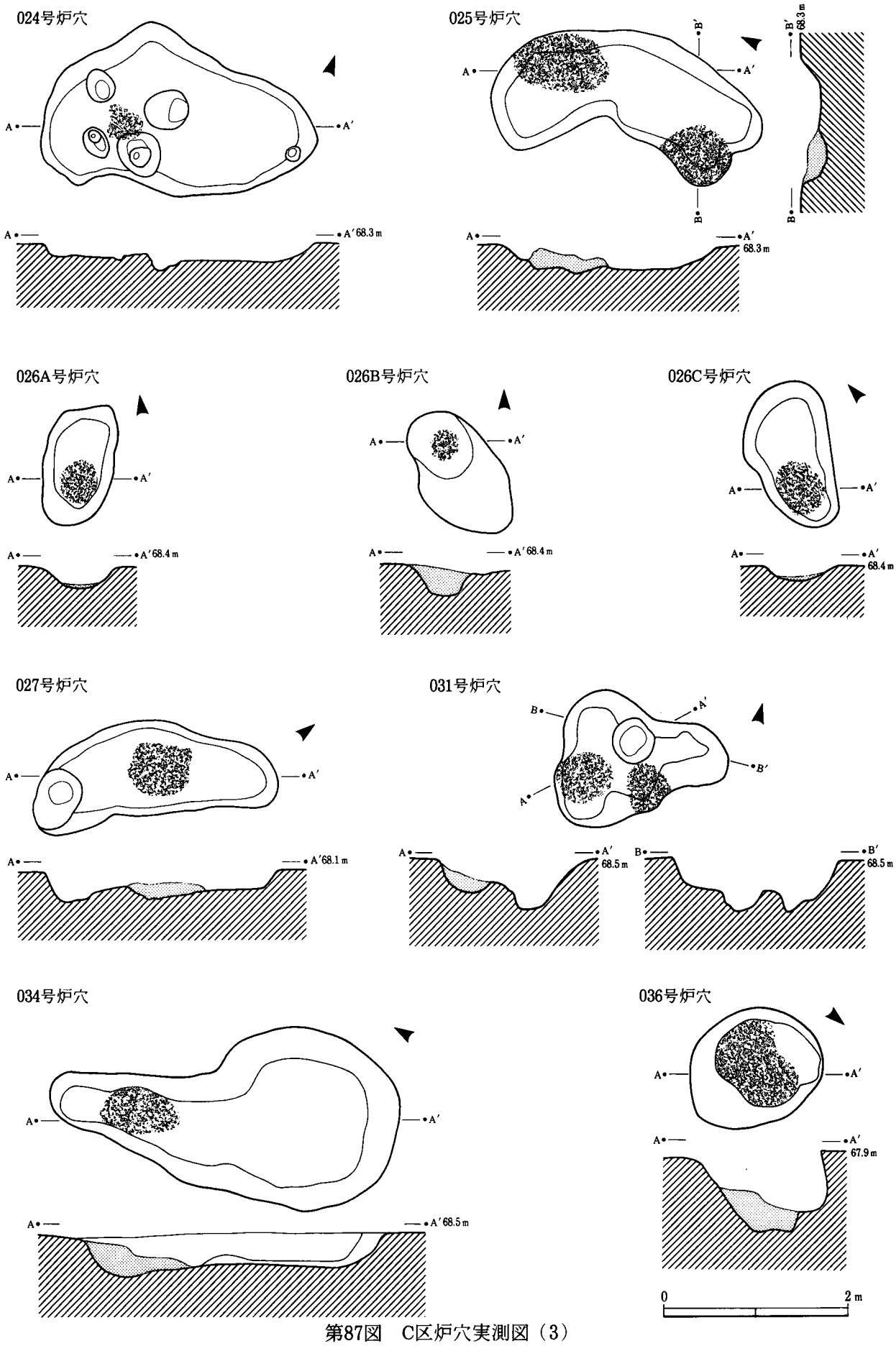
長楕円形の掘込みに燃焼部が認められる。燃焼部は比較的よく焼けており、焼土の堆積も比較的多い。南西側の柱穴状の掘込みが027号炉穴に伴うか否かは不明である。027号炉穴の設営時期は、覆土中から出土した土器（第98図）から、子母口式期と考えられる。

031号炉穴（第87図、図版19）

三角形風の掘込みに2か所の燃焼部が認められる。円形もしくは楕円形の掘込みが2基～3基重複しているような形態の掘込みである。北側の柱穴状の掘込みが031号炉穴に伴うか否かは不明である。燃焼部はよく焼けており、焼土の堆積も多い。南西側の燃焼部の直上からは土器片が多く出土している。031号炉穴の設営時期は、覆土中から出土した土器（第98図）から、子母口式期と考えられる。

034号炉穴（第87図、図版19）

長楕円形の掘込みと円形の掘込みが重複するような形態の掘込みである。燃焼部は長楕円形の部分に認められる。燃焼部は比較的よく焼けており、焼土の堆積は多い。燃焼部の直上から礫が出土している。034号炉穴の設営時期は、覆土中から出土した土器（第98図）から、子母口式期と考えられる。



第87図　C区炉穴実測図（3）

036号炉穴（第87図、図版19）

円形の深い掘込みに、燃焼部が認められる。燃焼部はよく焼けており、焼土の堆積は多い。036号炉穴からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

039号炉穴（第88図、図版19）

円形の浅い掘込みに燃焼部が2か所認められる。掘込みの底面は撹乱による凹凸が認められる。燃焼部はあまりよく焼けておらず、焼土の堆積は少ない。039号炉穴の設営時期は、覆土中から出土した土器（第98図）から、子母口式期と考えられる。

040号炉穴（第88図、図版19）

南側の楕円形の掘込みと、北側の不整形の掘込みからなる。北側の掘込みは、円形もしくは楕円形の2基の掘込みからなるようである。3か所の燃焼部が認められることから、3基程度の炉穴の重複したものであると考えられる。南側の掘込みの燃焼部はよく焼けており、焼土の堆積も多い。北側の掘込みの燃焼部はよく焼けていないが、焼土の堆積は比較的多い。北側の掘込み内の柱穴状の掘込みが040号炉穴に伴うか否かは不明である。040号炉穴の設営時期は、覆土中から出土した土器（第98図）から、子母口式期と考えられる。

041号炉穴（第88図、図版19）

円形の比較的深い掘込みに、燃焼部が認められる。燃焼部はよく焼けており、焼土の堆積は多い。041号炉穴からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

042号炉穴（第88図、図版19）

不整形の掘込みの端部に2か所の燃焼部が認められる。、円形もしくは楕円形の2基の掘込みからなるようである。燃焼部はよく焼けており、焼土の堆積も多い。042号炉穴の設営時期は、覆土中から出土した土器（第98図）から、子母口式期と考えられる。

043号炉穴（第88図）

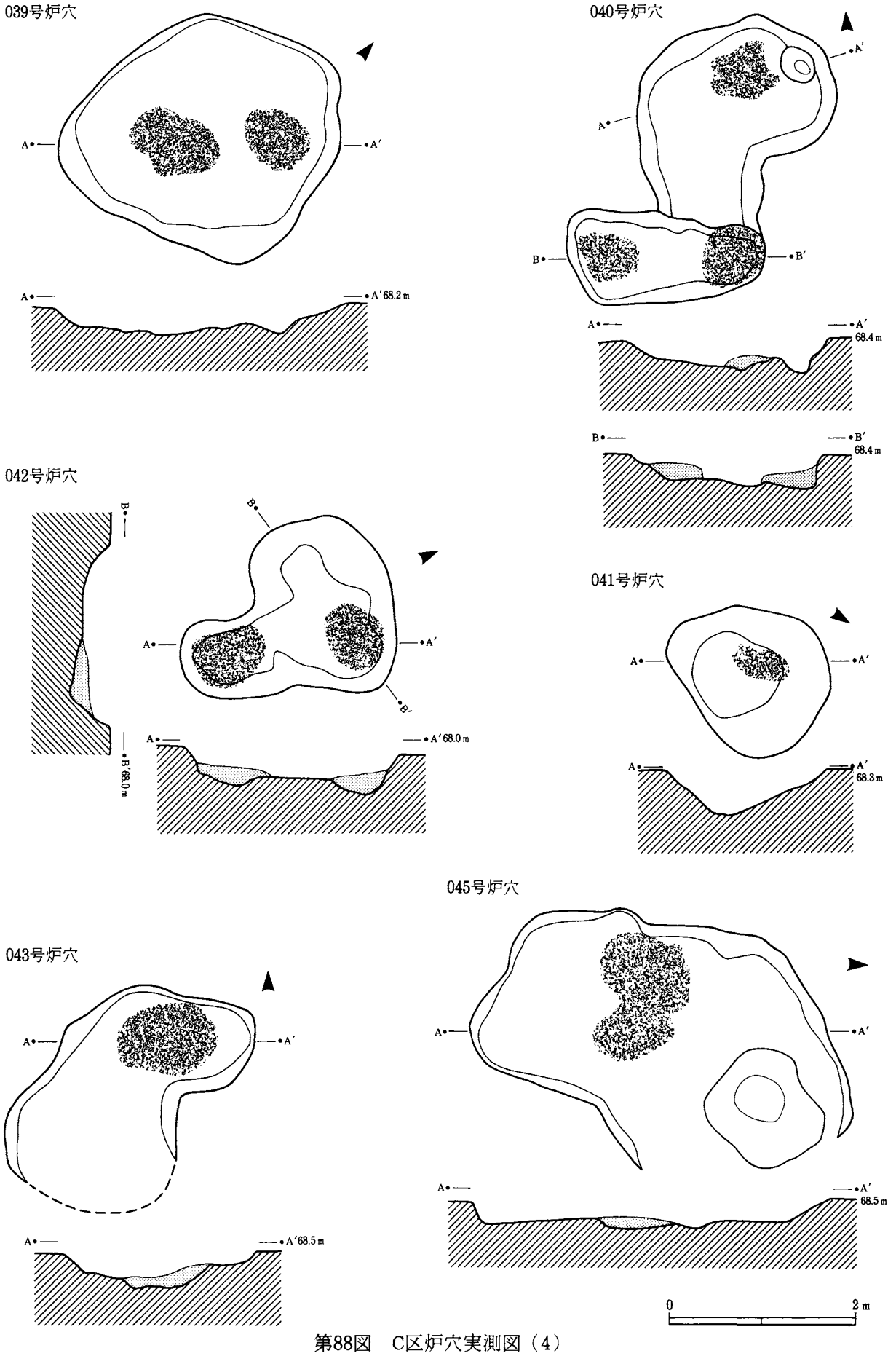
不整形の掘込みの端部に燃焼部が認められる。、円形もしくは楕円形の2基の掘込みからなるようである。燃焼部はよく焼けており、焼土の堆積も多い。043号炉穴からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

045号炉穴（第88図、図版19）

不整円形の大きな掘込みに燃焼部が2か所認められる。底面は撹乱による凹凸が認められ、東側の柱穴状の掘込みが045号炉穴に伴うか否かは不明である。燃焼部は比較的よく焼けており、焼土の堆積も比較的多い。045号炉穴から撚糸文土器が出土している（第98図、図版36）が、045号炉穴の設営時期を撚糸文期とすると、本遺跡の炉穴の設営時期とはかけ離れることから、現段階では設営時期は不明であるといわざるを得ない。

048号炉穴（第89図、図版20）

方形の大きな掘込みと、円形もしくは楕円形の小さな掘込みからなる。燃焼部は2か所認められるが、西側の燃焼部の範囲は極めて狭い。中央の燃焼部の直上からは土器片が出土している。燃焼部は比較的よく焼けており、焼土の堆積も比較的多い。048号炉穴の設営時期は、覆土中より出土した土器（第98・99図）から、野島式期と考えられる。



第88図　C区炉穴実測図（4）

051号炉穴（第89図、図版20）

不整楕円形の掘込みに、2か所の燃焼部が認められる。燃焼部はよく焼けており、焼土の堆積も多い。051号炉穴からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

052号炉穴（第89図、図版20）

長楕円形の掘込みの両端部に、2か所の燃焼部が認められる。南側の燃焼部はよく焼けており、焼土の堆積も多いが、北側の燃焼部はあまりよく焼けておらず、焼土の堆積も少ない。南側の燃焼部の直上からは土器片が出土している。052号炉穴の設営時期は、覆土中から出土した土器（第99図）から、子母口式期と考えられる。

053号炉穴（第89図）

不整の半月形の掘込みに燃焼部が2か所認められる。掘込みは浅く、壁の立上がりが明瞭に検出できなかったので、プランは不安定であるといわざるを得ない。柱穴状の掘込みが053号炉穴に伴うか否かは不明である。燃焼部はあまりよく焼けていないが、焼土の堆積は比較的多い。053号炉穴からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

054号炉穴（第89図、図版20）

楕円形の掘込みであるが、円形の掘込み（西半）と楕円形の掘込み（東半）からなっているようでもある。柱穴状の掘込みが054号炉穴に伴うか否かは不明である。燃焼部は比較的よく焼けているが、焼土の堆積はあまり多くない。掘込み中央部の覆土上層から土器片が多く出土している。054号炉穴の設営時期は、覆土中から出土した土器（第99図）から、子母口式期と考えられる。

055号炉穴（第89図、図版20）

楕円形の掘込みで、なだらかに立ち上がる壁面に燃焼部が認められる。燃焼部はあまりよく焼けておらず、焼土の堆積もあまり多くない。055号炉穴からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

057号炉穴（第90図、図版20）

楕円形の浅い掘込みが3基以上重複するような形態を呈する炉穴で、燃焼部も3か所以上認められる。掘込み中央部の柱穴状の掘込みは燃焼部を壊しており、057号炉穴よりも新規の設営であろう。東側の楕円形の柱穴状の掘込みが057号炉穴に伴うか否かは不明である。燃焼部はよく焼けており、焼土の堆積も多い。057号炉穴の設営時期は、覆土中から出土した土器（第99図）から、子母口式期と考えられる。

059号炉穴（第89図）

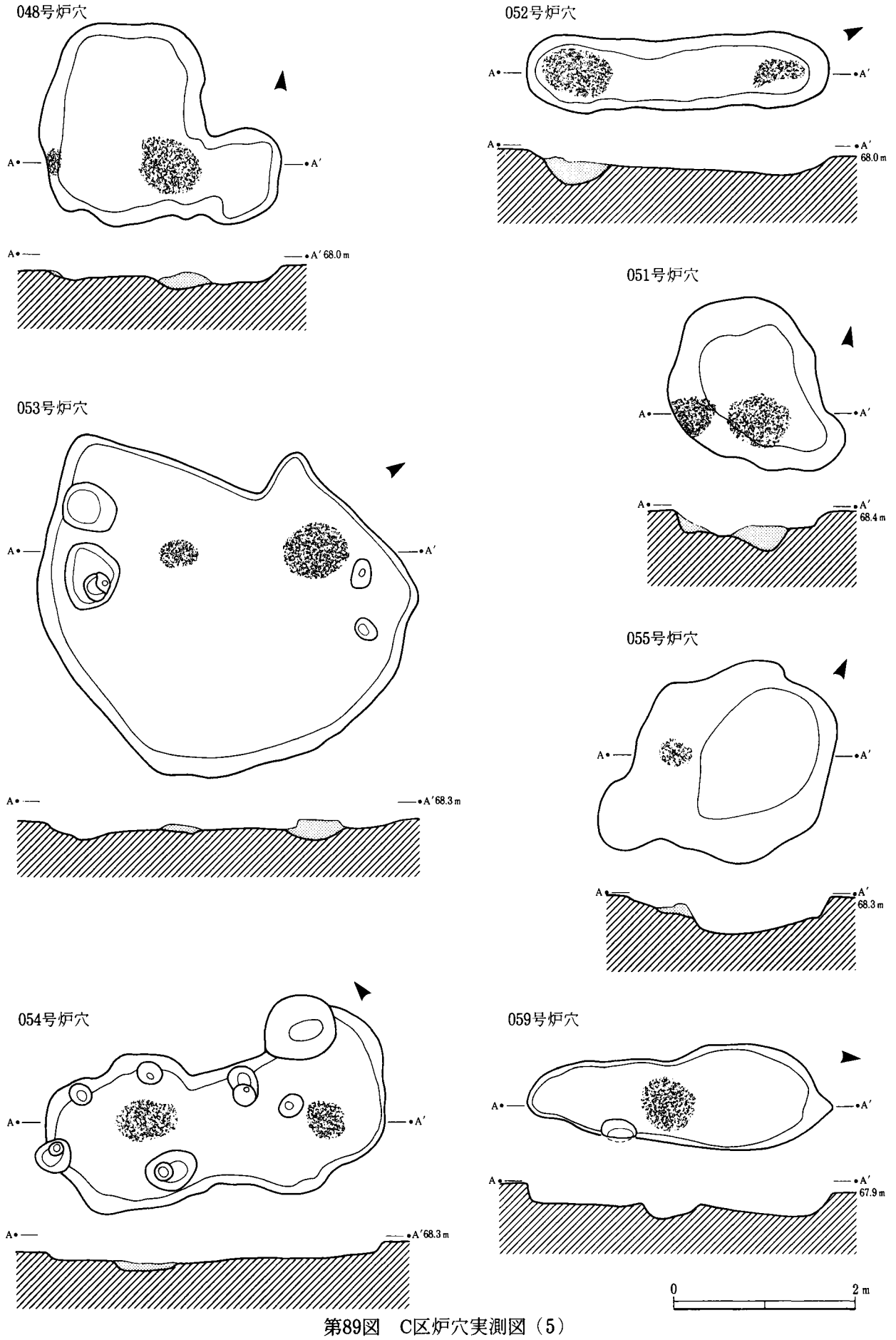
長楕円形の掘込みの中央部に燃焼部が認められる。南東側の柱穴状の掘込みが059号炉穴に伴うか否かは不明である。燃焼部はよく焼けているが、焼土の堆積はあまり多くない。059号炉穴からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

060号炉穴（第90図）

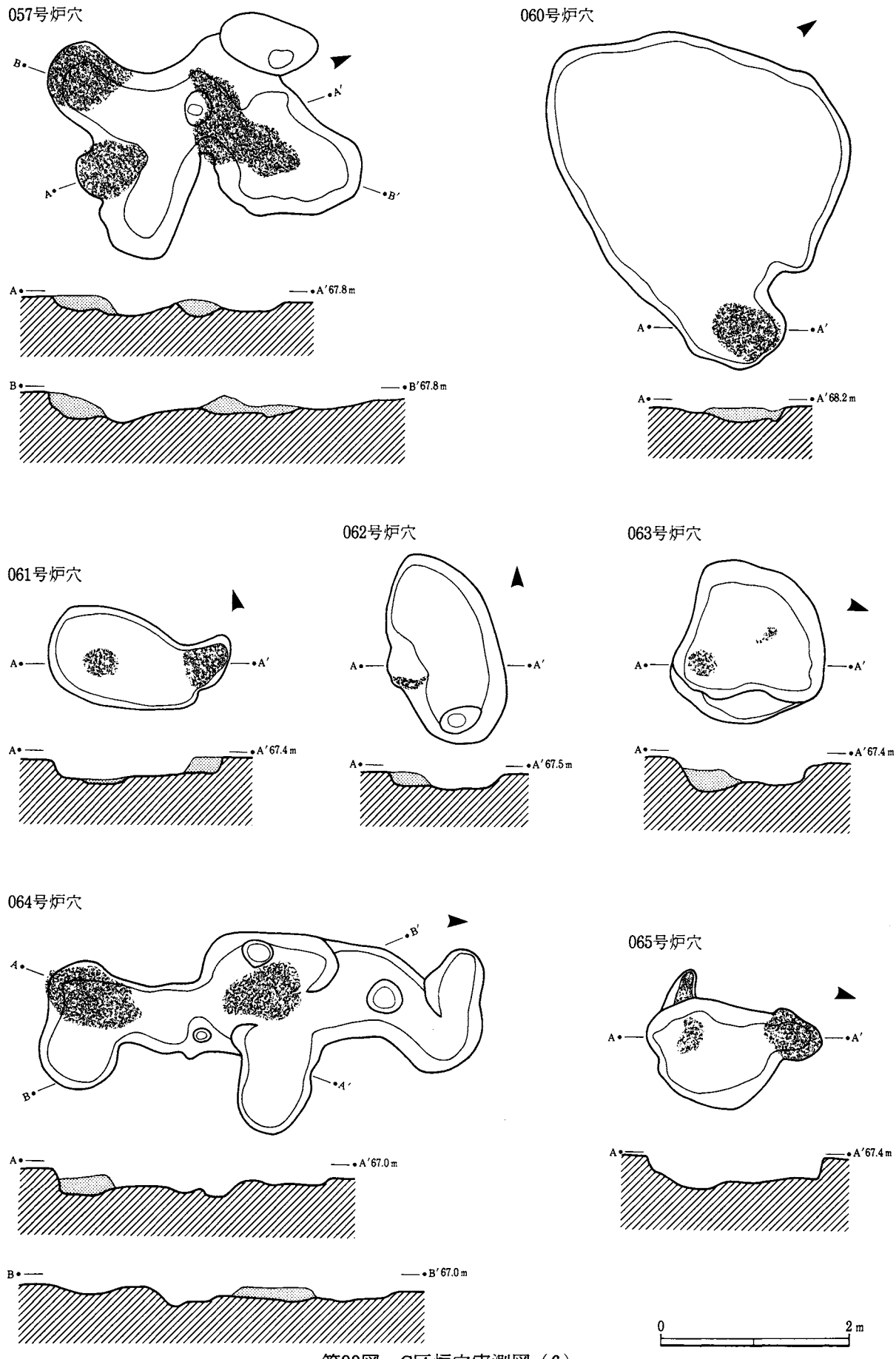
不整円形の浅い掘込みの南東部に円形の突出する掘込みがあり、この部分に燃焼部が認められる。燃焼部はよく焼けており、焼土の堆積も多い。060号炉穴からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

061号炉穴（第90図、図版20）

楕円形の掘込みに狭い範囲の燃焼部が認められ、東側の突出部にも燃焼部が認められる。燃焼部は共に比較的よく焼けており、焼土の堆積も比較的多い。061号炉穴からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。



第89図　C区炉穴実測図（5）



第90図　C区炉穴実測図（6）

062号炉穴（第90図、図版20）

楕円形の掘込みの西側の幅広の壁の部分に燃焼部が認められる。南側の柱穴状の掘込みが062号炉穴に伴うか否かは不明である。燃焼部はよく焼けており、焼土の堆積も多い。062号炉穴からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

063号炉穴（第90図）

不整方形もしくは不整円形の掘込みが2基重複するような形態である。新規に設営されたと思われる掘込み内には、小規模な燃焼部が2か所認められる。共にあまりよく焼けていないものの、焼土の堆積は多い。063号炉穴からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

064号炉穴（第90図）

長楕円形の掘込みの南北方向に楕円形の掘込みが突出するような形態を呈する。本来は、楕円形の掘込みが数多く重複するものであろうと思われる。比較的範囲の広い燃焼部が2か所認められる。燃焼部は共によく焼けており、焼土の堆積も多い。064号炉穴の設営時期は、覆土中から出土した土器（第99図）から、子母口式期と考えられる。

065号炉穴（第90図）

不整楕円形の掘込み内に2か所の燃焼部が認められ、南西の小さな掘込み内にも燃焼部が認められる。燃焼部はいずれもあまりよく焼けておらず、焼土の堆積も少ない。065号炉穴からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

066号炉穴（第91図）

不整円形の掘込みの北西端に燃焼部が認められ、掘込み外にも燃焼部が認められる。掘込み外の燃焼部が属する掘込みは、削平されてしまったものと思われる。燃焼部は共によく焼けており、焼土の堆積も多い。066号炉穴からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

068号炉穴（第91図）

楕円形の掘込みと、掘込み外に燃焼部が認められる。掘込み上面が削平され、掘込みの深い部分と燃焼部のみが残存しているものと思われる。燃焼部はよく焼けており、焼土の堆積も多い。068号炉穴からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

069号炉穴（第91図）

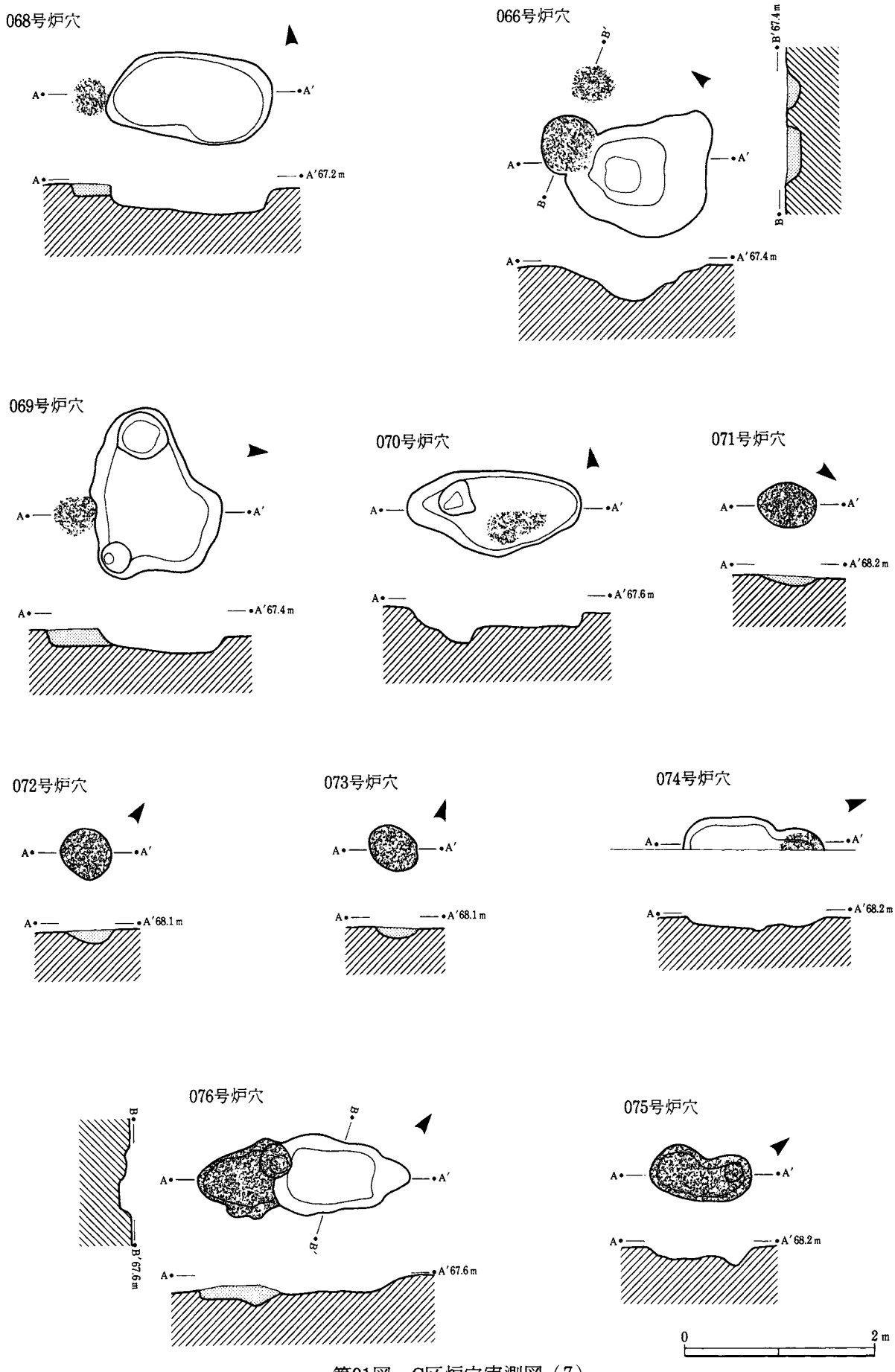
不整形の掘込みと、掘込み外に燃焼部が認められる。掘込み外の燃焼部は明らかにこの掘込みに伴うものと思われる。燃焼部はよく焼けており、焼土の堆積も多い。柱穴状の2基の掘込みが069号炉穴に伴うか否かは不明である。069号炉穴からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

070号炉穴（第91図）

楕円形の掘込みに、燃焼部が認められる。柱穴状の掘込みが070号炉穴に伴うか否かは不明である。燃焼部はよく焼けており、焼土の堆積も多い。070号炉穴からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

071号炉穴（第91図）

燃焼部のみが残存している炉穴である。燃焼部はよく焼けており、焼土の堆積も多い。070号炉穴からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。



第91図　C区炉穴実測図（7）

072号炉穴（第91図）

燃焼部のみが残存している炉穴である。燃焼部はよく焼けており、焼土の堆積も多い。072号炉穴からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

073号炉穴（第91図）

燃焼部のみが残存している炉穴である。燃焼部はよく焼けており、焼土の堆積も多い。073号炉穴からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

074号炉穴（第91図）

楕円形の掘込みの、幅狭の端部に燃焼部が認められる。掘込みの半分程度は調査区外に延びている。燃焼部はよく焼けており、焼土の堆積も多い。074号炉穴からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

075号炉穴（第91図）

燃焼部のみが2か所残存している炉穴である。燃焼部はよく焼けており、焼土の堆積も多い。075号炉穴からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

076号炉穴（第91図）

楕円形の掘込みが2基重複するもので、古い方の掘込みの全面にわたって燃焼部が認められる。柱穴状の掘込みの壁面には燃焼部による受熱の痕跡が認められるので、076号炉穴に伴うか、076号炉穴設営以前のものであろう。燃焼部はよく焼けており、焼土の堆積も多い。076号炉穴からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

078号炉穴（第92図）

不整楕円形の掘込みであると思われるが、溝によって壊されているので断定はできない。燃焼部は3か所認められるが、南西側の燃焼部は範囲が極めて広く、幾つかの燃焼部が重複しているものと思われる。燃焼部はいずれもよく焼けており、焼土の堆積も極めて多い。078号炉穴からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

080号炉穴（第92図）

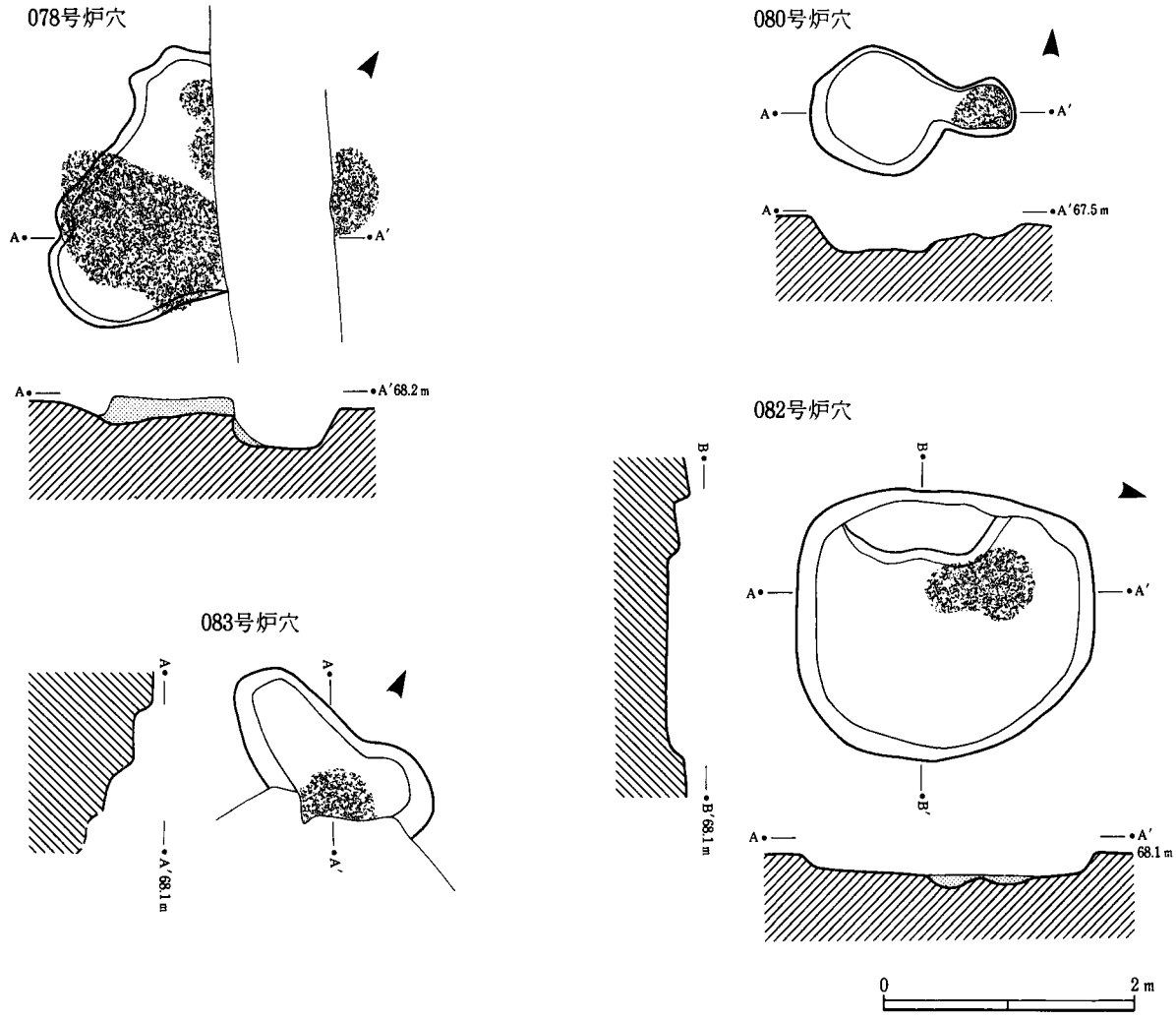
円形の掘込みの東側に小さな円形の掘込みが突出するように掘り込まれている。燃焼部は比較的よく焼けているが、焼土の堆積は多くない。080号炉穴からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

082号炉穴（第92図）

不整方形の掘込みで、燃焼部は2か所が重複しているようなプランを呈する。掘込み内の西側には段差が認められる。燃焼部は比較的よく焼けているが、焼土の堆積はあまり多くない。082号炉穴からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

083号炉穴（第92図）

長楕円形のプランを呈するものと思われるが、南端は壊されているので詳細は不明である。燃焼部はよく焼けているが、焼土の堆積は少ない。083号炉穴からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。



第92図　C区炉穴実測図（8）

（２）土坑

大作頭遺跡C区からは15基の土坑が検出されている。この中には、形態から考えて陥穴と判断されるものもあり、それについては本文中に明記している。

土坑の設営時期については、覆土中から出土した土器片の時期に準拠しているが、土器片が出土している土坑は１基にすぎない。したがって、土器片の出土していない大半の土坑については、時期はおろか、縄文時代に属するものであるかという基本的な疑問がある。しかし、これらの土坑については、調査段階で、確認面のレベルや覆土から考えて縄文時代に属すると判断していることから、縄文時代に属するものとして扱うこととした。

土器片の出土していない土坑の、詳細な設営時期は不明であるが、炉穴の設営時期（早期）・住居跡の設営時期（中期）・包含層の形成時期（早期・中期・後期）のいずれかに相当するものと考えられる。

土坑の土層断面の注記について、提示の必要があると判断されるもののみ本文中に記している。また、複数の掘込みが重複し、本来は複数基の土坑であると判断されるものであっても、調査段階で一つの遺構番号を付したものについては、１基として扱っている。

010号土坑（第93図）

方形のプランで、掘込みはしっかりとしている。010号土坑からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

014号土坑（第93図）

楕円形の浅い掘込みである。壁の大半は漸移層中に設けられており、壁はしっかりとはしていないので、プランは不安定であるといわざるを得ない。014号土坑からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

028号土坑（第93図）

方形プランのしっかりとした掘込みと、柱穴状の掘込みからなる。方形の掘込みのほうが新規の設営であると判断した。028号土坑からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

029号土坑（第93図、図版21）

楕円形のプランで、掘込みは深くしっかりとしている。陥穴であろうと思われる。東側の掘込み上面は崩壊・流出によって壁が斜めに掘り込まれているような状態を呈する。029号土坑からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

032号土坑（第93図）

長方形のプランで、掘込みはしっかりとしている。口径と底径に大きな差がない。032号土坑からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

033号土坑（第93図）

楕円形のプランで、掘込みは深くしっかりとしている。033号土坑の設営時期は、覆土中から出土した土器（第96図）から、子母口式期と考えられる。

035号土坑（第93図、図版21）

楕円形のプランで、掘込みは極めて深い。陥穴であろうか。035号土坑からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

038号土坑（第94図）

楕円形のプランで、掘込みは深くしっかりとしている。038号土坑からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

044号土坑（第94図）

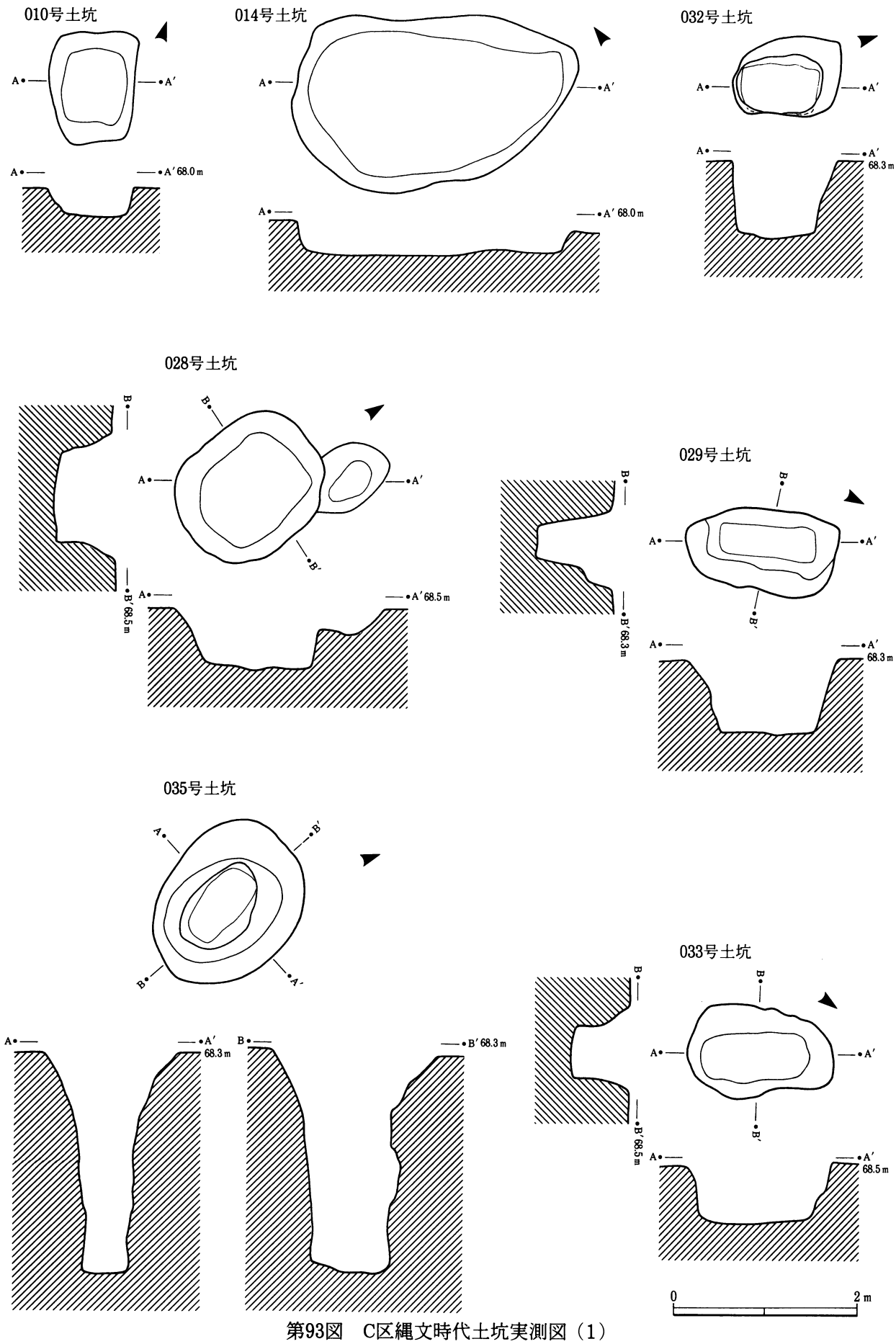
楕円形のプランで、掘込みは深くしっかりとしている。044号土坑からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

046号土坑（第94図、図版21）

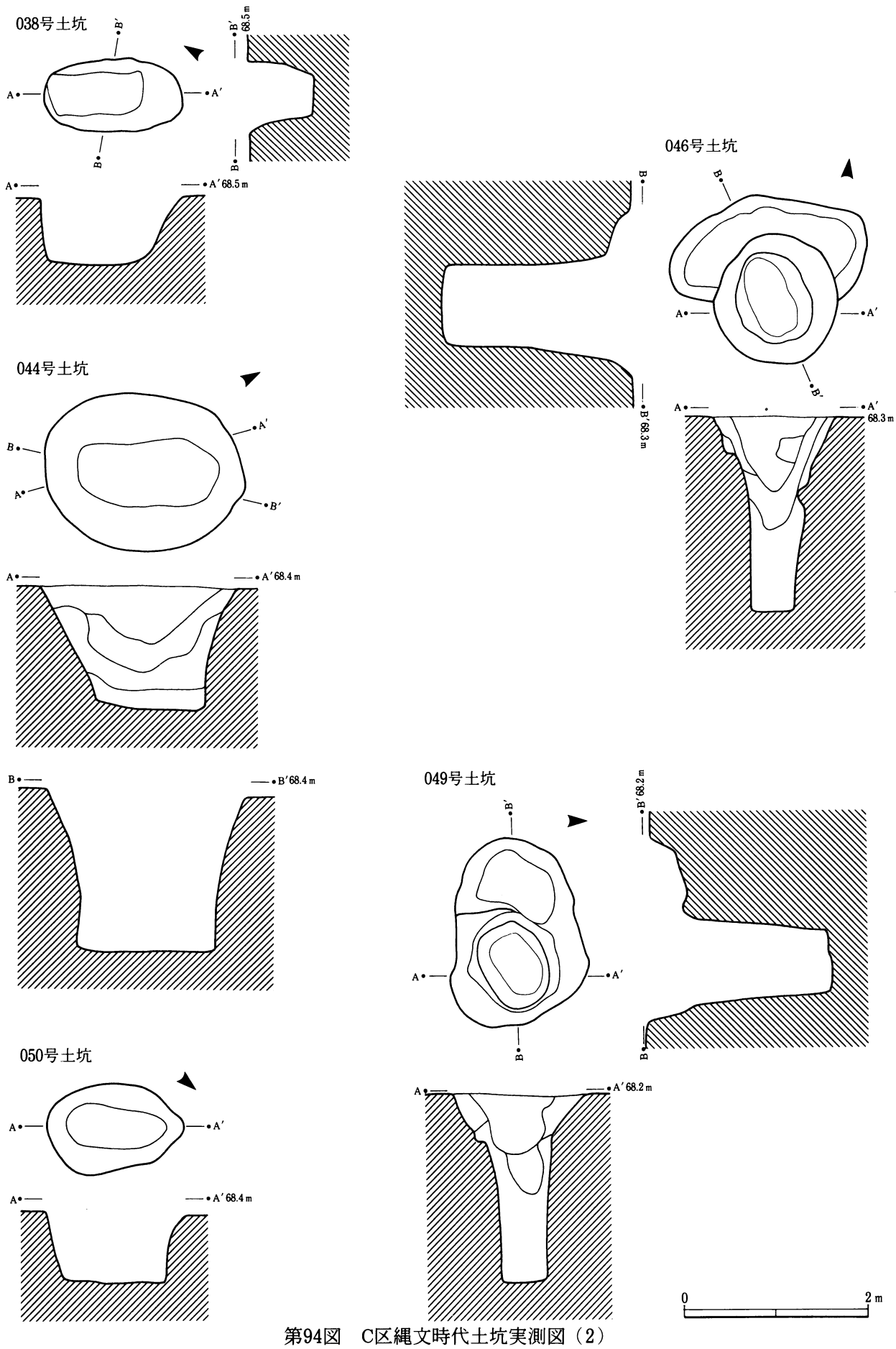
円形の掘込みと楕円形の掘込みからなる。円形の掘込みは極めて深い。陥穴であろうか。楕円形の掘込みは浅く、壁はなだらかに立ち上がる。046号土坑からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

049号土坑（第94図、図版21）

円形の深い掘込みと、円形の浅い掘込みからなる。深い掘込みは陥穴であろうか。049号土坑からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。



第93図　C区縄文時代土坑実測図（1）



第94図　C区縄文時代土坑実測図（2）

050号土坑（第94図）

楕円形のプランで、掘込みは深くしっかりとしている。050号土坑からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

056号土坑（第95図）

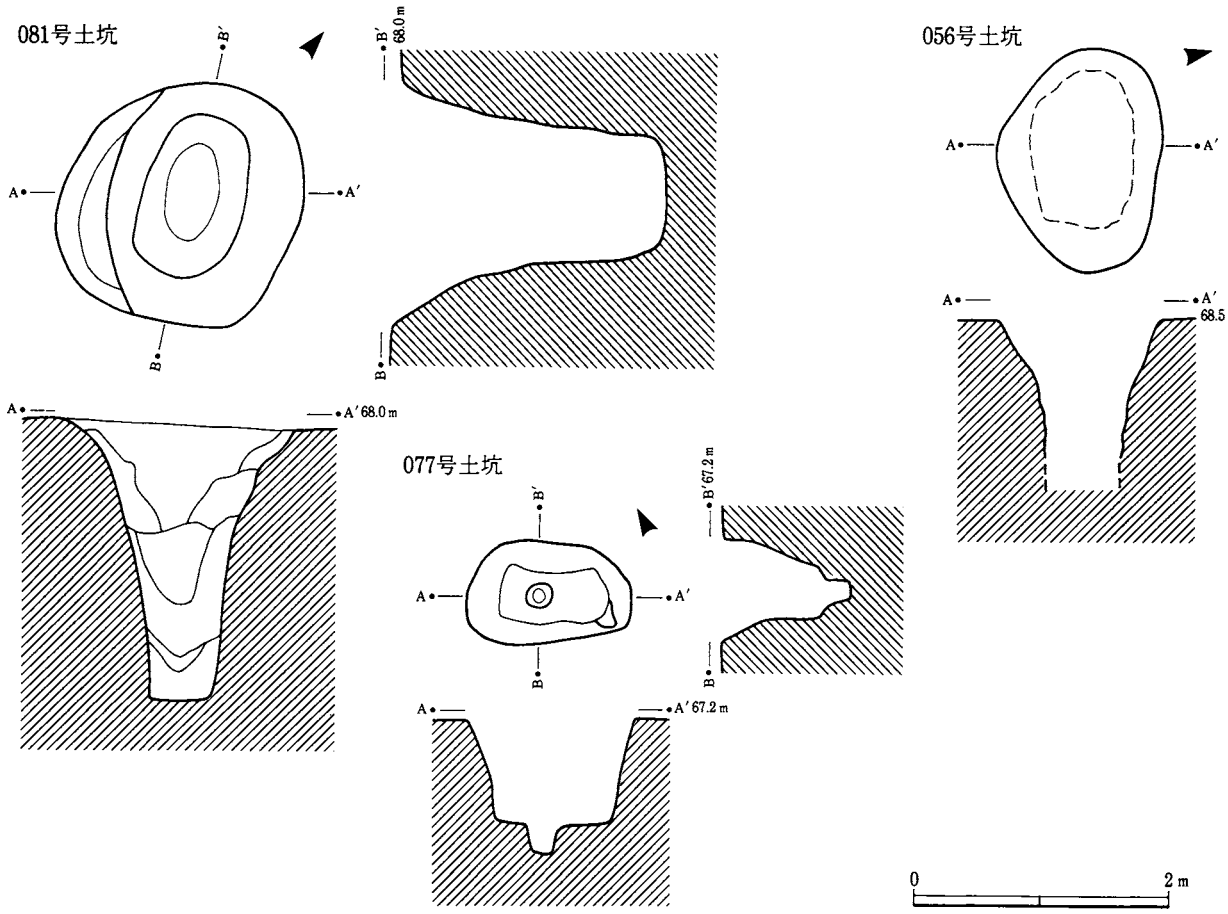
楕円形のプランで、掘込みは深い。地山の上半が脆弱であったため、崩壊の危険があり、底面の検出は行えなかった。陥穴であろうか。056号土坑からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

077号土坑（第95図）

楕円形もしくは方形のプランで、掘込みは深い。陥穴であり、底面のピットは077号土坑に伴うものと思われる。077号土坑からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。

081号土坑（第95図）

楕円形のプランで、掘込みは深い。陥穴であろうか。西側の浅い掘込みは、単独の土坑ではなく、深い掘込みの壁の上部が、崩壊・流出してしまった部分であろう。081号土坑からは土器は出土していないので、設営時期は不明である。



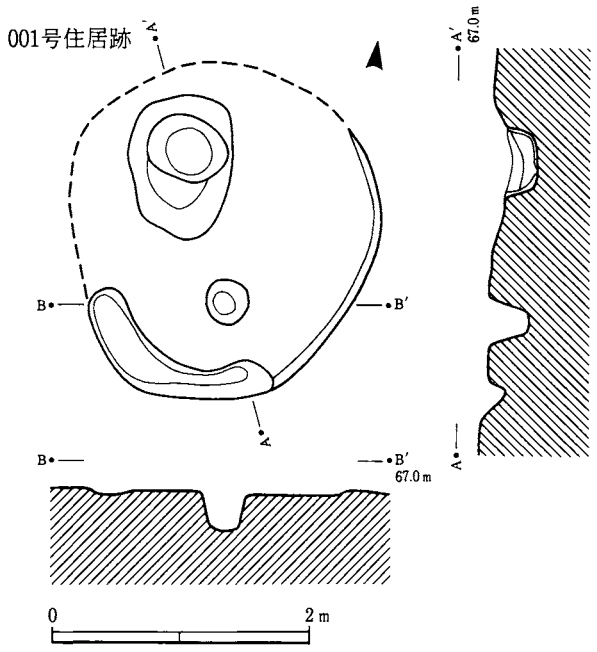
第95図　C区縄文時代土坑実測図（3）

（３）住居跡

001号住居跡（第96図、図版21）

円形のプランであろうと思われる。掘込みは極めて浅く、北西半の壁は検出できなかった。南西側の壁に沿うように、幅広の壁溝状の掘込みが検出されたが、掘込みは５cm程度であり、その性格は不明である。柱穴は１本検出され、掘込みは比較的しっかりとしている。炉は北西側から検出された。覆土は暗褐色土を主体に焼土を多く含むもので、掘込みの底面や壁面に沿うように焼土層が認められた。炉を囲むように掘り込まれている楕円形の浅い掘込みの性格は不明である。床面はしまりにかける。

001号住居跡の覆土からは土器片が出土している。いずれも脆弱な焼成であり、取上げの段階で崩壊が進行してしまった。整理作業の段階での接合・復元に努めたが、図示できるほどの大きさには接合できなかった。破片は加曽利ＥⅡ式もしくはⅢ式のキャリパー形土器の胴部破片であろうと思われ、001号住居跡の設営時期を示しているものと思われる。



第96図　C区縄文時代住居跡実測図

2　遺物

大作頭遺跡C区から出土した縄文時代の遺物は、土器・石器・礫に限られる。このうち実測図を提示するものは土器と石器であり、礫については出土状況（分布状況）の提示と、基礎的な分析（重量・大きさ・遺存度）を行うものとする。

土器は、遺構ごとに掲載し、その後に遺構外出土を掲載した。掲載順序は、遺構出土については、遺構の事実記載の順番に従っている。遺構外出土については、型式ごとの分類に準拠するのではなく、A区内での各時期別の土器片の分布状況が概観できるように、大グリッドごとに掲載した。掲載する土器の取捨選別の段階で、図示不可能な小破片や、細別時期が不明な条痕のみの破片・無文の破片は掲載しないものとした。胎土中に繊維を含む土器については、断面中にドットを付しておいた。

石器は、大作頭遺跡B区での石器組成（縄文時代早期の炉穴・土坑を主体とする遺跡の石器組成）を概観できるように、出土地点ごと（遺構ごと・グリッドごと）による提示ではなく、器種ごとに掲載することを基本とした。実測図を提示した石器は、完形もしくはこれに準ずるものに限った。なお、実測図を提示しないものについては、全点にわたり器種・石材・計測値等を第5表に示した。実測図に示した石器についても同様の作業を行っている。石器実測図に用いているスクリーントーンの用例は凡例に示している。

（1）土器

大作頭遺跡C区から出土した縄文式土器は、遺構内・遺構外出土にかかわらず、早期の撚糸文土器や子母口式土器が主体であり、少量の加曽利E式土器・加曽利B式土器が認められるにすぎない。

土器の事実記載に際しては、拓影図・断面図・写真（いずれも縮尺は1/3）によって確認できる要素については省略する。事実記載はあくまで、拓影図等によって表現することのできない要素を記す方法である。内面の拓影図については、遺存状態が良好なものや、特殊なものについては示している。内面の調整の有無や状態については、拓影図で示していないものについては、その都度記載している。土器型式名については、遺構出土のものに関しては、遺構の設営時期を推し量る際に重要であることから、その都度記載したが、遺構外出土のものに関しては、明確にする必要があるものに限り記載し、全点にわたり記載しているわけではない。

子母口式土器は市原市域のみならず、千葉県内での出土例はあまり多くない。また、大作頭遺跡（A区・B区・C区）出土の子母口式土器は、その終末期の様相をよく示した土器群であり、今後の引用・分析の対象となることが十分予想される。したがって、主要な土器群については巻頭のカラー図版に示し、文様・施文方法・口唇部加飾の詳細を示すために接写を行い（図版43～48　縮尺は任意）、今後の活用に向けての便宜を図っている。

条痕のみの土器・擦痕のみの土器・無文土器など、形式学的な特徴に乏しい土器については、胎土・焼成や有文土器の量的な多さから、子母口式土器と判断したものが多い。現実には田戸上層式土器の新しい部分から野島式土器の古い部分の土器も少なからず含まれている可能性が高い。しかし、破片資料でこれらを厳密に区別することは困難であることから、ここでの子母口式土器とは、若干の時間幅（田戸上層式土器の新しい部分から野島式土器の古い部分）を有していることを明記しておきたい。

また、条痕としたものの中には、貝殻条痕と絡条体条痕が含まれている。明確に絡条体条痕であると判断されるものはそのように記しているが、明確に区別できないものは単に条痕と記している。

a　炉穴出土土器

002号炉穴出土土器（第97図、図版35）

1・2は同一個体であろうと思われる。2の器表面には、太い絡条体の浅い押捺が施される。内面には軽易な擦痕が認められる。子母口式土器である。

003号炉穴出土土器（第97図、図版35）

1は内外面ともに条痕が認められる。3～5は同一個体である。3は波状口縁部の破片である。3は縦位の沈線に挟まれた部分に、板状ないし篦状工具による幅広の浅い凹線が施される。この凹線はZ字状に施される。細い沈線で区画された部分に凹線が施されることから、区画文の萌芽が認められる土器片であり、野島式土器的な要素を多分に有するが、子母口式土器の範疇におさめておくことが無難であろうと思われる。1～5は子母口式土器である。

012号炉穴出土土器（第97図、図版35）

1は受熱により、内外面ともに剥落が進行している。内外面ともに擦痕が認められる。子母口式土器である。

013号炉穴出土土器（第97図、図版35）

1は器表面のみに条痕が認められる。子母口式土器であろう。

015号炉穴出土土器（第97図）

1は中期後半のキャリパー形土器の胴部上半の破片で、破片上端の隆帯は、口縁部と胴部を区画する隆帯であろう。

017号炉穴出土土器（第97図、図版35）

1・2・4は内外面ともに擦痕が認められる。3は内外面ともに軽易な擦痕が認められる。いずれも子母口式土器であろう。

021号炉穴出土土器（第97図、図版36）

1は撚糸文土器である。

022号炉穴出土土器（第97図、図版36）

1は内外面ともに条痕が認められる。1・2共に子母口式土器であろう。

025号炉穴出土土器（第98図、図版36）

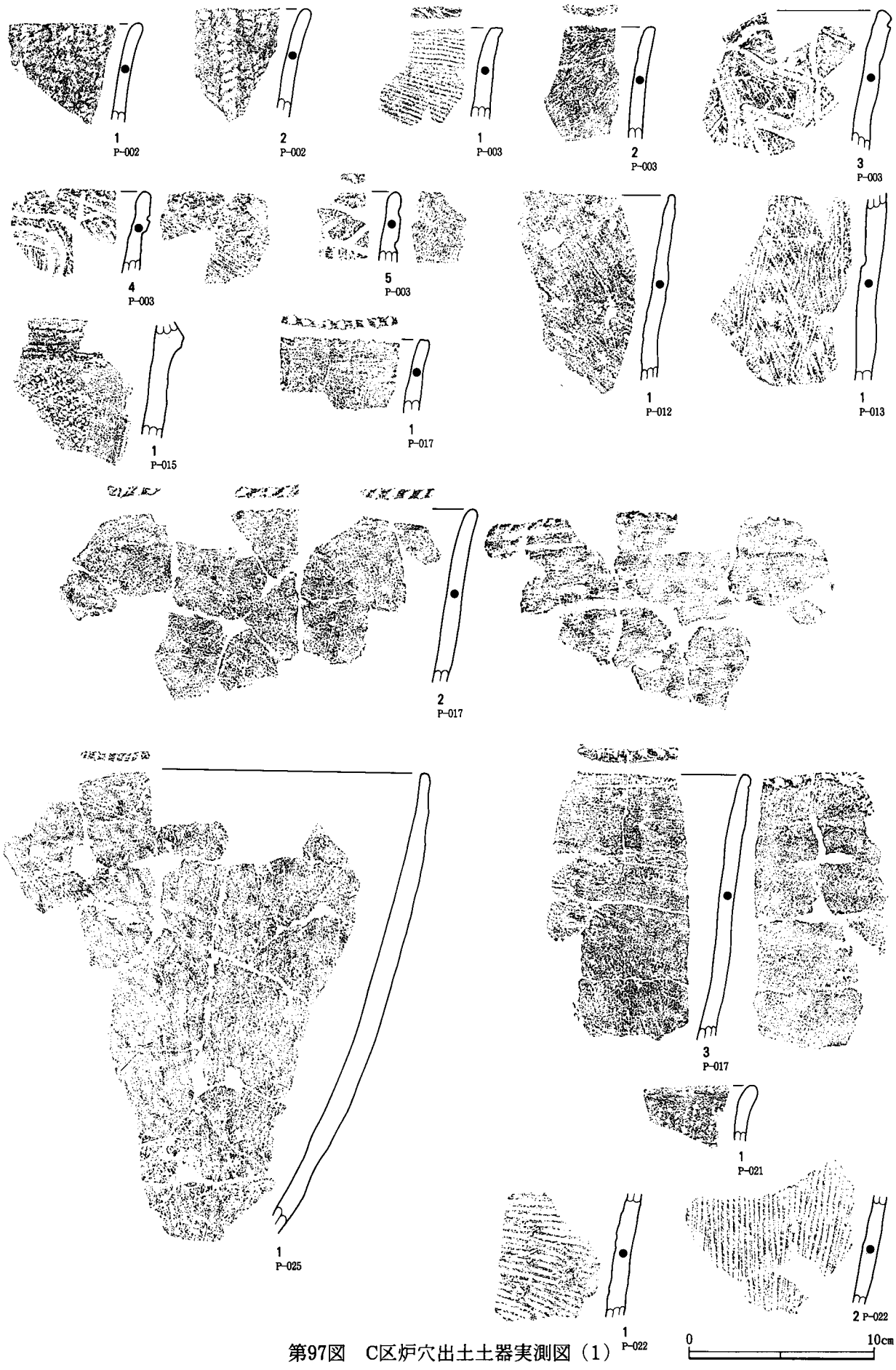
1・3は同一個体で、器表面には擦痕が認められる。2も擦痕が認められる。1～3の内面の擦痕はあまり顕著ではない。子母口式土器である。

027号炉穴出土土器（第98図、図版36）

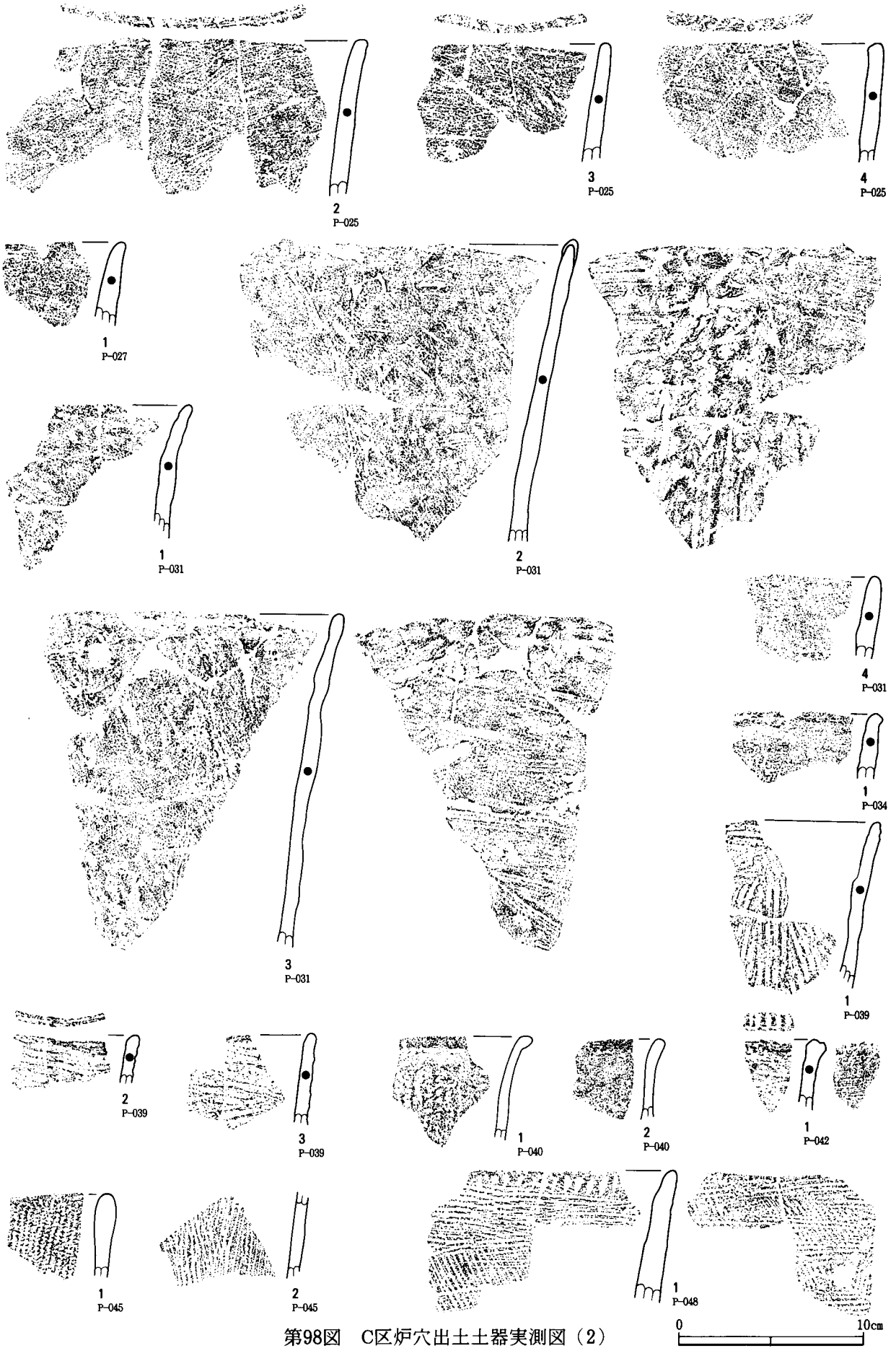
1は内外面ともに軽易な擦痕が認められる。子母口式土器である。

031号炉穴出土土器（第98図、図版36）

2は内外面ともに粗い擦痕が認められる。口縁左端は波状口縁であるが、波状部上半が破損しており、形態は不明である。3は内外面ともに擦痕が認められる。器表面の中央やや右側には、破片全体を縦断するように縦位の際沈線が施され、この沈線の両側に斜め下の方向に向けて、細沈線が施される。全体としては綾杉状の意匠である。子母口式土器にこのような細沈線が認められる例が散見されていたが、小破片のものが多く、調整の段階で偶然に生成した可能性などが指摘されていたが、3のような明瞭な意匠を有する例は極めて珍しいものといえる。1～4は子母口式土器である。



第97図　C区炉穴出土土器実測図（1）



第98図　C区炉穴出土土器実測図（2）

034号炉穴出土土器（第98図、図版36）

1は、内外面ともに軽易な擦痕が認められる。子母口式土器である。

039号炉穴出土土器（第98図、図版36）

1の器表面は、口縁端部では横位方向の条痕が、胴部では縦位の条痕が認められる。1～3は子母口式土器であろう。

040号炉穴出土土器（第98図、図版36）

1は撚糸文土器である。2は無文であるが、胎土・焼成から判断し、子母口式土器と思われる。

042号炉穴出土土器（第98図、図版36）

1は口縁端部が若干肥厚し、内外面ともに擦痕が認められる。子母口式土器である。

045号炉穴出土土器（第98図、図版36）

1・2は撚糸文土器である。

048号炉穴出土土器（第98•99図、図版36）

1は口縁端部に刻みが施される。刻みの下には横位方向の条痕が施され、破片左下では縦位の条痕が施される。内面の条痕は横位と斜方向である。2の器表面には縦横方向の条痕が施される。縦位の条痕の後に横位の条痕調整がなされる。内面も同様の条痕である。1・2ともに野島式土器である。

052号炉穴出土土器（第99図、図版36）

1は内外面ともに擦痕が認められる。子母口式土器である。

054号炉穴出土土器（第99図、図版36）

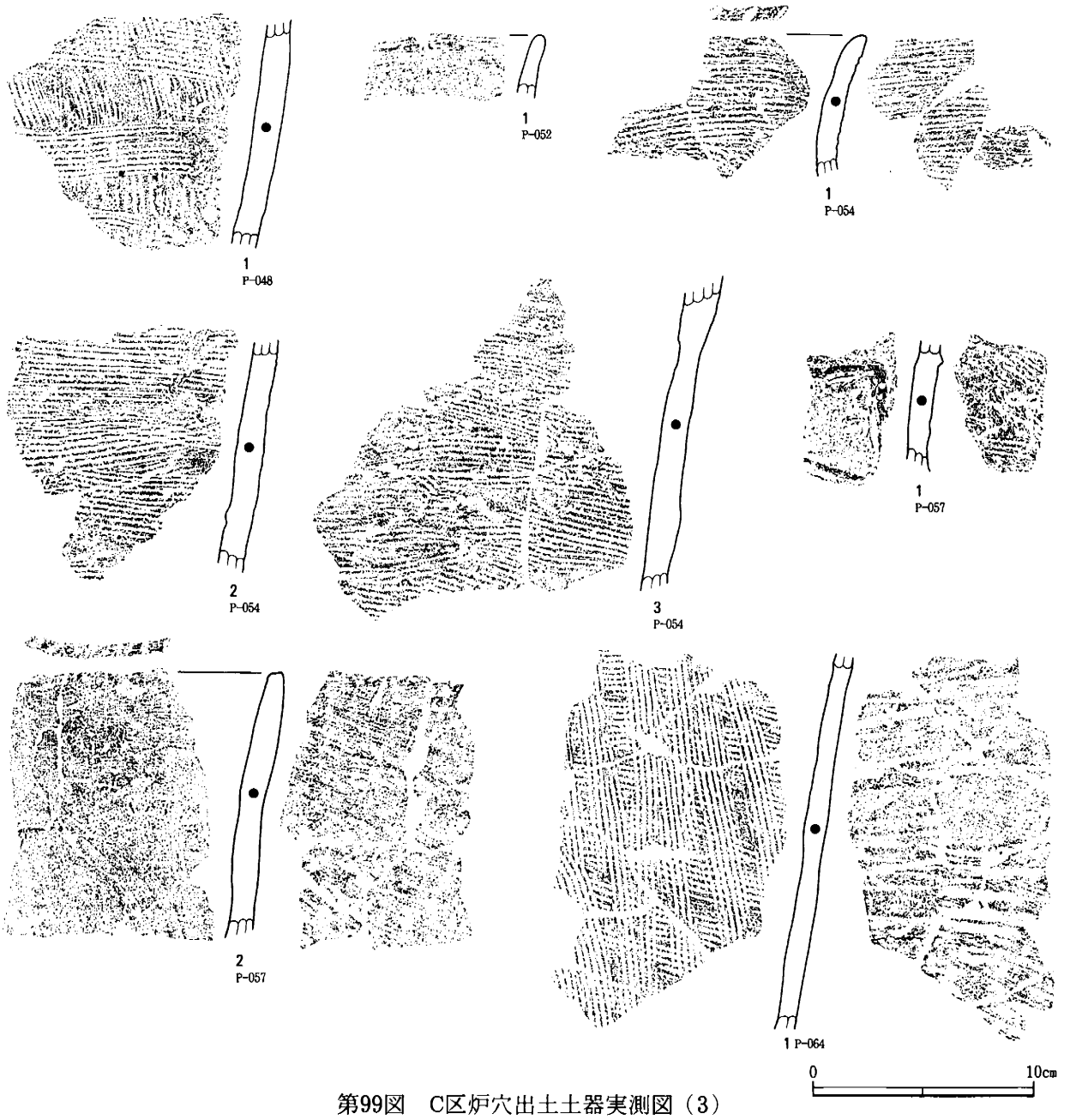
1～3は同一個体の可能性が高い。内外面ともにしっかりとした条痕が認められる。子母口式土器であろうと思われるが、野島式土器の可能性もある。

057号炉穴出土土器（第99図、図版36）

1は隆帯が貼付され、隆帯の両脇は軽易なナゾリが認められる。子母口式土器であろうか。2は内外面ともに軽易な擦痕が認められる。子母口式土器である。

064号炉穴出土土器（第99図、図版37）

1は横位の条痕の後に、縦位の条痕調整がなされる。子母口式土器である。

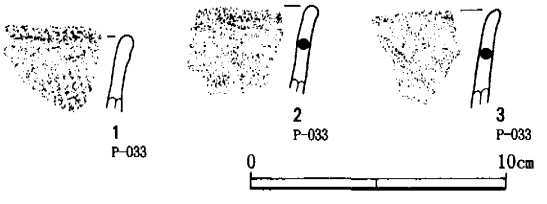


第99図　C区炉穴出土土器実測図（3）

b　土坑出土土器

033号土坑出土土器（第96図、図版37）

1は撚糸文土器で、2・3・は胎土・焼成から判断して子母口式土器と思われる。



第100図　C区縄文時代土坑出土土器

c　遺構外出土土器

ここでは、遺構外から出土した縄文土器を扱う。遺構外出土については、型式ごとの分類に準拠するのではなく、C区内での各時期別の土器片の分布状況が概観できるように、大グリッドごとに掲載した。なお、遺物番号は大グリッドごとに更新し、出土した小グリッドが判明しているものについては、その小グリッド名を遺物番号の脇に記している。

なお、縄文時代以外の遺構（C区では001号方形周溝状遺構）から出土した縄文土器についても、遺構外出土土器としてここに提示している。また、大作頭遺跡A区・B区・C区のどの地区から出土したか判然としない表採資料（大作頭遺跡表採土器）について、便宜的にここで扱うこととした（第102図）。これとは別に大作頭遺跡C区の表採資料（C区表採土器）も掲載している（第101図）。

001号方形周溝状遺構出土土器（第101図、図版37）

1・2は後期中葉に属する粗製土器である。

N23区出土土器（第101図、図版37）

1は撚糸文土器である。2は横位の集合沈線の上に断面が三角形の隆帯が貼付される。田戸上層式土器の終末期の破片であろうか。

O23区出土土器（第101図、図版37）

1・5・7は撚糸文土器である。7の口縁端部には斜め方向から横方向の撚糸文が施される。2・3・6は子母口式土器で、6の器表面には条痕が認められる。4は後期中葉に属する。

P22区出土土器（第101図、図版37）

2・3は撚糸文土器で、1の器表面には条痕が認められる。子母口式土器である。

P23区出土土器（第101図、図版37）

3・4・6は撚糸文土器である。1は横位の撚糸文が認められる。内面には軽易な擦痕のような調整が認められる。時期は不明である。2は器表面に軽易な擦痕が認められる。子母口式土器であろう。5は後期中葉に属する。

Q22区出土土器（第101図、図版37）

1は撚糸文土器である。

Q23区出土土器（第101図、図版37）

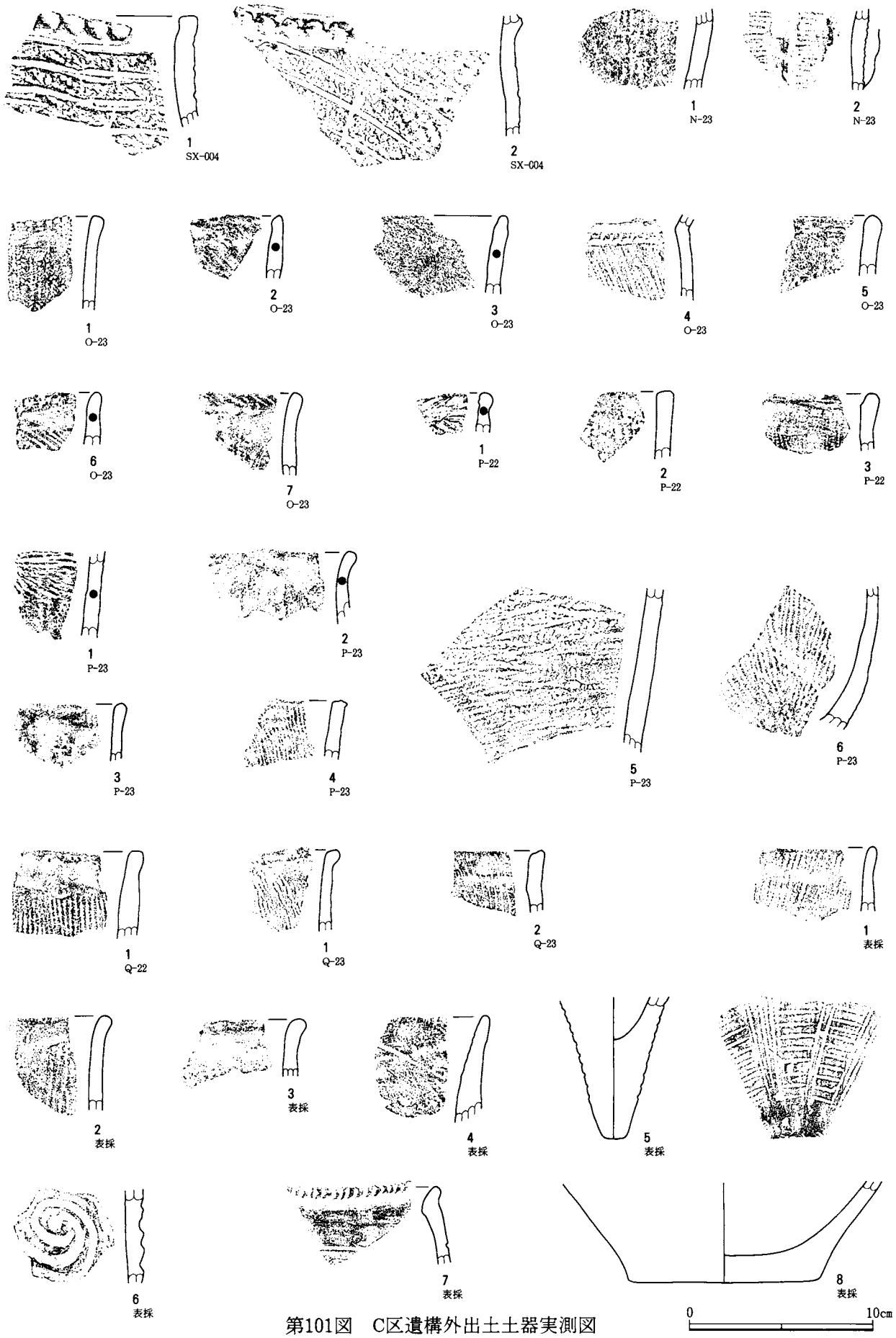
1・2は撚糸文土器である。

C区表採土器（第101図、図版37）

1・2・3は撚糸文土器である。4は胎土・焼成から判断し、子母口式土器と思われる。5は田戸下層式土器である。6・8は中期後半に属し、7は後期中葉に属する。

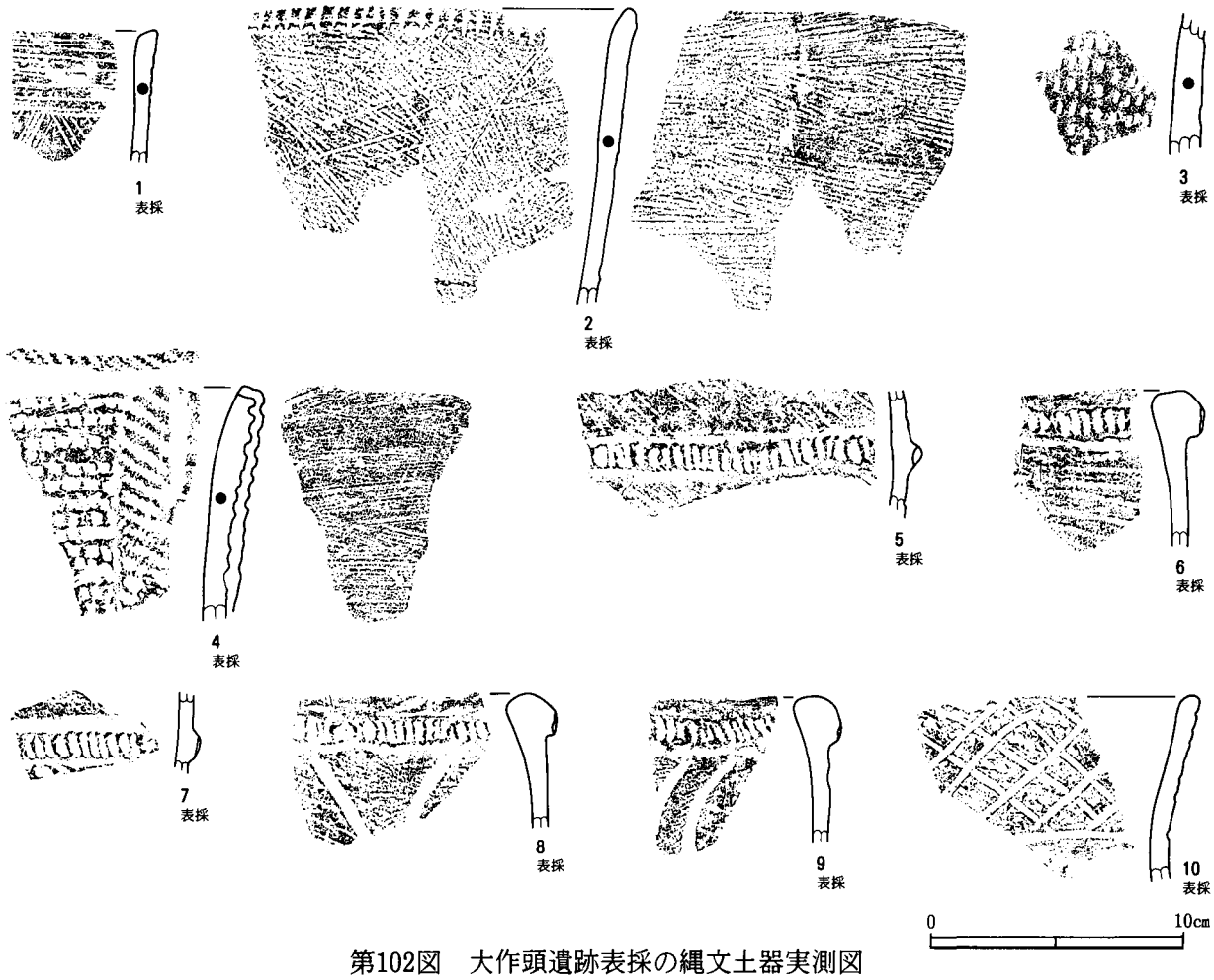
大作頭遺跡表採土器（第102図、図版37）

1は三戸式土器である。2は内外面ともに浅い条痕が認められる。口縁端部には絡条体圧痕が施される。胴部には細沈線による区画文と充填文が施される。破片中央下端には横位の微隆起が施される。微隆起や区画文系の意匠は野島式土器的であるが、浅い条痕や絡条体圧痕は明らかに子母口式土器である。現段階では子母口式土器の終末期の破片であるとしておきたい。3は幅狭の板状工具による刺突列が施される。子母口式土器であろう。4は破片右側に幅広の隆帯が貼付され、この隆帯が貼付される口縁部分・口唇部は若干突出する。口唇には絡条体圧痕が施される。隆帯上にも絡条体圧痕が施される。隆帯より左側には



第101図　C区遺構外出土土器実測図

横位方向の刺突列が施されるが、隆帯の右側は無文となる。内面には横位の擦痕が認められる。子母口式土器の終末に属する破片であろう。5～10は後期中葉から後半に属する。



第102図　大作頭遺跡表採の縄文土器実測図

（２）石器（第103図、図版38･42）

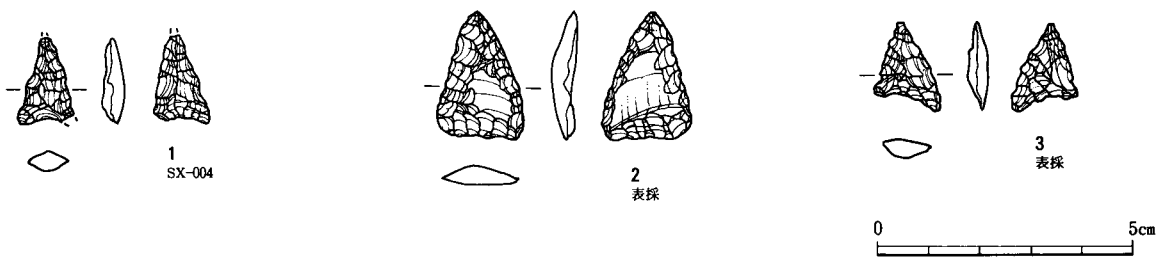
石器は、大作頭遺跡C区での石器組成を示すことを第一の目的とした。したがって、出土地点ごとによる提示ではなく、器種ごとに掲載することを基本とした。

実測図を提示した石器は、完形もしくはこれに準ずるものに限った。なお、実測図を提示しないものについては、全点にわたり器種・石材・計測値等を石器一覧表（第５表）に示した。実測図に示した石器についても同様の作業を行っている。石器実測図に用いているスクリーントーンの用例は凡例に示している。

実測図は、剥片石器（第103図、図版38）と礫素材の石器（礫石器　第104図、図版42）に分けて提示している。なお、事実記載に関わる要素は、すべて石器一覧表に記しているので、ここでの重複は避ける。

遺構・グリッド	名　称	石　材	長×幅×厚 (cm)	重量 (g)	図番号	遺構・グリッド	名　称	石　材	長×幅×厚 (cm)	重量 (g)	図番号
004号方形周溝状遺構	フレイク	チャート	2.4× 3× 1	5.5		O22-87	打製石斧	安山岩	8× 4.9× 2.9	131.3	101−6
004号方形周溝状遺構	フレイク	チャート	3.1× 2.5× 0.6	3		O23-20	フレイク	頁岩	5× 3.5× 1.3	15.3	
004号方形周溝状遺構	フレイク	黒曜石	2.3× 2.6× 0.8	3.9		O23-21	フレイク	チャート	2.7× 3× 0.5	2.9	
004号方形周溝状遺構	フレイク	黒曜石	1.7× 3.6× 1	4		O23-27	フレイク	黒曜石	1.1× 1.4× 0.5	0.61	
004号方形周溝状遺構	フレイク	黒曜石	3.1× 1.4× 0.7	2.7		P22-72	フレイク	安山岩	2.1× 3.3× 0.7	4	
004号方形周溝状遺構	フレイク	黒曜石	1.5× 2.3× 1	2.3		P22	打製石斧	ホルンフェルス	6.5× 4.1× 1.7	48.7	101−5
004号方形周溝状遺構	フレイク	黒曜石	2.4× 1.5× 0.8	2.2		P23-22	磨石	石英斑岩	7.4× 5.7× 3.9	258.8	101−4
004号方形周溝状遺構	フレイク	黒曜石	1.1× 1.3× 0.3	0.44		P23-44	打製石斧	ホルンフェルス	5.3× 4.3× 1.7	51.1	
004号方形周溝状遺構	石鏃	黒曜石	1.6× 1.1× 0.5	0.56	100−1	P23-44	フレイク	黒曜石	1.6× 1.2× 0.5	0.81	
004号方形周溝状遺構	フレイク	チャート	1.3× 1.7× 0.6	1.2		Q17	チップ	黒曜石			
004号方形周溝状遺構	フレイク	砂岩	1.2× 1.9× 0.4	1.2		Q17	チップ	黒曜石			
004号方形周溝状遺構	チップ	黒曜石				Q17	チップ	黒曜石			
007号炉穴	フレイク	チャート	2.9× 2.6× 0.4	2.2		大作頭表採	フレイク	チャート	4.3× 2.8× 0.9	10.3	
009号炉穴	フレイク	チャート	3.3× 2.3× 0.8	5.3		大作頭表採	フレイク	流紋岩	4.1× 3.1× 1.1	11.2	
042号炉穴	フレイク	黒曜石	1.3× 2.2× 0.7	1.2		大作頭表採	フレイク	安山岩	2.9× 3.6× 0.6	7.9	
043号炉穴	フレイク	黒曜石	2.2× 3.6× 0.8	5		大作頭表採	フレイク	黒曜石	2.6× 2.6× 0.7	3.7	
043号炉穴	フレイク	黒曜石	1.5× 1× 0.4	0.55		大作頭表採	フレイク	黒曜石	1.2× 1× 0.3	0.28	
043号炉穴	フレイク	凝灰岩	2.9× 3.7× 1.3	6.1		大作頭表採	フレイク	チャート	4.7× 4.2× 2.6	35	
表採	フレイク	黒曜石	1.6× 1.2× 0.6	0.73		表採	フレイク	チャート	3.7× 3.2× 1.2	14.8	
表採	フレイク	黒曜石	1.5× 2.5× 0.8	1.6		表採	フレイク	流紋岩	3.3× 3.5× 0.9	8.9	
表採	フレイク	黒曜石	3.4× 2.8× 0.7	2.8		表採	石鏃	珪質頁岩	2.5× 1.7× 0.5	1.6	100−2
表採	フレイク	黒曜石	1.1× 1.3× 0.4	0.54		表採	敲石	石英斑岩	5.8× 5.1× 4.2	156.2	101−7
表採	フレイク	黒曜石	1.1× 1.3× 0.4	0.54		表採	フレイク	黒曜石	1.5× 2.1× 0.9	1.1	
N23-25	RF	チャート	3.4× 5.6× 1.4	23		大作頭表採	石鏃	黒曜石	1.8× 1.3× 0.4	0.55	100−3

第５表　Ｃ区縄文時代石器一覧表

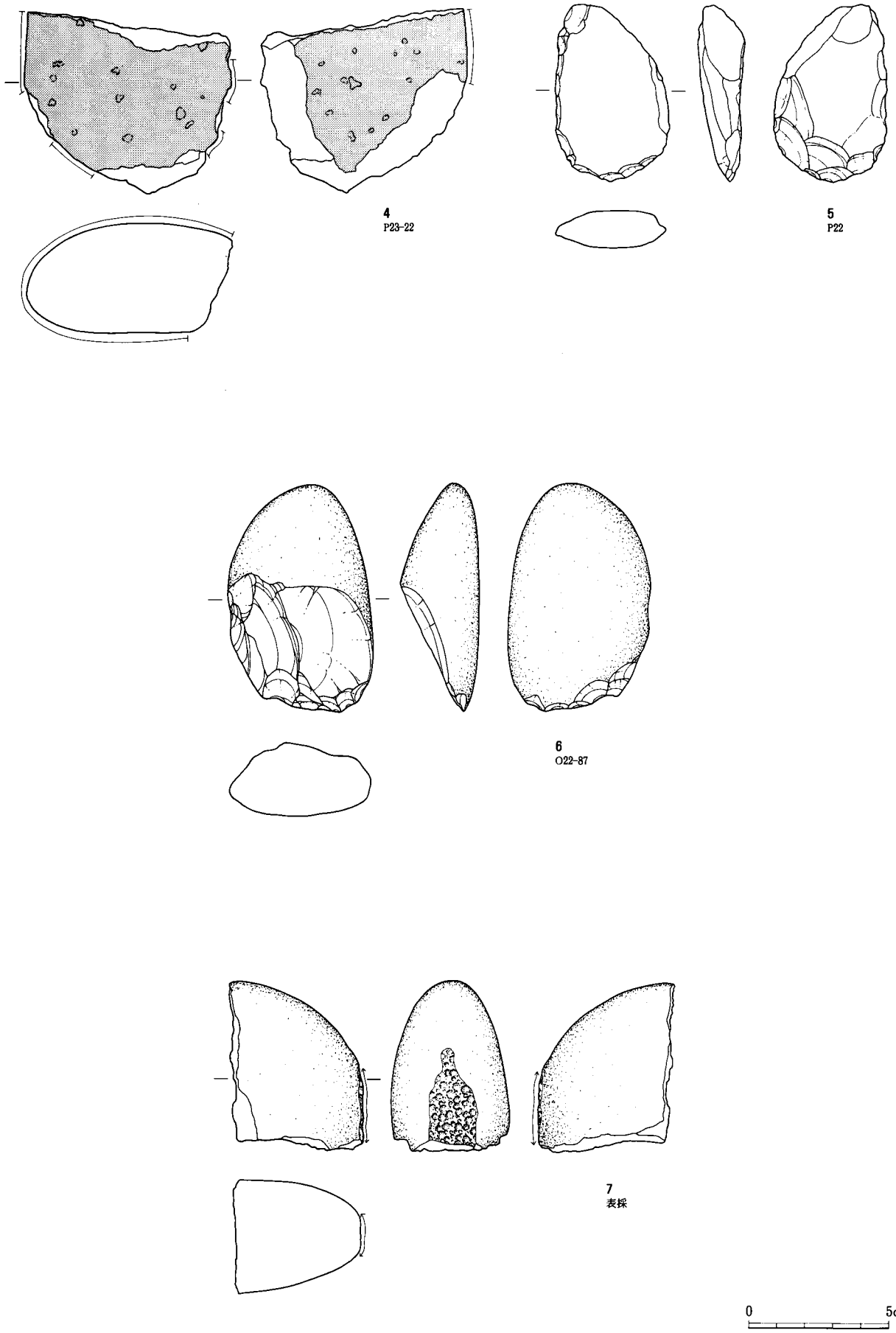


第103図　Ｃ区石器実測図（1）

（３）礫

大作頭遺跡Ｃ区の遺構外からは散発的に礫が出土している。顕著な集中範囲は形成されておらず、各小グリッドでの出土数は、０(ゼロ)もしくは５点以下が主体である。10点以上の礫が出土している小グリッドは、N23-25・O23-06の２つのグリッドのみである。

なお、大作頭遺跡Ｃ区から出土している礫は、Ａ区・Ｂ区から出土している礫と大きさ・重量に差はない。Ｂ区で出土した大量の礫については、第３章で詳細に分析しているので、Ｃ区の礫の分析は行っていない。



第104図　C区石器実測図（2）

第3節　歴史時代

1　遺構

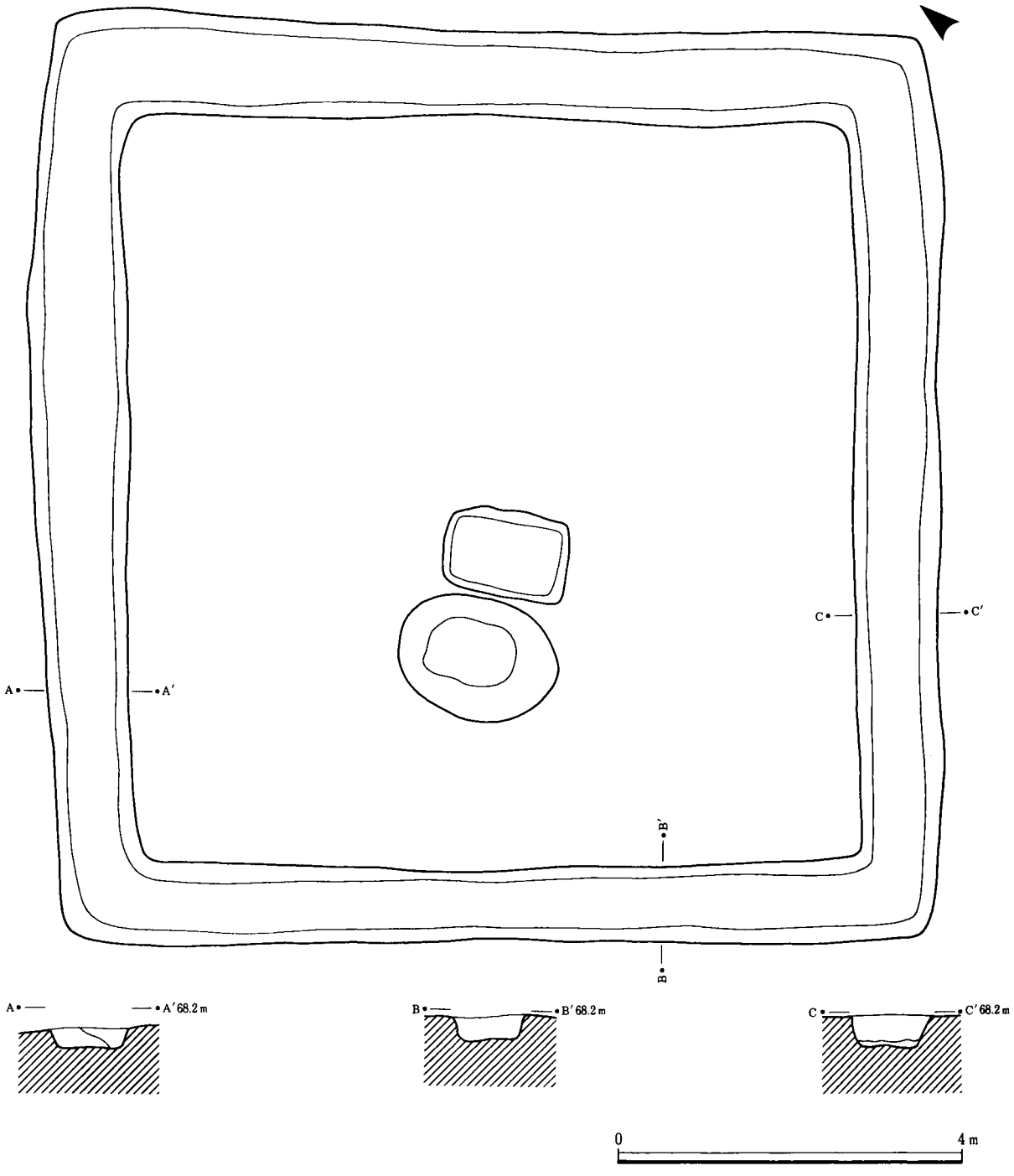
大作頭遺跡C区からは、歴史時代に属すると考えられる遺構は、方形周溝状遺構が1基検出されている。

001号方形周溝状遺構（第105図、図版21）

約10.5m四方の規模を有する方形周溝状遺構である。溝の幅は約1.0m強で、掘込みはしっかりとしており、深さは40cm～50cmである。溝の覆土は、暗褐色土を主体に黒色土を多く含むものであった。

方台部中央のやや南西側から、主体部と考えられる2基の土坑が検出された。方形の土坑と楕円形の土

001号方形周溝状遺構

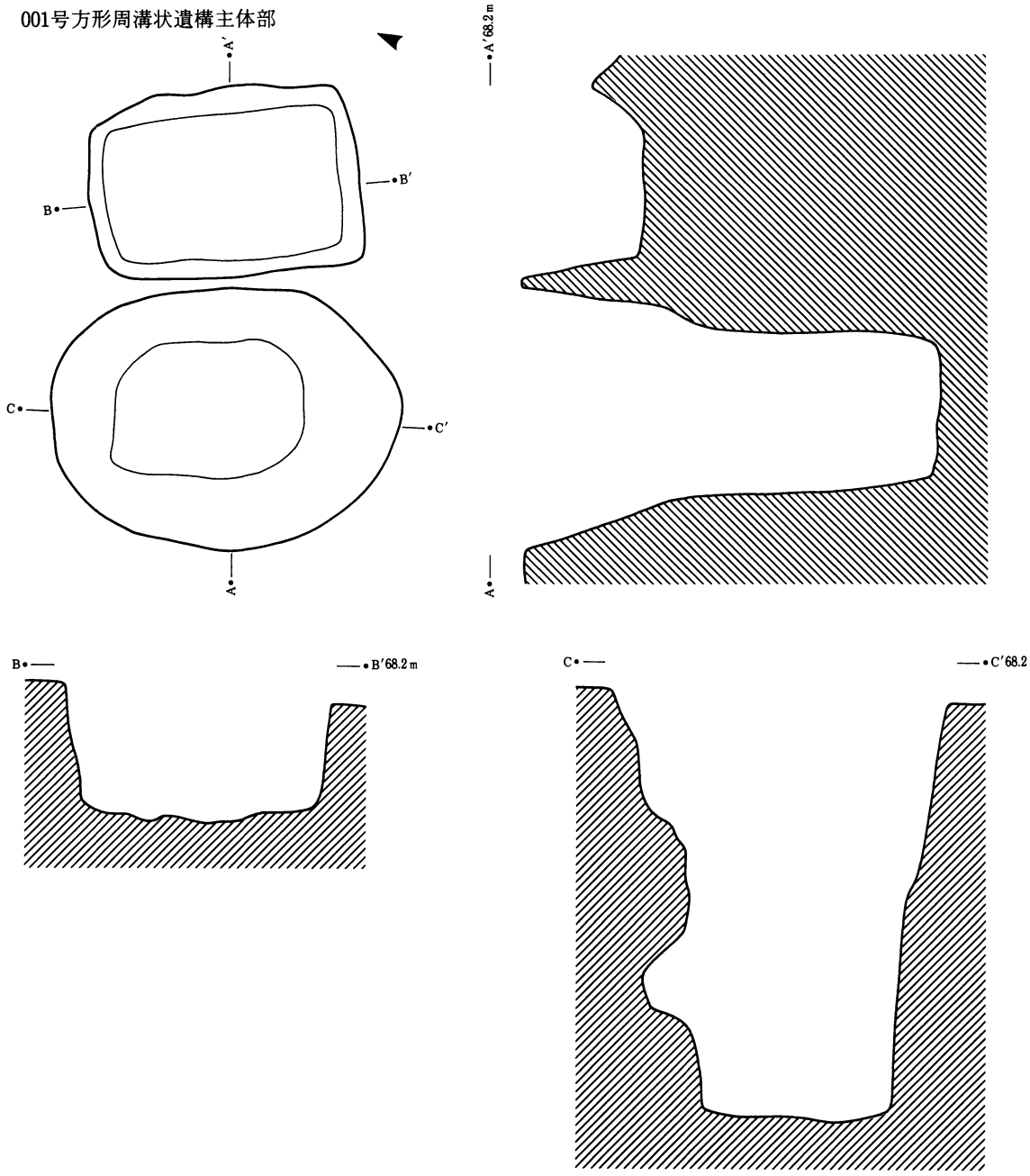


第105図　C区方形周溝状遺構実測図（1）

坑が並ぶものであり、共に長軸が北西から南西方向を向く。土坑の覆土は、共に黒褐色土を主体に小径のローム塊を含むもので、歴史時代の覆土であることは間違いない。調査段階での所見では、方形周溝状遺構に伴うものと判断されているが、この主体部が001号方形周溝状遺構に確実に伴うという根拠があるわけではない。単独の主体部であった可能性も認めておかなければならないであろう。

また、楕円形の深い掘込みの土坑が、方形周溝状遺構の主体部であるという類例に欠けていることからも、主体部であるとは断定し難く、今後の類例を待たなければならない点も明記しておかなければならない。

方形周溝状遺構の溝内や主体部からは遺物は出土していない。したがって、001号方形周溝状遺構の設営時期は、厳密には不明である。しかし覆土は明らかに歴史時代のものであり、大作頭遺跡A区でも方形周溝状遺構が検出されていることから、大作頭遺跡A区同様、奈良時代を中心とする時期であることが考えられる。



第106図　C区方形周溝状遺構実測図（2）　0　1m

第5章　まとめ

第1節　炉穴

大作頭遺跡からは160基の炉穴が検出された。炉穴の整理作業を行う中で生じた疑問点や課題について最後に述べておきたい。

一つは炉穴の用途である。炉穴の用途については、深い掘込みで煙道を有するものに限定するならば、安孫子昭二氏による煮炊き用の施設であるという論[1]と、新東晃一氏による燻製施設論[2]がある。

前者は、煙道上部に土器をすえて、燃焼部での火力により煮沸を行うという論である。筆者も、燃焼部直上から土器片が比較的多く出土する例が多いことなどから考えて、煮沸施設であるという論には整合性があると考えている。

後者は、煙道上部に燻製用の肉を置き、燃焼部で燃やされた燃料材の煙によって燻製を作るという論であり、実験結果[3]や理化学的な分析[4]から、整合性のある論であるといえる。

問題は、関東地方で一般的に認められる掘込みの浅い炉穴の用途である。掘込みの底面がハードローム層に達することのない10cm～20cm程度の掘込みの炉穴の用途が何であったか疑問が残る。これらの炉穴は、調査の最初の段階で除去された表土層の厚さを見積もったところでも、とても煙道を有していたとは考えがたいものである。大作頭遺跡でも、掘込みが深く、煙道を有していたと考えられるものは全体の中では少数であり、残りの多数の掘込みの浅い炉穴の用途は不明であるといわざるを得ない。

しかしここで注目されるのは、関東地方での炉穴は掘込みの深さにかかわらず、重複している例が多いという点である。この重複する様相の原因としては、燃焼に必要な風を取り入れるために、季節ごとの風向きを考慮に入れて、作り替えたのではないかという指摘[5]も傾聴に値する。しかし、作り替えたという点を基準にするならば、「壊れやすい」施設であったからなのではないかという指摘もできる。このように考えると、今日我々が調査をする掘込みの浅い炉穴は、何らかの上部の施設が壊されたものである可能性が高く、今後の調査において土層断面の詳細な観察が行われなければならないであろう。炉穴が複雑に重複するプロセスについては、石井寛氏によって、詳細な土層の観察から語られており[6]、今後の参考となろう。

もう一方の課題は、炉穴の基数の問題である。厳密には炉穴の基数の呼称方法の問題である。大作頭遺跡では、単独の掘込みに1か所の燃焼部が認められるものや、複数基の掘込みに複数か所の燃焼部が認められるものがある。単独で設営されている炉穴と重複する炉穴では、時期・立地・構造等による差異が存在していた可能性がある。また、多くの炉穴が検出された遺跡相互を比較する場合でも、単独の炉穴や重複する炉穴の基数の内訳が示されるべきであると考える。したがって、重複する炉穴を炉穴群と呼称し、掘込みの数と燃焼部の数を表す方法が望ましいと考えられる。

すなわち、3基の掘込みが重複し、燃焼部が2か所認められる炉穴群は、1群3基(燃焼部2)とし、このような炉穴群が2基検出されている場合は、2群6基(燃焼部4)と示す方法が望ましいと考えられる。この群・基による呼称方法に加え、単独で検出された基数を併記することにより、炉穴が多く検出される遺跡の内容を、少しでもわかりやすく表現できるのではなかろうか。

第2節　子母口式土器

大作頭遺跡からは子母口式土器が多く出土した。これは、市原市域のみならず千葉県内においても注目に値する量である。しかし、大作頭遺跡から出土した子母口式土器の評価は、量的なものではなく、時間的な位置である。個々の土器片の評価については事実記載中で触れているのでここでの重複は避けるが、子母口式土器でありながら、後続する野島式土器的な要素を多く有する土器が検出されている。子母口式土器の最終末段階に属するものである。これらの土器群はおおむね勢至久保遺跡[7]の土器群に並行するものと考えられる。東京湾東岸域での子母口式土器終末期の様相を示す土器として、「大作頭段階」の土器群と位置付け、巻頭図版[8]に示すことで、資料提供者の責務としておきたい。

注1　安孫子昭二　1985「炉穴はこのように使われた」『東京の遺跡』No.6　東京考古談話会

2　新東晃一　1997「縄文時代早期の炉穴の復元」『南九州縄文通信』No.11　南九州縄文研究会

3　前掲注2

4　中野益男　1998「栫ノ原遺跡から出土した(煙道付き)炉穴に残存する脂肪の分析」『栫ノ原遺跡』第1分冊　鹿児島県加世田市教育委員会

5　上田寛ほか　1985『貝塚山遺跡発掘調査報告書-第2地点-』富士見市教育委員会

6　石井寛　1990『山田大塚遺跡』横浜市埋蔵文化財センター

7　飯塚博和　1982『半貝・倉之橋・勢至久保』野田市遺跡調査会

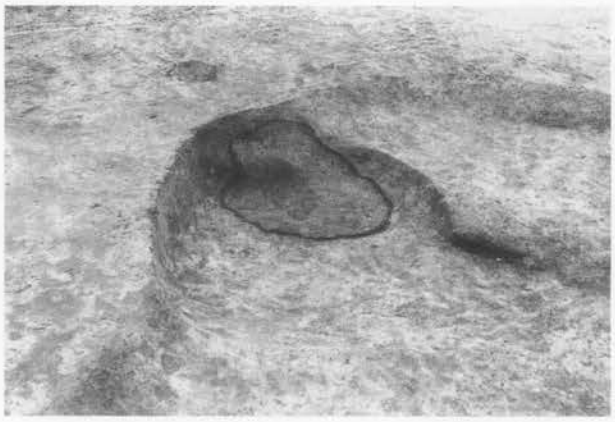
8　巻頭図版には、大作頭遺跡出土の子母口式土器のうち良好な資料を網羅しており、子母口式土器最終末段階以外の土器も含まれている。

写 真 図 版

大作頭遺跡周辺航空写真（昭和46年撮影）

001号炉穴

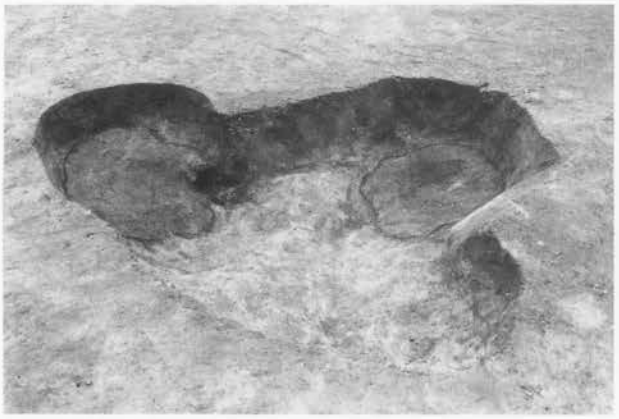
002号炉穴



007号炉穴

008号炉穴

009号炉穴



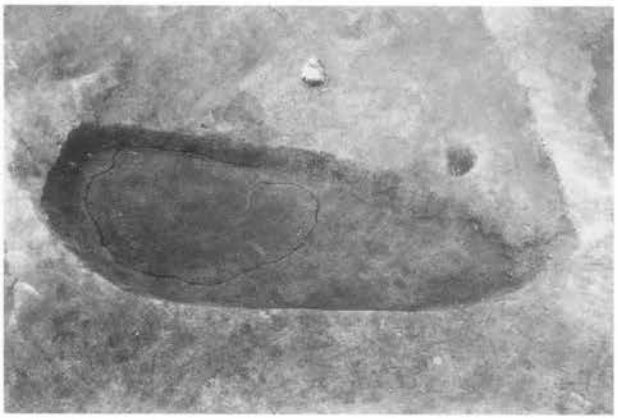
017号炉穴

024号炉穴

A区炉穴（1）

025号炉穴

026号炉穴



029号炉穴

033号炉穴

035号炉穴

036号炉穴・015号土坑

037号炉穴

037号炉穴

A区炉穴（2）

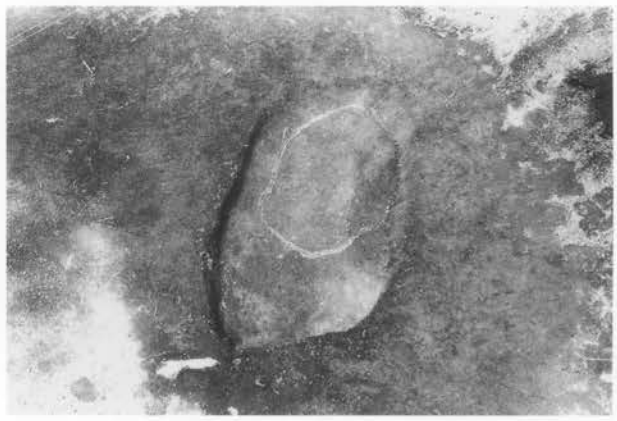
038号炉穴

039・040号炉穴

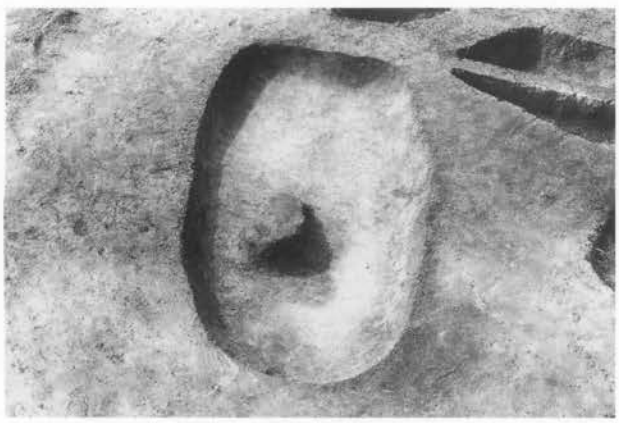
041号炉穴

044号炉穴

045号炉穴



047号炉穴

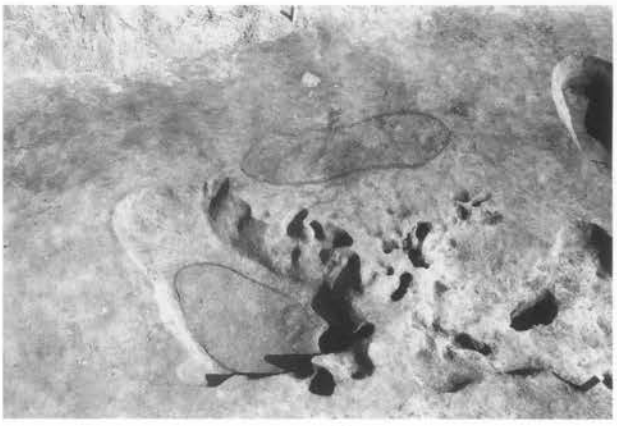


048号炉穴

049号炉穴

A区炉穴（3）

050号炉穴



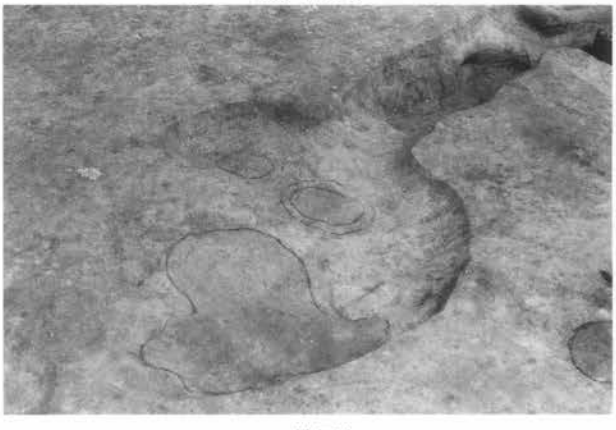
054・055号炉穴

065号炉穴

065号炉穴

065号炉穴

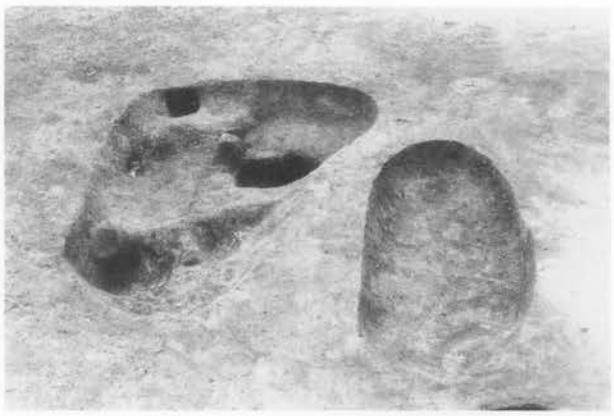
066・068号炉穴



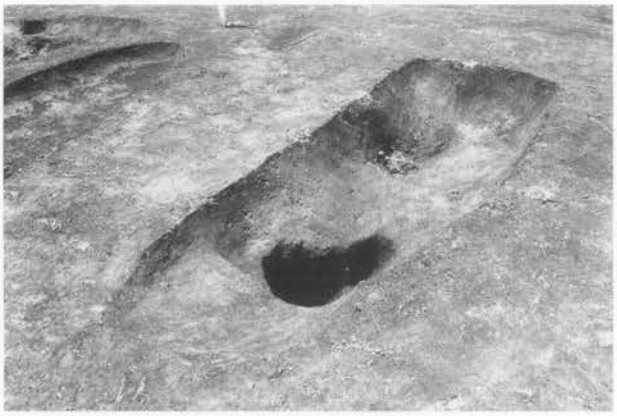
068号炉穴

A区炉穴（4）

069号炉穴

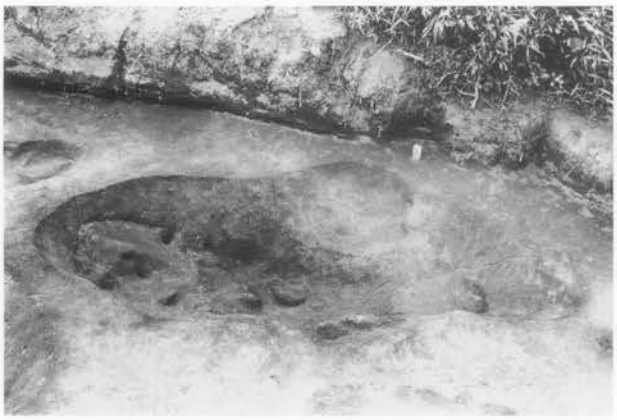


012号土坑（右側）



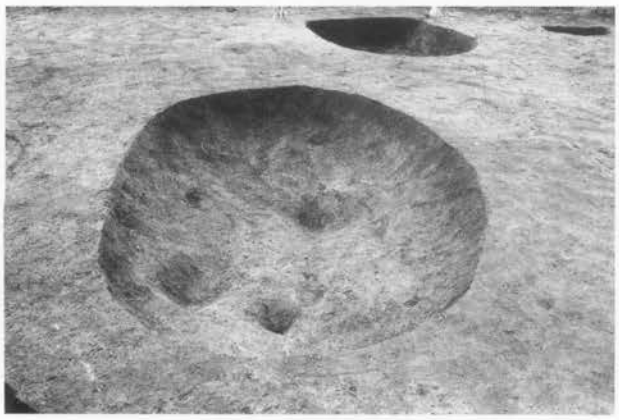
013号土坑

015号土坑



015号土坑

019号土坑



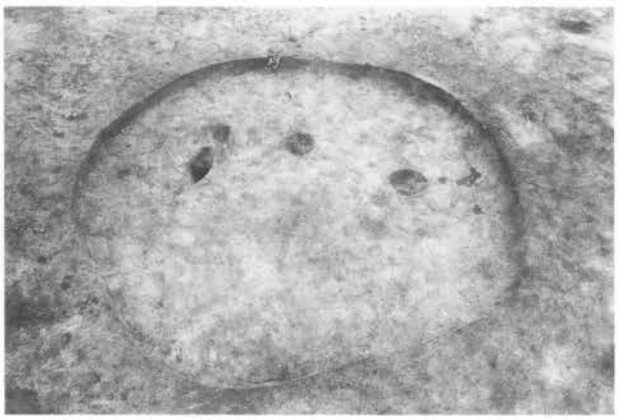
020号土坑

023号土坑

A区炉穴（5）、A区縄文時代土坑（1）

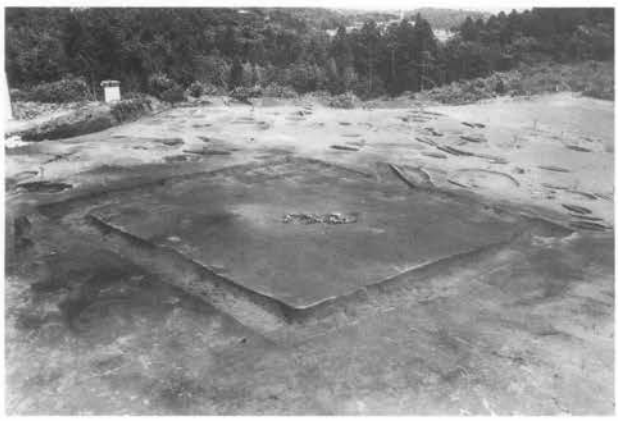
046号土坑

053号土坑



001号住居跡

A区方形周溝状遺構



A区方形周溝状遺構

A区方形周溝状遺構主体部

001・002号炉穴

003・004号炉穴

A区縄文時代土坑（2）、A区縄文時代住居跡、A区方形周溝状遺構、B区炉穴（1）

005・007・008号炉穴

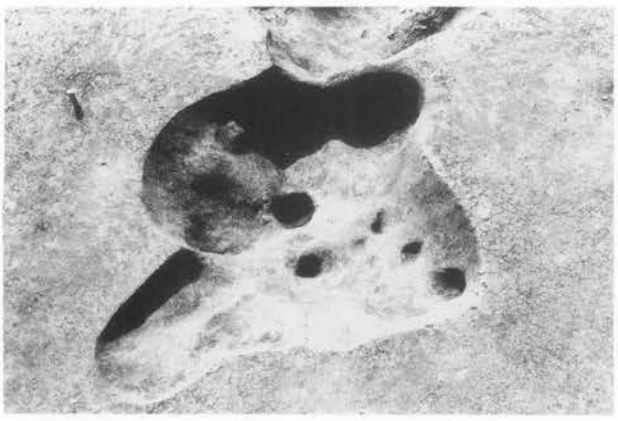
009号炉穴

027号炉穴

029・030・031号炉穴

030号炉穴

031号炉穴



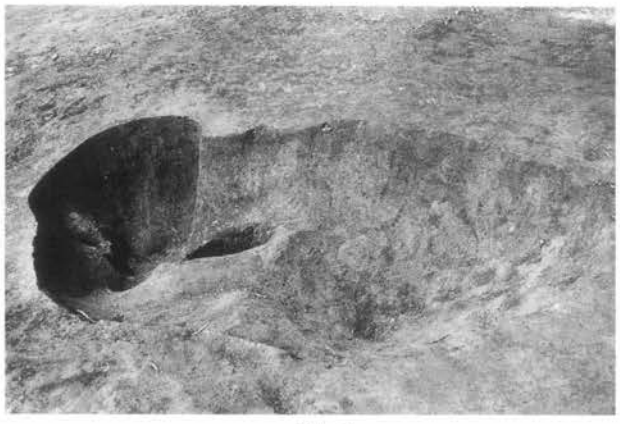
032・033号炉穴

035号炉穴

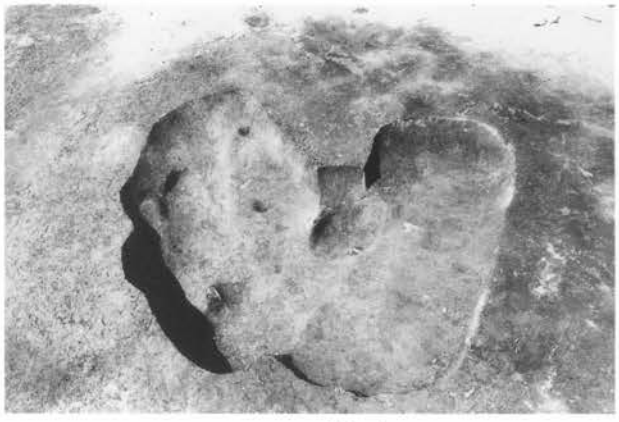
B区炉穴（2）

036号炉穴

038号炉穴



038号炉穴



039・040号炉穴

041号炉穴

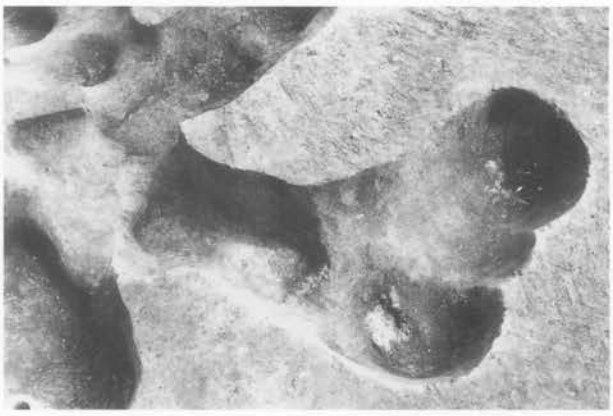
050・051・052号炉穴

053号炉穴

057号炉穴

B区炉穴（3）

058号炉穴



060号炉穴

061号炉穴

062号炉穴

063号炉穴

064号炉穴

065号炉穴

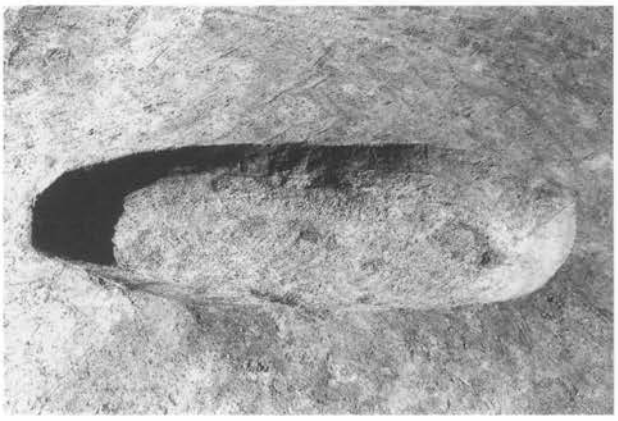
066号炉穴

B区炉穴（4）

066号炉穴

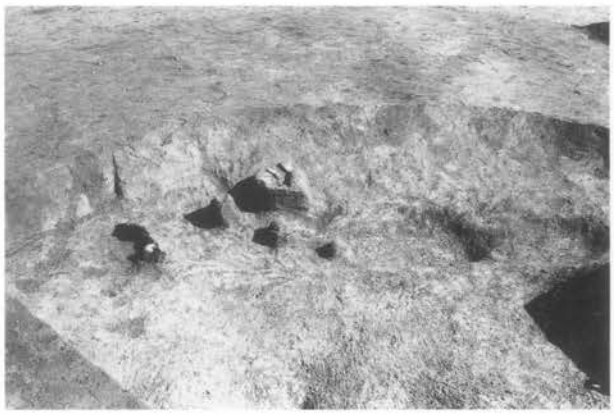
066号炉穴

069号炉穴



070号炉穴

071号炉穴

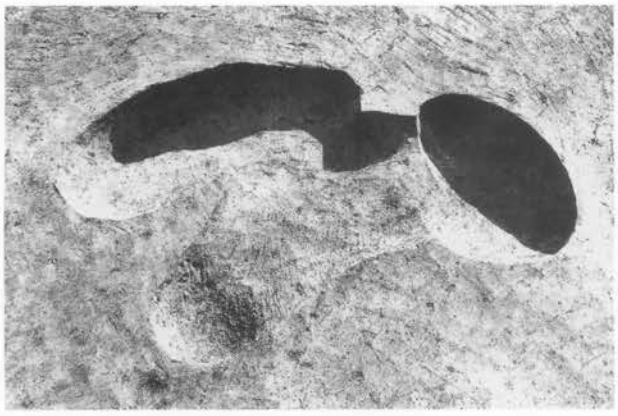


071号炉穴

072号炉穴

072号炉穴

B区炉穴（5）



073・074・075号炉穴

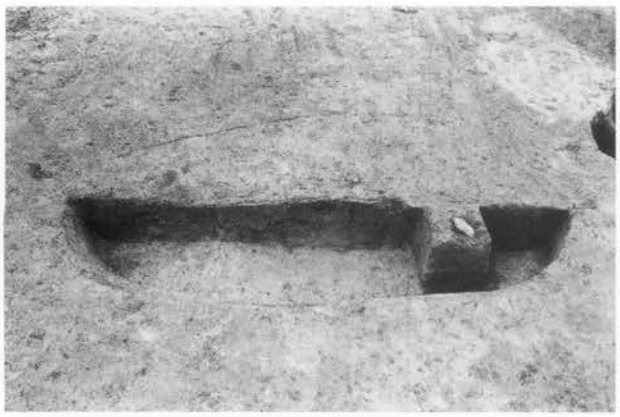
076号炉穴

078号炉穴

081・088号炉穴

081号炉穴

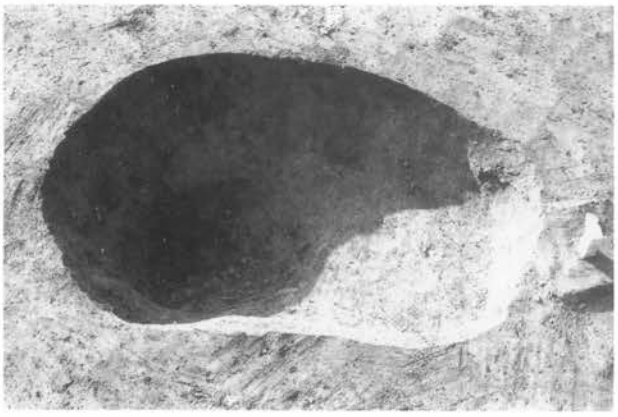
087号炉穴



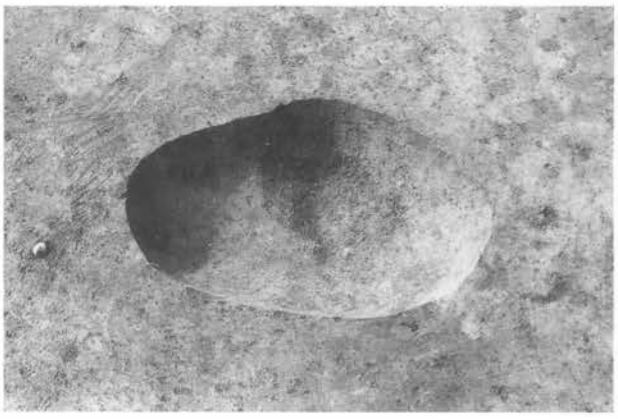
088号炉穴

090号炉穴

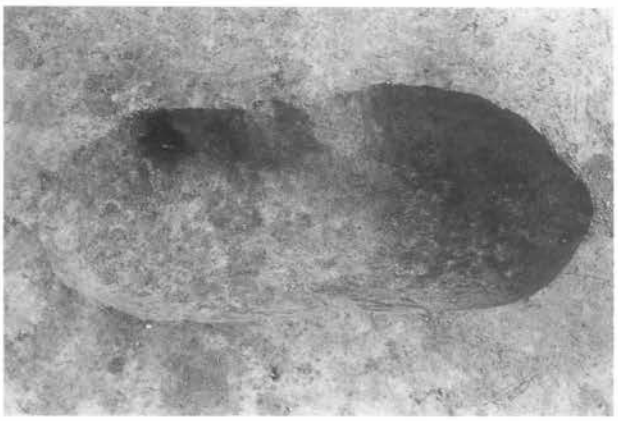
B区炉穴（6）



092号炉穴



094号炉穴

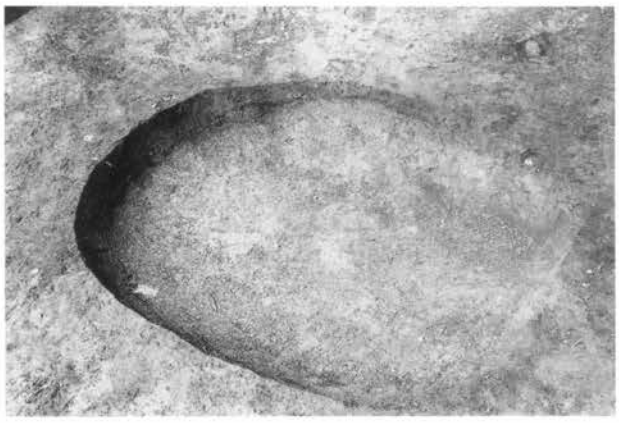


096号炉穴

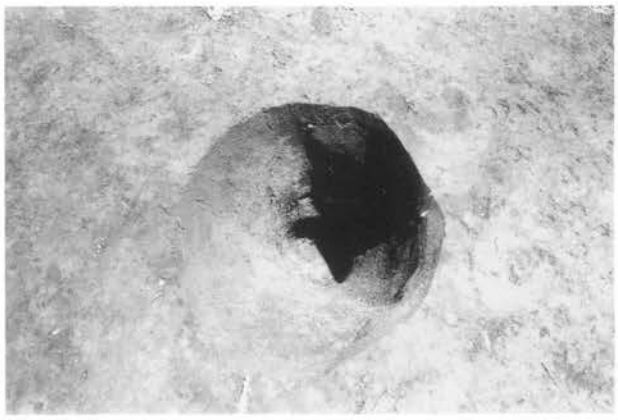
097号炉穴

010・011号土坑

012・013号土坑



014号土坑



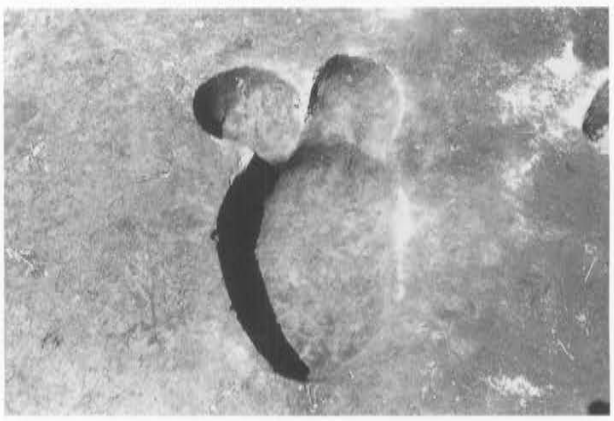
016号土坑

B区炉穴（7）、B区縄文時代土坑（1）

023号土坑

024・025号土坑

026号土坑

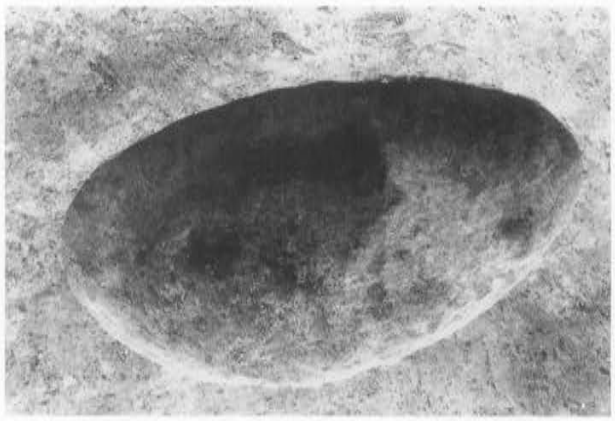


028号土坑

042号土坑

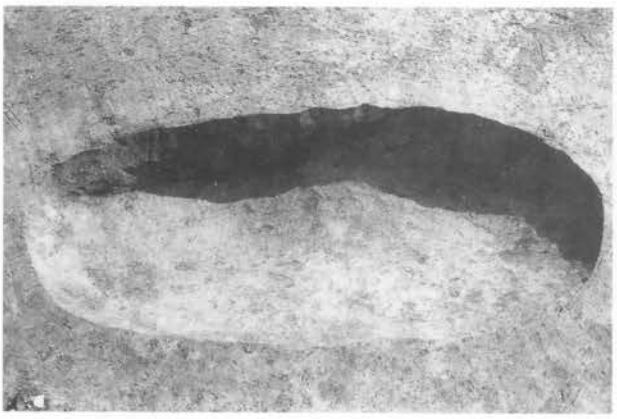
048号土坑

056号土坑

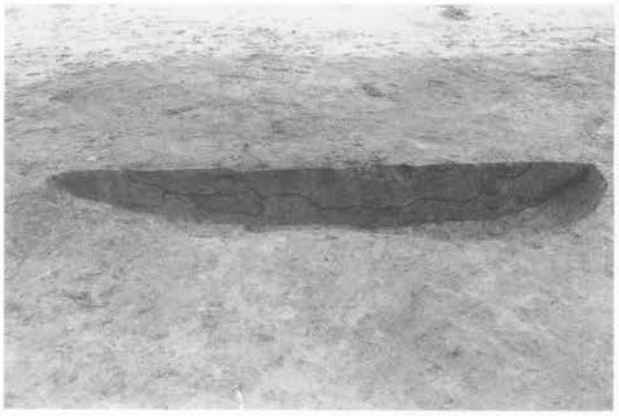


091号土坑

B区縄文時代土坑（2）



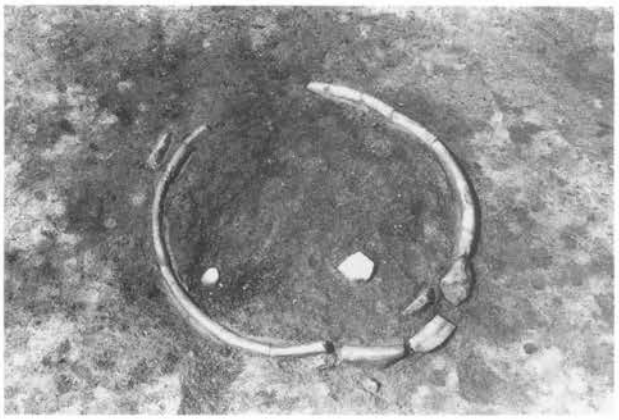
093号土坑



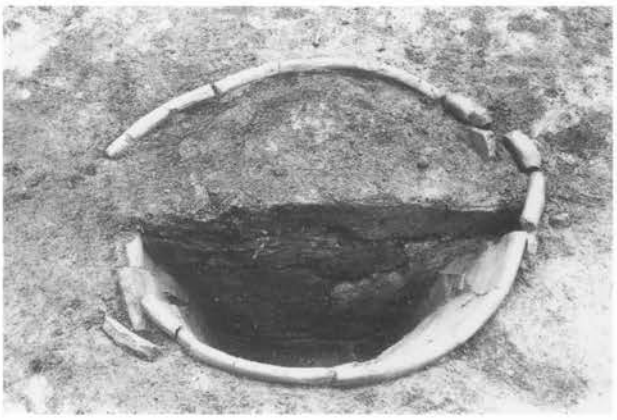
102号土坑

101号土坑

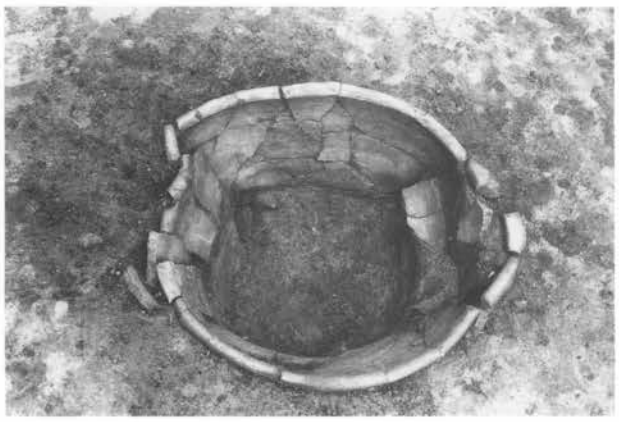
001号住居跡



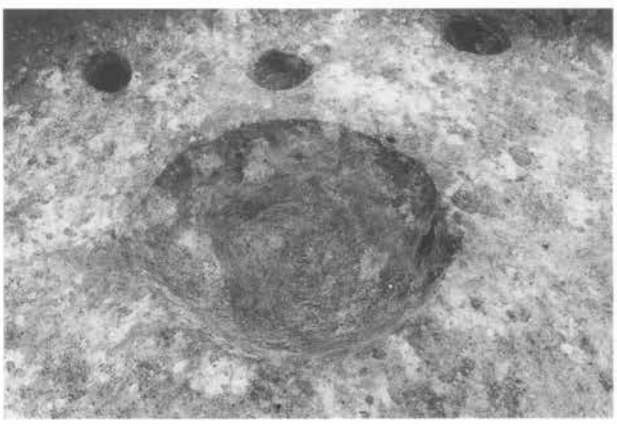
001号住居跡



001号住居跡

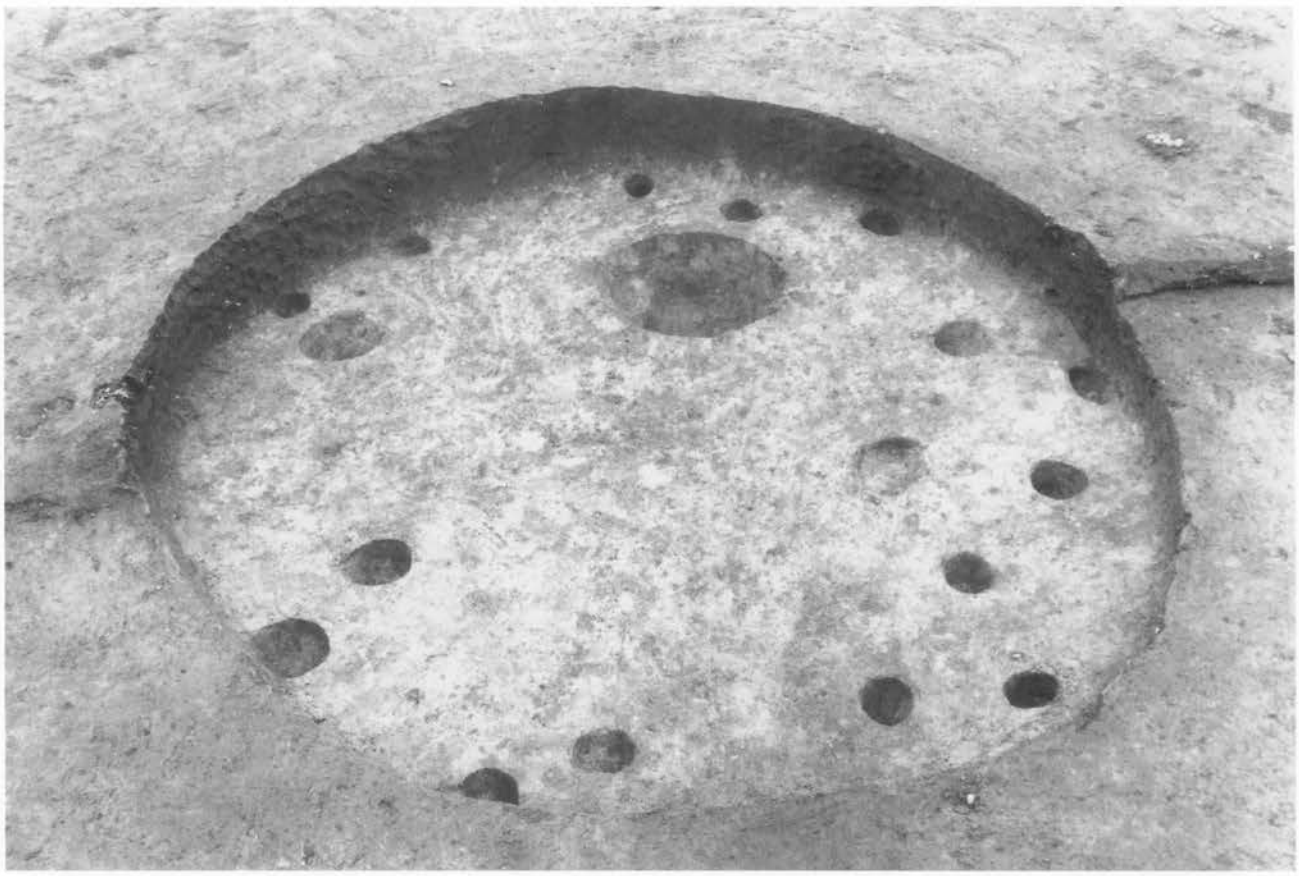


001号住居跡

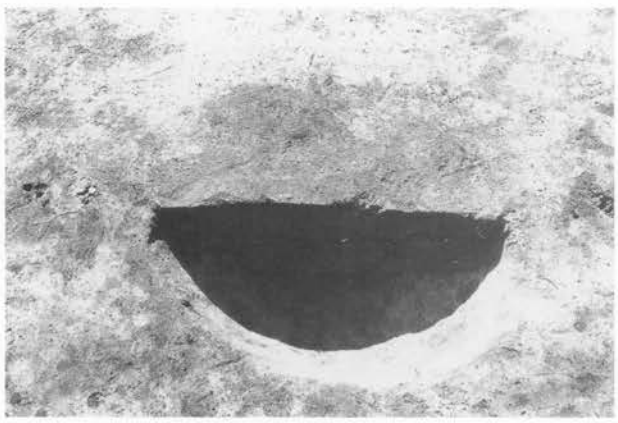


001号住居跡

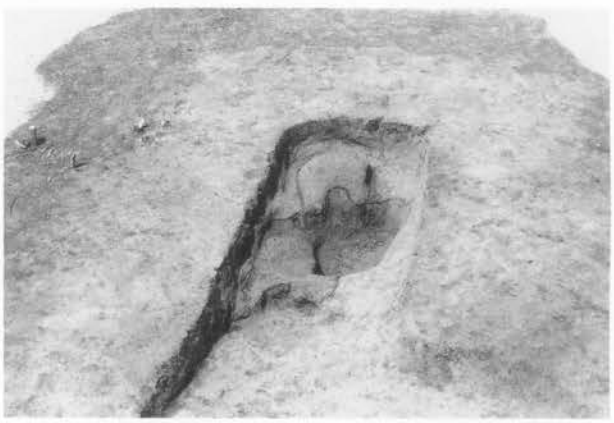
B区縄文時代土坑（3）、B区縄文時代住居跡（1）



001号住居跡



002号住居跡炉



002号炉穴

003号炉穴

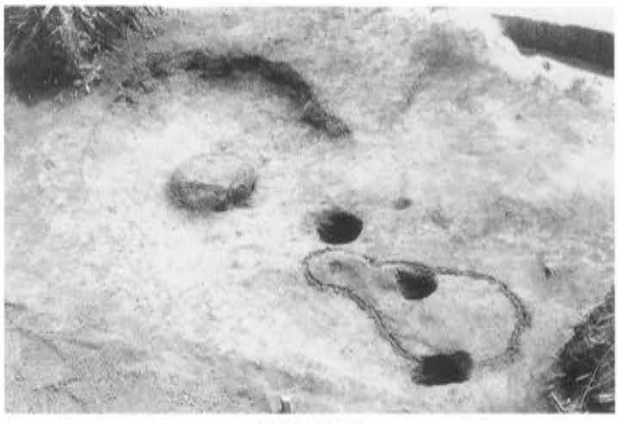
004号炉穴

B区縄文時代住居跡（2）、C区炉穴（1）

009号炉穴

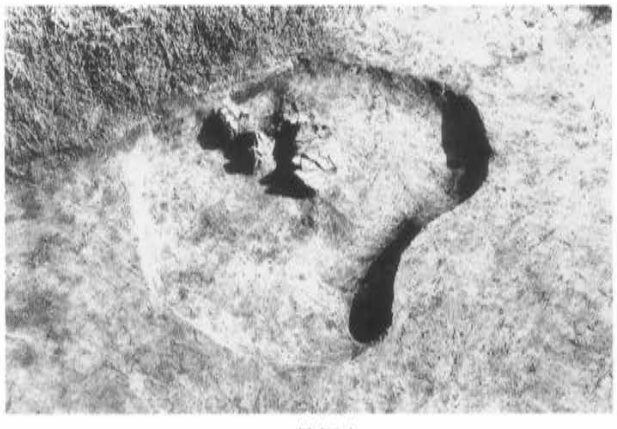
011号炉穴

012号炉穴



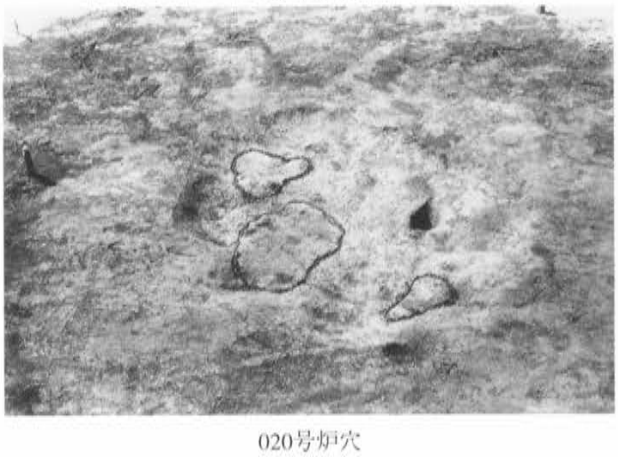
013号炉穴

015・016号炉穴



017号炉穴

017号炉穴



020号炉穴

C区炉穴（2）

021号炉穴

019・022号炉穴

023号炉穴

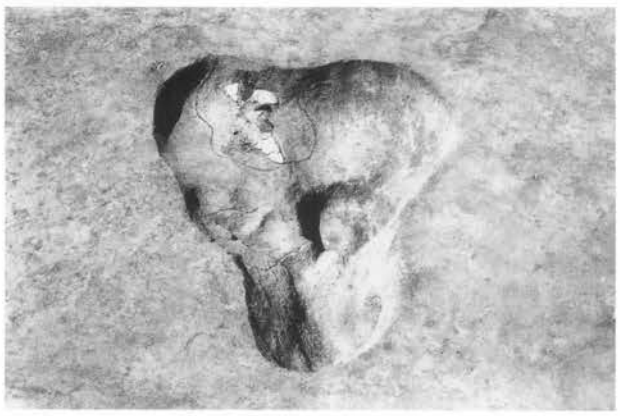
024号炉穴

025号炉穴

027号炉穴

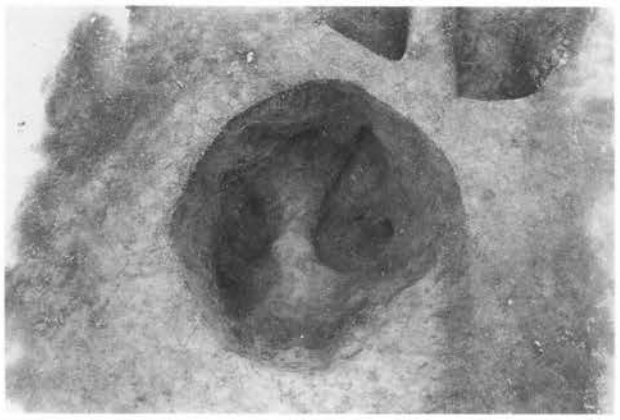
026号炉穴

C区炉穴（3）



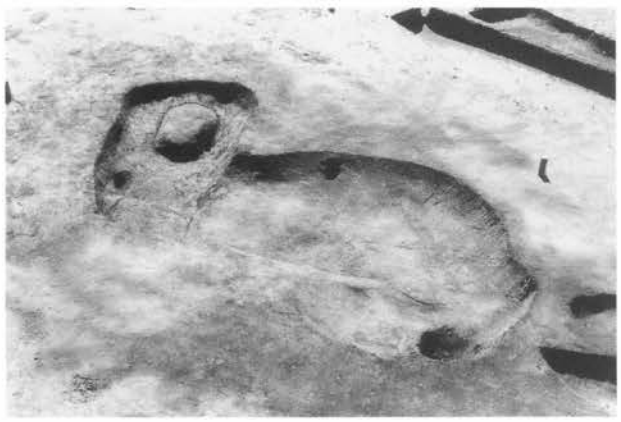
031号炉穴

034号炉穴



036号炉穴

039号炉穴



040号炉穴

041号炉穴

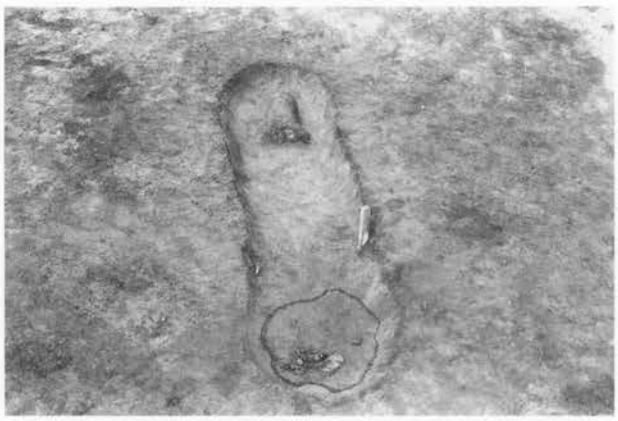
042号炉穴

045号炉穴

C区炉穴（4）

048号炉穴

051号炉穴



052号炉穴

054号炉穴

055号炉穴

057号炉穴

061号炉穴

062号炉穴

C区炉穴（5）

028号土坑

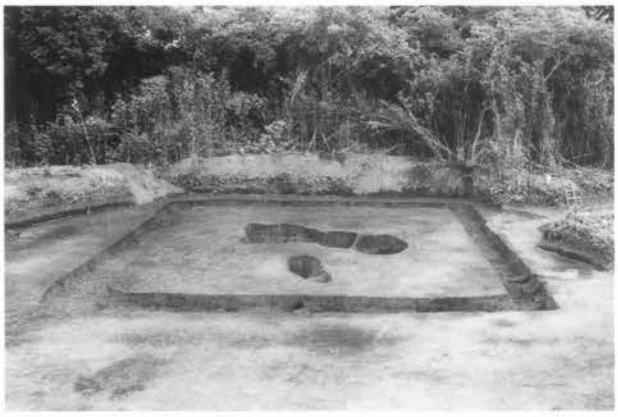
029号土坑

035号土坑

046号土坑

049号土坑

001号住居跡

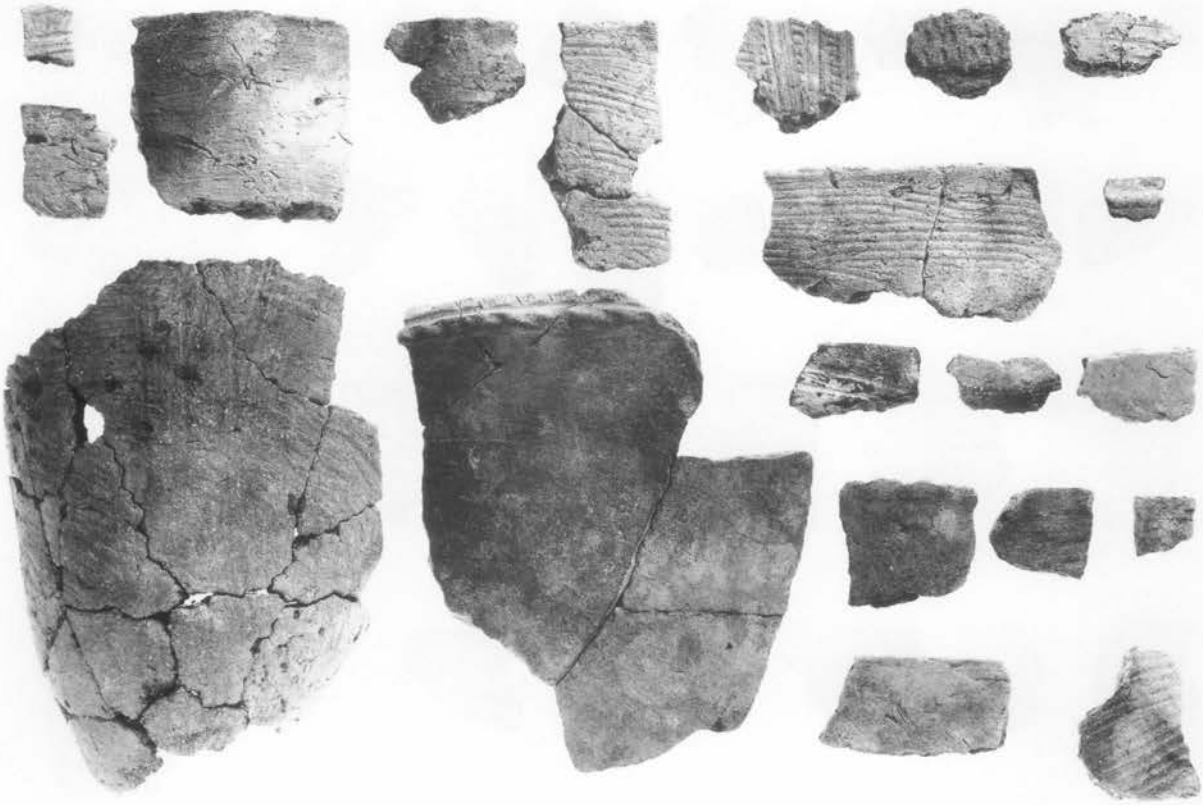


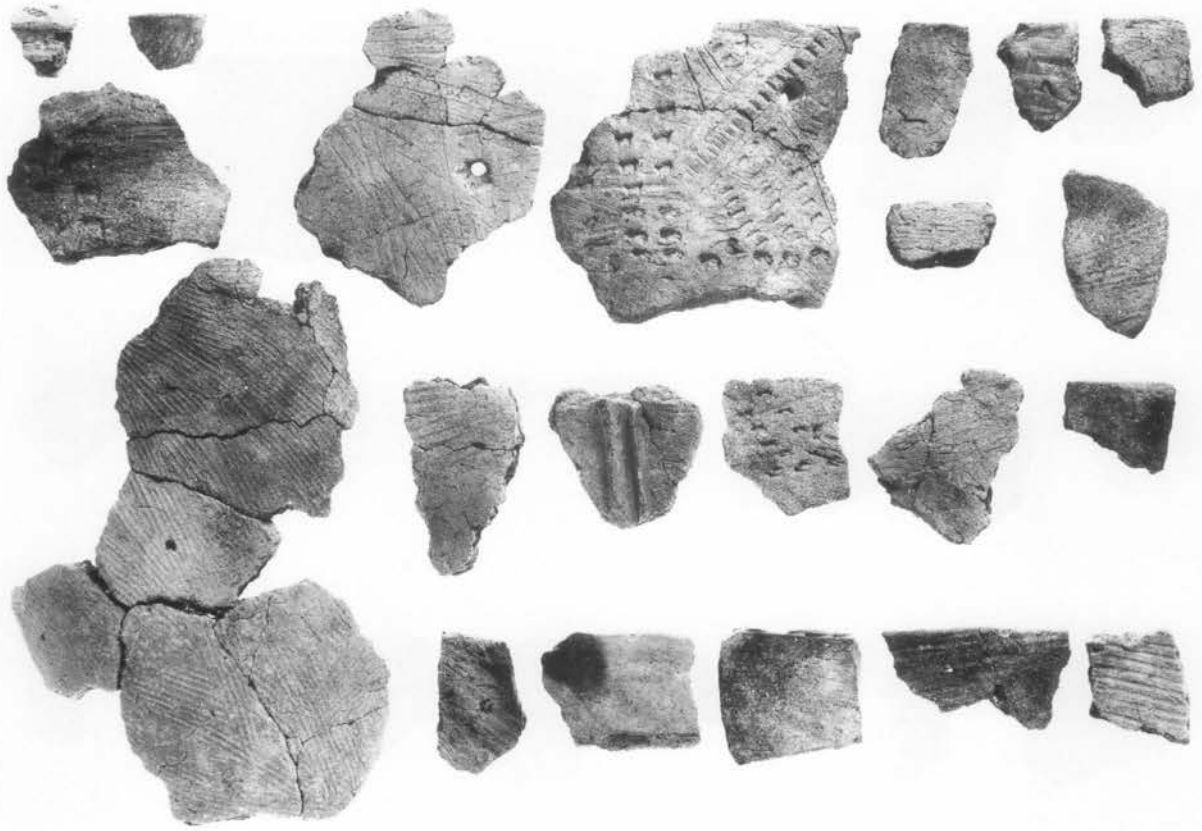
C区方形周溝状遺構

C区方形周溝状遺構主体部

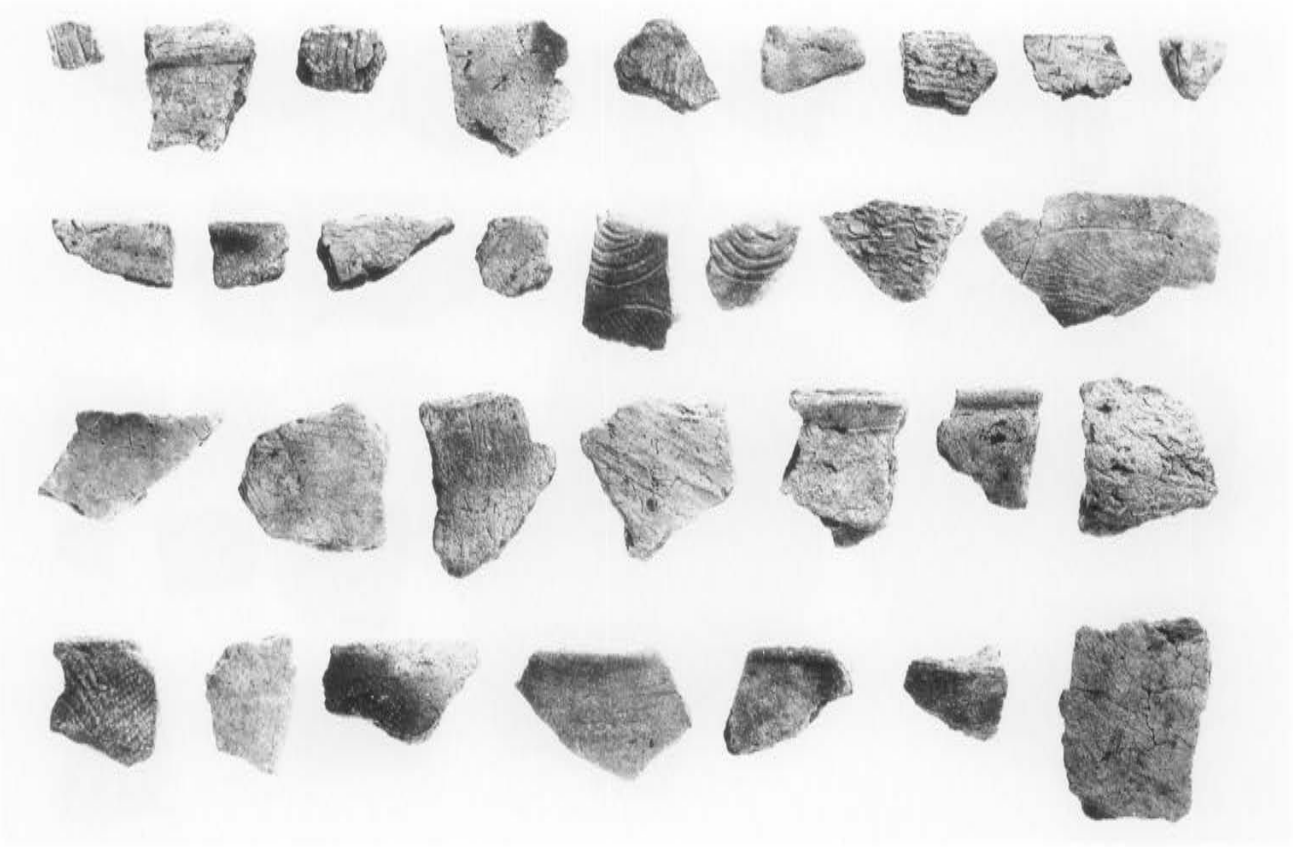
C区縄文時代土坑、C区縄文時代住居跡、C区方形周溝状遺構

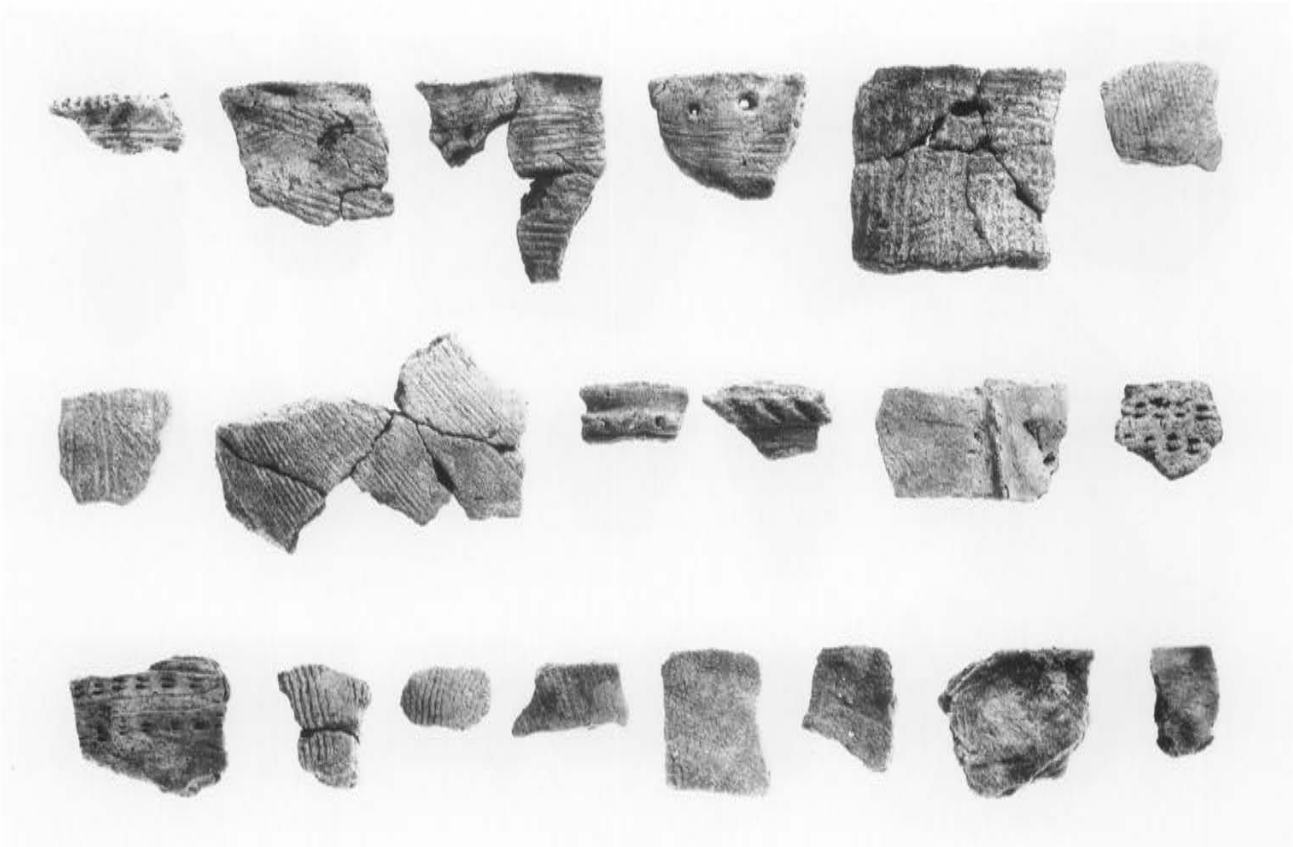
旧石器時代石器



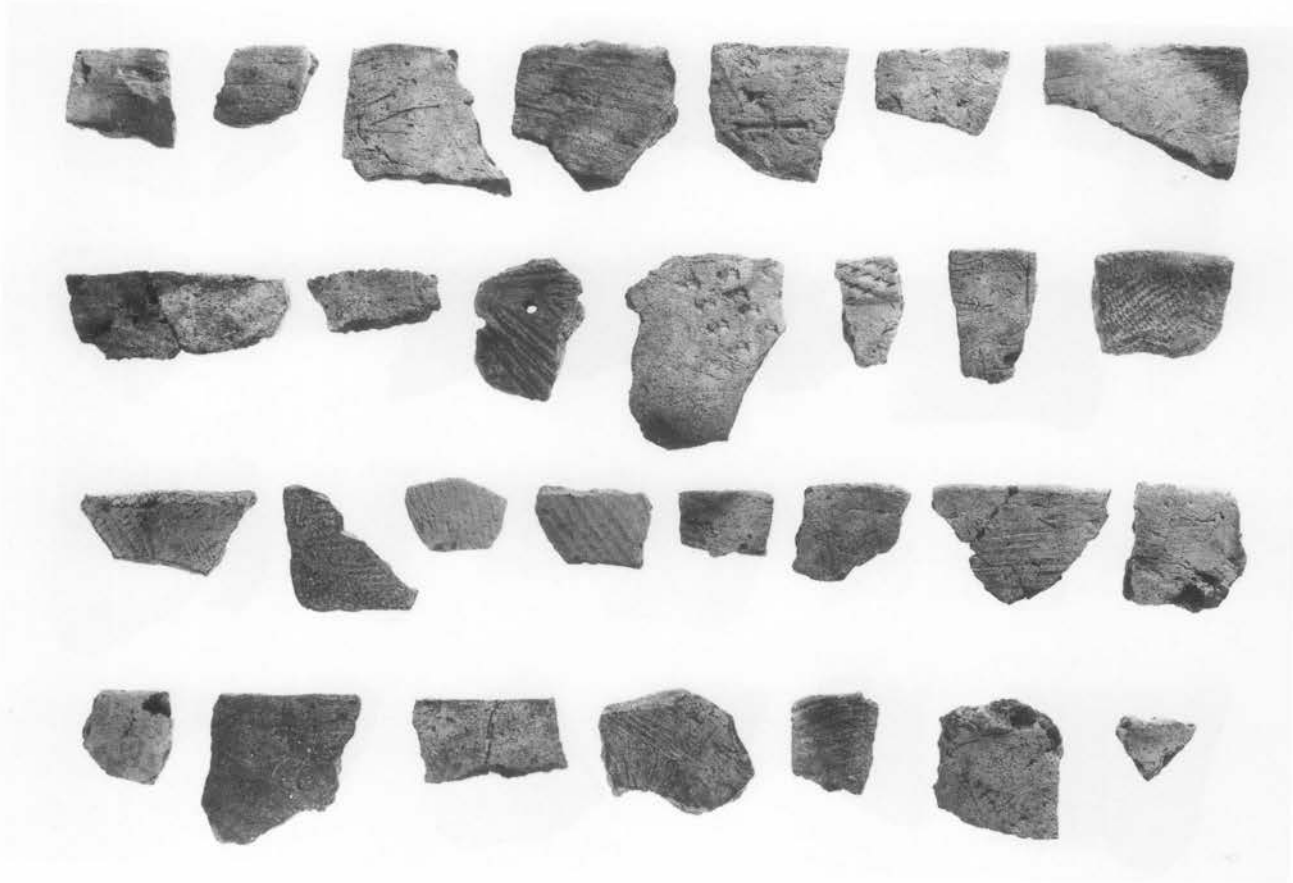


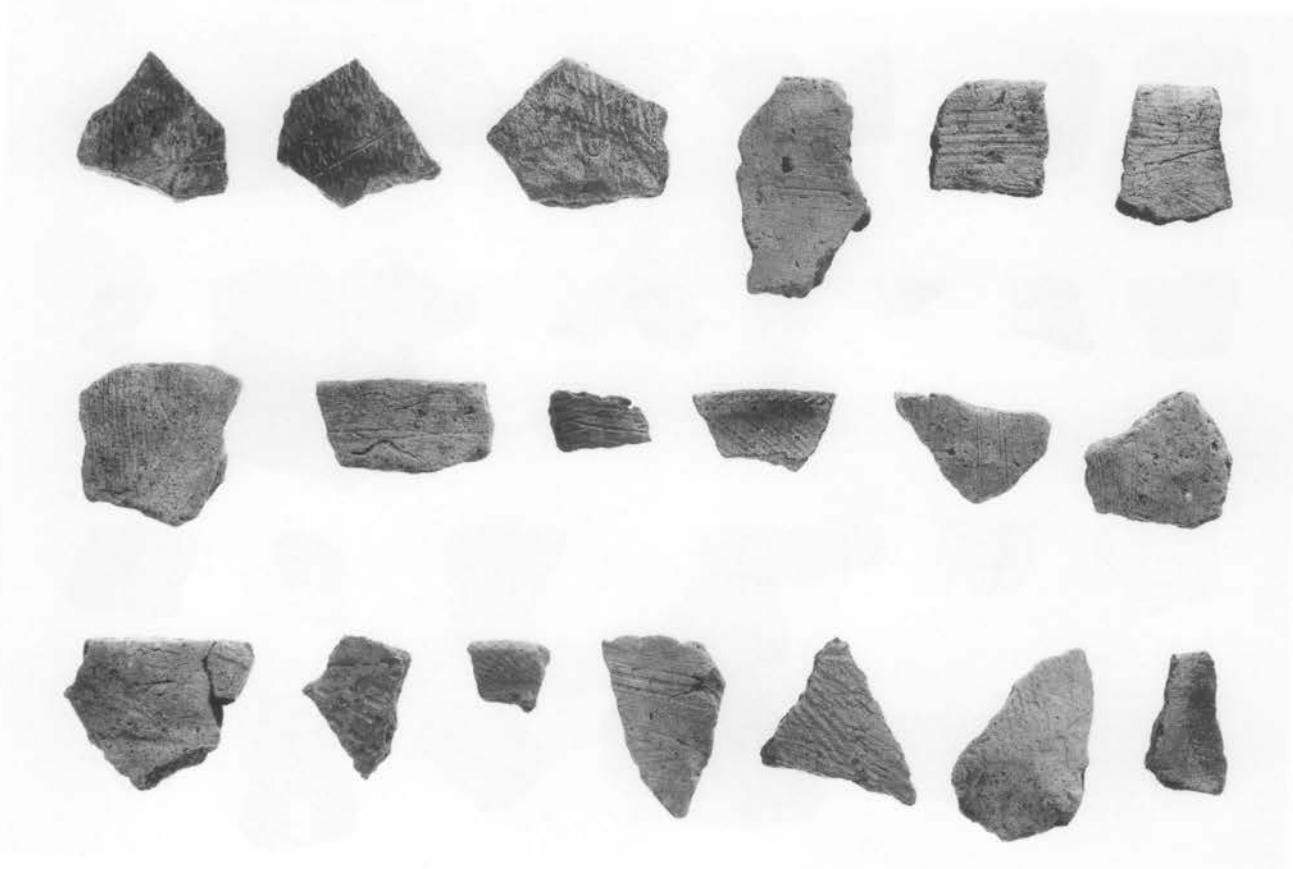
A区炉穴出土土器



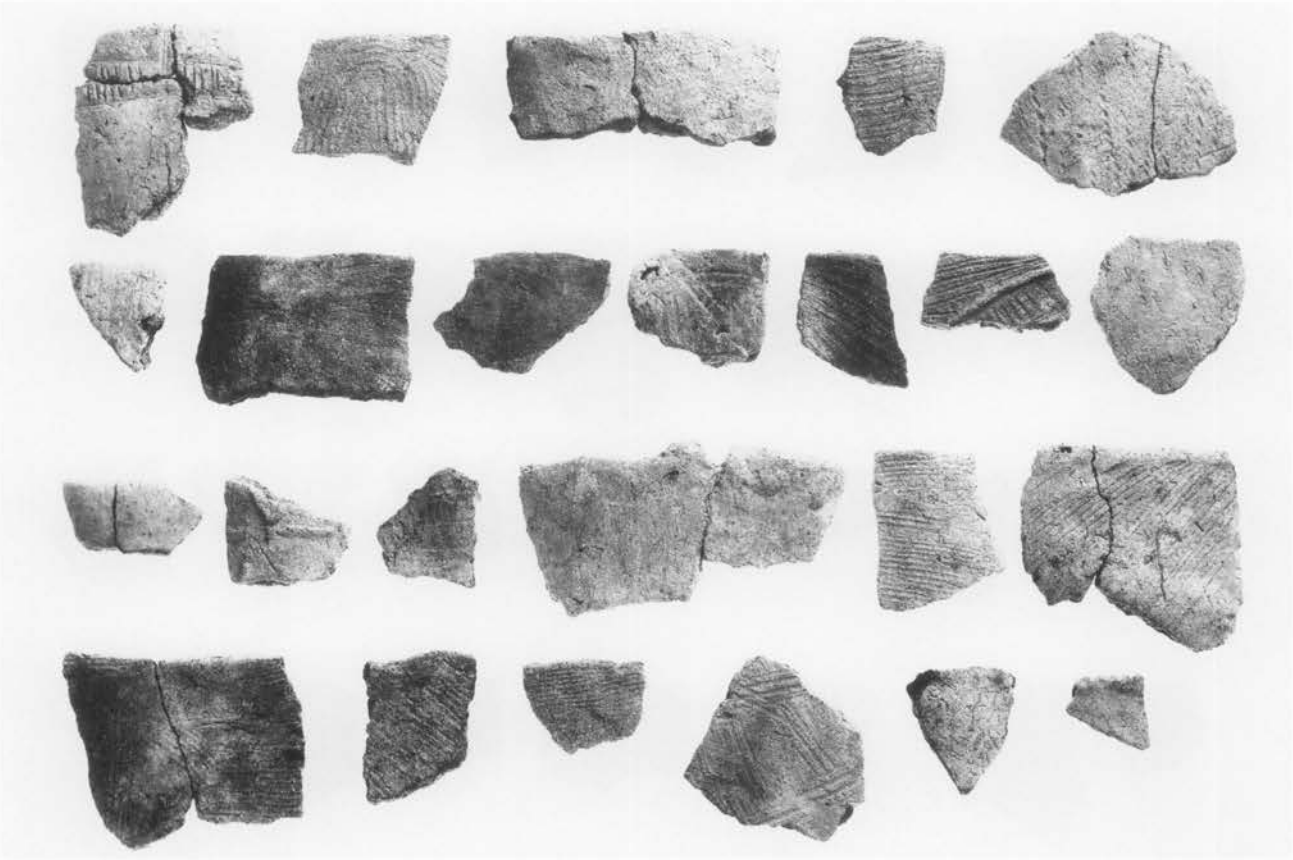


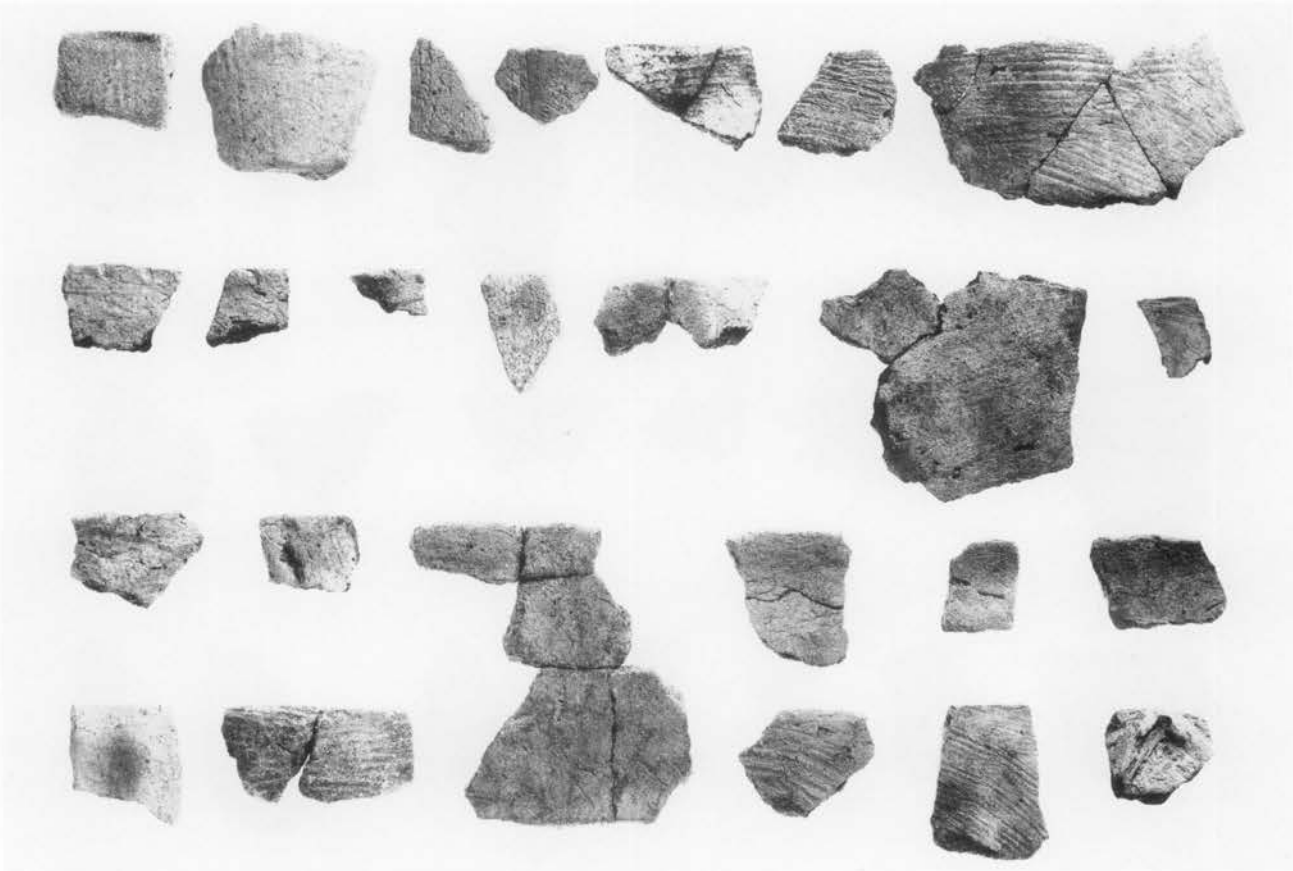
A区縄文時代土坑出土土器、A区縄文時代住居跡出土土器、A区遺構外出土縄文土器（1）



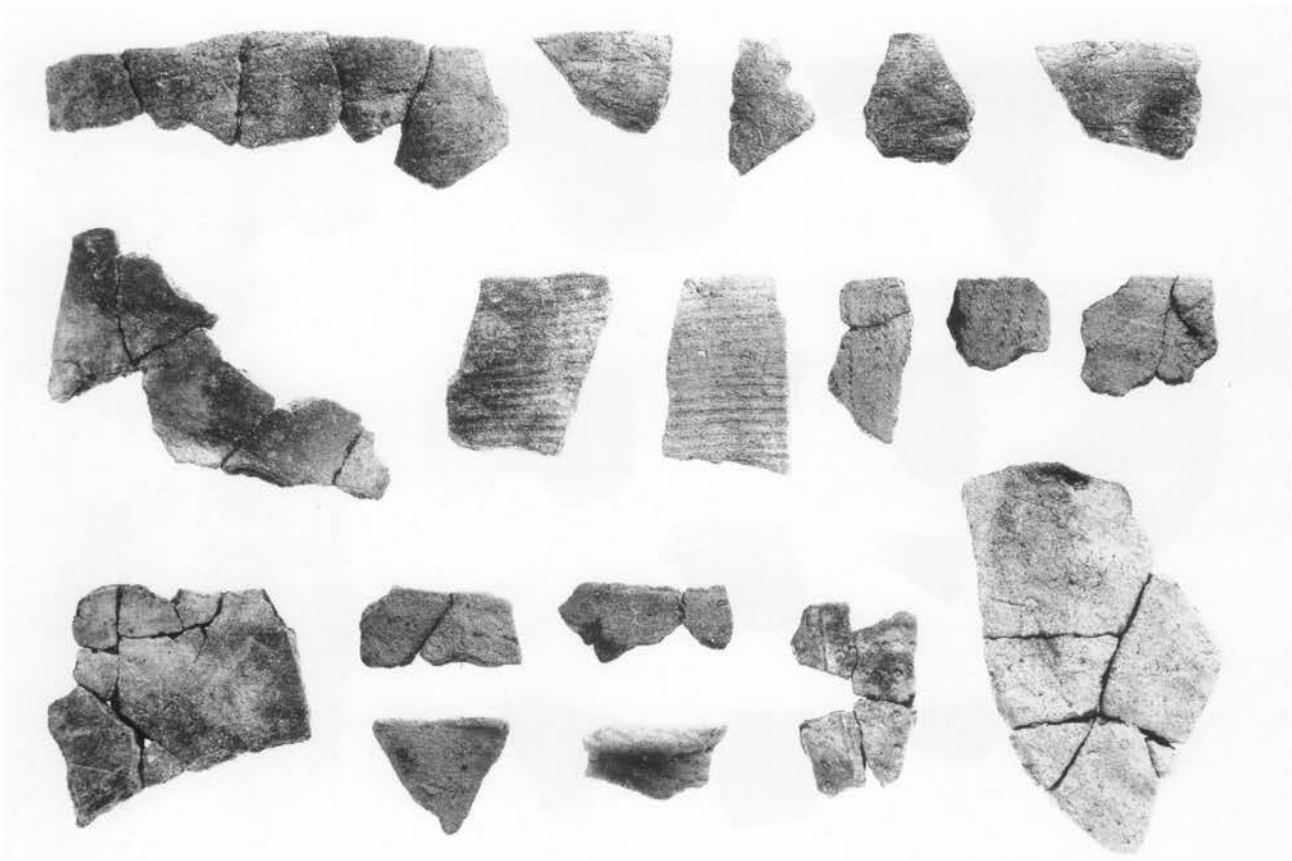


A区遺構外出土土器（2）

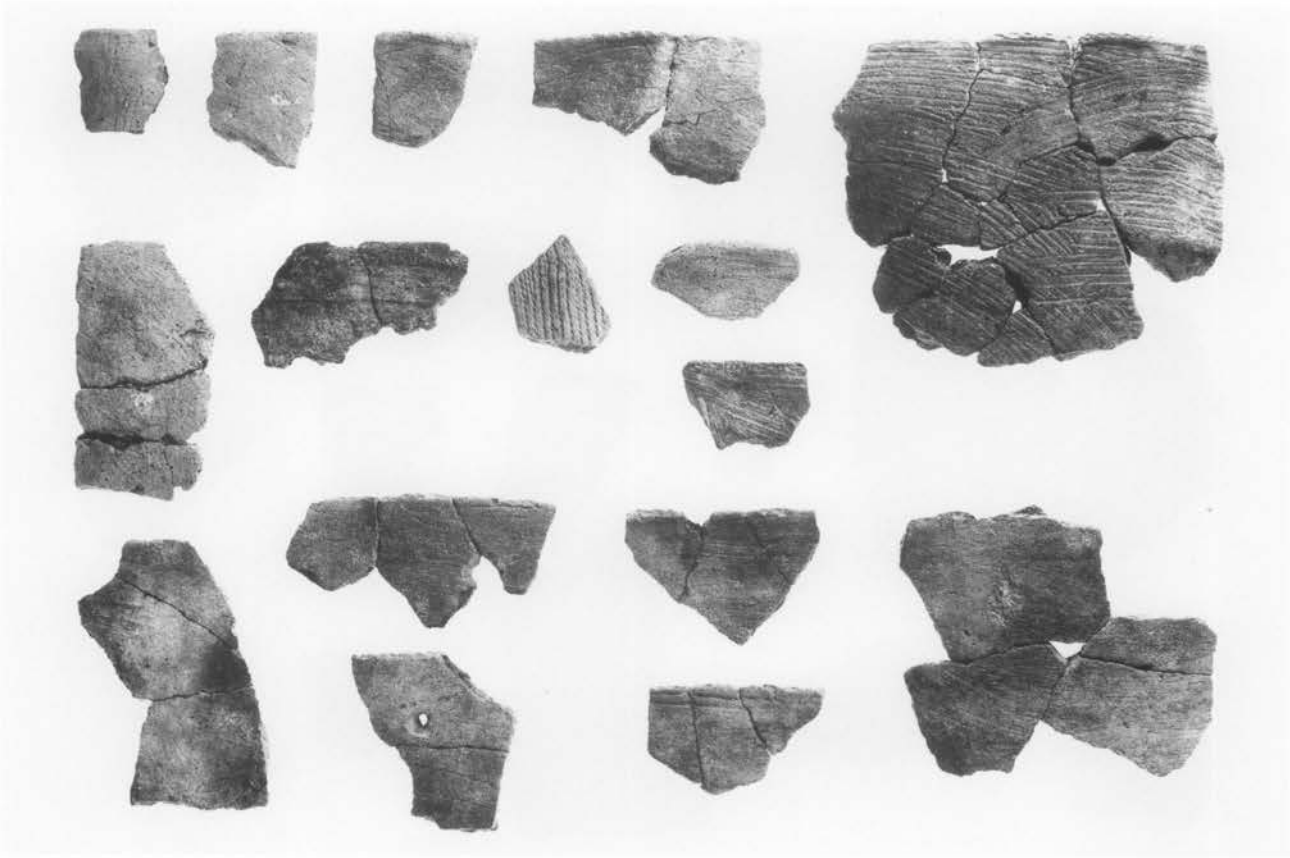


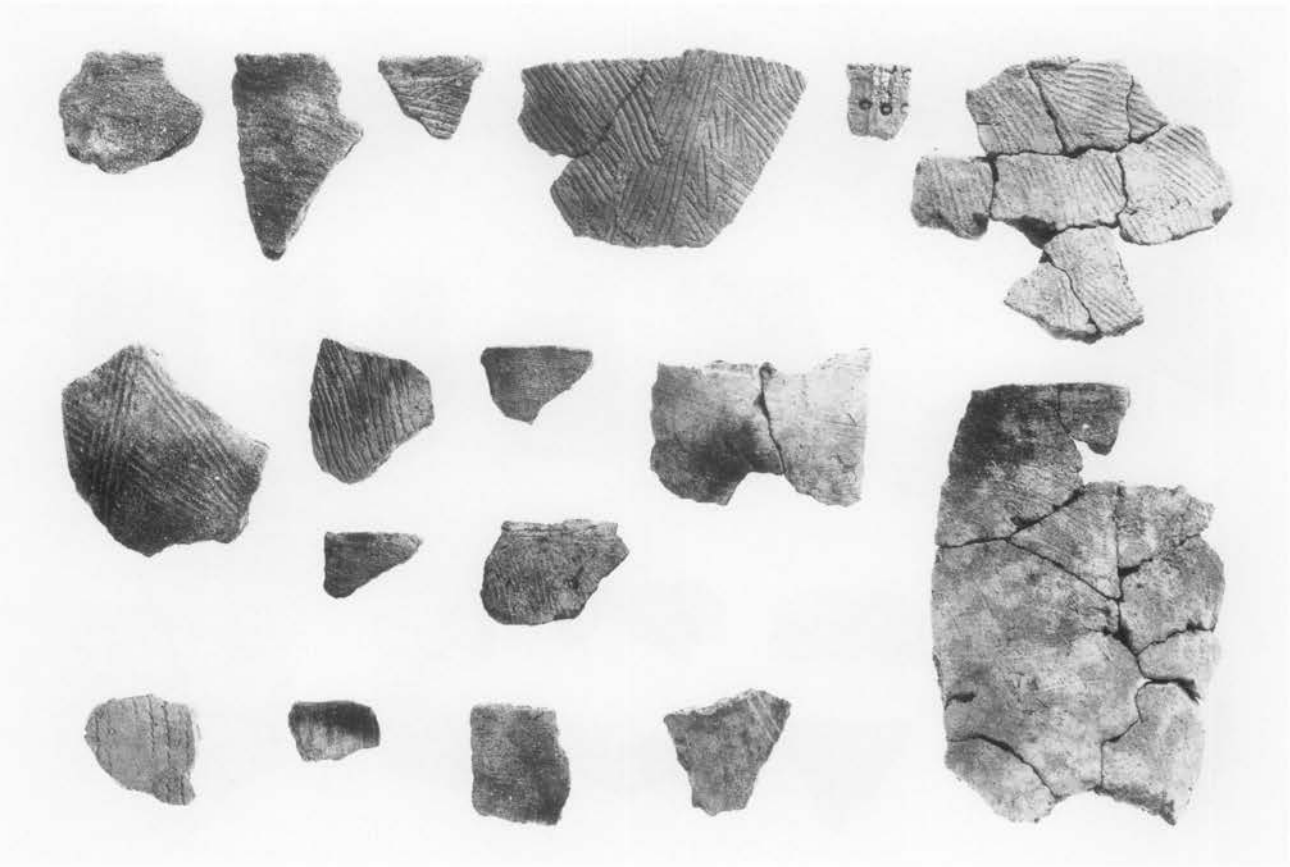


B区炉穴出土土器（1）



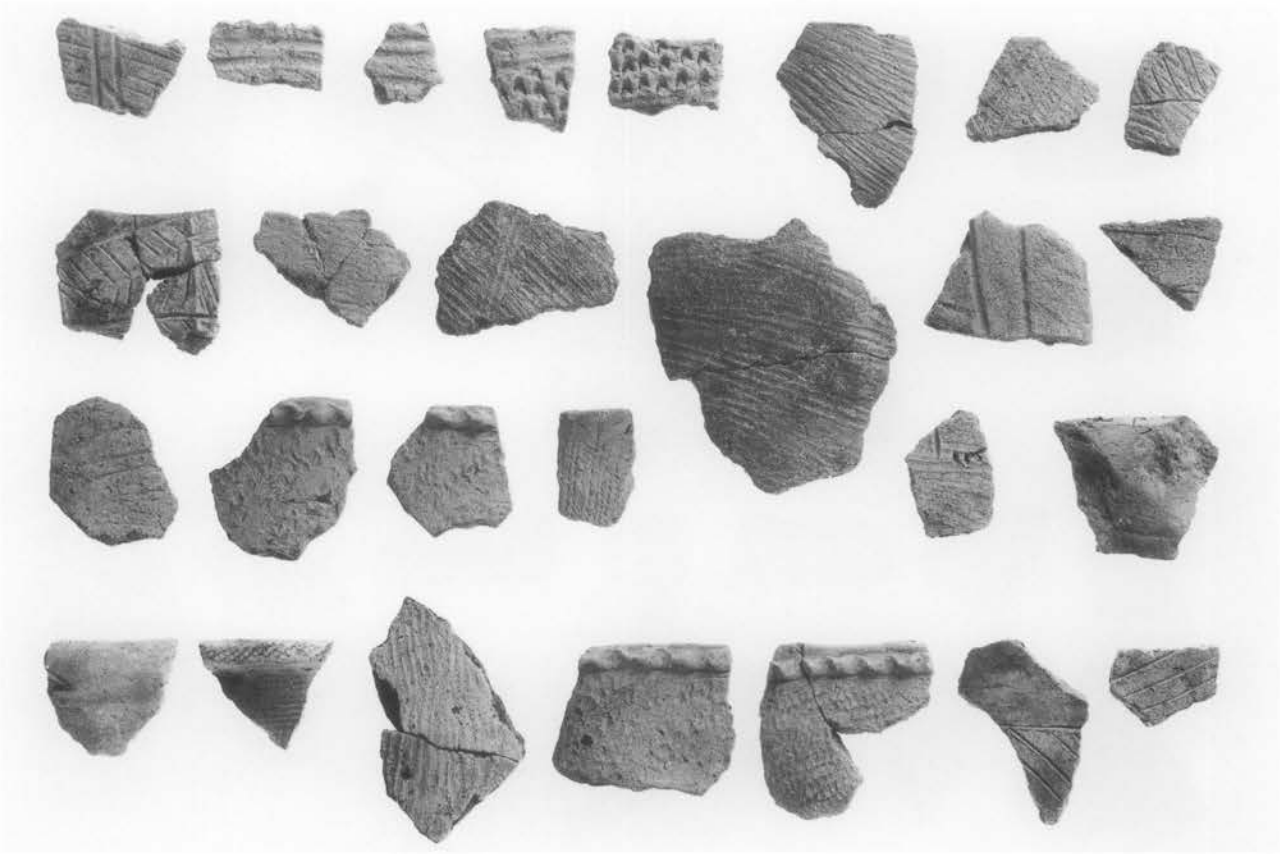
B区炉穴出土土器（2）

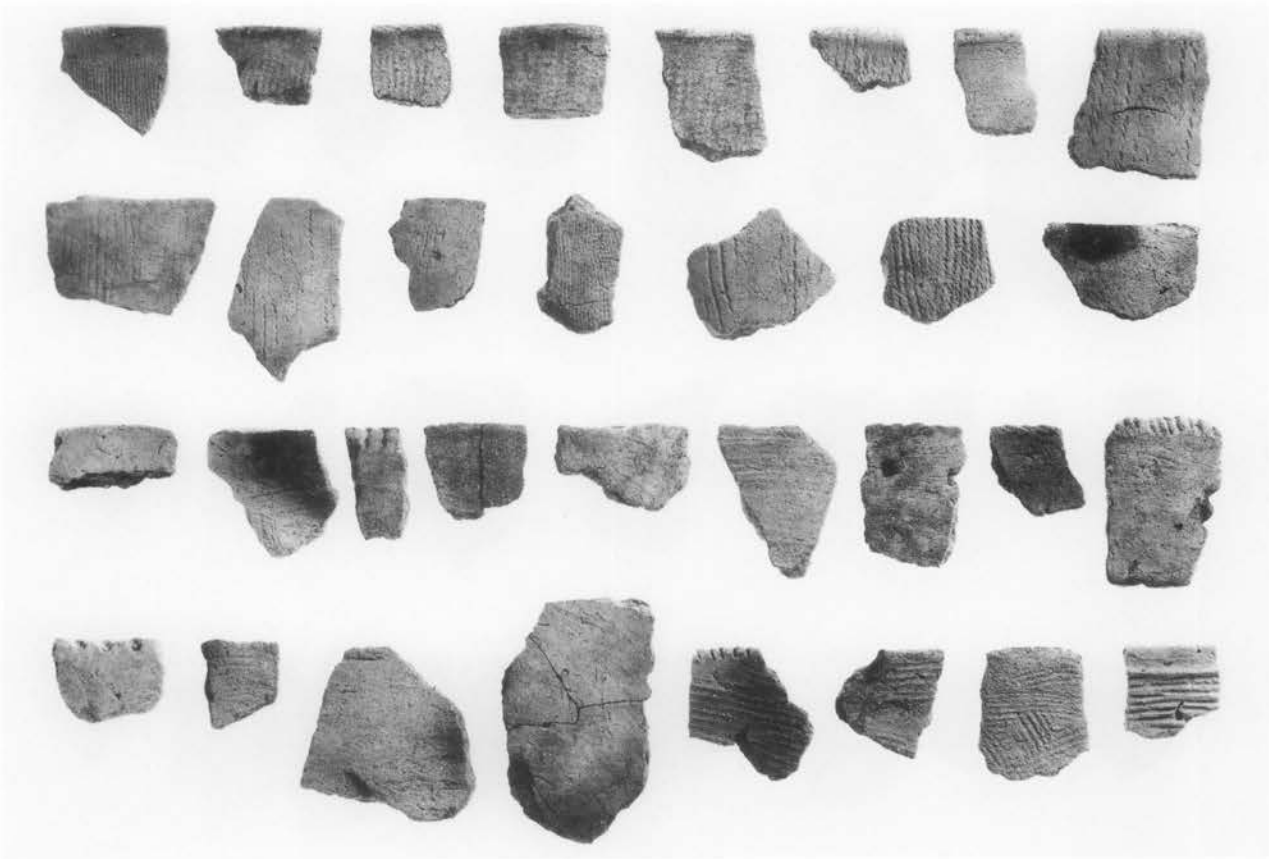




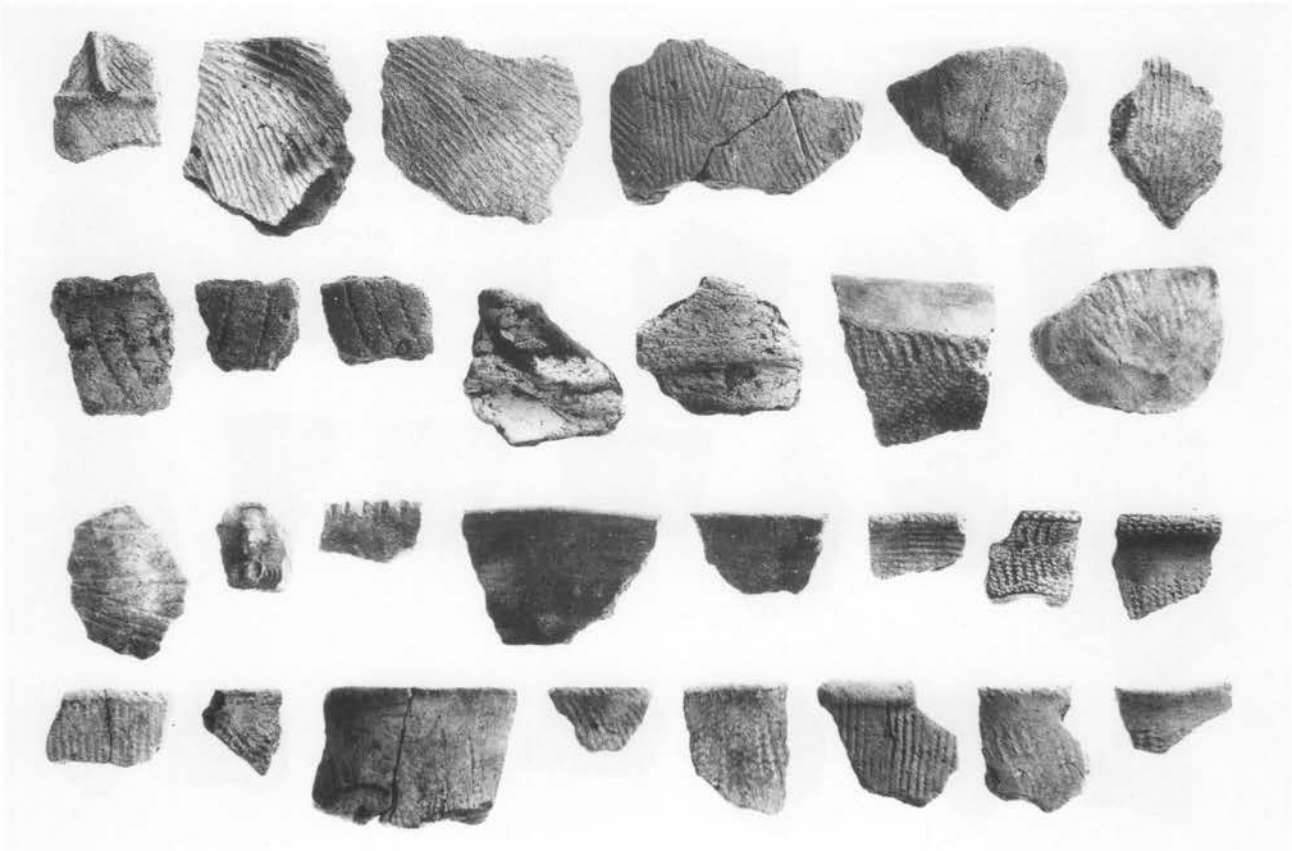
B区炉穴出土土器（3）、B区縄文時代土坑出土土器

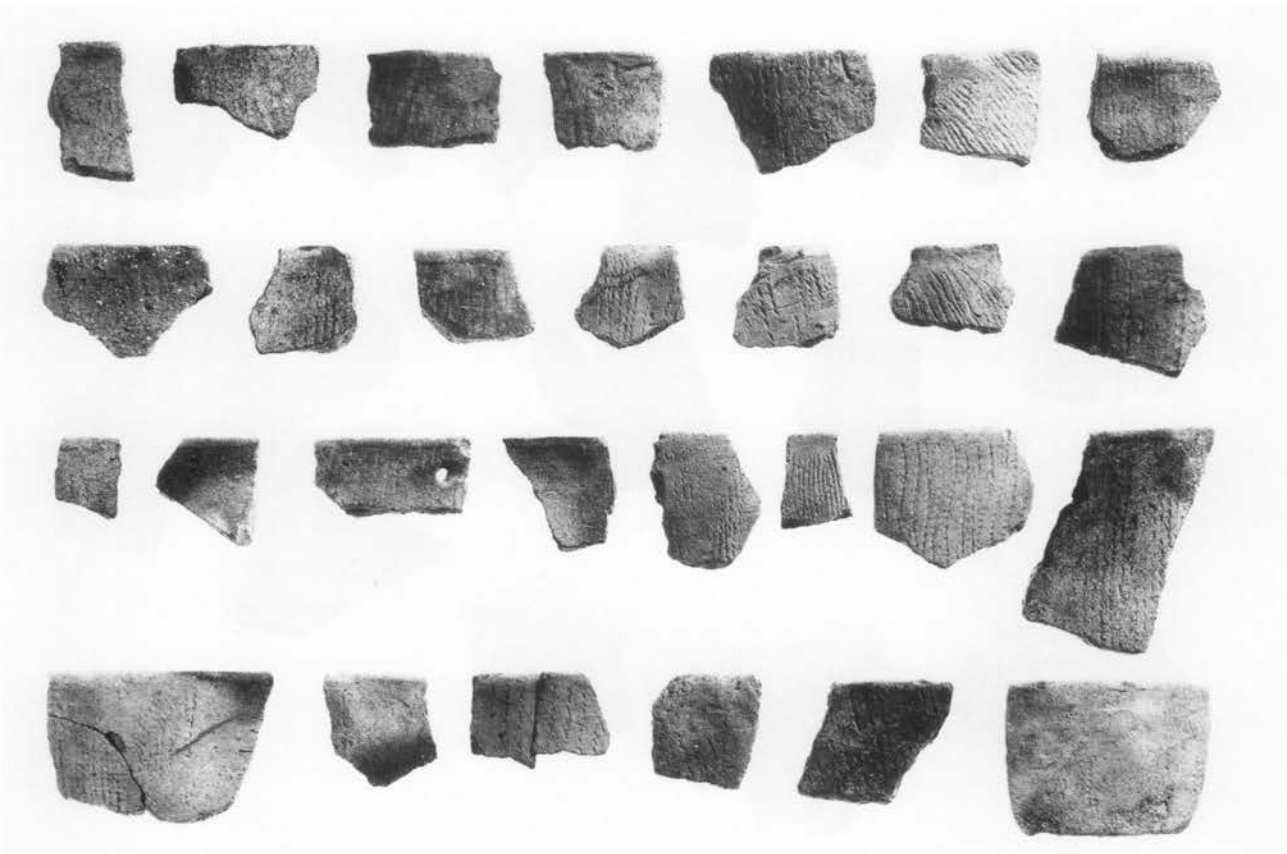
B区縄文時代住居跡出土土器、B区遺構外出土縄文土器（1）



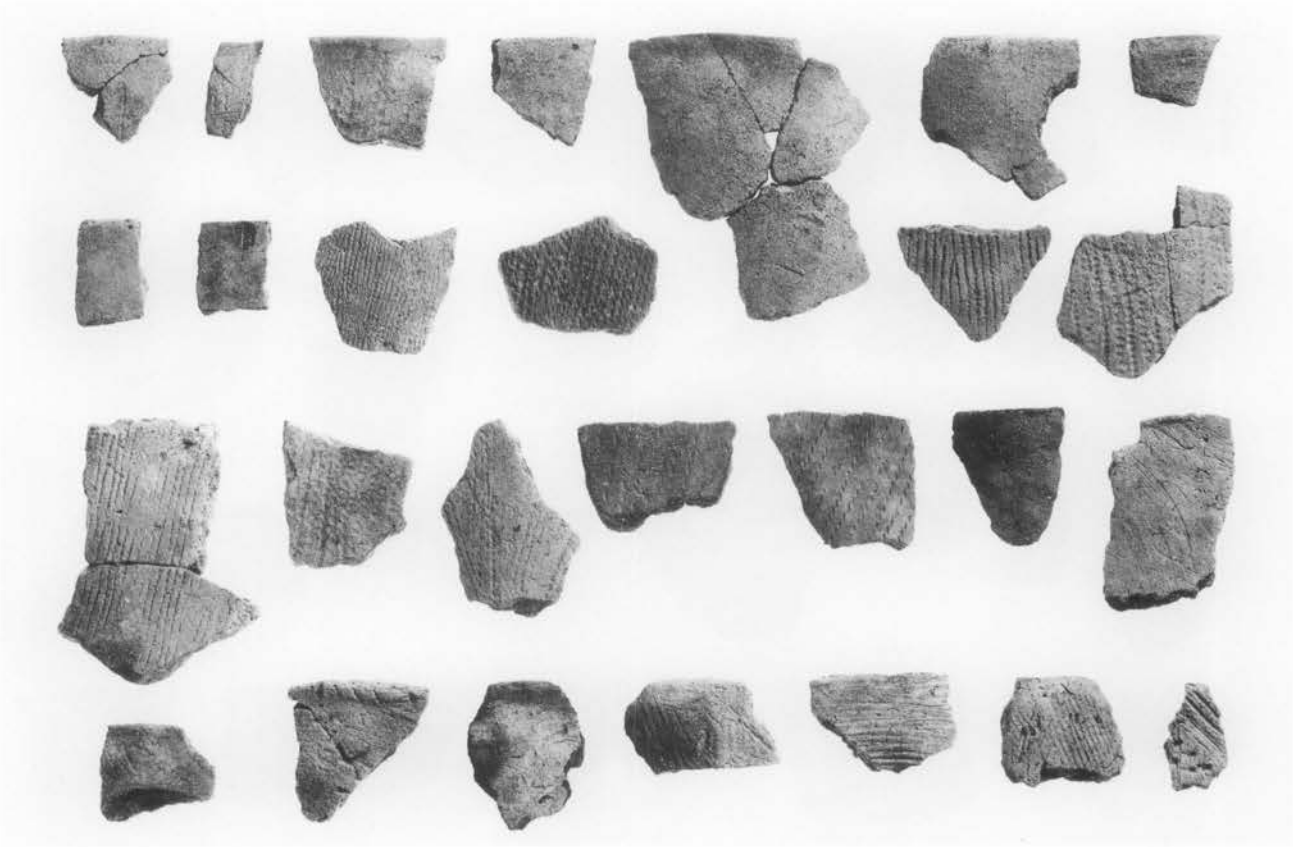


B区遺構外出土縄文土器（2）

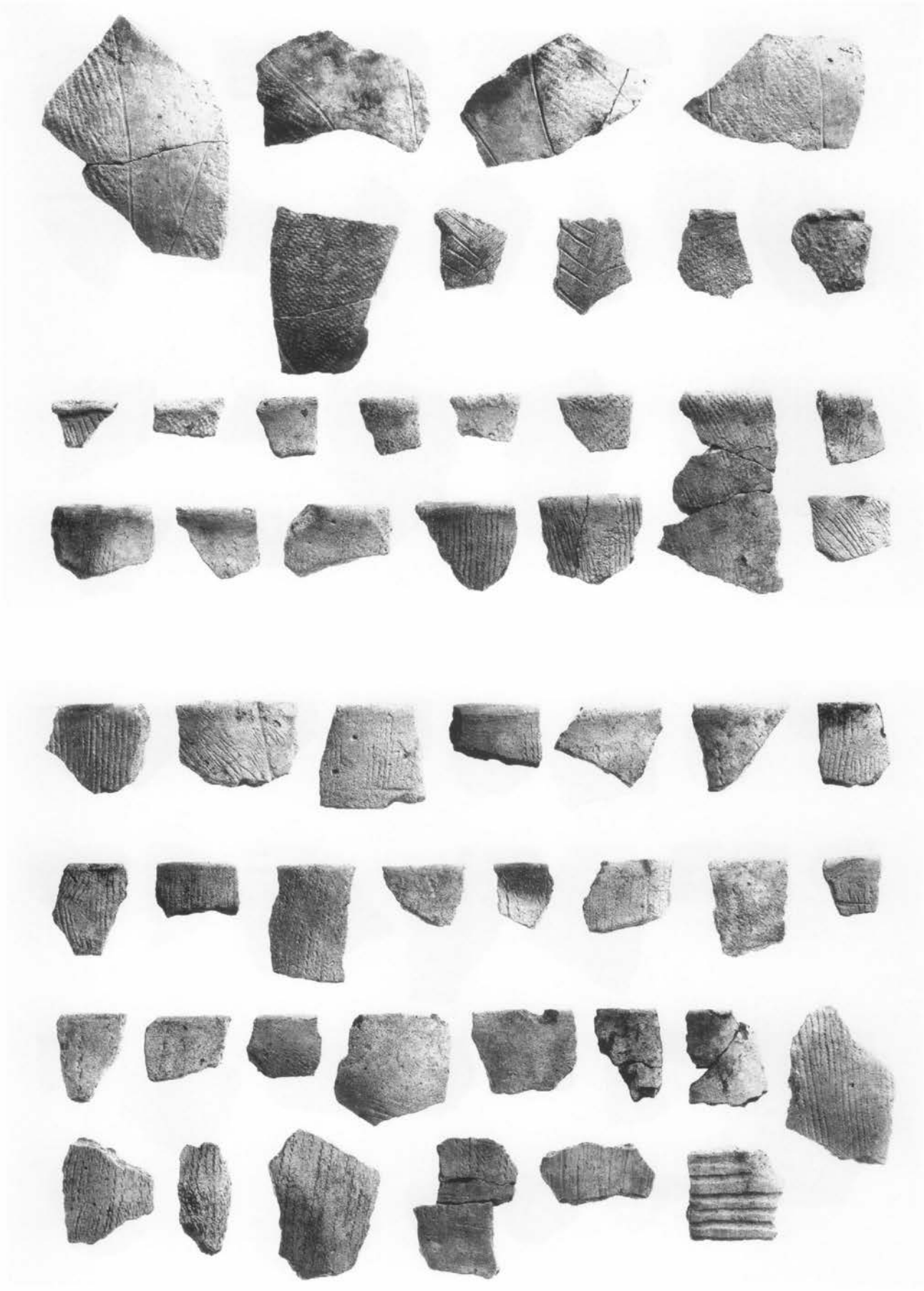




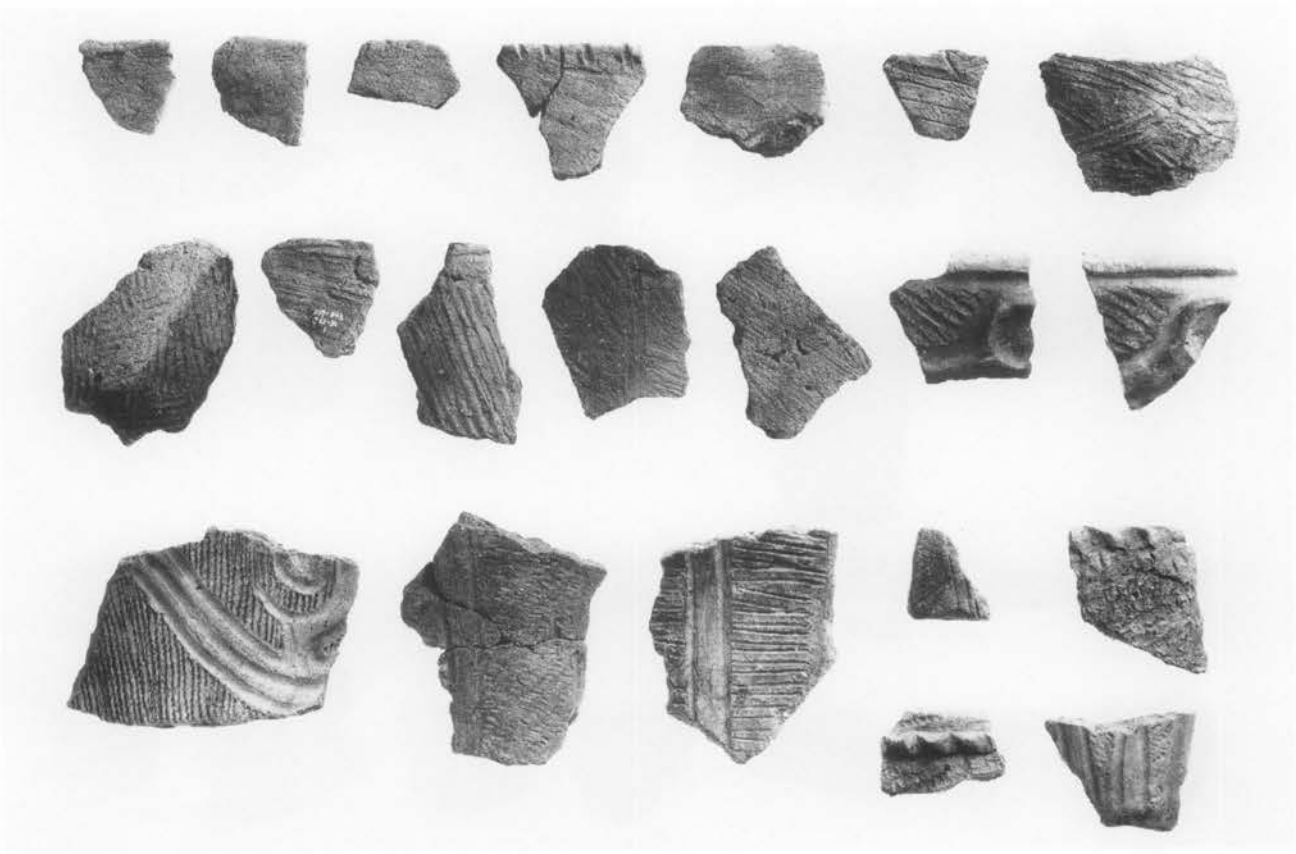
B区遺構外出土縄文土器（3）

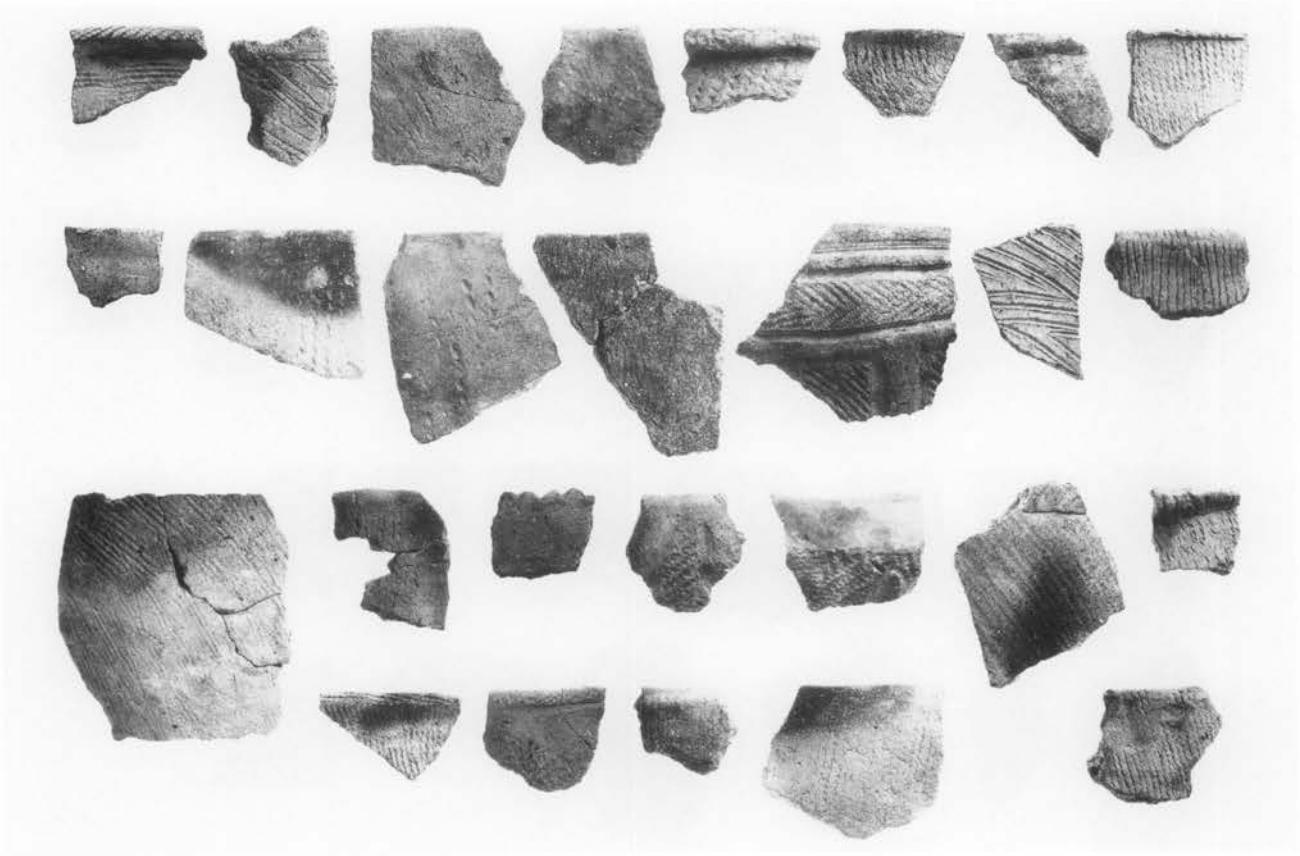


B区遺構外出土縄文土器（4）

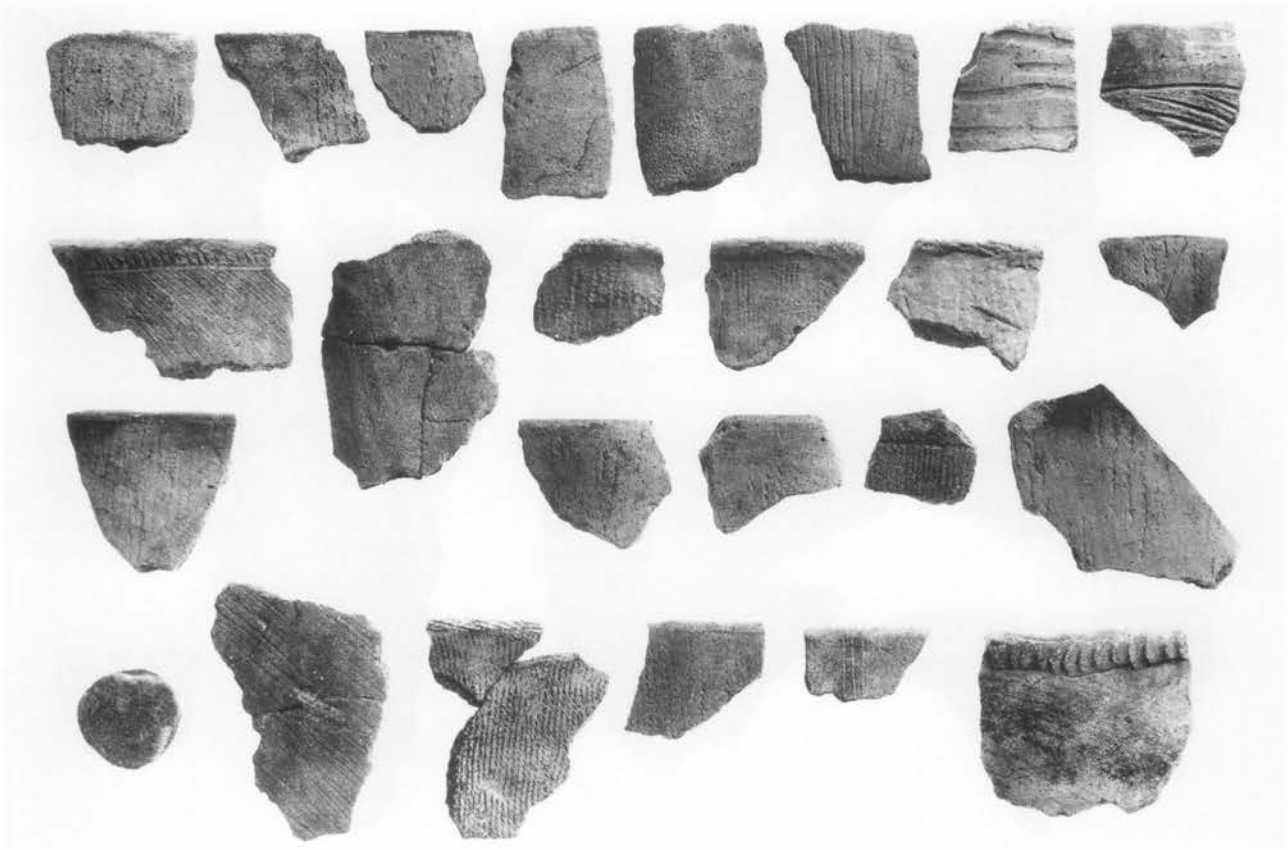


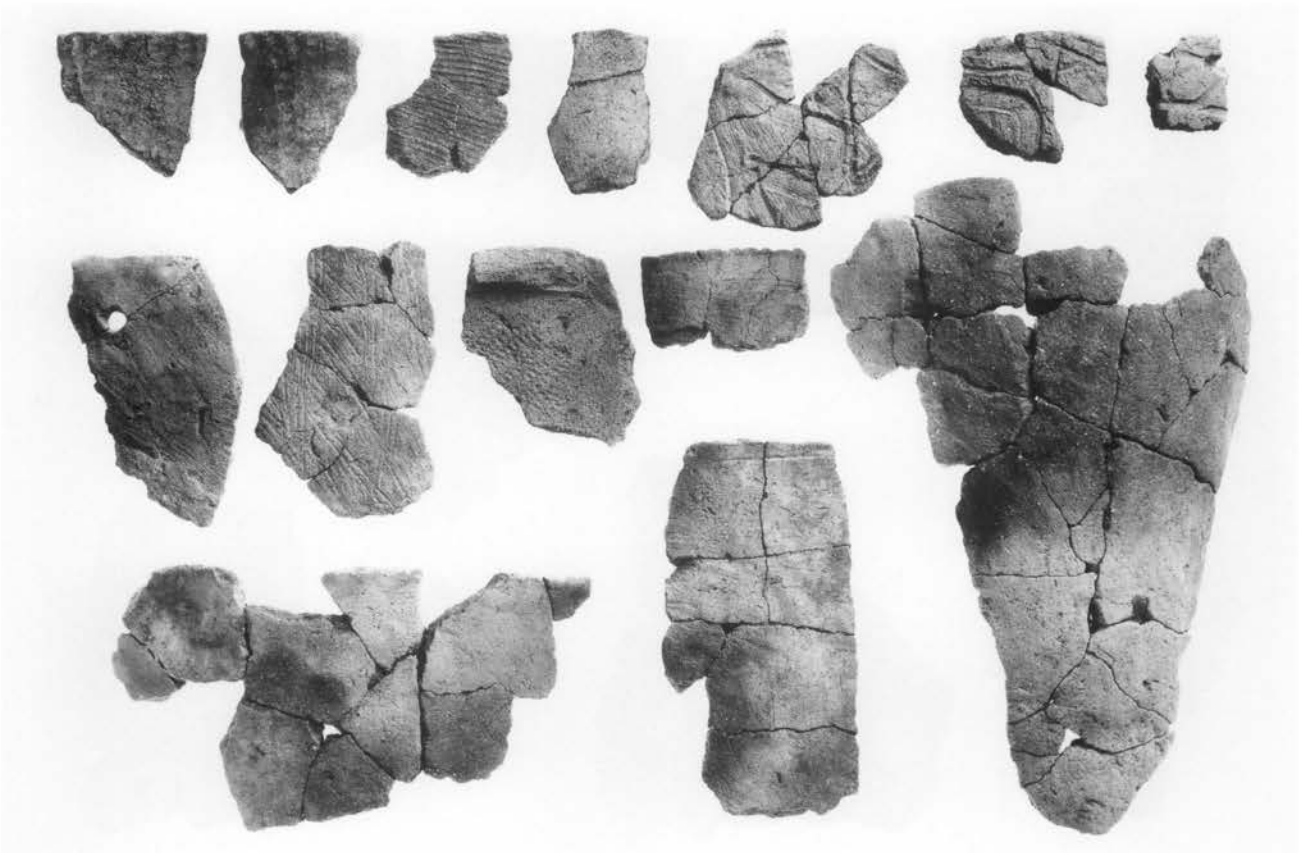
B区遺構外出土縄文土器（5）



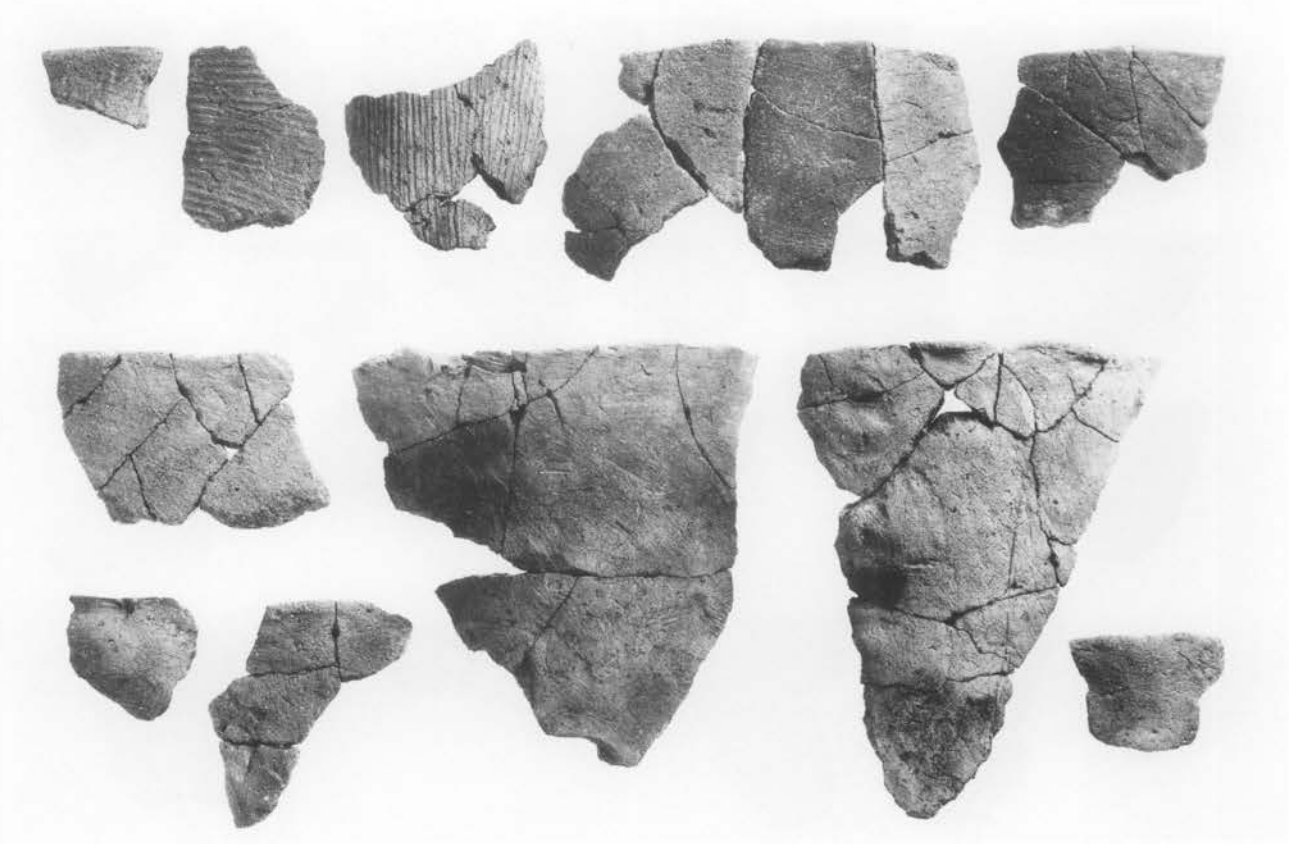


B区遺構外出土縄文土器（6）

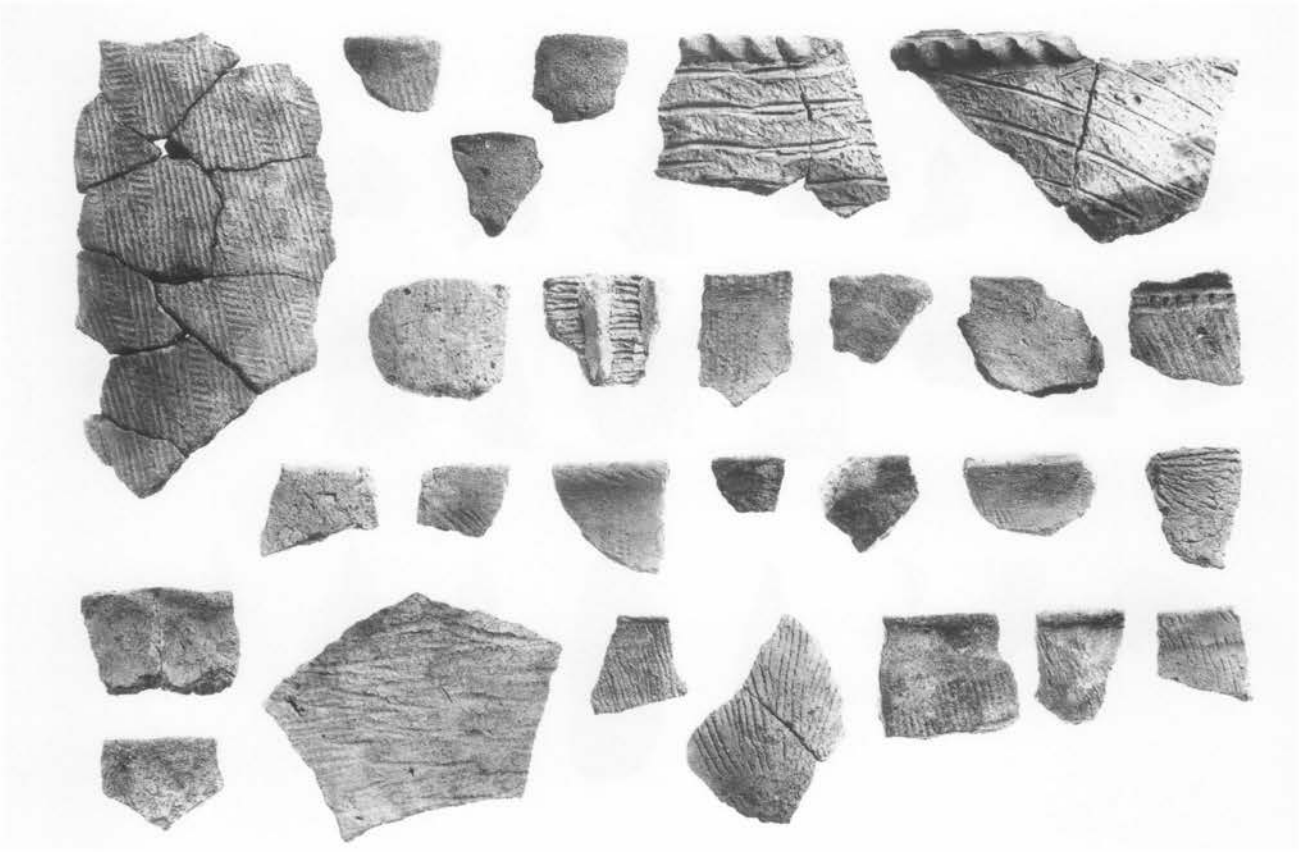


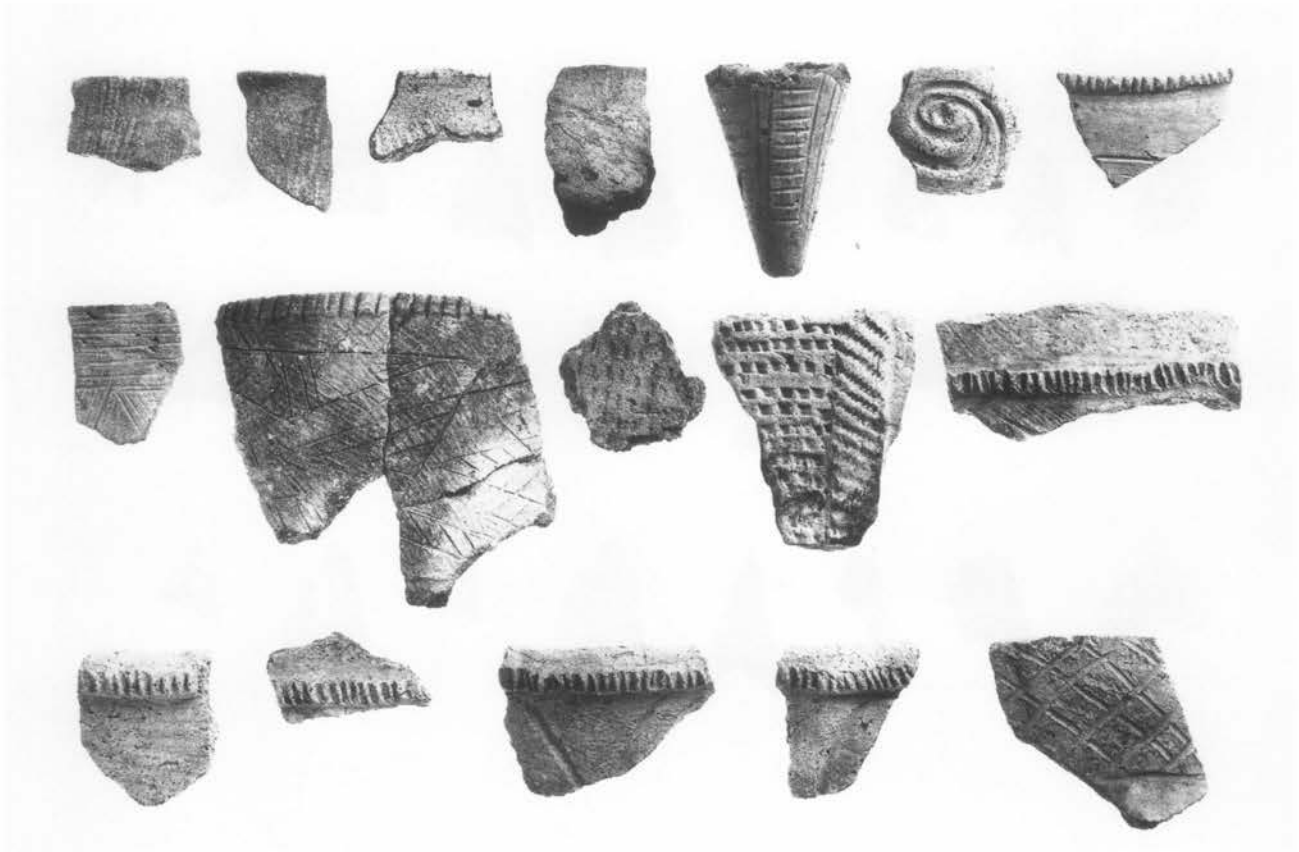


B区遺構外出土縄文土器（7）、C区炉穴出土土器（1）



C区炉穴出土土器（2）





C区炉穴出土土器（3）、C区縄文時代土坑出土土器、C区遺構外出土縄文土器、大作頭遺跡表採の縄文土器

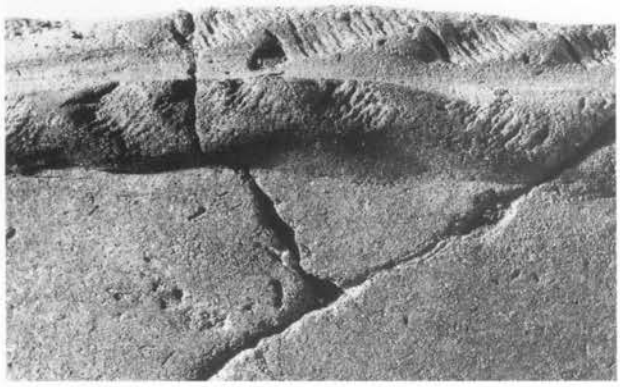
A区・B区・C区剥片石器

A区・B区礫石器

B区礫石器

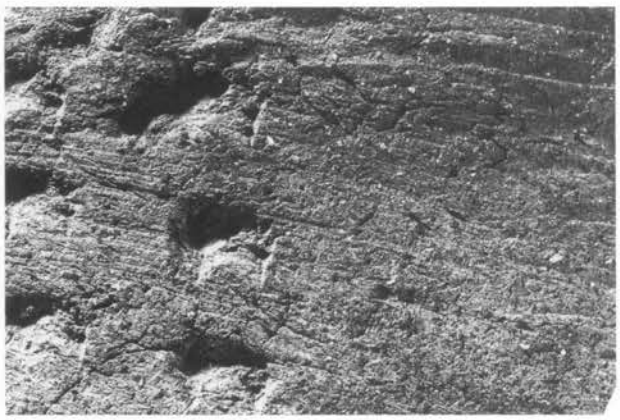
B区礫石器

B区礫石器、C区礫石器



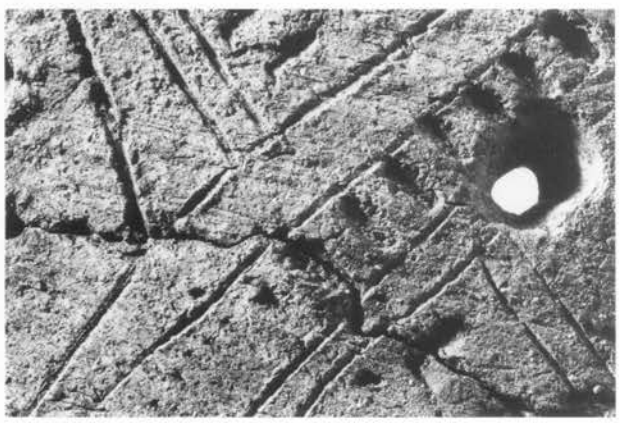
A区　025号炉穴　4

A区　030号炉穴　1



A区　037号炉穴　3

A区　037号炉穴　2



A区　037号炉穴　4

A区　037号炉穴　4

A区　056号炉穴　1

A区　002号方形周溝状遺構　2

子母口式土器文様接写（1）

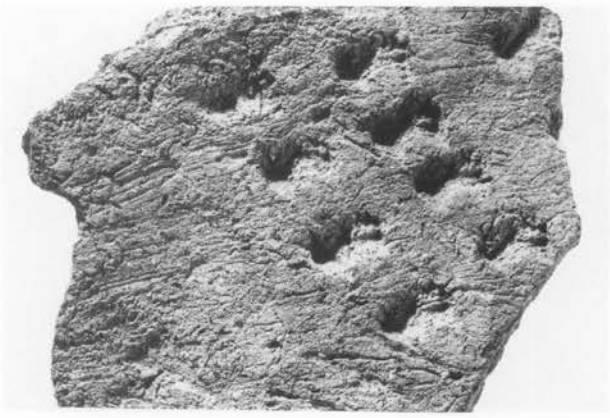
A区　D4

A区　D5-74・75・84・85

A区　D5

A区　D5-74

A区　D5-74

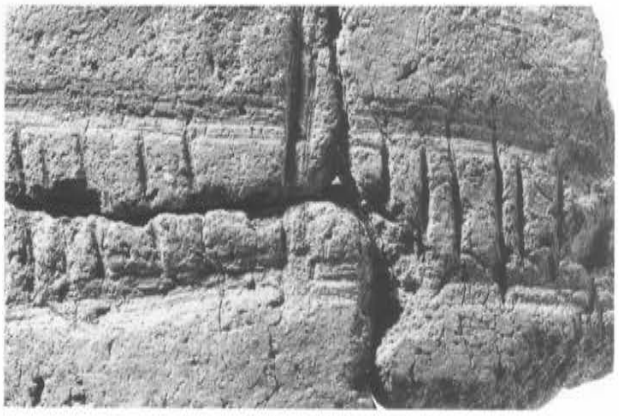


A区　D6

A区　D6

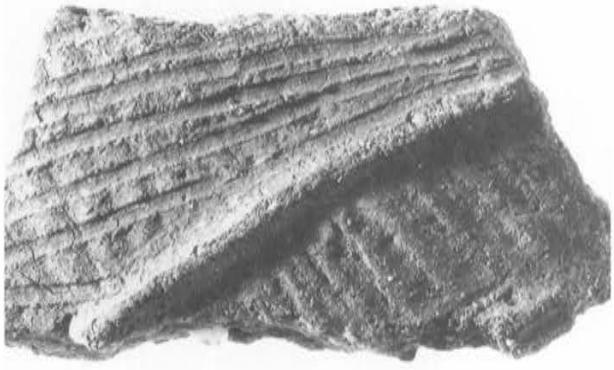
A区　D6

子母口式土器文様接写（2）



B区　003・004号炉穴　1

B区　003・004号炉穴　2

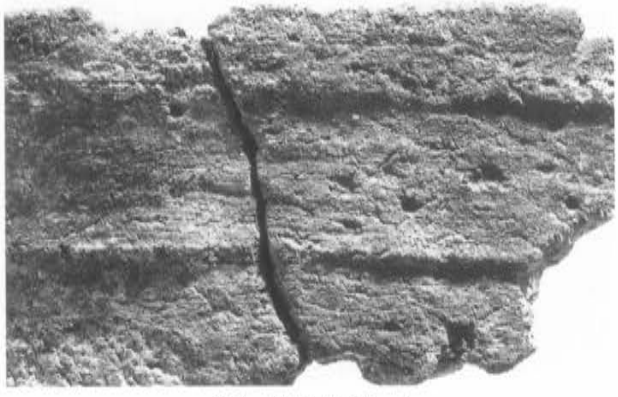


B区　030号炉穴　2

B区　031号炉穴　3

B区　041号炉穴　4

B区　069号炉穴　10

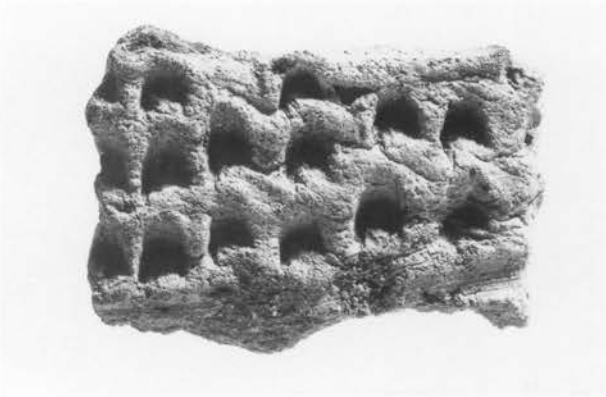


B区　071号炉穴　7

B区　I8-32

子母口式土器文様接写（3）

B区　I9-04



B区　I11-14

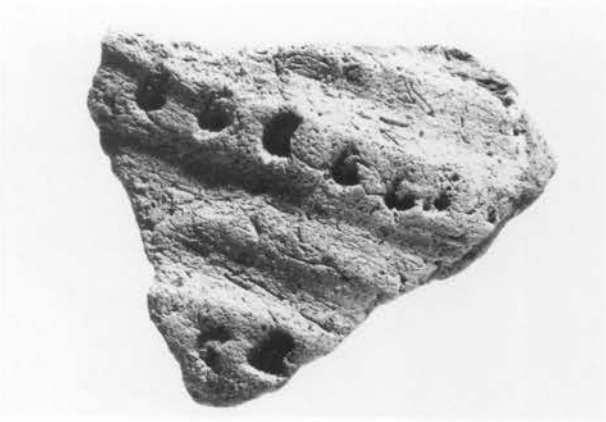
B区　I11-14

B区　J9-34

B区　J10-10

B区　J10-20

B区　J10-21



B区　J11-00

子母口式土器文様接写（4）

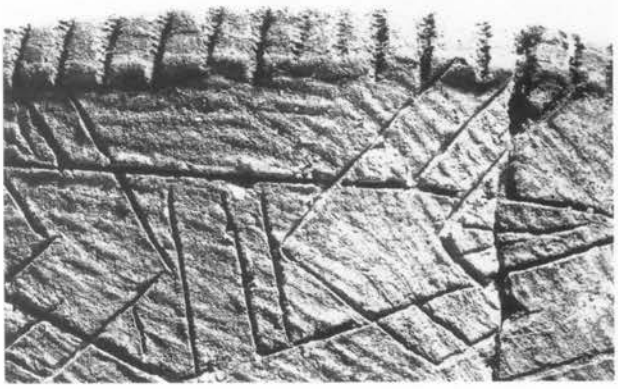
C区　003号炉穴　3

C区　003号炉穴　4

C区　031号炉穴　2

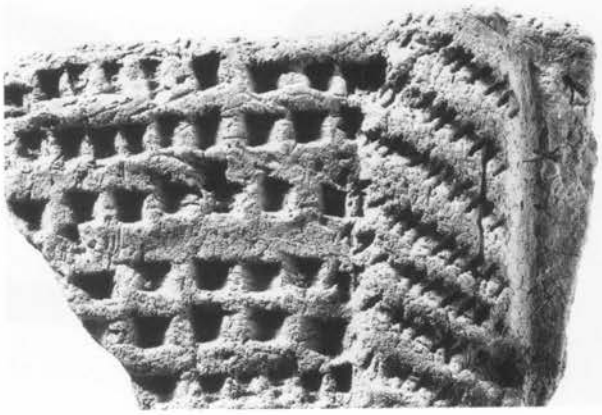
C区　057号炉穴　1

C区　N23



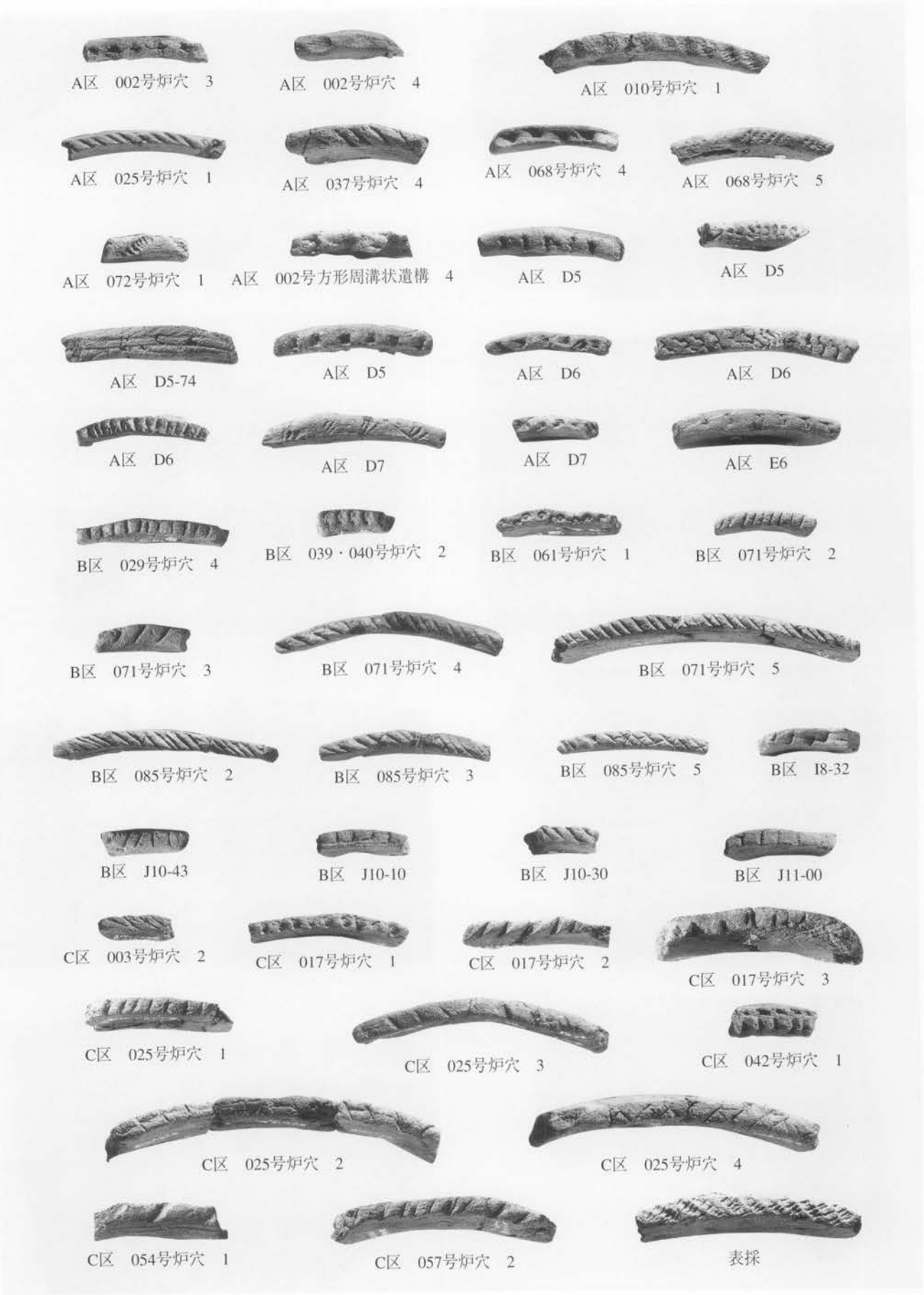
表採

表採



表採

子母口式土器文様接写（5）



子母口式土器口唇部加飾接写

報告書抄録

ふりがな	ひがしかんとうじどうしゃどう（ちば・ふっつせん）まいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ
書名	東関東自動車道（千葉・富津線）埋蔵文化財調査報告書
副書名	市原市大作頭遺跡
巻次	3
シリーズ名	財団法人千葉県文化財センター調査報告
シリーズ番号	第355集
編著者名	加納　実
編集機関	財団法人　千葉県文化財センター
所在地	〒284-0003　千葉県四街道市鹿渡809－2
発行年月日	西暦1999年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
大作頭（おおさくがしら）	千葉県市原市今富（ちばけんいちはらしいまどみ） 字大作（あざおおさく）1,066ほか	12219	043	35度 27分 48秒	140度 05分 02秒	19890306 ～ 19900211	20,450㎡	道路（東関東自動車道）建設に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大作頭	集落跡	旧石器時代	石器出土地点　3地点	ナイフ形石器、敲石	
		縄文時代	炉穴　160基 土坑　49基 住居跡　4軒	縄文土器（早・中・後期） 石器（石鏃、打製石斧）	早期の子母口式土器終末期の良好な資料が出土。
		奈良時代	方形周溝状遺構　3基 土坑　1基	須恵器	

千葉県文化財センター調査報告第355集
東関東自動車道（千葉•富津線）埋蔵文化財調査報告書3
－市原市大作頭遺跡－

平成11年3月31日

編　集　財団法人　千葉県文化財センター
発　行　日本道路公団
東京都港区虎ノ門1-18-1
財団法人　千葉県文化財センター
千葉県四街道市鹿渡809-2
印　刷　大和美術印刷株式会社
千葉県木更津市潮浜2-1-10